真の紋章持ちの暗躍

黎斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真の紋章持ちの暗躍

【Ｎコード】
Ｎ２９６５Ｐ

【作者名】
黎斗

【あらすじ】
麻帆良学園本校男子中等部に所属する少年には人には言えない秘密があった……。

篠宮カイという少年のお話（前書き）

黎斗と申します。

初投稿になります。

駄文ですが見て頂けると嬉しいです。

篠宮カイという少年のお話

「あーくそっ、何だって毎回毎回俺は逃げなくちゃならないんだーっ！」

美しい夕焼けが照らし出す舗装された道路を馬鹿みたいな事を言いながら必死で逃げている少女、いや少年の姿が在った。少年の後ろには大勢の少女達。

数はちょうど一〇人

これだけを見れば、何て羨ましい奴だ、とそんな罵声の声が聴こえてきそうな感じがするが、残念ながらそんな感じではない。

少年をこれまた必死で追いかけている少女達の形相は、悪魔も真っ青のイカれた表情。そしてその手には金属バットやら木刀、そして何処にそんな力が有るのか、鉄筋を担いで追いかける少女も居る。

これは命懸けの鬼ごっこ、捕まれば『死』しか待っていない。

かれこれ全速力で四〇分近くは走って逃げている。少年の体力は既に限界に近いが、後ろを振り向けば自分の命を狙う死神。立ち止まって休憩する訳にはいかない。

少年の体力は限界に近いと言うのに少女達の体力は全く減っていないようにも見える。それどころか息も乱さず、オラーッ待たんかいっ、と女子が言う言葉遣いではないことも言う女子が居る。

ぜえ、ぜえ、と息切れを起こしながらも曲がり角を曲がって、少

しでも少女達の数を減らそうと画策する少年。路地裏に入ってしまえば少なくとも鉄筋を担ぐ少女からは逃げられるだろう。

そう高を括った少年。

少年の思惑通り一番危険であろう鉄筋を担ぐ少女は鉄筋が邪魔になりリタイア。

それでも残りは九人。

このままでは捕まって死んでしまうかもしれない、そう悟った少年はズボンのポケットから『ある物』を取り出す。

「くらえっ！　浩輝の使ったハンカチ！」

少年は追いかけてくる少女達の方に振り向き、少年の友達のハンカチを投げつける。

すると少女達の表情は一転、パッと明るい表情に変わり、少女達は『浩輝のハンカチ』の争奪戦を繰り広げている。

逃げるなら今しかないと感じた少年は、たかがハンカチ一枚を争う少女達を尻目に脱兎の如くその場から逃げた。

「はぁ、はぁ、……くそっ、今回ばかりは死ぬかと思った……」

人気の少ない森林地区へと移動して、少年は木に凭れかかって息を整えている。季節は冬だというのに体中から汗が出ており、カッターシャツも制服のズボンもびしょ濡れという状態。息を吸う度に体温が冷たくなり上手く息を吸えない。

取り敢えず少年は目に入りかけている汗を手で拭って、少年には忌々しく映る夕焼けを細目で眺める。

あー、うぜぇ、と愚痴を零す少年の名は篠宮カイ。

麻帆良学園本校男子中等部に通う一般生徒。年齢は十四歳。今年の四月からは中学三年生だ。

カイが何故あんな風に少女達に追いかけられていたのか？

それはカイの容姿が関わっていた。

カイの容姿は艶のある黒髪、長さは後ろ髪でも肩までである。

そして顔はというと、そんじゃそこらに負けない美少女顔、つまり女顔。一〇人中一〇がカイを外見だけで女だと判断された伝説を持っている。

顔だけでも女だと判断されるが、実は体つきも女子に近い感じだ。筋肉量は男子平均よりも下回り、全体的に細身。

そんでもって身長も一五〇センチメートルしかない。体重も四〇

キロしかない。医学的に言えば危険な数値。ある意味命が危ないです。

そう、篠宮カイという存在はまるで少女そのもの。これが原因なのだ。

まずカイを追いかけていた少女達の正体はカイの友達の親衛隊。これだけ聞けば話はだいたい見えてくるだろう。

カイは女顔であり体つきも細い、となれば正常の男子ですら落とす傾向がある。実際に男子の人気は高く評判は良い。

逆に一部の女子からの評判は悪い。別に女子に冷たく当たったり、意地悪している訳でもない。カイは至って普通なのだ。

だがそれが女子には気に食わない。男子中にもカッコいい男の子は居り、ファンクラブも存在するくらいの者もいる。そのファンクラブを持っている男子と友達と言うだけでカイは狙われているのだ。

要は嫉妬だ。

カイは悪くはない。しかし外見が女子そのものという事もあり、女子からの外見での妬みも有ったりする。それが爆発して今回の事が起こったのだ。

ただ普通に友達と一緒に帰っているだけで、その親衛隊に襲われるのだから、カイとしては堪ったもんじゃない。

出来ることならこの女顔を整形したいと思うカイだった。

幾分経っただろうか、カイの呼吸も安定してきて、さて寮に帰ろうか、等と思ったその時、ズボンから携帯電話の着信音が響き渡る。

カイは首を傾げながらも携帯を取り出し開くと、画面には『学園長』という文字が映し出されている。

うげっ、と苦い顔をしてカイは嫌々ながらもピッとボタンを押す。

「何でしょうか、学園長？」

そう訊ねるカイに老人の声が耳に響く。

『うむ、唐突ですまないが『仕事』じゃ。賊が侵入したようでの、その捕獲に向かってほしいんじゃ』

学園長の言葉に反応して、カイは目を変える。『仕事』となればカイは真剣になる。

「捕獲ですか？　殺しの許可は？」

『駄目じゃ。生かして捕らえよ。多少の怪我は多目に見るがのぅ』

学園長に殺しの許可を貰えず一気に学園長への好感度を下げるカイ。もはやゼロには留まらずマイナスまで下がる。

「……了解。場所は？」

『すまないのぅ、今、探索班を出動させてはいるのだが、どうにも侵入者が見つからぬ。高等な魔法使いかもしれぬ。見付け次第連絡するから、そのつもりで』

「……分かりました。報酬はいつも通りで」

『うむ』

『仕事』の話も終わり、カイは通話を切る。

侵入者を見失うなんてここの連中使えねー、と心の中で愚痴るカイは一先ず学園長から連絡有るまで、寮で過ごす為に疲れた足で夕闇に変わった空の下を歩いた。

「はぁ、はぁ、はぁ、ちくしょう！　ついてねー、ついてねーよっ！」

麻帆良学園森林地区を必死こいて疾走する中年男。中肉中背と捉えようのない男は周りをキョロキョロしながらも走る。

この男は麻帆良学園の関係者でも無ければ、普通の教師でもない。この男は麻帆良学園にあると言われている『メルキセデクの書』を狙ってきた盗賊魔法使い。

男が有する情報網を用いて麻帆良学園に世界最高の魔導書、『メ

ルキセデクの書』があると知り遠路はるばるやって来たのだ。

そんな男も盗賊と名乗るだけのことはあり、侵入時は上手くいったのだ。学園結界も上手くかい潜り、『メルキセデクの書』が保管されている図書館島までたどり着けたのだ。

男は『メルキセデクの書』を得たら欲しがる組織に、一生遊んで暮らせるような大金で買い取らせようと画策している。

何とも欲にまみれた男か。

そして図書館島の仕掛けを回避して、中盤まで来た所で男は失敗する。

男は取り敢えず一休みしようと考えたのか、その場に座り込んだ。座り込むだけなら良かったのだが、男もなかなかいい年だ、寝転がってしまった。その時、頭に警報スイッチがあり、頭の重みでスイッチが押され作動してしまった。

ブーッ、ブーッ、と警報音が煩く響き渡り、男はいてもたっても居られず転移魔法を用いて逃げようとする。だが男の転移魔法で移動出来る距離はたかだか一〇〇メートル。連続で使用してしまった為、直ぐに魔力が尽きる。

それ故に現在はこうして森林地区を激走しているのだ。

要は男の不注意で見付かってしまった訳だ。同情する余地もない。

はぁ、はぁ、と息を切らして逃げながら男は現状を考える。

男は必死に逃げているのだが、追っ手は見かけない。どうして？

此処は麻帆良学園。裏は日本西洋魔法使いの本部でもある場所、追っ手を差し向けられない人材が居ない筈がない。

いったい何のつもりか、と男の頭は疑念で一杯になっている中、男は異変に気付く。

（いつまで経っても森を抜けられない……？）

男は気付いてしまった。自分はこの森に閉じ込められていることに。

くそ、どうやったら抜け出せる、と苛立ちながら愚痴を零すように言うと、少年のような少女のような声が聞こえてくる。

「ねえ、おじさん。俺と遊んでくれない？」

言葉としては軽いのに何処となく威圧感のある口調が男を支配していく。

「だ、誰だ！？　姿を見せろ！！」

いきなり聞こえてくる謎の声に男は恐怖に陥り、周りをキョロキョロしながら気配を探る。気配は全くない。自然と風に揺られている木々の靡く音しか聴こえない。目で探そうとも今は夜、暗くて月の光も街灯も無い。

今の声は何なんだ！？　と疑心暗鬼に陥った男の後ろから肩にポンと手が置かれる。

「ひっ、うわっ！？」

いきなり肩に置かれた手に男は飛び上がり、無様に尻餅をつく。
恐る恐る顔を上げれば其処に居たのは黒い外套を着た、何とも言えない趣味の悪い狐のお面を付けた誰かが立っていた。

コイツが追っ手なのか、と男は更に恐怖に陥りかけるが、男は気付く。

（コイツ……魔力が全然無い！　一流の魔法使いといえども魔力を完全に消せはしない！　なら俺にも勝機はある！）

男は狐のお面を付けた者に魔力が無い事に気付いた。男の言う通り確かに一流の魔法使いでも魔力を完全に隠すのは無理と言われている。

だったら魔力が切れている俺でも勝てる、と踏んだ男はナイフを取り出す。こんな形でも体術には自信が有るらしい。

男は自分なりに考え、気持ちに余裕が出てきたのか、狐の仮面を挑発する。

「オイ、死にたくなければ退け！　そうすれば見逃してやってもいいぜ？」

男の挑発に狐の仮面は、哀れだ、と呟き首の骨を鳴らす。

「悪いね。俺はおじさん如きにやられる程、弱いという自覚は無いんだよ」

「――ハッ、強がりを。魔力も気も無いようじゃ、俺には勝てねえ

んだ、よッ！」

男は瞬動術を用いて狐に接近してナイフで斬りかかる。だが男のナイフは狐を捉えず空を切る。

その後も瞬動術を用いて狐の後ろに回り込んで斬りかかるが、何度やっても当たらない。

ブン、ブン、と男のナイフが空を切る音しか聴こえてこず、一切身を切り刻む音がしない。

男は次第にムキになり感情が怒りに支配されていく。

「――――くそっ！　くそっ！　くそーっ！！　何で当たらねえ！？」

「だっておじさんの攻撃は『視えてる』からね」

「……何だと？」

狐の言葉に男はポカンと呆気に捕らわれてしまい、腕を止める。

『視えてる』？

コイツは何を言っているんだ、最初は訝しんでいたが男は頭が良いのか、またもや感づく。

（そう言えば裏の人間の中で『全ての攻撃を避ける』奴が居るっていう噂がある。確か名前は……）

「カイ・め――――！！」

男が狐の正体と思われる名前を言おうとした時、突如男の両脚が切断される。突然起きた出来事に悲鳴を上げる事すら許されず、地面に転がる。両脚を切断されれば立つ事も出来ない。

ここで疑問。男はいったいどうやって両脚を切断されたのか？

それは狐の指にあった。狐は黒い手袋を着用しているが、これは単なる防寒用ではなく、指の先に銀色の極細の糸が組み込まれていた。狐は指を巧みに動かして、男の両脚を切断したのだ。

男が声にもならない痛みに襲われている中、狐は笑う。

「あはははは！　ごっめーん、おじさんが俺の嫌いな名前を口にしたから、おじさんの脚、切っちゃった」

語尾に音符マークでも付きそうな程の軽快な喋りに、男は思った。

コイツ……イカれてる。

男はそんな事を思う中、狐は更に言葉を続ける。

「でもね、おじさんを捕らえないと怒られちゃうんだよ。だから移動手段を断たせてもらったよ。だから……」

そして声のトーンを落として男に近付く。

「さっさとくたばれ」

狐は地面に悶えている男の顔面をボコボコに踏み潰す。高笑いす

る訳でもなく、怒りに身を任せる訳でもなく、ただただ無感情で男の顔を崩壊させていく。
それを一分も続ければ男はぐったりしていて、もう抵抗する力も無い。いや、意識を失っているのだから当然なのだが。

これで任務完了だと判断し、狐は外套から携帯を取り出し誰かに電話を掛ける。

数回のコール音の後、狐が電話を掛けた者が出る。

『学園長じゃ』

狐が電話を掛けた相手は学園長で、狐は任務完了の旨を報告する。

「侵入者を捕獲しました。遣いを頼みます」

『あい分かった。……殺してはおらんじゃろうな？』

「ええ、もちろん。ただ両脚は失われ、顔も見るに耐えない状態ですが……」

『……まあ良い。では遣いの者を出す。場所は？』

「森林地区。ちょうど中央部です」

『うむ、直ぐに向かわせる』

場所を聞き出した学園長は電話を切り、狐も携帯電話を仕舞う。

狐と男以外、誰も居ないこの空間で狐は空を見上げる。こんな醜

い裏の仕事をしているにも関わらず、対照的に夜空は星達が輝いている。

一般の人はこの夜景にも価値を見いだすのだろうが、狐は違う。

「あんなに綺麗だと壊したくなるよね」

狐はそう言って狐の仮面を外す。そして露わになった素顔は篠宮カイの顔。

分かりきっていただろうが狐の正体は篠宮カイだった。侵入者の男を恐怖に陥れ、残虐的に虐げた。夕方、あれだけ女子達から命からがら逃げてきた少年とは思えない。

「さて、仕事も終わったし帰るか」

仕事が終わった為か口調も軽快になって、その場から歩き出し、闇の中へと消えていった。

こうして少年、篠宮カイの一日は終わりを告げた。

一方、侵入者を捕らえに来た魔法使いは男の残酷な状態を見て唖然としたと言う……。

篠宮カイという少年のお話（後書き）

えー、何を申して良いやら。

この篠宮カイという少年は主人公らしくないですね。

はっきり言ってこんなんじゃ原作キャラには嫌われますね。

まあどうでもいいのですが。

ともかくこんな主人公で良ければ続きも見てやってください。

篠宮カイという少年のお話2（前書き）

何故一緒にしなかったのだろうと自分自身疑問に思ってます。

ともかくお粗末ですが見て頂けると嬉しいです。

篠宮カイという少年のお話2

チュンチュン、チュンチュン。

小鳥の囀る鳴き声を目覚ましとした風変わりな方法で目覚めるカイ。備え付けのベッドから上半身を起こし、枕元にある目覚まし時計を、眠くて眠くて開けられない眼を必死に開けて見る。

目覚まし時計が指していた針は短針が7の手前、長針が11。つまり六時五十五分。

まだ寝れるな、と判断したカイは再び体を寝かせて二度寝を敢行しようとした。

「……」

数秒後、バッと起き上がり、目を見開いて再び目覚まし時計を確認する。確かに目覚まし時計の指針は六時五十五分を指していた。ただし秒針は1と2の間を動こうとはしていなかったが……。

「……はああーっ！？」

何電池切れをかましてんだよこのクソ時計は！？　と目覚まし時計に理不尽な怒りをぶちかましながら携帯電話を開く。

画面にはデジタル文字で07：59。いや、もう08：00に変わりました。

この無情な現実を受けてカイの脳内は活動を縮小してしまった。

（これって完全に遅刻フラグだよね？　ううん、フラグなんて甘いものじゃなくて確定事項なわけで……）

……終わった。今日は遅刻で確定だ。

この麻帆良学園は幼等部から大学部までのあらゆる学術機関を詰め込んだ学園都市。幾つもの学校が存在して、敷地面積が異様に広い。各々が所属する学校には基本的に電車を利用して登校するのだ。

そして電車が来るのは約五分に一回。今から制服に着替えて学生寮を出ても駅に着くのが約八時十分。電車に乗るのが八時十五分、そして男子中等部までが約十分。登校時間は八時二十五分と決まっている訳で……。

「……ま、一応行くか」

カイは途端に冷静になってゆっくりとベッドから起き上がる。どうせ遅刻は確定なので焦っても仕方ない。

髪をバリボリと掻いて冷蔵庫から缶コーヒーを取り出し、プシュっと音を立てプルタブを起こし飲む。ブラックなので独特の苦味が口の中に広がり、朦朧としていた意識が冴えていく。

あーっとおっさんみたいな声を出してカイは完全に目を覚ますと、颯爽と制服に着替える。そして黒いマフラーを装着すれば完成。

鞄を手にして部屋から飛び出ると、ゆっくりとした足取りで駅へ向かう。

いつも通りの登校風景に何か刺激的な物が欲しいと思うのは平和に馴染んでいるせいか。

この麻帆良学園は先程言った通り幼等部から大学部までのあらゆる学術機関を詰め込んだ学園都市だ。街並みもヨーロッパみたいな感じで、まあ綺麗だとは思える。だがそれは表の顔。

裏の顔は西洋魔法使いが支配する西洋魔法使い日本支部がある所でもある。

此処の人間は他の街と比べて平和に過ごせている。それは裏で暗躍する魔法使い達が活動しているから。ここの魔法使い達は勧善懲悪、危ない人が居たら助け、この街の人間やこの街を貶めようとする者がいれば裁きを加える。これだけ聞けば良い人達なのだろう。

だがそれが本当に良いとは限らない。

魔法使い達はその存在を完全秘匿とし、表に出る事を恐れている。魔法使いという存在は異能の力を使う。これまで隠され、空想化されていた存在が明るみに出れば、間違いなく歴史は変わるだろう。そんな事が起きないように専門の情報機関がある訳なのだが。

そしてヨーロッパの様な街並みを悠々と歩いているカイも、一応魔法使いに分類されている。それでも大半の魔法使いはカイが裏の人間だという事を知らず、知っているのは学園長を含め数人。カイは『学園長の懐刀』として活動しているので、知らなくても当然と言えば当然か。

だがカイは魔法使いとしての能力は低い。それも見習い魔法使いを卒業した魔法使いと同等程度。

魔力もあまりなく、気も使うのは出来ない。それに加え身体能力も一般平均を下回り、一般生徒にも負けてしまう始末。

実際に一般生徒との喧嘩になれば負けるのが殆ど。では大学部の格闘団体や中国武術研究会には勝てない、負けてしまいます。

はっきり言ってしまえば落ちこぼれ以下の存在。評価なんて最低ランクのEらんくを烙印されている。

そんな彼が学園長の『懐刀』として在るのは特別な力を所有しているからだ。

それは……。

「……ぁ、朝ご飯食べるの忘れてた。……はぁ」

駅に着いた所でカイは朝食を抜いて部屋を飛び出してしまったので、今頃になってぐぅ～っと腹が鳴る。腹が減っては授業中に寝てしまいかねないので、駅にあるパン屋で適当な物を買う事にする。

「いらっしゃいませえ～」

営業スマイルが輝いている店員さんに不覚にも心を癒されてしまったが、そんな事はどうでも良くさっさとパンを購入する。

購入したパンはメロンパンにチョココロネにフルーツサンド、後は紙パックのコーヒーを購入する。計五〇〇円。

「ありがとうございました～」

営業スマイルに押し出され店を出たカイは学生証を通りだして改札を通る。学生であれば学生証で無料で通れるので、便利な時代になったなと、しみじみ思う。

改札口を通り駅のホームに着けば、ちょうど電車が到着する。いつもなら満員電車も今日は遅刻したおかげで、車両は誰一人として居ない。

誰一人として居ないということでカイは電車の中で朝食を取る事にする。マナーが悪いので真似はしないでもらいたい。

もぐもぐとメロンパンを頬張っていると、窓の外から麻帆良の街並みが視界に入ってくる。

「……ほんと、此処だけは平和だね。魔法使いが居るおかげか、それとも此処に住む人間の脳天気さが原因か……」

カイの過去にあった事と現在を比べると、何が平和になれるのか原因が分からない。麻帆良だけ外界と隔離されたような生活がされているのだ。羨んでも仕方ない。

ハッと我に返ったカイは首をブンブンと振り、雑念を振り払う。

いつの間にか男子校がある駅に着いていて慌ててカイは降りる。やっぱり人が居ないな、と当たり前の事を思う。

「さて、気分を入れ替えて行きますか」

先程の暗い気分より一転して明るい気分で、鼻歌を歌いながら通

学路を歩いていく。その通学路を歩くのはカイ一人だけ。

だんだんと虚しさが心を蝕みます。

「……あれ？」

ふと、カイは異変に気付く。

何でも誰も居ないんだ？

これまでカイ何度か遅刻した事があり、今回が初めてという訳ではない。それまではカイ以外にも遅刻をした者がちらほらと、カイと同じように歩いていたりした。

しかし今回は誰も居ない。カイは途端に嫌な予感がしてズボンから携帯電話を取り出して、カレンダーを確かめる。そして唖然とする。

「……今日は土曜日じゃん」

そう、今日は土曜日。学生さんはお休みです。

カイは今日は学校があると思ってわざわざ制服に着替え登校してきたのに、休みだなんてやる気ゲージが最下降点まで到達する。

要はカイどこかしら抜けている。

ピューっと冷たい北風がカイの無駄な労力を労ってくれた。

数分の後、我を取り戻したカイは取り敢えず制服を着ているので、学園長の所まで向かう事にした。

実は昨日の依頼の報酬を受け取っていないので、受け取りに行く事にした。

学園長が居る場所は麻帆良学園本校女子中等部。意味が分かりません。

何で幾つも学校があるのに女子中にあるんだ？

そう疑問を問いかけたいカイだったが、この場には誰もカイの問いに答える者は居らず、自問自答しても仕方ない。

愚痴を零しても仕方ないのでカイはやる気を何とか持ち直しながら、女子中がある場所へ向かう。

「しかし女子中か……男の俺が入るのは気が引けるな……」

そう呟くカイはこう見えても男の子。本能的に女にモテたい、そう思うことだってある。

だがカイは女顔である以上、モテることはない。女性に言い寄られてもきっと同性愛者だと思う。あくまで予想だが。

そもそもカイを心から好きになる人なんて滅多にいない。おそらく確率的には年末ジャンボ一等賞を当てるよりも無いだろう。

それ程までに女運がない。おそらく一般的にモテない人よりもモテないだろう。

だって友達の親衛隊に襲われるぐらいなのだから。

きっと俺は永遠に孤独に生きるでしょう、とつまらない予言を言うカイ。

そんな馬鹿な事を思っていると麻帆良学園女子中等部に辿り着く。やっぱり人一人居ない。

（何か禁断の領域に足を踏み入れる気分……，心が躍動してしまいます！）

もう脳内では変態じみたことが繰り広げられ、収拾がつかない状態になっている。それでもカイは足を踏み入れる。

普通は入れない場所に入った時、人は好奇心に駆られるだろう。今のカイは全くそれだ。

周りを見渡しながら歩みを進める。

（……何か男子校と大差ないな…）

学園長を目指して歩いている中、全くと言っていい程やる気が落ちていく。最初は禁断の領域に足を踏み入れることにワクワクしていたにも関わらず、自分が通う男子校と同じだなんて、好奇心は急下降だ。

いや、構造自体は一緒な筈だから違う箇所なんて殆ど無い。あるとすれば学園長室が有るか無いか、それだけだろう。

はぁ、と溜め息を吐けば学園長室の札が見えてくる。

漸く着いたと首の骨を鳴らして気分を持ち直すと、右手で扉をノックする。

「失礼します。学園長いますか？」

「うむ、入ってよいぞ」

カイの言葉に学園長室から老人の返答が返ってきた。何か妙に噛み合っていないが、気にせずにカイは扉を開けて入る。

学園長室に入れば学園長が一人だけ。

相変わらずスゲー頭とスゲー耳、とカイは学園長の容姿に心の中で笑う。学園長の容姿は妖怪そのもの。頭は後ろに伸びており、耳もピアスによるせいか異様に下へ伸びている。

正直言って気持ち悪い、引きます。

だが此処の生徒達の大多数はそれを面白がり、気にする様子は無

い。やはり此処の人間はおかしいと思える。

普通の人が異常に思えることを異常に思わないのだから。

まあそんな事はどうでもよく、カイは早々に本題に移る。

「学園長、昨日の依頼の報酬を貰いに来ました」

「ああ、そうじゃったな。ほれ」

カイの様子要求に学園長は机の引き出しから封筒を取り出し、机の上に置く。カイはその封筒を手に取り、中身を見る。

中身は一〇万円。

「一〇万円ですか……？」

「うむ。依頼は『侵入者の捕獲』じゃからな。殺害とは違う」

「……まあ、それもそうですね」

学園長から依頼された内容は『侵入者の捕獲』。侵入者を殺すことよりは軽い内容ということか、報酬は少ない。

いつもなら学園長からの依頼は『侵入者の殺害』なので、報酬金は五〇万円から二〇〇万円まで。賞金首ならもっと多くの報酬が貰える。まあ無名の侵入者を殺しても最低五〇万円は貰えるので、割といい仕事なのかもしれない。

「それで学園長、昨日の男はどうなりましたか？」

カイは何となく昨日の男について訊ねてみる。それに対し学園長も返答する。

「うむ、自分の名前とある程度の言語記憶だけは残して全ての記憶を消去させた。お主が両脚を切断したお陰で学園都市外の病院に入院させておいたがな」

どうやら男は自分の名前と言語記憶以外は全て消去され、学園都市外の病院に入院させるように手配させた。この判断にカイは意外そうな顔をする。

「脚、治さなかったんですか？」

「侵入者が最高の魔導書、『メルキセデクの書』を盗もうとしていたのじゃ。ああなっても仕方ないじゃろう」

「……お人好しな学園長とは思えない判断ですね。意外です」

カイとしては学園長を含めた魔法使いは男の両脚を治して、外へ投げ出したのかと思っていた。

しかし学園長は男の怪我も治さず、外の病院に捨てた。

「男が『メルキセデクの書』の情報を得た組織の尻尾も掴めた。あの男は用済みじゃ」

あの朗らかな性格をしている学園長だが、時々こういった裏の顔を出す時がある。

身内には甘ったるいくせに敵には厳しい一面も見せ容赦はしない。

こういう采配はカイも認める部分かもしれない。

「じゃが男を殺せなかったことに関しては、ワシはお人好しなのじゃろうな。生かしておるのじゃから」

「……まあ、そうですね」

「お主みたいに冷酷にはなれんよ」

学園長は自嘲しながらカイも貶しているように言う。確かに裏の仕事をしている時のカイは冷酷だ。いや、単にイカれているだけか。

まあ学園長のお人好しな性格は長所なのだろう。例え自分や身内の首を絞めようとも。

「さて、俺は帰ります」

報酬も受け取れたので用は無くなったカイは学園長室から去ろうとする。すると学園長からある疑問を投げかけられる。

「何でお主は制服を着ているのじゃ？　学校は休みなのに……」

その問いにカイは振り返り、爽やかに答える。

「勘違いしました」

そう爽やかに答えたカイは学園長室から去っていった。

一人残された学園長はカイについて呟く。

「案外抜けておるのぅ……」

報酬も受け取り、何となく懐がホクホクする感じなので、今日は盛大な夕食にしようかと頭の中で膨らませている。

いっちょ超高級焼肉店で一人焼き肉するか、とカイは今日の夕食を確定させる。もう顔はえへへ、と変態じみた表情をしている。

この顔を誰かに見られれば通報されても仕方ない顔だ。

そんな顔をしているカイの背後から忍び寄る影。

直後にカイの背中に大きな衝撃が加わり、カイは焼き肉を食べている妄想から現実へ引き戻される。

「――――ってぇ！？　何なんだいったい？」

ジンジンと痛む背中を庇いながらカイは振り返る。其処に居たの

はニヤニヤと笑っているカイの友人。

「……浩輝か。てめぇ何しやがる」

カイの背中をバシンと叩いたのはカイの友人、加藤浩輝。

この男こそが昨日カイを命の危険に陥れた親衛隊が崇拝する人物。

カイと同じクラスの友人で寮の部屋は隣同士。

容姿は非の打ちどころが無いほどの整った顔。その容姿と頼りがいのある性格から男女共に『プリンス』と呼ばれている。

運動能力も勉強の成績も良く、男子中ではトップクラスに入る程。なのに部活には入っていない。

喧嘩の方も強く、高校生相手なら負けた事はない。喧嘩を吹っかけられ、やられていたカイを助けた事もある。

そう、浩輝は完璧人間である。全く羨ましい。親衛隊が出来るのも納得だ。

「お前が変態じみた顔をしていたから戻してやったんだぞ？　感謝しろ！」

もう一発バシンとカイの背中を叩く浩輝。細身で筋肉が少ないカイは苦痛の表情を浮かべて耐える。

正直背骨が折れないか心配で心配で仕方ない。

「そういや、昨日は大丈夫だったか？」

「大丈夫じゃないって。あの親衛隊ヤバいよ。金属バットやら木刀、そして鉄筋だぞ！？　あり得ねえよ！」

軽い口調で聞いてきた浩輝にカイは命からがら逃げた事を話す。あの逃走劇は映画になるぜ、と誇大化して説明するカイに浩輝は大笑いを上げる。

「アハハハ！　おもしれえな！」

「笑い事じゃねえよ！　マジで死にかけたんだぞ！？」

「いや、わりぃわりぃ！　まあ確かにそれはやりすぎだよな。俺からも言っておくよ」

「頼んだぞ？　俺の命が懸かっているんだから」

本当に浩輝が親衛隊の子に言ってくれないとカイの命は危ない。それは確かな事だ。

そんな中、浩輝はカイの服装に疑問を持つ。

「何で制服着てるんだ？」

「……」

答えたくありません、絶対に笑われるから。

だが答えない訳にもいかないので、か細い声で答える。

「今日学校があると勘違いして此処まで来てしまった訳で……」

「……プッ！　くっ、あはは！　お前って本当に抜けてる所あるよな！？」

ほら、笑われた。

カイの素を知っている浩輝にとっては、そんな抜けている所も人気の要因の一つかもしれない。大いに笑われて恥ずかしいカイは学生寮に戻る為、歩く。

「待てって。悪かったって。機嫌直せよ？」

そう言って浩輝はカイの肩に手を回す。

「うるせえ、ばーか」

「……お坊ちゃんが今日クラスの皆に焼き肉奢ってくれるってよ。それで俺はお前を探しに――」

「マジ！？」

浩輝の言葉に目を輝かせるカイ。

ほんと食い物に関しては単純だよなぁ、と浩輝は引き気味になりながら思う。

カイは食い物に関しては目がない。美味い食い物なら何だって食うし、この体で大食いだ。クラス一の大食いで、麻帆良で行われた

大食い選手権では大学生などを相手に優勝したこともある。

あれは凄かったなー、と当時の事を思い出す浩輝。クラスの皆に推薦され嫌々ながら出場したカイが、圧倒的な食いっぷりを披露して会場を驚かせたのは良い思い出だ。

それから一部では『ブラックホールの胃袋を持つ女男』と呼ばれていたりする。

そんだけ食えるなら太れるだろうと思うのだが、どういう訳か太らない。カイはいくら食べても太らない体質なのかもしれない。

因みに浩輝が言った『お坊ちゃん』はカイと浩輝のクラスの委員長のあだ名。女子中の雪広という財閥の娘が居るが、その財閥と同等の財力を持つ財閥の息子。だから『お坊ちゃん』と皆に呼ばれている。

本人はこの呼び名は嫌っているが、事実そうなので色々と諦めている。

ともかく浩輝は問う。

「……で、行くか？」

「行くに決まってんだろ！」

「なら決まりだ！　と言っても集合は六時だから時間あるし、どっかで暇潰そうぜ？」

「ならゲーセンでも行くか？　臨時収入も入ったし」

「臨時収入？　……ま、いっか。よし、行こうぜ」

「ああ」

浩輝はカイの臨時収入に疑問を持ったが、直ぐにどうでもよくなり、カイを引き連れて歩いていく。

一方、カイとしては浩輝が麻帆良の人間で良かったと安堵した……。

篠宮カイという少年のお話2（後書き）

話としては全然進んでません。

何か原作キャラと関わったの学園長だけですね。

このままネギとか明日菜とか関われるのか微妙です。

まあ男子校に通っていたら基本的に関わることなんて無いですしね。

とりあえず頑張ってみます。

殺人鬼は冷たく笑う（前書き）

戦闘描写ってやっぱり難しいですね。

お粗末ですが見て頂けると嬉しいです

「――い、――ろ――」

うん？　うるさいな。

微睡みの中で寝ていた少年は突如聞こえてきた何かの声に覚醒し始める。

「――おい、―きろ！」

ああ、浩輝の声か……。

少年はこの声の主が自分の友人だということに気付く。これは起きないといけないなと思いながら、目を開けようとすると突如腹部に激痛が走る。

「――――っ！！」

いきなり腹部に激痛が走ったことに少年、カイは体を丸めて痛みが和らぐのを待つ。

「起きたか、カイ？」

「……お、きま、し、……た……」

カイの腹部から脚を退かして冷たい目で見下ろす浩輝。

いてて、とカイは腹部をさすりながら、蹴って起こした浩輝を忌

々しく見詰める。

「何しやがるんだ、浩輝」

「時計を見てみろ」

浩輝の言葉にカイは枕元の目覚まし時計を見る。時刻は六時五十五分を指していた。

「まだまだ大丈夫じゃないか？」

「それ、電池切れ」

「……ぁ」

浩輝の言う通り目覚まし時計は秒針が動いていなかった。

ああ……電池変えてなかったんだ、とカイは何で電池を変えなかったんだと悔やみながら落胆する。

取り敢えず携帯電話を取って開くと０７：３０と表示されている。

「……遅刻するじゃねえか！？」

「分かったらさっさと着替えろ！！」

浩輝が急かす中、カイは急いで制服に着替える。二日前は休日ということで遅刻は免れたが、今日は普通に学校がある日。今回は遅刻するわけにはいかない。

そして出来る限り早く着替え、冷蔵庫から缶コーヒーを取り出して一気に飲み干す。空になった缶コーヒーをゴミ箱に投げ入れて、鞄を手にする。

「よし、行こう！」

全ての準備を整えたカイは浩輝に声を掛ける。

コイツ着替え早いなーっと心の中で呟いている浩輝だったが、遅刻する訳にはいかないのでカイと共に部屋を飛び出した。

取り敢えず駅までは全速力で走って、走って、走り抜く。浩輝は足も速いので良いが、カイは足に関しては平均的。徐々に離されていくのが分かる。

「――浩輝っ、速い――！」

「ったく、もう少しで駅だから頑張れ！」

「――っくそ！！」

何となく上からの発言に少々頭にきているが、今は頑張って走る。遅刻したら面倒なことが起こりそうなので仕方なく走る。

駅にたどり着くと大量の人。次は精神的に厳しい満員電車に乗り込まないとならない。

「何かいつもより人が多いような……」

「一本早く来れていたら少しは楽になれたかもな～」

カイの呟きに浩輝が素っ気ない感じで答える。まるでカイの寝坊に責任があるかのように。実際にカイの寝坊が原因なのでカイも反論出来ない。

勝ち誇ったかのような笑みを浮かべる浩輝を恨めしく睨むことしか出来ないカイ。そんな時、麻帆良学園中央駅行きの電車が到着する。

それに乗り込めば待っているのは華やかさなどない男共のよく分からない独特な匂い。それでも誰かが適度に香水を付けているので、匂いに関しては耐えられる。

後は目的の駅に着くまで窮屈な状態で我慢すればいいだけの話。

あーまだかなーっと心の中でカイは愚痴を零していると浩輝が話しかけてくる。

「な、知ってるか？　今日女子中に新任教師が来るんだってよ？」

「新任教師　こんな時期に？」

「そうそう。何でもその先生ってのが十歳の子供なんだとか」

「はあ？　十歳の子供が先生？　寝言は寝てから言えよ、浩輝」

浩輝が言っている事を全く信用していないカイは呆れ顔で答える。それもそうだ、十歳の子供が働ける訳がない。労働基準法に引っ掛かる。しかも先生とか有り得ない。年上の生徒達を年下の先生が教えるとか色々と終わってる。

だが此処は麻帆良学園。中には裏の住人、魔法使いが居るくらいだ。外に情報を漏らさないように統制すれば何とかなるかもしれない。その新任教師が魔法使いだというのなら尚更。

というか間違いなくその新任教師は魔法使いなのだろう。それしか考えられない。浩輝の言っていることが本当の場合なら。

「だけどネズミが言ってたんだ。間違いないだろうよ」

「あいつが？　それなら確かに少しは信用出来るけど……」

ネズミと言うのはカイのクラスの一人のあだ名。本名は木村耕太。部活は報道部に入っていてクラス一、いや、学校一の情報通で日夜コソコソと学園都市を走り回っている。故にクラスの皆から『ネズミ』と呼ばれている。

そんな男の情報はどれも正確で一度も誤報を流したことはない。だからカイも信じる心が広がってきたのだ。

「でもおかしいよな？　いくら此処が麻帆良でも十歳の子供を先生にするなんて」

「ああ、何考えてんだ、あの妖怪じじい。……ま、俺達には関係無いんだろ、女子中の話だし」

「自分のこと以外はクールだねぇ。もう興味を失せちゃったか」

興味を失せ、窓の外の光景を眺めるカイに浩輝は苦笑いを浮かべる。

新任教師が来るという事に最初は興味を持ったカイも、結局は自分には関わらないのでどうでも良くなった。

所詮は他人事、俺には関係ないぜと言わんばかりにカイはいつも通りの表情。もうカイの心には新任教師の情報など消失している。

『次は麻帆良学園中央駅――』

そして到着のアナウンスが流れ電車のドアが開かれる。

「さ、路面電車まで走るぞ、カイ！」

「また走るのか……」

また走らないといけない羽目になってしまったカイは本当に嫌そうな顔だ。それでも遅刻をしたくはない。

何故なら今週は遅刻者ゼロ週間があるからだ。遅刻をした者にはイエローカードが進呈され、二枚貯めるとレッドカードになる。レッドカードになった者には罰が用意されていると言われているので、どうあっても罰は受けたくない。

カイは罰を受けたいという体質や性格はしていないので、やっぱり遅刻は嫌なのだろう。路面電車まで頑張って走る。

路面電車も走っているのでなかなか追い付けないが、先に路面電車に捕まった浩輝がカイに手を差し伸べる。

「カイ、掴まれ！」

「ああ！」

浩輝が差し伸べた右手をカイも走りながら右手を伸ばす。うんと伸ばして何とか浩輝の手を掴むと、浩輝は力を入れてカイの体を自分の方へ引き込む。

そしてカイもまた路面電車に掴まり、カイと浩輝は互いに顔を合わせニッと笑う。この二人の間には信頼関係が築かれ、しっかりと絆が結ばれている。

こういうのが浩輝の親衛隊の癪に障るのかもしれないが……。

遅刻することもなくカイと浩輝は無事に自分達の教室に辿り着き、中に入ると学級委員長の『お坊っちゃん』が腕を組んで立ちふさがるように立っていた。

「篠宮君、危うく遅刻するところでしたね？」

「いや、別に遅刻してないし問題ないと思うけど……、って何で俺だけなんだよ？　浩輝も遅刻しかけてるじゃないか！？」

「僕が加藤君に篠宮君を起こしに行くように伝えたんです。加藤君はちゃんと規則正しい生活を送っていますからね」

今日カイを起こしに来た浩輝はお坊っちゃんの指令によって、と言うことが判明した。

カイは無表情だが何処か冷たい目で浩輝の方を見ると、浩輝はそっぽを向いて口笛を吹いている。恨めしい。

はぁ、と浅く溜め息を吐いたカイは肩を竦み上げる。

「取り敢えず遅刻しなかったんだから勘弁してよ、お坊っちゃん」

「……今週だけは絶対に遅刻しないでくださいよ。遅刻して辱めを受けるのは篠宮君なんですから」

そう言ってお坊っちゃんは自分の席へと戻っていった。

辱めって何なんだ？　とお坊っちゃんの言葉に言い知れない不安をカイは抱いてしまう。この時、今週だけは遅刻はしないでおこうと決めたカイだった。

しかしながらお坊っちゃんがカイに注意してくれるのは、委員長としてカイを心配してくれているのだろう。自分のことだけじゃなく、周りの者の気遣いも出来るからクラスの学級委員を務めているのだろう。それだけにお坊っちゃんの信頼は厚い。カイもそんなお坊っちゃんに信頼を置いている。

自分には到底出来ないことをしているのだから、お坊っちゃんは凄いなとカイは思っている。

その時、チャイムが鳴り、それと同時に先生が教室に入ってくる。

「篠宮、さっさと席に着け」

「え？　俺だけ？　浩輝は……、っていねえ……」

教壇に着いた先生はカイにだけ言う。それに疑問を持ったカイは後ろを振り向くが浩輝の姿はない。

浩輝の席を見れば既に浩輝の姿が在り、カイの方へ手を振っている。全く恨めしい。

そんな感情を抱きながらもカイは自分の指定の席に着く。カイの席は窓側の一番後ろ。何となく偉くなった気分がする。

「朝のホームルームを始める」

カイ達の担任、神多羅木はホームルームを始める。

この神多羅木という男はオールバックの黒髪にサングラスをかけ、髭まで蓄えている。この容姿から生徒達の間では『グラヒゲ先生』と呼ばれている。

それは表向きの顔で正体は魔法使い。魔法先生の一人でその実力は高く、もちろん今のカイよりも強い。まあカイは殆どの魔法使いには勝てないのだが。

だが神多羅木はカイが学園長の『懐刀』として学園の敵を排除している事を知らず、普通の一般生徒だと思っている。流石に魔法先生の神多羅木も魔力もなく、身体能力が低いカイを裏の人間たどは思わないのだろう。

それはカイにとっては好都合なので期待に添えて『しがない一般生徒』をやっている。

まあカイが本当に隠さなければならない事柄は他にあるので、どうでも良い事だが。

神多羅木の渋い声を聞き流しながらカイは窓から外の空を見る。今日も清々しいくらい青空が映っている。今日も平穏に暮らせれば良いなとカイは思う。

先日みたいに侵入者が現れることもなく、平穏に暮らせればどれだけ楽なのだろうか。

人も殺さず過ごせるなら……。

「――――いてっ！」

突如カイの頭に小さな痛みが襲う。それは白いチョーク。投げたのはグラヒゲ先生。

「外の景色を眺めず俺の話を聞け」

「……はい」

この瞬間、小さな笑いが教室を包み込んだ。

特に珍しいことが起こった訳でもなく、何事もなく今日の学校は終わりを迎えた。

「じゃーな篠宮」

「おー、また明日な」

カイが帰り支度を済ませている途中、クラスの一人がカイに別れの挨拶を告げ、カイもそれに返答する。学生寮でも会う可能性があるのに、また明日な、と返答するのは如何なものか？

そんなこと気にせずカイは帰り支度を続けていると、他のクラスの皆もカイに声を掛けていく。それに応えるカイ。こんな事はしょっちゅうだ。

この人気が女子にも有ればなと常々思っている。

カイがそんな事を思っていると浩輝が声を掛ける。

「一緒に帰ろうぜ」

浩輝はカイに一緒に帰ろうと誘うが、カイはそれを断る。

「断る」

「何で！？」

「お前の親衛隊に追いかけられたくないから」

「……ぁ、あー、なるほど。それなら納得」

カイのとてつもなく嫌そうな顔と言葉で浩輝は思い出す。先日、カイが自分の親衛隊に追いかけられていたことを。

あれは浩輝からしてもやりすぎた事件だし、カイが断っても仕方ないと思える。

恐らく今日も出待ちされているので親友を危険に陥れない為にも、浩輝は諦める。

「わかった。じゃあな」

「ああ」

浩輝は手を上げて教室から去っていく。きっと親衛隊に囲まれながら学生寮に帰っていくのだろう。

ご愁傷様、とカイは心の中で祈りながら帰り支度を終える。いざ

帰ろうとすると、お坊っちゃんがカイに声を掛ける。

「篠宮君、明日も遅刻しないように早く寝てくださいね？」

「あはは、わかったよ。今週は早く寝れば良いんだな？」

「ええ。そうすれば遅刻する確率は減少する筈ですから」

「ありがとう委員長、こんな俺を心配してくれて」

色々と注意をしてくれるお坊っちゃんにカイは礼を述べる。

妙に真剣に言ってくるカイにお坊っちゃんは目を見開いて驚く。

「なっ！？　どこか頭をぶつけましたか？」

「……そんなに俺が礼を言うのがおかしいか？」

「これは明日は雪が降りますね、間違いなく」

お坊っちゃんにとってカイが礼を言うのは珍しいことであり、異常なのだろう。そんなに礼を言った事が無かったか？　等とカイは思いながらも、お坊っちゃんに向かって手を振る。

「……ちぇ、礼なんて言わなければ良かったな。それじゃサヨナラ、お坊っちゃん」

「ええ、さようなら。また明日」

カイの挨拶にしっかりと返答するお坊っちゃん。カイが教室を出て行くまで見送ってくれる。

お坊っちゃんと別れた後もブツブツと文句を言っているカイ。意外と根に持つタイプのようだ。

「さて、この後どうするか？　帰ってゲームでもするか」

学生寮に帰った後の予定を考えるカイだったが、やはりゲームをするという選択に落ち着く。

基本的にカイは仕事が無い日は部屋でゲームをして過ごすことが多い。友達に遊ぼうと誘われれば遊ぶのだが、誰からも誘われなかったら部屋で一日ゴロゴロとゲームをする。

学校や仕事が無ければ間違いなく引きこもりになっているだろう。一部からは『引きこもり予備軍』と思われていることも。

これからの予定も決まった事だし早く帰ろうと思っていた矢先、カイの携帯電話の着信音がズボンから鳴っている。

何となく嫌な予感がするのは俺だけでしょうか？

カイは恐る恐る携帯電話を開き、画面を見ると其処には『学園長』という文字。カイの嫌な予感は当たった。

このまま出ないでやろうかと思いつつも、カイは仕方なく電話に出る。

「はい、何ですか？」

『むっ、不機嫌そうじゃの？』

「いえ、別にそうではありませんが、今はまだ校舎の中に居ますので、後で此方から折り返させてよろしいでしょうか？」

『おお、そうか、すまないことをしたな。お主のことじゃから直ぐに帰ってぐうたらしてるものじゃと思っておったぞ』

「あんた俺を何だと思ってんだ？」

『いやいや失敬』

「……切ります」

不機嫌が最高潮に達したカイは学園長との通話を切り、携帯電話をポケットに戻す。

こんな時間から出動要請なんてしないよな、と思いながらもカイは学園長に電話する為に、人気のない場所まで移動する。

歩いて、歩いて、人気が無い場所に辿り着いてカイは学園長に電話する。一回のコールで出る学園長。

『待っておったぞ』

「用件だけ聞きましょう」

『うむ、実は今日の警備に欠員が出てしまっての。何とか篠宮君、お主に警備に回ってもらいたいんじゃ』

「……俺の素性は学園長を含めた数名しか知らないんですよ？　そ

んな俺が警備に出られるとでも？」

学園長の依頼にカイは疑問を持つ。カイの正体は学園も含め数人のみ。魔法使いの間でも秘匿とされている。

そんなカイを夜の警備の仕事をさせるとは、どういう頭をしているのだろうか？

『安心してくれ。お主の事を知っている人物と組んでもらうからの』

「いや、そういう事じゃなくてですね……」

『もし他の警備の者と鉢合わせになったとしても、その者がフォローするように言っておく。これならどうじゃ？』

学園長は何とかカイに夜の警備に出てもらおうと画策しているが、カイも引き下がらない。

「それよりも俺以外に警備出来る人達は居るでしょう？　その人達に頼めば良いじゃないですか？」

『いや、使える者は出払っておっての。他ではちと不安じゃ』

「俺もその他の部類に入るとは思いますが」

『お主には例の力が有るじゃろ？　そりゃお主『個人』の力は当てにはしておらんが……』

「……悔しいですけど本当のことなので反論出来ない」

『ともかくどうじゃ、引き受けてくれんかの？　報酬もちゃんと用意しておく』

学園長のしつこい誘いにカイは遂に折れてしまう。

「分かりました。やれば良いんでしょ、やれば」

『そうか、引き受けてくれるか。なら深夜零時、世界樹広場前に居ってくれ。お主と組む者を向かわせるから』

「分かりました。それでは」

学園長に了承の旨を伝えカイは電話を切る。

次第に安請け合いをしてしまったという後悔の念が沸いてくる。早速お坊っちゃんとの約束を破棄してしまうことに申し訳なさが滲み出てくる。

まあ約束もしてしまった事だし、カイは切り替えて警備の仕事の準備の為、学生寮へと戻ることにした。

午前零時、麻帆良学園世界樹前広場。

日付も変わり辺りには静寂が佇む中、カイは仕事着を着て座って待っていた。今日はやけに寒いので完全防備で来た。もし戦闘が起こるようなことになれば足手まとい間違いなしだ。

そろそろ来る頃かな、と相手を待ちわびていると、後ろから誰かの足音が響いてくる。

やっと来たかとカイは後ろを振り向けば、一瞬硬直、すぐに苦い顔を浮かべる。その人物はカイの苦手な相手である。

「お前が今日のパートナーかよ……、龍宮真名」

その人物は麻帆良女子中に通う同級生の女の子、龍宮真名。女の子と呼ぶには失礼なほど大人びていて、冷静沈着。

報酬が良ければ仕事は何だってするという、カイと同類に値する人物。そしてカイの力を知っている数少ない人物の一人。

明らかに嫌そうな顔をしているカイに真名は冷たい目で見下ろす。

「それはこちらの台詞だ。なぜお前と組まなければならないのか分からないな。今のお前は魔力も気もない、ただの一般人以下だというのに」

「悪かったな、ただの一般人以下で。精々足を引っ張らないようにさせていただきますよ、た・つ・み・や・ま・な・さ・ま！」

「相変わらずムカつく言い方をしてくれるじゃないか、チビの分際で」

「ハッ！　お前がデカすぎるんだろ？」

「フッ、そんな事しか言えないのか？　あぁ、体が小さいから脳も小さいんだな。それで大層なことは言えないと」

「……この女ぁ……！」

見ての通りこの二人は仲が悪い。犬猿の仲で面が会えば口喧嘩をすることもしばしば。

思えば初めて会った時からいがみ合っているので、相性そのものが悪いのだろう。

だがいつまでもこんな風に睨み合いをする訳にもいかず、真名は溜め息を吐いて気持ちを鎮める。

「さっさと担当エリアに行くぞ。遅れるなよ」

「……ふん、分かってるよ」

真名の言葉にカイもそっぽを向きながら頷く。こうしてカイと真名は一時のパートナーとして警備を開始した。

警備の仕事と言うのは非常に楽なものだ。

単に朝まで学園内を見回りをしておけば良いのだから。それに先日みたいな侵入者が学園内に入ってくる事も多発している訳ではない。むしろ少ないのではないだろうか。

この麻帆良学園は『学園結界』なるもので外敵から守護している。麻帆良の外に居る裏の人間も学園結界を知っている筈なので、おいおいと手は出せない。

もし手を出して侵入してしまえば此処の魔法使いが撃退するからだ。先日カイがやったように……。

今でも馬鹿みたいに侵入してくる者が居るので真名みたいな裏の人間が警備の任に就く。カイは存在が秘匿とされているので、今日まで一度も警備をした事がない。だから初めてなので内心ドキドキワクワクしていたのだが、よりにもよって褐色の長身女と共に警備だ。そんな感情は霧散してしまった。

そう言えば、とカイは真名に問う。

「あの半……桜咲はどうしたんだ?」

「……刹那ならお嬢様が気になって仕事が手に付かないらしい」

桜咲刹那という人物は龍宮真名と同じルームメイトの少女。彼女もカイの力を知る人物の一人だが、真名と同じくカイとは相性が悪い。

最初に会った時、カイが刹那を見て、『あ、半デコ』と思わず呟いてしまい、それが刹那の耳に入ってしまい彼女が持つ野太刀で斬

り掛かれた事があった。それから敬遠されている。そう、カイが全て悪い。

そんでもって刹那という少女は勝手に主としている近衛木乃香という学園長の孫娘を密かに護衛している。向こうは刹那と友達として接したいのだが、刹那は主と従者という形にこだわり、一線置いている。

何か妙な関係となっている刹那と木乃香をカイも知っているわけで、真名と組んでいる刹那が来ていないという事は木乃香に何かあったと言うことで……。

「何か有ったのか？」

「今日からお嬢様の部屋に新任教師が寝泊まりするという事で監視しているらしい。たかが十歳の子供なのにな」

「……は？」

真名の言葉にカイは呆然としてしまう。何をおっしゃっているのでしょうか？　と言わんばかりに呆然としている。

浩輝が言っていたように女子中に新任教師が来たという事は当たっており、その新任教師は真名のクラスの担任になったらしい。そしてその教師が刹那の愛しいお嬢様の部屋に寝泊まりする事となり、今も監視しているとか。

アホらし。

刹那の木乃香愛の凄まじさを垣間見たような気がしてならず、カ

イは深く溜め息を吐いてしまう。

そんな事の為に俺は警備の仕事をしているのか、と落ち込んでしまっている。だが刹那にとっては一大事な訳で、お嬢様の操が危ない！　と思っているのかもしれない。

しかし相手は十歳の男の子。流石に第二次成長期を迎えているとは思えないし、そういう考えは無いと思う。

いや、もしかしたら小学生でもそういう道に走ることも可能性は無きにしも非ず。だが……。

うーんと唸っていると真名が訝しい目で問うてくる。

「何だ、気持ち悪い顔をして？」

「気持ち悪い顔はしていないと思うんだけどな」

「で、何を考えていたんだ？」

「……別に。桜咲は今後色々と大変な人生を歩みそうだなと、お兄さんは心配になっただけです」

「……お兄さん……ね。本当にお兄さんという年齢か？」

「さあね？　どうなんだろ」

真名の問いにカイははぐらかす。

カイにとって年齢なんてどうでもいい事だろう。どうせ覚えてお

いても全く意味を成さないのだから。

その時、カイの額が一瞬だけ青白く光り、カイに『未来』が視える。

「龍宮」

「……何だ？」

「どうやら今日は不運な日らしい。敵だ」

今までのカイの雰囲気が一変した事で真名も警戒レベルを上げる。

「敵は四人。一人は杖を持っている事から後衛タイプ。残りの三人は前衛タイプのようだ。場所は市街地の路地裏。此処から北東一〇〇メートルだ」

「それは『何分後』のことだ？」

「五分後だ」

「了解した」

「俺は敵を逃がさない為、結界を張る。龍宮は援護をよろしく」

敵の居場所と簡単な作戦を立て、真名もそれに頷く。

そして来るべき『敵』を迎え撃つ為に二人はそれぞれ散った。

麻帆良学園の一般人が住み着く市街地の路地裏。其処に四人の男が話し込んでいた。

「この情報を『あの方』にお伝えしなければ……」

「しかし『あの方』が居る場所まで遠いぞ？」

「仕方ないだろ。『あの方』は気まぐれであるからな。此方に来てくれないから、此方から出向かなければならない」

「しかしこのままではバレてしまうぞ？」

「そうだよね。このままじゃ此処の人間にバレちゃうよ？　ってかもうバレてんだけどね」

「！　誰だ！？」

男達の会話に狐のお面を付けたカイが自然に会話に加わる。いきなり気配も感じさせずに近寄られた事に男達は動揺する。

それもそうだ、いきなり狐のお面を付けた謎の人間が立っていた

ら驚くに決まってる。

「別に誰でも良いでしょ？　こんな時間にこんな場所で何を話し合っているのか教えてくれない？　お兄さん達」

「誰がてめえなんかに教えるか！　さっさと失せろ！」

カイが出来るだけ訊ねると返ってきたのは罵声の言葉。一人の男を皮切りに三人の男もカイに向かって罵声を浴びせる。

これはカイにとって宣戦布告であり、カイが戦うには十分だ。

「そう。なら死んでくれ」

一〇本の指から銀色の糸が垂れ流れ、地面を這うようにウネウネ動きながら一人の男をを全身縛り付ける。

縛り付け、切り刻もうとしたが男の『気』が爆発したかのように発散され、銀糸も解かれてしまう。

（先日の侵入者のようにはいかないか）

銀糸を解かれたカイはバックステップで後退して、表へと出る。

「オラァッ！！」

カイを追いかけてきた二人の男の内、銀糸を解いた男は力が自慢のようで己の拳で飛び込みながら殴り掛かってくる。

一方、男の攻撃が『視える』カイは左方に回避して、誘うように後退する。もう一人の男は魔力で出来た剣を用いてカイに斬りかか

る。

一気に二人掛かりになってカイも焦るかと思うが、カイは全く焦っていない。男達の攻撃は全て『視えて』いるので、焦る必要がないのだ。

「くそっ、ちょろちょろと動き回りやがって！」

「全然攻撃が当たらねえ！　何がどうなってやがんだ!?」

男達の思考はカイの事で一杯であり、周りの様子なんて気にしていられない。一刻も早く目の前の狐野郎を潰したいのに、攻撃が当たらなくて頭に血が昇る。頭に血が昇ったことで動きも単調になってきて、『先を視なくても』躱せる。

そんなカイだったが突如背後に敵の魔法使いが現れる。

「解放、流水の縛り手」

「なっ!?」

カイの背中に手を付いた魔法使いの男は捕縛系魔法を発動する。予め遅延呪文として詠唱を完成させ、転移魔法でカイの背後を取った。

この男はどうやら魔法使いとしてはレベルが高いらしい。

水柱がカイを包み込み、完全に捕らえて閉じ込める。

ブクブクと呼吸が出来ずカイは息を吐き出しながらもがく。男は

わざと水の中に酸素を取り込まず、カイを溺死させようとしている。

「――う、――ぁぁ、」

「ははっ、もがき苦しんで死にさらせ！」

もがくカイの姿を見て男達は笑う。

そんな中、必死にもがくカイに狐の仮面が取れてしまう。カイの素顔が露わになり、男達はカイを凝視する。

「！　こ、コイツは！？」

男達の一人がカイの顔を見て何かに気付くが、水柱に捕らわれているカイが男達の方を向いて不気味に笑っている。この不気味な笑みに男達は一歩後ずさると、突如カイの額にある『紋章』が青白く光り水柱が爆発する。

「――ば、馬鹿な……」

カイを捕らえた魔法使いの男は自分の魔法を簡単に解いた目の前の少年に唖然とする。男の魔力も高く、カイよりは断然高い。それなのにいとも簡単に解かれてしまっては、魔法使いとして面目立たない。

実際のところ、水柱の牢獄を抜け出せたのはカイ個人の力ではなく、カイの額に宿る『紋章』のおかげ。この『紋章』の力がある限りカイは戦う事が出来る。

一方カイはびしょ濡れで『水も滴るいい男』みたいになっている

が、季節は冬、非常に寒い。水責めにした魔法使いがとても憎い。

カイは唖然としている魔法使いの男から杖を奪い取り、その杖で男の側頭部を思いっきり殴る。

「うぐあぁっ！！」

力一杯に殴られた男は壁にぶっ飛ばされ、その衝撃で気を失う。まずは一人。

「て、テメエ！！」

仲間を倒され躍起になった男達はカイに迫るが…。

「ぐあっ！？」

「うぐっ！？」

だが二発の銃弾がそれぞれ男の急所に当たり、一撃で地面へと倒れていく。この光景を見て取り敢えず一息吐く。

「流石はスナイパー、百発百中ってか？」

真名の狙撃能力に素直に賞賛を送っていると、カイの隣にスタッと真名が降り立つ。

「びしょ濡れだな。風邪ひくんじゃないか？」

「風邪ひいたら学校休めるから良いけどね」

「ふん、邪なことを思いつくな。それより四人じゃなかったのか？三人しか居ないが……」

真名は倒れている敵の数を数えながらカイに訊ねる。確かに最初は間違いなく『四人』居たのだが、いつの間にか三人に減っていた。

だがカイの『未来』はしっかりと教えてくれていた。その光景を元にカイは小声で真名に情報を与える。

「……十秒後、龍宮の足下から敵から出て来る。そこを叩く」

「……ああ、わかった」

カイの言葉に真名も信用して十秒後の『未来』に備える。そして十秒のカウントダウンをした後、カイの声と共に真名は飛び退く。

「跳べ！」

カイの声と共に真名が後ろに跳んだ瞬間、地面から最後の敵が飛び出してきた。この男は完全に真名を捉えたと思っていただろうが、それはカイの『未来』によって邪魔されてしまった。

驚きを隠せない男にカイはニンマリと笑んで、腕を広げる。

「ご苦労様でした。もう舞台から降りてゆっくり休んでくださいな」

「お、お前は！！」

「我が真なる未来の紋章よ、その力を我に示せ！」

男がカイの顔を見てやっぱり驚いているが、カイはそんな事を気にせず『真の紋章魔法』を放つ。

男の身体に青白い光が発生し、男を包み込む。大きな泡に包まれた感じで男は逃げだそうと、殴ったり蹴ったりするが全く割れない。

そしてこの状況を作ったカイは、くっくっくっと笑い、男に別れを告げる。

「残念だけどそれは割れないんだよ。『真の紋章』には『真の紋章』で対抗しないといけないみたいなんだ。だからアンタの人生は此処までだ。次は普通の人生を歩めると良いね」

「……ゃ、嫌だ！　嫌だ！！　まだ死にたくない！！　助けてくれ！！」

「……バイバイ」

男が命乞いをしているが男の声はカイには届かない。完全に遮断されているので声が届く筈がない。

すると男を包んでいる泡は急速に収束を始め、男と共に霧散していった。跡形もなく。

ふぅ、と一息吐いたカイは戦いの惨状を見る。惨状といっても地面が抉られているが、これなら何とか修復出来そうだ。

これ、俺が弁償しなきゃならないのかな？　等と思っていると、真名がカイに声を掛ける。

「相変わらず凄まじい力だな。その『真の紋章』という力は」

真名は以前に一度だけカイの『真の紋章魔法』の力を見た事が有ったのだが、その時は完全に戦場丸ごと一つ消した。敵も味方も関係なく戦い合った人々を一撃で消したカイを、酷く恐れた時期もあった。

その時のカイは魔力も充溢していたのだが、訳あって魔力は殆ど無くなっているが……。

「まあこの力を持つ人なんて『この世界』には居ないだろうしな」

「『この世界』？」

「いや、何でもない」

カイが迂闊に漏らした言葉に真名が食いつくが、何とかはぐらかそうとする。

ふーん、と訝しんでいるが、それでも真名は追求はしなかった。それに取り敢えず安堵するカイ。

カイに宿る秘密と言うのは『真なる二十七の紋章』の一つ、『真なる未来の紋章』を宿しているということ。この『真なる二十七の紋章』というのは、この世界とは別の世界にある意志を持った存在。伝説ともなっている紋章で、その力は絶大だ。『真の紋章』が暴走すれば一国は滅び、『真の紋章』が一つでも破壊されれば世界は滅ぶ。そんな存在だ。

その世界では絶大な力を持った『真の紋章』を巡った戦いが幾度

も繰り広げられ、多くの人々が命を失っている。その力を額に宿しているカイも、かつてはその戦いに参加した事もある。

これらの通りカイはこの世界の人間ではない。異世界人なのだ。

『真の紋章』を宿せば絶大な力が得られるが、代わりに大きな代償を払わせられる。それは永遠の時間……つまり不老。一切成長する事はない。

『真の紋章』を宿した者は例外なく人としての時間から逸れ、死ぬ時まで永遠とも言える時を過ごさないとならない。そして『真の紋章』を宿した者は孤独になる運命にあるのだ。

カイも『未来の紋章』を宿してから数十年経っているのだが、『未来の紋章』を宿す前に居た友達も死んでいった。天寿を全うしたり戦争で死んでいったりと。カイも孤独な運命を歩いている。今も変わらず……。

「まあ良い。取り敢えず助かったよ、ありがとう」

「えー、龍宮が礼を言ってるー、意外過ぎるんですけど」

「そんなに死にたいのか、お前は？」

何故かカイに礼を述べる真名にカイは意外そうな顔をすると、拳銃を額に突きつけられてしまう。

流石に『未来を視れても』避けられないので謝るしかない。

「ごめんなさい、本当に申し訳ないと思っているので、銃を下ろし

てください！」

カイが平謝りすると真名はゆっくりと銃を下ろす。その表情は不服そうだが。

「そんなに私が礼を言うのがおかしいか？」

「いや、そうじゃなくて『真の紋章魔法』は俺自身の力じゃないから、俺に礼を言うのはおかしいんだよ」

「何を言っているんだ？　お前が発動させたんだろう」

「だから……もういい。コイツらを引き渡さないと」

真名に色々と説明するのが面倒になったカイは、話をはぐらかそうと敵を学園側に引き渡す準備に入る。更に真名も追求するが、カイはのらりくらりと躱す。

もうこれ以上説明しては色々おかしな事態に巻き込みそうなので逃げる、逃げます、逃げさせていただきます。

殺人鬼は冷たく笑う（後書き）

カイの秘密が少しでも明るみに出れたでしょうか？

幻想水滸伝には真なる２７の紋章はあるのですが、未来の紋章はありません。オリジナルです。

原作ファンには何だか申し訳ない気持ちが……。

今思えば真の紋章が他の世界に行ったら、幻想水滸伝の世界は滅びたりしないでしょうか？

確か２７全部有るから世界は存在しているわけで……。

何か今になってやってはならない設定をしているのでは？

とりあえず此処まで見てくださりありがとうございます。

これからも見て頂けると嬉しいです

ファミレス対談

「ありがとうございました～」

ショップ店員の営業スマイルを背中に受けながらカイは店を出て行く。その手には新しい携帯電話が入った袋がある。

今日の未明に謎の男達と戦ったカイと真名。あれから無事に学園長側に男達を引き渡し、朝まで警備を続けた。

その際にカイは何となく携帯電話を外套から取り出したのだが、全く反応しなかった。開いてもボタンを押しても何の反応もない。

先の戦闘で水の捕縛陣に捕らえられた際、携帯電話は水没してしまった。そう、あの水の魔法使いによって……。

携帯電話が水没してしまった事で一時狂乱してしまったが、取り敢えず学校が終わってから新しい携帯電話を買う事にしたのだ。幸いお金の方は報酬金で賄える事が出来た。これで何とか連絡手段を回復出来たであろう。

そして現在に至るわけなのだが、これからどうしようか考える。既に学校も終わり後は学生寮に帰る訳だが、どうせなので適当に食べてから帰ろうかと思う。

空も夕闇が広がっており夕食時の時間なのだ、外食しても問題はない筈だ。学生寮の門限の時間は八時までと決まり事があるが、遅れても大した問題はない。少し怒られれば済むのだから。

取り敢えずファミレスにでも行こうかな、とカイは決めるとファミレスへ直行する。一人でファミレスへ行くのも何となく恥ずかしい感じがするが、カイはそんな事気にしない。

いざ入ってウエイトレスの案内により席へと移動して、ふと一息吐く。夕食時な為か店内にいる客も多く、賑やかな感じがする。

しかも妙にカップル客が多いように感じる。カイに対する何かのイジメか？

しかも現状一人客はカイしか居らず、妙に孤独感を感じる。まあこんな事があっても仕方ないと思いながら、カイはメニューを見る。

（ここは定番にハンバーグやらカレーやらピザでも頼んでおけば良いか。……蝸牛の地獄ラザニアって何だ？　美味いのか？）

メニューを開いて適当に多めに頼もうとした時、ふと目が『蝸牛の地獄ラザニア』を映した時は興味が出てきた。しかも『店長のオススメ！』なんて書かれたら頼まない訳にはいかないだろう。

しかし蝸牛なんて食えるかなー、なんて考えながらカイはメニューを頼もうとウエイトレスを呼ぼうとするが、ウエイトレスが一人の客を連れてカイの元へやって来る。

「あの、お客様、お連れの方がお見えになりました」

「は？　連れ？　そんな人は居ないんだけど……、うげっ」

ウエイトレスの言葉にカイは疑問符を浮かべながら隣に居る人間を見て、見てはいけない物を見たような嫌な顔を浮かべる。

その者は今日の未明、一緒に警備をした制服姿の褐色の長身女。

「……龍宮」

「ではごゆっくり」

真名が何故か其処に姿を見せており、ウエイトレスは下がっていった。

ではごゆっくり、じゃねーんだよ馬鹿やろう！　とでも言いたげそうなカイを無視して、真名はカイと対面になるように座る。

「やあ、朝方ぶりだな」

「……」

真名がカイに声をかけるが、カイは訝しそうにジトーっと見つめるだけ。

何で此処に居るんだ？　とか、注文し損なったじゃないか、とか色々な事を思っている為、返事をする気力もない。

真名はそんなカイにはぁ、と息を吐いて、

「何か喋ったらどうだ？」

「お願いです、帰ってください」

「女に向かってそんな事を言うなんて男としてどうなんだ？」

「何だ？　俺を男として見てくれてるのか？」

「そんな訳ないだろ。馬鹿でも分かる」

「……」

何気ない会話の流れでカイの心は酷く切り裂かれました。

何でこんな風に言われなければならないんだろうか。それどころか目の前に居る褐色女は何をしに来たのか、カイには分からない。

取り敢えず真名が此処に居る理由は後ほど聞くとして、カイは注文をする為にウエイトレスを呼ぶ事にした。ウエイトレスを呼ぶ為のボタンを押すと、三〇秒もしないうちにウエイトレスが来る。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「月見ハンバーグとカレーと石焼きビビンバとピザとステーキとカルボナーラに蝸牛の地獄ラザニア、それからチョコパフェと特大プリンをそれぞれ一つずつ」

カイの大量注文にウエイトレスと真名は少し引き気味になっている。

これを一人で食い尽くすつもりなのか、と心の中で愚痴を零しながらも、ウエイトレスは注文を聞き返す。それにカイは頷くとウエイトレスは真名にも訊ねる。

「ご注文は？」

「餡蜜一つ」

こっちは少ないなとウエイトレスは思いつつも、注文を承って厨房の方へ向かった。

「おい、あれだけ頼んで大丈夫なのか？　残すんじゃないだろうな？」

「成長期の男子をなめるなよ。これくらいの量は食べるさ」

「お前、成長期だったのか？」

「……」

「どうなんだ？」

「……身体年齢は成長期真っ最中だよ」

「ほぅ……」

「聞いといてそれだけかい」

出来るだけ真面目に答えるが真名は気になってない態度を取るので、カイはテンションが下がる。

カイが『未来の紋章』を継承したのが十五歳の時だったので、身体は成長期の真っ只中だった。だが『未来の紋章』の呪いで不老となった事でカイの身体は成長することも老いる事も無くなった。

「まあどれだけ食べたとしても太る事もなく、逆に痩せる事もないよ」

「不思議な身体だな、お前のは」

「ああ、本当に、な。で、龍宮が此処に居るのは何故だ？」

「別に大した事じゃない。ただ時間が時間だったし夕食にしようと思っただけだ。そしたら外からお前の姿を見てな。一人でいるお前と一緒に食事をしてあげようと思ったんだ」

真名が此処にいる理由はただ単に時間と、外からカイの姿を見掛けたから。一人で寂しく食事をしていそうなカイを哀れに思ったのか、一緒に食事してやろうという余計なお世話を企んだのだろう。

本当にお節介な奴だ、とか思っていると、真名が頼んだ餡蜜が届けられる。

「お待ちどうさまです。餡蜜でございます」

餡蜜が真名の前に置かれると、真名は餡蜜に手を付ける。一口、一口と美味そうに餡蜜を食べる真名に、カイは早く食べたいという気持ちを抑える為、窓の外を眺める。

もう外は完全に夜の姿となり、たいぶ学生達の姿は無くなってきた。大半は学生寮に帰っている頃であり、残りの学生はカイと同じようにファミレスやら他の食事処に居るだろう。

そんな外の光景を見ているとカイが頼んだ注文の一つが届く。

「お待たせいたしました、月見ハンバーグです」

カイの目の前に置かれた熱々の月見ハンバーグ。何となくウエイトレスに頭を下げ、ナイフを入れて一口食べる。

卵の半熟が上手くハンバーグと合い、なかなか美味になっている。うん、美味い。

「カイ、今日戦った奴らの事を覚えているか？」

「お前、俺を馬鹿にするの好きだよな？　俺もそこまで馬鹿じゃねーよ。それが何なんだ？」

月見ハンバーグをむぐむぐ食べていると、真名が今日の未明に戦った男達のことを話題にしてきた。多少馬鹿にされながらもカイは逆に問い返す。

「死んだらしい」

「……は？」

真名の言葉にむぐむぐ食べていたカイも手を止める。生かしてきた敵が死んだとなれば、話を聞かざるを得ない。

言っている事は重要な事なので、真名は声を小さくして話す。

「学園長から連絡が来たんだ。今朝引き渡してきた男達が死んでいるって。それも誰かに殺されたらしいんだ」

「殺されたって……そんなの学園側がやったんだろ？　そりゃ俺も

一人は殺したけどさ」

「まだ素性も情報も分かっていなかった。それなのに始末すると思うか？」

「……しないな」

捕らえられた敵は尋問や拷問にでも掛けて自分が持っている情報を洗いざらい喋らすことになっている。それなのに正体も情報も知らない敵を、みすみす殺す訳がない。

その前に死んだという事は口封じをされたという事で……。

「この学園にはまだ敵の仲間が居るということか」

「そう考えるのが妥当だな。そこら辺は情報部隊が頑張るらしい。私達は無駄に気を張る必要は無いらしい……、と学園長が言っていたよ」

「ふん、まあ俺を敵に回すような奴だったら、誰であろうと殺すがな」

そう言ってカイは月見ハンバーグを平らげる。その間にもカルボナーラと蝸牛の地獄ラザニアが運ばれていたので、こちらも食べ始める。

（ん……意外と蝸牛の地獄ラザニアは美味しいね）

カイは蝸牛の地獄ラザニアを一口食べると、案外美味しい事に驚く。蝸牛の地獄ラザニアに絶賛の嵐を送っていると、真名は話を続

ける。

「誰でもか……、それが例えば友人や恋人だったとしても？」

真名の問いにカイ食べる手を止めずに、

「……そうだね。以前戦った仲間が暴走した時も俺は止められず殺してしまった事があるからな。きっとまた同じような場面に出くわせば俺は同じことをするだろうね。そして何度も……俺が死ぬ時まで」

何の表情も変えずに食いながら言ってのけるカイに、真名は言い知れぬ恐怖を抱いてしまう。

何故こんなにも無表情で言えるのか……と。

もちろん依頼があれば誰でも殺すような傭兵ならば、この様な考え方を持っていなければならない。それなのに何故か賛同出来なかった。自分も目の前にいる女顔の少年と同じなのに。

いや、根本的な部分は間違いなく違うだろう。真名とカイは違う存在で違う考え方を持っているのだから。それでも目の前にいる年老いることの無い少年は、やはり普通の人間とは何かが違うようで……。

「ま、その時にならないと分からないけどね。龍宮ならどうする？友人や恋人を殺すか？　それともハッピーエンドを目指す為、助けるか？」

カイに逆に問われた真名は戸惑う。今は金で雇われたら何でも働

く裏の人間。

だがかつては『立派な魔法使い』と共に困ってる人を助ける旅に出た事もある。

なら迷う必要は無いだろう。カイの問いに自信をもって答えればいい。

「私は助けるさ。それが大切な人なら、な」

「ふぅん、良いんじゃない、人間らしくてさ」

真名の答えを予想していなのか、カイはパクパクと蝸牛の地獄ラザニアを平らげ、カルボナーラを食べ始める。そして残り頼んでいた料理が一気に来る。

どうもどうもと言ってカイは料理を受け取ると、それらも食べ始める。

本当によく食うなー、等と真名は思う。これだけの量を食べて太らないなんて正しく女性の敵だ。体重も何も変わらないとは『真の紋章』の継承者は恐ろしい。

「もしお前が誰かと結婚したら奥さんは大変だな。食費とか掛かるし……」

「お前、俺がいつも大食いだと思ってんのか？　別に食わなくても生きていけるって」

「……そうなのか？」

カイの言葉に真名は疑問符を浮かべた。

カイはああ、と続けて、

「一ヶ月は何も食わなかった事もあった。この額に宿る紋章を持っているのが嫌になってね、この紋章を欲しがる奴らから逃げたりと……。死にたくなって自分を傷付けたり、水も飲まないようにしたんだけど死ねなかった。多分この紋章が俺を死なせてくれないんだろうね。まだ俺には何かしらの役割があるのか……」

『未来の紋章』を得てからカイは『未来の紋章』を求める国や組織から逃げる日々が始まった。カイを追いかける相手はその世界でも最大国。『真の紋章』を集める事を国策としているような国から逃げるのは辛かった。

逃げても逃げてもしつこく追い掛けてくる相手に『未来の紋章』を宿してから数年しか経っていなかったカイは、生きるのが辛かった。今より精神的に幼かったカイには、逃げ続ける日々は辛いものだ。

だから自殺を敢行してみたが結果は失敗。何をやっても死ぬ事は出来なかった。『未来の紋章』がまだカイを死なせる訳にはいかないと思っているのかもしれない。

本当に面倒な紋章を宿したよ、と呟くカイには哀愁が漂っているようにも見える。

カイはだから、と続けて、

「俺は飲み食いしなくても生きてはいけるよ。まあ食べなかったら

元気は出ないから、戦う為にも食べるけど」

「……ふーん」

「……ってこんな事を聞いて何がしたいんだ？　まさか俺に気が有るとか？」

「……あり得ないな。何故私がお前に好意を寄せなければならないんだ」

ニヤニヤと気持ち悪い表情をしながら問うカイに、真名は無表情……と言うより冷たい表情で無いと断言した。これは本当に無いだろう。

そりゃ当然だな、とカイは呟き、笑う。

「人を殺すのに感情も無くなった俺の事を好きになる女なんて居ない。それぐらい分かってる」

まるで自分に言い聞かせるように言うカイ。

『真の紋章』の継承者でも結婚し子供を成したという現実があるが、今のカイにそこまで出来る度胸もない。余裕もそれを受け止めるだけの器量も。

「一つ聞きたい事が有るんだが良いか？」

「何だ？」

「お前は何で私にそんな自分の秘密を喋るんだ？」

真名が気になった事はカイ自身の秘密を自分に喋っていること。カイにとっては自分の命に関わるような事をべらべら話しているのか分からなかった。

自分ならそんな事はしない。それがいつも口喧嘩をするような奴なら尚更。それなのにカイが此処まで喋ることに何の意味が有るのかと気になったのだ。

そんな事を気にしてたんだ、と言ってカイは食事する手を止め、真名を見つめながら口を開く。

「簡単な話だ。お前ならある程度は話しても大丈夫だと判断したからだ」

「……それだけか？」

「もちろん。それに全部秘密は話していないし、龍宮が俺の『未来の紋章』を狙うような事をすれば……、後は分かるな？」

「……」

カイの威圧するような眼と言葉に真名も押し黙る。

今のカイが生きる最優先事項は『未来の紋章』を守ること。『未来の紋章』を狙う輩が居ればカイは全力を持って殺す。誰であろうと。

それが麻帆良学園になったとしたら、カイは『未来の紋章』を暴走させてでも滅ぼすつもりだ。

そして例外なく真名も殺すのだろう。どんな手段を使ってでも。
それがカイの生きる道か。

確かに人道的を無視すれば逃げ続けるよりかは殺す方が楽だ。殺せる相手なら尚更……。

それを平然と口に出来るカイに、真名はやはり何かしらの恐怖を抱いてしまう。こういう男は本当に危険なんだと……。

「さて、暗い話は終わりであります。ご馳走様でした」

カイはパンっと手を合わせて食事を終える。頼んだ注文は全てカイの腹に納まり、綺麗さっぱり無くなっている。

流石は『ブラックホールの胃を持つ女男』だ。

「俺は帰るけど龍宮はどうする？」

「もちろん帰るに決まっているだろ」

「よし、行こう」

カイは会計の紙を持ってレジの所まで行く。その際、真名が頼んだ餡蜜も含まれていたので、真名は、自分の分は自分で払う、と言い続けたが、カイが面倒だから一緒に支払うといって口論となったが、結局はカイが真名の分まで支払う事となった。

真名は不服としているが仕方ない事と割り切って、外に出た。

外の気温は低く、早く帰りたいと思わせるような冷え込み。本当に早く帰りたい。

「じゃあな龍宮」

もうカイは直ぐに帰るようで、真名に手を振って去ろうとする。それに真名は待ったをかける。

「待て、篠宮！」

真名に声をかけられカイは脚を止める。

「何？」

黒いマフラーで顔半分隠しながら振り返る。見るからに怪しい。

「……いや、すまない。何でもない」

「何なんだよ、まったく……。それじゃ今度こそバイバイ」

真名が何も言わなかったのでカイは今度こそ手を振って立ち去る。その後ろ姿をじっと真名は見つめる。

その目は何かを思いつめたよう目。そして一人呟く。

「お前はいったい何をそんなに恐れているんだ？」

学生寮へと戻ってきたカイは寮監に少し説教を食らった。どうやら門限をオーバーしてしまったようで、今後しないようにと注意された。

バレないように入れば良かった、と全く反省のない心でいるカイは、今度はもっと気配を隠して侵入する事を決めた。

エレベーターを使い六階のボタンを押して運んでもらう。

妙な浮遊感に襲われ、何故か眠気に襲われてうとうと眠りこけそうになる。学生寮の中が寒くはないからか、安堵感にも包まれる。

エレベーターが六階に到着し扉が開かれるのを待ってから、エレベーターから出て行く。エレベーターから出ると男子寮のくせに埃一つない綺麗な廊下を、てくてくと歩いていく。

ここの構造は中央部が吹き抜けで、周りに学生達の住む部屋がある。その部屋数は多く、一つの階に四〇もの部屋がある。一学年に二階分を占有しているので、部屋数は八〇もあるのだ。

一つの部屋には総じて二、三人が共有しているのだが、カイだけはルームメイトは存在せず、一つの部屋を一人で占有している。これはカイが学園長に要求した訳ではなく、ただ運によって一人となってしまった。

カイとしては嬉しい限りだがクラスメートがカイの部屋…六〇一号室が一人だけだと知り、毎夜毎夜遊びに来る。正直に言って面倒だ。

そして今日もカイの部屋の前にはクラスメートの姿がある。

「何をやってんだ、ネズミ」

その姿は学校一の情報通、ネズミこと木村耕太だった。耕太はデジカメを手にしてカイをニヤニヤっと見つめる。

「いやー、女顔で一部の女子から妙に敵視されているカイくんにも一足早く春がやって来たわけですなぁ？」

「……何言ってるんだ？」

耕太の言葉にカイはジト目で訝しむ。そんなカイに耕太はカイの肩を組んでデジカメを見せる。

「これ見てよ」

そう言って見せてきたデジカメの画面にはファミレスで夕食を共にしているカイと真名の姿が映っていた。

これを見てカイは、ああ、撮られていたのか、と投げやりな態度

を取っていた。相手するにはもう面倒くさいのだろう。

「この娘さんは龍宮神社の一人娘、龍宮真名さんですね？　麻帆良学園本校女子中等部２―Ａに在籍してバイアスロン部に所属。スリーサイズは――」

「もはやそれは変態だろ！　って言うかストーカーそのものじゃねえか！？」

「何を言っているんですか。僕は全生徒全ての情報を持っているのですよ？　何ならカイくんのスリーサイズも――」

「何で俺のも知ってんだよ！　つーか俺すら知らないんだが！？」

「僕ぐらいになると見ただけで分かっちゃうものです」

「何なんですか、そのスキルは！？　さっさと捨てちまえそんなスキル！」

耕太の信じられないような能力にカイは恐れ入る。この男を前にすれば個人情報なんて関係ない。これが一般人なのだから本当に恐ろしい。もし耕太に魔法の存在が知られれば、一瞬にして日本中に広まりそうである。

取り敢えずこの様な掛け合いをいつもやっているくせに、何故か慣れる事が出来ない。

「それでどうなんですか？　認めますか？」

「認めねえよ。そいつは俺を嫌っているからな」

「そうですか？　でも結構楽しそうにしてますよ？」

カイの言葉に耕太はデジカメを操作して複数の画像を映し出す。どれもこれも楽しそうにしているが、それが真実とは限らない。

「残念だけど耕太の読み違いだ。俺と龍宮との間に恋なんてものは無い」

断言キッパリと否定するカイに、耕太も不満そうにしているが……。

「カイくんが此処まで否定するとなると、そうなのでしょう。分かりました。これは表に出しません」

そう言って耕太はデジカメに記録されていたカイと真名の画像を全て消した。

耕太のスクープ率は一〇〇パーセントで、未だに誤報を広めた事はない。それ故にカイが否定しているのに広めたら、誤報という事になり、一〇〇パーセントを下げたくはないのだろう。

カイもデジカメから自分達の画像が消えるのを確認すると、耕太の肩をポンと叩く。

「俺に恋なんて訪れないよ。一生ね」

そう言ってカイは鍵を開け、部屋の中へと入っていった。

何となく逃げられた感のある耕太は、深く溜め息を吐いて大人し

く自分の部屋へと戻っていった。

春休みの一日の出来事（前書き）

そんなに長く続ける気がないのに何か無駄なことを書いている気がします……。

粗末ですが見て頂けるとありがたいです。

春休みの一日の出来事

あれから約二ヶ月の月日が流れた。

真名が教えてくれた、侵入者の男達を殺した者は結果からして判明する事は無かった。麻帆良の情報部隊も裏で積極的に探し出したのだが、結局判明しなかった。情報部隊も分からなかった事を活動が制限されているカイに分かる筈もなく、迷宮入りとなってしまった。

もう判明しないかなと諦めたカイは日常を謳歌する事にした。謳歌すると言ってもいつも通り学校行って、勉強して、浩輝の親衛隊に睨まれる日々を送る、そんな日々だ。

とんでもなく悲しい。

だがカイにとってそんなありふれた日常（最後の一つは例外）は実に幸せな事だ。此処に居る限り『未来の紋章』を狙う奴は居らず、命が関わる事はない。

もちろん裏の仕事をしていれば命に関わるのだが、それでも『未来の紋章』を必死に追いかけてくる奴等に比べれば楽だ。

それにここ二ヶ月は侵入者も居なかった為か、カイの仕事もなく平穏に暮らしていた。お気楽な生活をしているのだ。

それはともかくカイは無事に中学二年生を修了し、今年の春から三年生へと昇格する。麻帆良学園は小中高大一貫のエスカレーターで、特に勉強する必要もない。カイは勉学に関しては平均的なので、

大学まで勉強する事もない。

まあ大学生になるまでこの麻帆良に居るかは分からないが、それでも安心は出来るだろう。

と言うわけで現在、学生は春休みの真っ只中。部活に入っている者は部活に励んでいて、部活に入っていない者は遊びまくれる春休み。次の学年に昇格するので宿題がある訳ではない。

思う存分遊びたい放題だ。

そんな訳でカイは部屋で引きこもりみたいにゲームばっかしていたのだが、浩輝によって無理矢理外に連れて行かれた。

何でも、お前みたいな健康不良体は外で体を動かした方が良いんだよ、という事で、半ば強制的に浩輝によって外で遊ぶという事となった。

どうせ遊ぶと言ってもゲーセンやらカラオケに行くんだろ？　とカイは呟いたが、浩輝はそれを無視。カイも深く溜め息を吐きながら、仕方なく流れのまま連れて行かれる事にした。

それから色々と学園内を浩輝と二人で歩いていた訳だが、そんな時、二人の目の前に格闘団体が活動していた。

「あれって確か中武研だったっけ？」

「そうそう。カイとは無縁の団体さんだ」

「悪かったな、喧嘩が弱くて」

浩輝が意地悪い笑みを浮かべて言ってきたので、カイはふん、とそっぽを向く。カイが命を懸けた戦いの時以外は『未来の紋章』は先を見せてはくれず、カイ自身の能力で何とかしないとならない。その為、相手の殴るや蹴るといった攻撃は経験で避けれるのだが、非力なせいか、カイが殴っても相手は痛くないみたいだ。悲しい事かな、その時のカウンターで負ける事がしばしば有る。

魔力など有れば無様な負け方はしないのだろうが……。

それはともかく中武研と言うのは中国武術研究会、その名の通り中国拳法を得意としてい武闘派集団。彼等は麻帆良の中でもそれなりに強く、その中でも異才を放っている少女が居る。

その名は……。

「ムッ!?　我がライバル、浩輝アルネ!　勝負アルよ!!」

「げっ……、古菲に見付かっちまった」

一人の中華娘が浩輝の存在を認識し、いきなり勝負を挑んできた。それに対し浩輝は嫌な顔を浮かべ、一歩後退する。

彼女の名は古菲。中国武術研究会の部長であり、ウルティマホラという武闘大会で優勝した程の実力者。裏の人間ではないが、それでも裏の人間に匹敵するほどの実力を持っている、

例によってカイには体術では絶対に敵わない存在ではあるが、カイの横に居る嫌な顔を浮かべた浩輝は違う。浩輝は偶々喧嘩を売られ返り討ちにしてやった時に古菲がその闘いを見て、勝負を挑んで、

何と浩輝が古菲を負かした事があったのだ。

古菲はそれまで負けた事が無いらしく、唯一負かされた浩輝に執着している。それからというもの、古菲は浩輝の姿を見れば場所が何処であろうと闘いを挑んでいるのだ。

そんな理由があるので、浩輝は古菲に苦手意識を抱いているのだ。毎回毎回闘いを挑まれれば嫌になるのも仕方ないかもしれない。

「アイツは麻帆中2―Aの加藤浩輝！　くっそう、菲部長があんな優男に……！」

中武研の男子は古菲に心酔しており、古菲が執着している浩輝に嫉妬やら憎しみからの対抗心を抱いている。よって浩輝は古菲だけでなく、中武研の男子からも襲われている。

こうなってしまえば遅いが浩輝はあの時、古菲に負けておけば良かったと後悔している程だ。

「さあ浩輝！　ワタシと闘うアルネ！？」

「待て待て！　俺は絶対にお前となんて闘わないからな！」

「浩輝に拒否権はないアル。ワタシと闘うしかないアルよ！」

既に臨戦態勢に入っている古菲は珍しく逃げ腰になっている浩輝に襲いかかる。浩輝はこの場から逃げようと考えたが、それは出来なかった。

何故なら後ろにはニヤリと不気味な笑みを浮かべるカイが居たから

だ。

「おいおい、男が女に闘いを申し込まれてんだぞ？　男として逃げる訳にはいかねえよな？」

「な、何を……」

「いってこい、ばーか」

カイは浩輝の背中を蹴って古菲と闘わせる。カイに蹴られ前のめりになった浩輝は眼前には古菲の姿。咄嗟に古菲の繰り出された攻撃を受け流す。

そんな浩輝の姿を見て、カイは踵を返して立ち去ろうとする。その光景を視界に捉えた浩輝はカイに向かって叫ぶ。

「待てっ！　親友を置いて行くつもりか！？」

「頑張ってねー。心の片隅で応援してるよー。って言うか無理矢理俺を外に連れ出した事を後悔しながら、やられてしまえ」

「おい、待ちやがれ、カイ！　後で覚えとけよ！！」

「はーいはーい」

浩輝が何か叫んでいるが、カイは気にせず手を振って去っていく。古菲の事に関してはカイは関係ないので、無理に関わるような事はしない。

だって面倒なんですもの。

浩輝を置き去りにしてカイはてくてくと歩いていた。このまま学生寮に帰ろうと思ったが、どうにもお腹が空いたので適当に昼食を取ることにした。ちょうどすぐ近くにカフェがあるので、此処で昼食を取る事にした。

浩輝に無理矢理外に連れ出されたので、あんまり多くの金を持っていないので、多くの物は頼めない。

結局はサンドイッチと珈琲を頼むしかない。この二つで四八〇円也。そして残りの所持金、二〇円。

サンドイッチと珈琲を受け取り、テラスで食べる事にする。サンドイッチを頬張り外の光景を眺める。

なかなか風流な事をしているんじゃないか俺、みたいな意味不明な事を考えていると、それを邪魔する者が現れる。

「ああー、『お姫様』だ！」

「ほんとですー！何やってるですかー？」

カイの顔を見た二人の少女は直ぐさまカイに近寄り、べたべたとカイの体を触って食事の邪魔をする。

（こいつら……相変わらず俺を『お姫様』なんて言いやがる……ムカつく）

髪を引っ張られたり、頬を引っ張られたりしながらも、カイは段々と苛立ちが沸いてくる。

二人の少女の名前は鳴滝風香と鳴滝史伽。麻帆良女子中に通う十四歳の少女で、二人は双子。ただ容姿が小学生ぐらいの身長しかないので、噂では年齢詐称疑惑が流れているほど。

この二人はさんぽ部という麻帆良学園内をただ歩き回る、という謎の活動をしている。

そしてこの二人は悪戯が好きで、偶にカイと出会えば悪戯をする。二人がカイを『お姫様』と呼ぶのはカイにとっては蔑称で、理性で我慢しているが二人が男ならば銀糸で体を切り刻んでいるだろう。

そう、カイは耐えに耐えているのだ。

その時、カイを助けてくれる女神の声がする。

「これこれ、風香殿、史伽殿、それ以上カイ殿を苛めてはならぬでござるよ」

……ような気がした。

風香と史伽によって色々ともみくちゃにされているカイを助けたのは、どこか忍者口調で喋る長身女。

この長身女のおかげでカイは風香と史伽から解放されたのだが、当のカイは実に嫌そうな顔をしている。

「……長瀬楓……」

一応助けてくれたのにカイは今にも逃げ出したい気分になっていた。

糸目でカイを見る長瀬楓という少女は風香と史伽と同じクラスの者で、二人の保護者役を任されている。

だがカイからしたら楓は危険な匂いがして、妙に苦手意識を抱いている。立ち振る舞いから一般人のものではなく、裏の人間という事が分かる。ただ相当な実力を持っている筈なのに、龍宮みたいに血の匂いは感じ取れない。

（コイツも古菲みたいに裏の世界の事情なんて知らない、ただの一般人という分類か……？）

結局カイは楓を一般人という分類に入れているのだが、それでも疑いが払拭される事はなかった。

いつの間にか風香と史伽がカイから離れ、カウンターの所に行っ

て店員に何かを頼んでいる。

いつの間にあんな所に……、とカイは内心安堵しながらも、楓の動向には見逃せない。

「そんなに警戒しなくても拙者はカイ殿に何もする気はないでござるよ？」

気付かれていました。

楓はカイと対面になるように座り、その柔和な笑みを崩さず口を開く。

「そんなに警戒心を表していたら拙者もどの様な態度を取ったら良いか分からぬでござるよ？」

「だったら普通にしていてくれ。そちらも探りを入れなければこちらも普通に接しよう」

「いやはや、流石に普通の人とは違う何かを持っていたら、探りを入れてしまうのは当然だと思うでござるよ」

この楓の言葉にカイはキッと目を細めて睨み付ける。

楓はカイの中に何か異様な力を持っている事を分かっている。ただそれが何なのか分からないだけ。カイが不老で成長することも老いることもない永遠の時を持っている、という具体的な事は分かっていない。

だから楓の頭の中ではカイを危険人物に認識しているのだろう。

「だったら俺を殺してみるか？　探りを入れるぐらいなら、いっそのこと殺した方が楽だとは思うがな」

「いやいや、大義も無いのに殺生をする事はしないでござるよ。まだカイ殿を『敵』とは認識していないでござるからな」

「……」

糸目が僅かに開かれながら発せられた言葉にカイは押し黙る。楓がカイに攻撃を仕掛けないのは単に『敵』と認めていない為。もしカイが楓に敵対行動を取れば、楓もカイに攻撃を仕掛けるのだろう。

その時は容赦なく、己の実力を持って排除するのだろう。

「……はぁ、帰ります」

何だか居てられない気分になってしまった為、カイは席から立ち上がり立ち去ろうとする。しっかりとサンドイッチを胃袋の中に押し込んで。

立ち去ろうとするカイに楓が声を掛ける。

「少し待つでござるよ、カイ殿」

楓の言葉にカイは無言で振り返る。

「拙者はカイ殿に対してはそれほど危険とは思ってはいないでござるよ。ただ何か怪しい力を持っているだけ。それ以外は普通の人間でござるからな」

「……なんか言ってること無茶苦茶じゃない？」

「拙者はバカでござるからな」

「それとこれとは違うだろ……」

何か話がややこしくなって混乱してきたカイは、もうこの女と話すのは止めにしようと思い、さっさと立ち去る事にした。これ以上話して頭痛を起こしたくはない。

さっさと去っていくカイの後ろ姿を楓はいつもと同じ柔和な表情で見送っていた。

「……はぁ、あの忍者と話をするのは疲れる。もう近道通って部屋に帰ろう」

酷く疲れた顔をしながらカイは男子寮への道を歩いていた。双子の姉妹には髪は乱されるわ、忍者にはよく分からない事を言われる

わ、と散々な目に遭っている。

それもこれも俺を外に引きずり出した浩輝が悪い、とカイは此処には居ない浩輝に八つ当たりをしている。

（そう言えば浩輝の奴どうなったかな？　流石にやられるとは思えないけど……、って自分の身を案じた方が良いか？）

カイは考える。このまま学生寮に帰ったとしても待っているのは浩輝の報復なのでは……と。

古菲のエサにした浩輝を置いて逃げるように去っていったカイを浩輝が許す訳がなく、報復されるのは間違いないだろう。

このまま帰るのはマズいか、と判断したカイは学生寮に帰る事を諦め、適当に夜までぶらぶらと時間を潰す事に決めた。どうせ報復されるのなら時間を遅らせて、浩輝の怒りの心を少しでも和らげようと考えたのだ。

この考えは逆効果だと思うのだが、今のカイには気付かない。

さて、これからどうするか、と悩むカイに、無機質な声がかかる。

「お久しぶりです、篠宮カイさん」

カイの目の前に現れたのは人間でもなければ魔物でもない、言葉を喋る女の子の形をしたロボットだった。

何ですか、今日は厄日ですか？　と現実逃避に走りたいカイだったが、現実はそれを許さない。目の前に居るロボット……いや、ガイノイドには面識がある。彼女はある人物の従者として働いており、

何度か話した事もある。

その主がまた弄り甲斐があって面白いのだが、今日は会う気分にはなれない。いや、目の前にガイノイドが居る時点でカイに選択肢は無いのだが……。

「えーっと、何しに来た？」

「マスターが『あの女男を連れてこい』と命令を受けたので遂行しに来ました」

何となく前向きに訊ねてみたのだが、返ってきたのは予想通りの返答。これは間違いなく連行されてしまうのだろう。

目の前のガイノイドから逃げようとしても、このガイノイドにはブースト機能が備わっている為、すぐに捕まってしまう。しかも一度捕まえられてしまったら、抜け出す事は出来ないだろう。無駄に力も強いからだ。

此処は大人しく連れて行かれようとカイは深く溜め息を吐きながら決めた。

「はいはい、反抗も抵抗もしないから、さっさと行こうか？」

「賢明な判断に感謝します」

もう何だか投げやりになってしまったカイは、このままガイノイドの主の家まで連行される事となった。

麻帆良学園森林地区。

この広大な森林地区に一つのログハウスが存在している。このログハウスにカイを呼び寄せた人物が居る。

ガイノイドの案内により家に招き入れられたカイは、中の様子に相変わらずかと呆然としてしまう。家の中は人形だらけで座る場所なんて存在しない。

何処に座ろうか、等と考えていると、二階から幼い声が降りかかる。

「ようやく来たか、篠宮カイ」

「あ、妖怪オババ」

「誰が妖怪オババだ!?　私にはエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという名前があるわ!!」

素っ気ないカイの言葉に金髪の少女は怒る。

見た目十歳くらいの少女の名前はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。これでも中学生をやっている。

そんな彼女は実は六〇〇年ほど生きている吸血鬼。しかも普通の吸血鬼とは違い、『真祖の吸血鬼』と言って日光や十字架は効かない。それに不老不死なものだから最強の種族として魔法使いの間でも認識されている。

だが今の彼女には最強と呼べる程の力は無い。何でも好きな男を追いかけて、その男に麻帆良に閉じ込められる魔法を掛けられ、終いには魔力まで奪われてしまった。哀れを覚える吸血鬼だ。

エヴァンジェリンは一階に降りてきてソファーに乱雑に置かれている人形を退かして座る。

お前もその辺に座れ、とエヴァンジェリンは指で差しながら言ってきた為、カイも人形を退かしてソファーに座る。

「で？　俺を呼び出した理由って何なの？　妖怪オババ」

「だ・か・ら！　その妖怪オババって何なんだ！？」

「前にも言っただろ？　俺にも知り合いの吸血鬼が居て、何となくお前と似ているから『妖怪オババ』って呼んでるの。理解できた？」

カイにはエヴァンジェリンの他にも吸血鬼を知り合いで、仲間だった事がある。その吸血鬼にカイは『妖怪オババ』と呼んでいて、その吸血鬼と同じ種族のエヴァンジェリンにも同じように呼んでいるだけである。

だがそんな事情を知る由もないエヴァンジェリンは激昂する。

「できるか！　だいたいその吸血鬼も妖怪オババと言われてキレただろ！？」

「そうだね、お仕置きに大量に血を吸われちゃったよ。それから妖怪オババなんて言ってないよ」

「だったら私もそう呼ぶな！　普通に名前で呼べ！」

「えー？　だってシエラさんより恐くないし、もう少し迫力があったら良いのにね」

「私に迫力なんて無いと言うのか！？」

「うん、全くないね」

カイに『真祖の吸血鬼』としての凄みが無いときっぱり言われ、エヴァンジェリンは愕然としてしまう。こんな恐くも何ともない目の前の女男に言われては、人から恐れられる吸血鬼として終わったと思う。

そもそも相手が悪いのだ。

六〇〇年ほど生きてきたエヴァンジェリンには及ばないが、激動な人生を歩んできたカイに、たかが吸血鬼を目の前にして臆する心など、とうに失している。

「お茶をお持ちしました」

「おい茶々丸、こんな奴に茶をやる事もないぞ」

お盆にお茶を乗せてやって来たガイノイド、茶々丸はカイにお茶を出すが、エヴァンジェリンがガミガミ口を出す。

茶々丸はどうしようかと狼狽えるが、カイは有無を言わさずお茶を取り、ゴクゴクと飲む。

「んー、美味い。茶々丸の淹れたお茶は美味しいね」

「ありがとうございます」

「……貴様という奴は……」

一気に茶々丸が淹れたお茶を飲み干したカイに、エヴァンジェリンは呆れて何も言えない。

「それで？　俺を呼びつけた理由って何？」

「簡単な話だ。貴様の血を寄越せ」

「帰らせていただきます」

エヴァンジェリンの用件を聞いたカイは即座に帰ろうとする。だが茶々丸に肩を押さえつけられ、身動きが取れなくなってしまった。

身動きが取れなくなったカイにエヴァンジェリンが近付く。

「悪いが貴様の血をいただく。貴様の血を飲めば少しは力も戻るだろう」

エヴァンジェリンはカイの血を飲めば自分の力が戻ってくると思っている。

だがカイは抵抗するどころか、くすっと笑う。それがエヴァンジェリンの癪に障る。

「……何がおかしい？」

「だってねえ、今の俺の血を飲めば更に弱体化すると言うのに」

「……何だと？」

「今の俺に流れている血には魔力を最低限に抑える魔法が掛けられている。その血を飲めば『学園結界』で封じられるよりも弱まるんじゃないかな」

今のカイの血には魔力を極端に落とす魔法が掛けられている。この血が流れている限り魔力の底上げも出来ず、ましてや飲めば魔力が回復する事もない。

この血を飲めば例外なくエヴァンジェリンも魔力が失われる。

「せっかくこの半年間、人を襲って魔力を徐々に回復させてきたのに、俺の血を飲めばふりだしになる。それだったら俺の血を飲むわけにはいかないだろう？」

「くっ……」

「それでも良いのなら遠慮せずに俺の血を吸えば良いよ」

カイは首を傾けて挑発するように言うと、エヴァンジェリンはチッ、と舌打ちしてカイから離れる。

目の前の女男にそんな秘密を持っているなんて知る由もなかった為、普通の人間みたく血を吸えばそれなりに力が回復するかと思っていたのだ。

それがカイの血は魔力を失う魔法が掛けられ、それを飲めば同様に魔力を失う。そんなのを飲めば半年間、危険を冒して学園の人間達を襲って血を吸った意味が無くなってしまう。

それだけは何としても避けたいので、カイの血は諦める事にした。

「貴様にそんな秘密があるなんて知らなかったぞ？」

ドカッとソファーに座り、恨めしい視線を送りながらエヴァンジェリンは言う。それに対しカイは涼しい顔で答える。

「別に何でも自分の事を話すお人好しじゃないって。まあ多少お喋りの部分はあるけどさ」

「ふん、お喋り……か。確かこの世界にはない『真の紋章』を宿しているんだったな？」

「ああ」

「何故そういう秘密を話す？　お前のことだ、何か策を張り巡らせているのだろ？　そうでなければ説明がつかん」

エヴァンジェリンは常々疑問に思っていた。カイが何故重大な秘密を他人に話すのかを。

この世界にはない力を持った者が現れれば、どこかの組織は狙って追いかけて来るだろう。普通なら誰にも喋ったりはしない。自分の命が危険になるから。

しかしカイは違う。カイは学園長を始め、数人の人間に自分の秘

密を話している。エヴァンジェリンもその内の一人だ。

最初は眉唾ものだと思っていたが、実際にカイが学園の敵に『未来の紋章』を使った事で信じざるを得なくなった。自分達が知らない魔法を使う奴が居るのだと……。

「どうなんだ？　お前はいったい何を考えているんだ？」

エヴァンジェリンの問いにカイは薄く笑い、答える。

「確かに俺はこの学園に流れ着いてから、ある事を考えているよ。だけどそれはエヴァンジェリンが関わる事じゃない。真実を知る必要は無いでしょ？」

「……お前のやろうとしている事に私達は道具として使われているということか？」

「まあね。でもその効果は現れていない。ほんと、どうなっているのやら」

カイははぁ、と溜め息を吐いて途方に暮れる。

何かしらの策がカイの頭にあるのだが、それは誰にも話してはいない。この世界の人間の誰にも。

さて、と声を上げてカイは立ち上がる。

「用は済んだろうから帰らせてもらうよ」

「ふん、さっさと帰ってしまえ」

カイが帰ろうとするとエヴァンジェリンもシッ、シッ、と手を振って帰れと促す。

自分で呼んでおいてこの対応か、とカイは呆れつつも帰る。

そしてエヴァンジェリンの家を出て、カイは来た道を戻っていく。本当に面倒な一日だったとカイは髪を掻いて溜め息を吐く。

「ったく、無駄な一日だったな……」

ここでカイは疑問に思う。

何かを忘れているのではないか……と。

懸命に思い出すも今日は頭にきた一日だったので、なかなか思い出せない。何だったかなと思いながら学生寮に帰ったカイは漸く思い出す。

「やっべ、浩輝に報復されそう」

エレベーターでのんびりと上がっている時に漸く気付き、どうしようかと悩んでいるとエレベーターの扉が開く。

その扉が開かれた先には浩輝の姿が在った。しかも満面の笑みで。それが何とも恐怖を産む。

その笑顔のままで浩輝は口を開く。

「やあ、カイ。いったい何処に行っていたんだ?」

「い、いや、別に、何処って程でも……」

珍しくカイは怯む。正直に言って浩輝の報復が怖い。

いったい何をされるのか分からないからだ。以前同じような事があった時は逆さ吊りを約二時間され、暫くふらふらになったことがある。

今回はそれ以上の事をされると予想され、覚悟しなければならない。

「さて、言い訳させる時間なんて無いぜ。覚悟しろ」

「は、はは……」

浩輝の満面の笑みの裏には鬼が見えます。

もうこうなってしまえばカイにはどうする事も出来ず、ただ流れに身を任せるしかない。

この日、一人の少年の断末魔が男子寮に響き渡った……。

春休みの一日の出来事（後書き）

先に進みたくても何故か進めない。

エヴァンジェリン編ですが軽く無視します。

だってカイが介入する理由が無いですしね。

次は大停電の日まで飛ぶと思います。

それでは次もまた見て頂けると嬉しいです。

篠宮カイの敗北（前書き）

今回はオリキャラ（敵）が出てきます。

……少しやり過ぎたと感じます。

それでも良ければ読んで頂けると嬉しいです。

篠宮カイの敗北

「今日は年に二回ある大停電の日です。皆さん大人しく部屋に閉じこもっていてください」

お坊っちゃんが教壇に立ち、大停電の話をしている。

今日は麻帆良学園で年二回あるメンテナンスの日だ。ありとあらゆる電力が停止され、生徒達は外出禁止となる。

この時ばかりは祭好きな麻帆良の人間も殆どの者が部屋で大人しくしている。まあ一部の者はこっそりと外に出て、見回りの先生達に見付かってキツく怒られたりした事が、過去にあったらしい。

ともかく今日の夜は少しばかり不自由な生活をする事となる。電気もテレビも使えないので、基本的に寝る事しかない。特に一人部屋のカイにとっては寝るしかない。

ただカイは外を見ながら思う。

今日は大停電の日。電力を停止にするという事は『学園結界』も停止するということ。従って外敵が簡単に侵入出来るということ。

もしこの大停電の最中に侵入者が現れれば、カイに依頼が来るかもしれない。大抵は警備している魔法先生達が撃退してくれるので、カイが大停電の日に仕事をした事はない。

だから今日ものんびりと過ごす事が出来るのだと思うのだが、何故か心が落ち着かない。それはカイの額に宿る『未来の紋章』が朝

から疼いているのだ。何かカイに知らせているような感じだ。

以前にもカイに何か危険な事があった時に『未来の紋章』は疼いていた。だとしたら今回もその予兆なのではないだろうか。

この大停電の時に何か起きるのではないか……と。

（この嫌な気分……もしかしたら奴らが？）

カイの頭の中である人物の事を思い浮かべる。カイにとって忌々しい男と女の二人組の事を。

もしそうだとしたらぶっ潰すだけだが、とカイは冷酷な気持ちになり始めていた。

そんな事を考えていると、お坊っちゃんの話が終わっていたようで、クラスの皆は帰り支度をしていた。

冷酷な心が霧散していき通常状態に戻ったカイも帰り支度を始める。

それでも額に宿る『未来の紋章』の疼きは止まる事はなく、更に強まった感じがする。

（ったく……、疼くなら『未来』を見せてほしいものだけど、聞いてはくれないし。完全にこの紋章を使いこなせていれば、こんな事にはならないんだろうけど……）

カイが『未来の紋章』を宿して数十年は経っているが、それでも完全には使いこなせない。戦闘に関しては使えるので問題は無いの

だが、不安要素があるのは些か心配になる。

それでも今までやって来られていたので、自分を信じてこれからも進むしかない。

「ぼーっとせずにさっさと帰ろうぜ、カイ」

「……浩輝か」

既に帰り支度を整えた浩輝はカイに声を掛けてきた。カイはやる気ない声で返す。

「何だ、具合悪いのか？」

「いや、大停電は面倒だなって思うと憂鬱で」

「まあな、これぱかりはどうしようもないだろ」

「確かにな。それじゃ帰るか」

「おう」

浩輝と話している間にもカイは帰り支度を済ませ、カイと浩輝は教室を出て行く。

そして教室を出て行き、校舎を出れば購買部が停電セールとしてロウソク等を売っている。大停電がある日にはこうして購買部が各校舎に売りに来ている。

その購買部には人の群れが出来ている。

「俺らもロウソクとか買っていくか？」

「そうだな、ロウソクなんて無いしな」

部屋にはロウソクのストックが無い事を思い出したカイは、浩輝の提案に乗る事にする。どうせ数時間程度で終わるのだから、別に買わなくても良いのだが、それでも人は暗闇には恐怖を覚える。

電気の光もテレビの光も点かないので、完全な暗闇に陥る。その不安を解消する為にもロウソクを買っておいて損は無いだろう。

「ロウソクが一〇円ってどういうことだよ……」

カイはロウソクの値段に誰にも聞かれないような声量で呟く。

いくら大停電セールだからと言ってロウソクを一〇円で売るのは如何なものか。まあしがない貧乏学生にしたら嬉しい限りだろうし、そもそもロウソクなんて大停電の日以外に使い道が無いので、購買部も一〇円で良いとことかもしれない。

ほんと、便利な時代になったな……、と年寄りくさいことを思っているカイは、取り敢えずロウソクを一本買う。

「一本だけで良いのか？　もうちょっと買っても良いんじゃないか？」

「いえ、一本で十分ですので」

購買部のお兄さんにもっと買えと勧められるが、カイはそれを一

蹴、ロウソク一本分の一〇円を渡して群れから抜け出る。

「お疲れさん」

カイが抜け出た時には浩輝は既に群れの外に居た。

「浩輝はもう買ったのか？」

「ああ、ほら」

カイの問いに浩輝はレジ袋を掲げて見せる。その袋の中にはロウソク十数本も入っている。

これにはカイも疑問に思う。

「何でこんなに買うんだ？」

「そりゃ部屋一面に飾るんだろ。いっぱいのロウソクの灯りも良いもんなんだぞ」

聞いて損した。

カイはたくさんのロウソクに囲まれた部屋を想像してみて、妙に悲しい気分に陥る。いや、ロウソク一本で部屋を灯そうとする方が悲しい気分になるか。

ともかく浩輝の趣味には何も言うまいと決めたカイだった。

「さて、帰るか？」

「そうだな」

『こちらは放送部です。これより学園内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてくだ――』

夜八時。

放送が流れたと同時に学園内は停電になり、学園都市は闇に包まれた。

自分の部屋で大人しく漫画でも読んでいるカイは、ふと幼女姿の吸血鬼の事を思い出す。今頃は自分の担任の血を求めて行っている頃だろうか？

しかもその担任ってのが好きだった男の息子ときた。とんだ笑い話だ。己に掛けられた呪いを解くために好きだった男の息子の血を追い求めるのだから……。

まるでゲームや漫画みたいな話だ、とカイは今読んでいる漫画を

見ながら思う。

呪いを解く方法なら他にも有りそうな気はする。六〇〇年も生きた吸血鬼なら尚更知ってそうな感じは……。

そんな事どうでもいいかと思い始めたカイは、再び漫画の世界に入り浸る。

だが突如『未来の紋章』が疼きだし、頭痛が走る。

「……ッ、何なんだ、いったい……？」

額には紋章魔法を発動する時の青白い光が発していて、何か危険な予兆があるのではとカイは警戒する。今朝から続いた疼きに関連しているのは間違いない筈だ。

だが『未来の紋章』は何も見せてはくれない。本当に戦闘の時以外は見せてはくれないのだな、と改めて実感する。

戦闘の時や大規模な戦争の時は活躍してくれたのに、大事な場面では『未来』を見せてはくれない。本当にこの紋章は何を望んでいるのか分からないのだ。

ただ宿主であるカイを死なせないようにはしているようだ。『未来の紋章』にとってカイに死なれるのは問題ということか。

暫く疼きに我慢していると、青白い発光も収まり、『未来の紋章』の疼きも収まる。

ほんとに何なんだ？　と思っていると、外から魔力反応を感知す

る。

（エヴァンジェリンか……？　だがエヴァンジェリンとは別の魔力……）

カイは今頃子供先生と呼ばれている者と戦っているのだろうが、カイが探知した魔力はエヴァンジェリンよりは劣る。

それなら例の子供先生か？

カイはこれまで子供先生を直に見た事が無いので、何とも言えない。しかし子供先生とも違うように思える。

もっと他の誰か……この学園の者ではない気がする。

なら侵入者か？

それだったら警備中の魔法先生やら魔法生徒に任せれば良い。此処の魔法使い達もカイよりかは強いのだから。

その時、ふいに携帯電話が鳴り響く。カイは携帯電話を開き画面には『学園長』と映し出されている。

嫌な予感しかしないな、と思いながらもカイは出る。

「はい、何でしょうか？」

『至急の依頼じゃ！　報酬は弾むから君にも動いてもらいたい！』

何か妙に焦っている学園長に、カイは訝しむ。

「穏やかではありませんね？　何かあったんですか？」

『うむ、学園内に侵入者が現れたんじゃが、当然魔法使い達が撃退、捕獲に向かったんじゃが……』

「……その続きは？」

『全滅したようじゃ』

辛く、何かに堪えるように言った学園長の言葉が、カイの何処かに突き刺さった。

……全滅？

それ相応に出来る魔法使い達が？

敵は相当な実力者という事になる。いくら『平和な箱庭』に住んでいる魔法使いだからって、ちゃんとした実力はある。それなのに全滅されたのが、少しばかり信じられなかった。

「それで敵は？　敵の数は？」

『命からがら逃げ延びた者の情報からでは、どうやら女魔法使い一人のようじゃ』

「一人！？　一人にやられたんですか！？」

『……うむ、情けない事に……、の』

たかが一人の魔法使いに学園内の魔法使い達がやられるとは信じられなかった。女魔法使いという事で、エヴァンジェリンかと思ったが、彼女は現在子供先生に躍起になっている。流石に学園内の魔法使いを相手にはしていないだろう。

だとしたらいったい誰が？

「しかし何故俺に？　もっと強い魔法使いとか居るでしょ？　例えば高畑先生とか」

『高畑君は今学園内には居らんくての。君ならもしかしたら……、と思ったんじゃが』

「……、俺の事を過大評価し過ぎですよ」

恐らく学園内最強であろう高畑が居ないとなると、白羽の矢が立ったのがカイなのだろう。

こんな自分を評価してくれるのは有り難いが、今の自分に誰だか分からない女魔法使いに勝てる力は無い。『未来の紋章』を上手く使って撃退出来れば良い方だ。

はぁ、とカイは溜め息を吐き、

「分かりました学園長。その依頼を引き受けましょう」

『本当に引き受けてくれるか！？』

「ええ。ただし条件があります」

『条件とな？』

「はい。増援など呼ばないでください。援護は無用です」

『本気か！？』

「はい。居ても邪魔になるので

『し、しかしじゃな……』

「俺も今回は本気でやらないといけないみたいなので、他に人が居るのは邪魔なんです」

カイは『未来の紋章』の力を使いながら戦う事しか出来ない。仲間が居ればその者の『未来』を読みながら此方も予測しなければならない。

それは面倒だ。

仲間と戦うぐらいなら一人で戦った方が楽だ。勝てるかは別として。

カイの条件に学園長はうーんと悩むが……、

『分かった、他の者には手出しさせないようにしておこう』

学園長はカイの条件を呑み、承認した。

これで望み通りカイが一人で戦う事となった。

「それでは場所は？」

『場所は世界樹広場じゃ』

「分かりました。すぐに向かいます」

場所を聞き出したカイは早々に通話を切り、準備を行う。敵の戦闘力は未知数な為、万全な準備をしなければならない。

黒ずくめの仕事着に着替え、黒い外套を羽織り、黒い手袋を装着し、狐のお面を付ける。そして数種類の札を持って窓から飛び降りて、学生寮を抜け出した。

どろんとした漆黒の闇を駆け抜け、全速力で世界樹広場まで向かう。息を切らしながら脚がもげるまで速く動かし、世界樹広場に向かう。

そして世界樹広場に辿り着く。

「はぁ、はぁ……、此処だよな？」

カイが世界樹広場にたどり着くと、其処には人っ子一人も居なかった。

……おかしい。何故一人も居ない？

学園長が言うに敵の女魔法使いや、その女魔法使いに倒された学園の魔法使いの姿が無いのだ。

何処かに行った後なのか、女魔法使いの気配も感じられない。

（これはどうしたものか……）

学園長の依頼を受けやる気を出して来たものの、敵が居なければ削がれてしまう。

取り敢えず辺りを捜してみようと思ったカイに、何処からともなく声が聞こえてくる。

「もしかして……、もしかしなくても私を捜しているのかしら？」

闇夜に静まり返った広場に突如降りかかる女の声。凛とした声でありながらも、人を威圧するような覇気をも持っている。

この女の声は……、とカイは聞き覚えのある声に、思わず視線を上へ向ける。

カイの視線の先には空に浮かぶライトグリーンの長髪を持った女の姿。日本人ではなく西洋人で、スラッとした顔立ちで美人である事は間違いない。

足元まである白いローブを羽織り、不敵な笑みでカイを見下ろしている。

女の顔からして二十代前半の歳をしていそうだが、魔法使いなら若返りの術を使える可能性があるので、正確な年齢は分からない。

ただ不敵に見下ろしている女の事なら、カイは少々分かっているつもりだ。

カイは素顔を隠している狐のお面を外し、それをフリスビーのように投げ飛ばす。

「まさか、今頃になって現れるとはね……」

カイの心は異様に高ぶっていた。言葉では冷静に抑えているが、それでも心は異様に高ぶっている。

漸く分かった。何故朝から『未来の紋章』が疼いていたのかを。

それはこの女に会えるという前触れだったのだ。忌まわしきこの女と。

『未来の紋章』はこうなる事が分かっていて、紋章なりに教えてくれていた。

それが分かったカイはにやついた顔が抑えられない。この麻帆良学園でどれだけ目の前にいる女を想っていたか。

カイは実に気分が良かった。漸く目の前の女を殺せるのだから。

「ふふ……、お久しぶりですね、篠宮カイ君？」

カイは女の事を知っていて、女もカイの事を知っている。二人とも知り合いのようだ。

それでも仲が良く、友達という訳ではないが。

「もう現れないのかと思っていたよ。あれだけ俺の事をしつこく追い回していたくせに、二年前の件でバッタリと断ち切った。本当に現れないかと思ったよ」

「嬉しい限りですね。あなたはこの二年間、私達の事を忘れずにいてくれたのですからね」

「忘れるわけないだろ？　俺を弱体化させた貴様らのことをな！！」

カイは指から十本の銀糸を垂らし、女に向けて静かに放つ。静かに、だが疾く女の身体を切り刻む為に銀糸が走る。

だが十本の銀糸は女の身体には届かない。女の周りには四方八方、風の障壁が展開されているからだ。つまり銀糸は風によって弾き返されている。

今のカイでは魔力も気もない状態で女の風の障壁を切り裂く事も出来ない。ここは大人しく銀糸を戻す事しか出来ない。

ちっ、と舌打ちをしてカイは忌々しく女を睨む。

「その厄介な風は健在か……」

「ええ、もちろんです。今のあなたには破れもしないでしょうがね」

「破ってやる。弱者なりの戦いを見せてやる」

カイはそう言うと真っ直ぐ女の元へ走る。直線距離にして約二〇メートルだが、女は悠々と空中に浮いている。

カイには浮遊術といった空中に浮かぶ術を持っていないので、足場を作るしかない。

だからカイは札を数枚取り出して、女目掛けて札を投げる。その札は直ぐさま踏んでも潰れない程の岩となり、足場となる。それを土台にしてカイは女の元へ空を飛ぶ。

女の表情は全く変わらず不敵な笑みを浮かべるばかり。

「ふふ……、それでどうやって私に攻撃するつもりかしら?」

そう、カイが空を浮かぶ女の元にたどり着けても、女の絶対的優位には変わらない。

女の周りには三六〇度風に護られているので、大抵の攻撃はほぼ弾き返せる。

そんな女の心情も知ったことかと、カイは更に札を使う。

今度は女の周りに札を放つ。その札は当然の如く風の障壁によって切り裂かれる。

女はいったい何がしたいのだろうか？　と思っているが、それも直ぐに分かる。

切り裂かれた札から巨大な岩が現れ、女を取り囲む。

「――なっ！？」

まさか切り裂かれた札から自分ごと取り囲むような岩が具現されるとは思ってもいなかったのだろう。

女は光も入らない真っ黒の視界に少し動揺するが、それでも直ぐに冷静になって、自分を取り囲む岩を破壊する為に魔法の詠唱に入る。

女は魔法を高速で発動する事が得意だ。普通の魔法使いが詠唱する時間の五分の一の時間で発動する事が出来る。それ故に岩が女を取り囲んでから三秒で岩は破壊された。

圧倒的な速さで岩を破壊した女だったが、直ぐ目の前に両手をカイの不敵な笑みを視界に入れる。

カイが何故女が展開している風の障壁内に居るのか？

それは女が攻撃魔法を使う時は周りに展開されている風の障壁が展開されなくなるからだ。女が魔法を使い岩を砕いた時、厄介な風は消え去ったので、その隙を突いてカイは女の間近に接近したのだ。

「取り敢えずくたばれ」

狂気の笑みへと表情を変えたカイは左拳を握り締め、そのまま女の顔面を殴った。

悲鳴を上げる事もなく女は五、六メートル先の地面まで飛ばされた。非力なカイでも女を殴り飛ばせる力は持っており、しかも恨みを持っている相手なので更に力強く殴る事が出来たのかもしれない。

女を殴り飛ばしたカイは地面に降り立ち、女の様子を窺う。『未来の紋章』の力で先を見通せるカイは、次に女がどの様な行動を取るか分かっている。

次は女が起き上がり、カイに向かって何かを話す。

『未来の紋章』が見せた通りに女はのろのろと立ち上がり、鼻から出血した血を拭ってカイを見る。美人の顔が台無しだ。

「流石は腐っても『真の紋章』の継承者。こうも簡単に私の顔を殴る事が出来るのだから」

「腐らせたのはアンタらだ。二年前あの箱型の道具を使って――」

「アンチスキルスロットよ。忘れないでくださいね」

「そうだったな。そのアンチスキルスロットで俺の魔力を奪った。おかげで今の俺は見習い魔法使いと同等程度。ほんと、やってられない」

カイは溜め息を吐きながら愚痴を吐く。

二年前、カイは目の前に居る女ともう一人、男が居たのだが、その時に戦っていて『アンチスキルスロット』という対象者に魔力を極端に下げる道具を受けてしまった。

以前のカイはそれなりに魔力を有していたのだが、アンチスキルスロットを受けてからは今みたいに魔力が殆ど無い状態だ。これで戦えるのもひとえに『未来の紋章』が有るからなのだ。

愚痴を零しているカイに女は、ふふッ、と笑い、

「あなたに宿る『真の紋章』を奪う為にも、あなたの魔力は邪魔でした。だから潰した。それだけです」

笑いながら、それでも冷酷に言ってのけた。

その態度がカイは苛立ちを募らせながらも、疑問に思ったことを述べる。

「……アンタらの強さなら簡単に奪えただろ？　わざわざアンチスキルスロットを使わずとも」

「しかし現に今も『真の紋章』はあなたが護っている。私と『あの方』の力を持ってしても……、奪う事は出来なかった」

「……」

カイの目の前に居る女はカイから『未来の紋章』を奪う為に、カイを追い回していた事があった。それは二年前に限らず、数十年の年月を掛けて……。

対魔法使い専用の道具を使ってでも『未来の紋章』を手に入れたかった。結局はカイが弱体化しても護り抜いているわけだが……。

そう言えば、とカイは思い出した事を告げる。

「そう言えばあの男はどうした？」

「『あの方』なら此処には居ません。『あの方』にもやる事がありますので」

「……、アンタとあの男だけはどうしても許せないんでね。出来れば一緒に葬りたかったよ」

カイが疑問に思った事は女が主と呼ぶ男の姿が見えないという事。カイを……、というよりは『未来の紋章』を執拗に追いかけていた男の姿が見えないので、疑問に思っていたのだ。

その男が直接カイにアンチスキルスロットを食らわせたので、特に許せない相手に指定している。

なのでその男にも姿を見せて欲しかったのだが、現れない事にカイは落胆する。殺したい相手が現れないことに……。

でも、いいや、とカイは髪をバリボリと掻いて、

「先ずはアンタを殺す。そうすればあの男も出て来てくれるよなァ？」

カイは札を数枚取り出して女に向かって走る。

対して女は澄ました顔で一息吐く。

「残念ですが死ぬのはあなたですよ。あなたが死ねば『真の紋章』は手に入るのですから」

女はカードを取り出して、アデアット、と呟くと、バレーボール程の大きさの球体が現れる。女はその球体を手にして、呟く。

燃える天空。

そう呟いた瞬間、女が手にしてる球体から炎系上級魔法、『燃える天空』を無詠唱で発動した。

カイはあり得ないといった表情を浮かべるが、自分に向かって禍々しい炎が飛んで来ているので、カイもなけなしの魔力で障壁を張りながら横に避ける。

その瞬間、辺り一面に炎の海が広がる。まるで大規模な戦争が起こったかのような、傷跡を残していく。

「――ぅ、ゲホッ！　ゲホッ！」

なけなしの魔力を使い捨て障壁に注いだ為、何とか死は免れたが、それでも身体にダメージを負い、肺が焼けるような感覚に襲われ、上手く呼吸が出来ない。

無様に地面で悶えているカイに、不条理な足音が近付く。カツ、カツ、と靴底で地面を叩く女はカイの頭を踏む。

「どうですか、私のアーティファクト……、太極訃音は？　これはあなたにも見せた事はありませんでしたね」

「……、な…何なんだよ……、それは……？」

「このアーティファクトは無詠唱で魔法を発動する事が出来る代物。魔法理論を全てひっくり返したアーティファクトなんです。解りましたか？」

女が手にしているアーティファクト、太極訃音は全ての魔法を無詠唱で発動する事が出来る。

本来魔法とは精霊に語りかけ、協力してもらう為に詠唱して魔法を発動する事が出来る。それが正しい魔法の使い方、そういう理論なのだ。

だがこの女のアーティファクトはその理論を全て無視して、女が魔法名を呟くだけで発動してしまう、禁断のアーティファクト。普通に詠唱して発動する魔法と威力も変わりなく、連続で発動する事も出来る。

なんてアーティファクトだ……、と女に頭を踏まれながらカイは両の拳を握りしめる。

動く。

まだ動ける。

身体はまだ動けると判断したカイは踏みつけてくる女の脚を振り払い、札を投げつける。その瞬間、札は炎となり女を巻き込んで爆発する。

その後は傷付いた身体を抱えながら後退して、警戒態勢を取る。あの女がこの程度の爆発で死ぬ事もなく、ましてやダメージを与えられているとも思っていない。

だから『未来の紋章』の魔法をいつでも発動出来るように詠唱し、待機させておく。

カイが未来の紋章魔法を発動する為に詠唱していると、轟々と燃えている炎がかき消されていく。その場から全く無傷の女の姿が現れる。

「まさかこの程度で勝ったとは思っていないですよね？」

「当然だ。今の俺にはアンタみたいな奴に勝てる方法はこれしか無いんだからな！」

カイの額にある紋章が青白く光り、女を囲うように膜が具現される。未来の紋章魔法が発動したのだ。

今のカイが目の前にいる女に勝てる方法はこれしか無いのだから。

未来の紋章魔法に囚われた女は、それでも冷静であった。眉一つ動かす事もなく、無表情でいた。

「これが『真の紋章魔法』……。『真の紋章』には『真の紋章』で

しか対抗出来ない。私のアーティファクトでも破る事は出来ない。
”本来ならば”」

女はニヤリと口角を上げて、

「しかし彼の魔力はアンチスキルスロットによって最低値にある。ならば！」

女は太極訃音を操り、ありとあらゆる上級魔法を無詠唱で発動する。

炎、風、雷、氷、闇。この属性の上級魔法を撃ち込んで、膜を破壊しようとする。

女が未来の紋章魔法を破ろうとしているのを見ているカイは驚きしか出来なかった。女が自分を覆っている膜を破壊しようとする事にもそうだが、未来の紋章が見せる『未来』に思わず驚きを隠せなかった。

（馬鹿な……、あれを壊すなんて……）

『未来』に驚いていると、女が膜を壊して出て来る。　意外にあっさりと、余裕の笑みを浮かべて。

「やはりアンチスキルスロットを食らわせて良かったと感じますよ。あなたの魔力が無いおかげで『未来の紋章魔法』を打ち破る事に成功したのですから」

「……、俺の魔力が無いからって打ち破るなんて……」

「言いましたよね？　『あなたの魔力は邪魔』だと」

女は解っていたのだ。カイに魔力が無ければ『未来の紋章』の真の力を引き出せないと。

もしカイに魔力があれば女は膜を破る事も出来ずに絶命していただろう。

さて、と呟いた女は目を細める。

「そろそろ終わりにしましょうか。あなたに『未来』が見えていても、私の攻撃は躱せないでしょうから」

女は紡ぐ。

千の雷。

女が持つ太極訃音から千本の雷がカイに向かって疾走する。

コレは……、駄目だ。

本能的に駄目だと悟ってしまったカイは全く動けなかった。脚が何かに掴まれているかのように動かない。ただ立ち尽くすだけ。

地面を切り裂きながら近付く雷。

カイの頭には『死』の一文字しか浮かばなかった。

（このまま死ぬしかないのか？　未来を先読みしても無詠唱で上級魔法を発動なんて躱せる訳がない……）

いくら『未来を見通せる』からといってカイの身体が動かなければ話にならない。それに無詠唱魔法を連発でもされたら避けられる訳がないのだ。

こんな不条理な攻撃に敵う筈がない。

（いや、駄目だ！　絶望なんてしてられない！　何としても生き抜かないと！）

カイは絶望的な考えを捨て、何とか生き抜く事を考える。

と言っても千本の雷が目前に迫っているので、考えている時間はない。

カイは無意識に全ての札を使って千の雷の威力を軽減しようとする。

そしてカイは千本の雷に呑み込まれた。

「――ぐっ、うあっ！！」

千本の雷に呑み込まれたカイは一〇メートル近く宙を舞い、受け身を取る事も出来ず地面にドサッと落ちる。

千の雷を受けたカイは何とか生きているが、意識が朦朧として身体が全く動かない。脳が指令を送っても手足は動いてくれない。

（……動け、動いてくれ……。奴の攻撃がくる……）

意識が朦朧としている中、顔を女が居る方へ向ける。女はゆっくりとカイの方へ歩いて来ている。

その姿は処刑執行人そのもの。カイを殺そうとする為に近付いてくる。

着実に『死』が近付いているにも関わらず、身体は動かない。動こうともしない。

ここまでか……、と心が諦めてしまったカイは、目を閉じる。

最後に自分の額に宿る『未来の紋章』に謝りながら、篠宮カイは意識を落とした。

「……あの魔法を受けて、まだ生きますか？　恐ろしい人ですね」

意識を落としたカイを見下ろしながら、女は呆れている。雷系の上級魔法を受けたにも関わらず、まだ生きている事には呆れを通り越して驚嘆に値する。

女の視点からではカイが千の雷を食らう直前に札を使って威力を軽減している所が見えなかったので、女は流石に死んだと思っていた。だがまだ息をしているので、殺し損ねた事に舌打ちする。

だが今の状況ならばカイを殺して『未来の紋章』を奪う事が出来る。女の目的としては達成出来るので、今生きていようが関係ない。

カイを殺す為に女は右手を近付ける。どうやって殺そうかと思ったその時、女の右手がバチンと何かに弾かれる。

「なに！？」

女は右手を見ると、まるで火傷を負ったかのように皮膚が剥がれていて、見るに堪えない状態になっている。

いったい何が……、と女が思った時、カイを中心とした一帯に何かが脈動する。

「な、何が……」

いったい何が起こっているのか分からず、女は恐怖を覚え一歩後

ずさる。

地面が脈動し、空気が震え、空が嘆くと、のろのろとカイの体が起き上がる。目は閉じたままだが額にある紋章を青白く光らせ、女を見据えて口を開く。

「見ていたぞ、主達の戦いを」

声質はカイのものだが、何処かカイとは違う感じがする。

まさか、と思った女は『カイ』に訊ねる。

「あなたは『未来の紋章』ですね？」

女の問いに『カイ』は答える。

「そう呼ばれているな」

認めた。今のカイの身体を借りて『未来の紋章』が表層に現れているのだと。

「なら私が此処に居る目的は分かりますね？」

「我を手に入れる為」

「分かっているのなら話は早いですね。早速その宿主を捨て、『あの方』に宿っていただけませんか？」

「断る」

女が未来の紋章に目的を話すと、未来の紋章はあっさりと斬り捨てた。

くだらないと言わんばかりの表情で。

あっさりと即断して断った未来の紋章に女は激昂する。

「どうして！？　『あの方』じゃ駄目なんですか！？」

「決まっている。カイの方が棲みやすいからだ」

未来の紋章に女は唖然とする。

たかが『棲みやすい』という理由だけで、カイから離れないと言うのだから。

未来の紋章は髪をバリボリと掻いて、

「もちろんそれだけではないが。ともかく女、我の宿主を傷付けたんだ。それ相応の報いを受けよ」

「――――ッ！」

未来の紋章は右手で横に凪ぐと、ゴウッ！　という鋭利な風が発生する。女の周りに展開されている風の障壁も切り裂き、女の身体を切り刻んでいく。

女だけではなく周りの建物も傷付けていく。

「――な、なんなの、この風は！？」

「どうした女？　無詠唱で上級魔法を撃ってみろ」

「くっ！　千の雷！」

未来の紋章に挑発されるように女は太極訃音を用いて無詠唱で千の雷を放つ。

カイを沈めた魔法で未来の紋章に放つが、未来の紋章はフッと笑うだけ。

「愚かな女だ」

そう言って未来の紋章は少し目を開き、向かってくる千の雷を左手で受け止め、女に向けて倍の速度で跳ね返す。

異常な速さで自分の元に返ってくる千の雷に、女は転移魔法で逃げる暇もなく、前面に全力の魔法障壁を展開して耐える。だが威力は軽減する事はなく、女の身体は千の雷に呑み込まれた。

悲鳴を上げる事も許されず、カイと同じように一〇メートル程宙を舞った。

ドサッと無様に落ちた女に未来の紋章は溜め息を吐いて近付く。

俯きに倒れている女に近付き、未来の紋章は女の頭を踏みつける。カイが女に踏みつけられた時と同じように。

ぐりぐりと踏みつけられ、女のプライドは崩された。女にとって敵に頭を踏みつけられるのは、許せない事なのだろう。

未来の紋章を恨みがましく睨み付けている。

「ふん、我が宿主はこの表情を見たら蔑んで虐めるのだろうな、弱い者苛めみたいに。まあ今回やられた事で受けた側の心境が分かったであろう。……それでもやり続けそうだが」

未来の紋章は女を踏みつけながら宿主であるカイの事を考える。

敵に対して何度か倒れている敵の頭を踏みつける事があったが、被害者の立場はあまり無かった。今回で少しでも被害者の気持ちが分かれば良いが、それでも止める事はないだろう。

だってカイはそういう奴だから。

踏みつけるのも面倒になってきたな、と思い始めた未来の紋章は女にトドメを刺そうと考えた。

どうせまた未来の紋章を狙って来るのだ。今此処で葬っても問題は無いだろう。

未来の紋章は女にトドメを刺そうと脚を振り上げた、その時、学園内に光が戻ってくる。メンテナンスが終わり、停電が解除されたのだ。

その光景に目を奪われ、隙を生んでしまった。

女はその隙を突いて未来の紋章から距離を取り、態勢を立て直す。

トドメを刺しきれなかった事に舌打ちし、未来の紋章は女に告げ

る。

「今日のところは見逃してやる。さっさと失せろ」

「……くっ」

未来の紋章に言われ、女は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべ、転移魔法で去っていった。あっさりと負けてしまったのが悔しいのか、それとも未来の紋章を得られなかったのが悔しいのか。

そんな事はどうでもいい未来の紋章は戦場だった、この場を見る。地面には複数の深い傷跡。これは千の雷によって地面が抉られてしまった。建物にも未来の紋章が生んだ風によって爪痕を残している。

これを見て未来の紋章は思う。

「やりすぎたか？」

そう呟いてしまう未来の紋章に異変が起こる。

額に激痛が起こり、崩れ落ちるように地面に両膝をつける。

頭を抱え、激痛に堪えるが一向に治まる気配はない。

「ちっ、少し長く出過ぎたか……」

そして未来の紋章は倒れる。今はカイを失う訳にはいかないので、再びカイの深層に溶け込む。

こうして未来の紋章もカイの深層に戻った為、体はこのまま地面に横たわったままになってしまった……。

篠宮カイの敗北（後書き）

正直、めちゃくちゃな感じはします。

それでも続けていこうと思いますが……。

此処まで読んでいただきありがとうございます。

今後も読んで頂けると嬉しいです。

密かに動く陰謀（前書き）

今回もオリキャラ登場回です。

何ともな出来になってしまいましたが見て頂けると嬉しいです。

密かに動く陰謀

「申し訳ありません。『未来の紋章』を奪い損ねました」

薄暗い部屋の中でカイと戦っていた女が、片膝を着いて目の前の椅子に座っている男に報告していた。

女の名はマリア・フォースト。

詠唱もせずに上級魔法を発動出来るアーティファクト、太極訃音を持つ異常者。

そんな異常者も先程までカイと戦っていた為か、白いローブは所々切り裂かれ、所々黒ずむ程に汚れている。顔にも血やら火傷の痕も見られ、少しばかり痛々しい思いになる。

それもこれも殆どは『未来の紋章』に乗っ取られたカイがやったのだが。

マリアの報告を男は目を閉じ、黒髪をくるくると指に絡めて弄りながら、ふーん、と呟くだけ。

目の前の男はどこか日本人の顔をしている。

しかし明らかに日本人ではない部分がある。それは敵を射抜き殺しそうな紅い目だ。この部分は絶対に日本人ではないと断言出来る。

歳はマリアと同じ、見た目青年っぽい顔から二〇代と思われる。

だがこれが本来の年齢とは限らない。この世界の魔法を使えば外見を若作りする事も可能だからだ。だから本当の年齢は分からない。

そんなキザっぽい男は髪を弄るのを止めて、目を開けて視線をマリアに向ける。開かれた紅い目にマリアはドキッと鼓動を大きくする。

マリアはこの男の従者であり、パートナーであり何年も共に居るのだが、いつまで経ってもこの紅い目だけには慣れなかった。

大抵は共に居るにつれ慣れていく。何か食べる時はナイフとフォークを使わないと食べられないとか、今男がやったように髪を弄る癖など、大抵は時間が経つにつれ慣れていくものだ。

それが『普通』な事だから。

しかし男の両の紅い目には今でも慣れる事はなかった。隙を見せれば今にでも喰い殺されそうな気持ちにさせるからだ。

そう、男の両目は『普通』ではないのだ。

男の両目は生まれもっていた目ではない。ある日、男は禁忌の魔法に手を出し、生まれもった両目を奪われた。その代わり普通ではない紅い目が備えられた。

もちろんしっかりと見る事は出来る。ちゃんと目としての機能を果たしてくれている。

禁忌の魔法に手を出していながら、代償が両目だけなのは男にとっては幸いだったのかもしれない。少ない代償で大きな力を得られ

たと考えれば。

いつまでも慣れる事が出来ない紅い目、それに畏怖を抱いている女は顔に出す事はしない。何故なら目の前の男に嫌われたくないからだ。

もし恐怖に染まった顔をして男に見られでもして捨てられたら、マリアとしては死に等しいだろう。それ程までにこの男を愛している。いや、依存しているだけか。

この男に命令されれば何だって忠実にその命令を遂行する。敵を殺せと命じられれば残虐なまでに殺すし、この街を破壊しろと命じられれば街を更地にするまで破壊してみせる。

今回の事だってそうだ。男の命令があったから麻帆良に堂々と侵入し、カイが持つ『未来の紋章』を奪おうとしたのだ。

結果は失敗に終わってしまった訳だが……。

「未来の紋章の強奪に失敗し、やられて帰ってくるとは……、マリア、君はそこまで弱い女なのかい？」

首を傾げながら問う男にマリアは慌てて弁明する。

「い、いえ、そんな事は！　途中までは圧倒して追い詰めたのですが、その……」

「言い訳は聞きたくない……、と言いたいところだが、今回ばかりは仕方ないのかもしれないね」

「え……？」

「私達が追っているのは『神と同等の存在』。そう簡単に手に入らないのは仕方ないんだ。今までもそうだったしね」

「……」

「未来の紋章に体を乗っ取られたカイにはアンチスキルスロットの効力は通用しなかったのかい？」

「は、はい。カイの体だからと言ってアンチスキルスロットの効力は受けませんでした。……歯が立ちませんでした」

マリアは悔しそうに歯を噛み締めながら答える。あれだけ異常なアーティファクトを使っても勝ち目が無いように感じた。

未来の紋章に手を出してきたのが間違いだったと今更思うぐらいに。

ところで、と男は話を切り替える。

「カイを殺そうとはしていないよね？」

「……え？」

「殺そうとは、していないよね？」

男は紅い眼光をマリアに放ちながら問う。

未来の紋章と対峙した時と同じように上手く呼吸が出来ないでい

る。肺を握り潰されたような圧迫感が、マリアの身体を襲っていた。

マリアは答えられない。だってカイを殺そうとしていたから。

いつまでも答えようとしないマリアに男は察したように溜め息を吐く。

その瞬間、マリアの首が何かに絞められ、本当に呼吸が出来なくなる。酸素が欲しいと必死に喘いでいるマリアに対して、男は椅子から立ち上がり、マリアの髪を鷲掴みにする。

「私は『未来の紋章』が欲しいと命じた訳で、別に『カイを殺せ』とは命じていないんだよ？」

「――――、し、しか……し、殺さな…ければ……！」

「未来の紋章を奪えないか？　だったらカイを連れて来れば良いだろ？　未来の紋章を使わせるように洗脳でも何でもすればいい。それに私はカイ自身の事も気に入っているんだ。それなのにマリアはカイを殺そうとした。君は何年私の従者をやっているんだい？」

「……あ、が……ぁ」

男は狂気の笑みを浮かべながらマリアを床に叩きつける。下手したら死んでしまいそうな程に強く、何度も叩きつける。

何度も叩きつけられたせいか、マリアの額から血が流れ出ている。この現状を見れば未来の紋章にやられて受けた傷の方が易しいと思える。

そしてマリアが窒息死になりかけているので、男はマリアの首を解放する。マリアの首を絞めていたのは男の力だ。手も使わず魔法かと言われれば、それは半分正解としか言えない。

男はこの世界の魔法使いには絶対に使えないであろう魔法を使う事が出来るから。その力でマリアの首を絞めたのだ。

解放されたマリアはハァ、ハァ、と必死に酸素を取り込んでいる。あと数秒で窒息死になっていたマリアは恨みがましい目つきで男を見上げる。

「何だい、その目は？」

「……、どうしてあなたはあの男に執着をなさるのですか！？」

マリアは自分を死に追いやりかけた男に対して恨みがましい視線を送った訳じゃない。自分の主が執着している女顔の少年に送っているのだ。

男は愚問だな、と呟き、

「私が気に入ったから。ただそれだけだ」

男は当たり前のように答えてみせた。

ただ単にカイを気に入っているから。だからマリアが殺そうとしているのが許せなかったのだろう。

男は初めてカイを見掛けた時から気に入っていた。理由は分からない。男が秘密にしているからだ。

そんなお気に入りのカイと未来の紋章を手中に入れたいから、男はカイを何年も、何十年も追い求めている。

それがマリアにとって許せなかった。憎いのだろう、自分の主の心を占領しているカイが。自分だけに向けてくれず、他の人間に視線が向いているのだから。

だからマリアはカイを殺したいのかもしれない。未来の紋章を奪うという理由だけでなく、私情の事で……。

マリアが悔しそうに歯を噛み締め、爪を身に食い込ませるほど握り締めていると、男が身に着けている白いローブを翻し、再び椅子に座り身を預ける。

「取り敢えず未来の紋章の強奪には失敗。暫くは麻帆良学園には手を出せないね」

「……、申し訳ございません」

「別に構わないよ。こんな事を何十年とやってきたんだから」

男にとって時間が掛かる事には疎いらしい。

標的としているカイは未来の紋章による呪いで不老、永遠の時間を歩む者だ。時間なんてどうでもいいのだろう。

問題は奪えるか奪えないか。ただそれだけの話。

ところで……、と男は続けてマリアに問う。

「『彼』はどうしているんだい？」

「『彼』なら今でも麻帆良の学生をしております。変わらずカイの監視を」

マリアの言葉に男は、そう、と一言呟いて目を閉じる。

麻帆良学園内に二人の息が掛かった者が居るらしく、カイの監視をしていると言う。

「『彼』からの連絡事項は？」

「近日にカイが在籍している学校が修学旅行に出掛ける事が分かりました。場所はまだ決まっていないらしいので分かりませんが、麻帆良から出るのは確実です」

マリアの報告を聞いて男は考える。

カイが麻帆良から出るのなら修学旅行が狙い目だ。その時に未来の紋章を奪取するしかない。

「……、そう言えばあのガキが日本の京都に行くんだったね？」

「ガキ？　……『完全なる世界』のアーウェルンクスですか？」

「そうだ。どういう訳か京都に行くんだったな？」

「はい」

「なら利用させてもらうか。『彼』に連絡を取ってカイのクラスの修学旅行先を京都に行かせるように仕向けろ」

「了解しました、レアン様」

男……レアンの命令を受けてマリアは此処から転移魔法で消え去る。忠実に命令通りに遂行するのだろう。例え暴力を受けても……。

この薄暗い部屋の中でたった一人になった男は天を仰ぐ。

この部屋は部屋と呼べるのかと思える程広く、壁にはモニターが無数起動している。そのモニターの輝きで大きな部屋が照らされている。

一つのモニターには何処かの街が映し出されていて、他のモニターには別の街が映し出されている。無数のモニターの中には麻帆良の街が映し出されているのもある。

どうやら世界各国の街の光景を映し出しているようだ。

レアンは麻帆良が映し出されているモニターに視線を移し、現在の様子を見る。

現在の麻帆良は深夜の時間帯なので、一般人は誰一人として外に出ていない。外に出ているのは警備をしている魔法使い達。

先程マリアの襲撃に遭ったばかりなので、今日はいつも以上に警戒しながら警備している様子が映し出されている。

滑稽な奴ら、と内心ほくそ笑んでいるレアンは、別のモニターで

カイを捜す。

流石に回収されたかと残念がっているレアン。麻帆良が映し出されているモニターは複数有るのだが、カイとマリアが戦闘した場所は映っていなかった。戦闘をしている痕跡は見られたのだが、残念ながら本人は映る事は無かった。

だからマリアが敗れ、麻帆良の地を去っていった後のカイがどうなったかは知らないのだ。

レアンの予測としてはマリアに重傷を負わされ、カイは麻帆良の人間に回収されたと思っている。アンチスキルスロットの影響で魔力が最低限しかないカイが、自力で戻れるとも思えない。だったら誰かに回収されたとしか考えられない。

そう考えているレアンは再び天井へと視線を移す。そしてどこか笑っているような表情で呟く。

「カイ……、もちろん死んでいないよね？　まだ死んじゃ駄目だよ？　私が君を手に入れる、その時までは……」

「……、うぅ……痛い……」

身体に走る激痛によって篠宮カイは目を覚ました。

カイにとって憎い女から受けたダメージが身体全体に痛みを知らせる。そして何故か頭までもが痛い。その理由が分からないカイは苦痛の表情を浮かべながらも、辺りを見回す。

「……俺の部屋。いつの間に帰って来たんだ？」

辺りを見回して、やっと此処が自分の部屋だと分かる。窓からは朝日が射し込んでいて、時計を見れば時間は六時きっかし。飛び出して行った窓も今は閉じられている。

寝起きでぼんやりとした頭で侵入者の女、マリアとの戦闘を思い出す。

（確か俺は太極訃音とかいうアーティファクトで、あの女にやられた筈だ。未来を読んだとしても無詠唱で発動された上級魔法を避けられる筈もなく、あっという間にやられて、気を失ったんだよな）

そう、カイはアーティファクトを使ったマリアに手が出せなく、一方的にやられ気を失った。完敗したのだ。

それなのに死んでもなく、自分の部屋に居るのは何故なのだろうか？　とカイの頭は疑問符で一杯だった。

それもそうだ、あれだけ未来の紋章に固執していた女が、何もせずに帰るとはカイも思えない。

未来の紋章が表層化した事はカイの記憶には無いので、マリアが何故何もせずに去ったのか分からないのは仕方ない。

そして気を失って目覚めたら自分の部屋だ。ワケが分からなくなるのは当然だ。

取り敢えず自分の身体の状態を確認する。何故か身体には包帯がされている。もちろんカイが巻いたわけではない。

しかもよく感じたら額にも包帯が巻かれている。これじゃまるで病人だ。いや、まあ病人なんだが。

腕、脚、腹、額と怪我している所に包帯が巻かれていて、いったい誰が処置してくれたのだろうか？

しかも包帯が巻かれているという事はカイの服を脱がしたということ。服を脱がし包帯を巻き、更に服を着せたという事になる。

それが本当だとすると、カイの顔が直ぐに真っ赤になり、とてつもなく恥ずかしい思いに駆り立てられる。

カイの身体に男らしい筋肉が有れば良いのだが、残念ながらその要素はない。なよっとした身体である為、見られるのが恥ずかしいのだ。

ともかく恐らくこの部屋に運んだ人も包帯を巻いてくれた人なのだろう。よく見ればテーブルの上に救急箱が出されていて、開けっ

放しになっている。

しかし誰が運んだのだろうか？

カイが裏の人間だと秘匿された状態である故に、カイを知らない警備の者が発見すれば普通に病院に居る筈。いや、それどころか主戦場となった場所で気を失っていた為、その正体を探るべく学園長の所に連れて行くかもしれない。

だとすればカイを此処に運んだのはカイの正体を知る人間。ここからエヴァンジェリンは除外。子供先生と戦っていた筈だから。それにエヴァンジェリンがカイを助けるとは思えない。特に理由は無いが。

後は真名か刹那か楓か、はたまた学園長になるのか。

もう嫌な予感しかありません、と言った表情をしながら、カイはある異変に気付く。

どことなく食い物の匂いがしてくる事に。

匂いを嗅いでみれば何となく粥の匂いがする。

（この部屋に誰か居る？　気配なんて感じなかったな……。気配を感じれなくなってるまで弱ってるのか？）

誰かがこの部屋に居る事に少し警戒しながら、カイは自分の状態に殴りたくなる。

普段なら誰かの気配を感じる事ぐらい出来る筈なのに、今は気配

を感じる事さえ出来なくなっている。もしこの部屋に居る誰かが敵だったら、命は無いだろう。

そんな腑抜けている自分に、カイはぶん殴ってやりたいと思っている。

そんな時、部屋の扉がガチャリと開かれ、カイは警戒する。いつ戦闘になっても良いように、態勢だけは整えておく。

そして入ってきたのは……、

「何だ、起きたのか……、って何でそんなに警戒している？」

「……龍宮かよ」

部屋に入ってきたのは長身褐色女こと、龍宮真名だった。その手には粥が乗せられているトレイを持って。

取り敢えず部屋に居るのが真名だと判り、カイはホッと安堵する。ある意味では天敵だが今は気にしない。

と言うことは、だ。カイを世界樹広場からこの部屋に運んだのも、服を脱がせて包帯を巻いたのも真名という事になるのではないだろうか？

カイは嫌な予感最高潮に達しながらも、恐る恐る真名に訊ねる。

「えーっと龍宮真名さん？　俺を世界樹広場からこの部屋を運んだのはあなた様ですか？」

どこか下手に訊いてくるカイに真名は粥が乗ったトレイをテーブルに置きながら答える。

「ああ。私も今日は学園の警備をしていて外に出ていたし、世界樹広場でお前が侵入者と戦っていた事も学園長から聞いている。そして戦いが終わったように感じて行ったらお前が倒れていて、お前をこの部屋まで運んだんだ」

どうやら真名も今日の学園警備に出ていたらしく、カイとマリアの戦いを最低限は知っていたみたいだ。そして戦いが終わったと判断した真名は独断で世界樹広場に行き、倒れているカイをここまで運んだという。

まあ真名がカイをここに運んでくれたおかげで、他の魔法使いにカイの正体を知られずに済んだというわけで感謝はしている。

そして問題は次の質問に。

「えーっと、それじゃ俺の身体に包帯を巻いたのは……？」

さらに下手で訊いてくるカイに、真名はニヤリと口角を上げて、

「やっぱりお前はひょろっとした身体だな」

カイにとっての爆弾が投下されました。

応急処置してくれたのは素直に感謝したいが、何故こんな辱めを受けなければならないのだろうか？

しかもこんなひょろっとした身体を天敵とも言える存在の真名に

見られるのは我慢ならない。

頭にハンマーで殴られたような衝撃を受け、カイは顔を真っ赤にして段々と縮こまっていく。

いっそのこと死のうかなー、と口にしてはいけない事を呟いている。

そんな事を気にしているカイを放っておいて、真名は粥を食べろと勧める。

「ほら、いつまでも恥をかいてないで、さっさと食え」

「誰が恥をかかせたんだよ!?」

「ギャーギャー喚くな。まだ男子達も寝ているし迷惑になるだろ。それに私がお前の部屋にいる今の光景を見られると、変な噂が立つぞ?」

「あ、それもそうか……、ってよく考えればお前がこの部屋に居るの、めちゃくちゃおかしいじゃねえか!?」

「だから煩いと何度言えば分かってくれるんだ、この馬鹿は」

「あーもう、分かったよ。静かにすれば良いんだろ、静かにすれば」

ぶつぶつと呟きながらカイはベッドから起きて、のろのろとテーブルまで移動する。真名もカイと対面になるように座る。

カイの目の前には見た目美味そうな卵粥。これを冷酷な暗殺者が

作ったとは思えない。いや、思いたくないだけかもしれない。

仕事に厳しい女が実はとっても家庭的なんです、という要素を真名には求めていないのだ。

「……これ、ほんとに龍宮が作ったの？」

「そんなに私が作ったとは思えないか？　それにお粥くらい誰でも作れるだろ」

「確かにそうだけど何か俺病人っぽいし……、って卵粥ってお前、勝手に冷蔵庫開けたのか！？」

「ああ、卵を使う為にな。しかし一人暮らしだからって、ちゃんと食べないと駄目なんじゃないか？　冷蔵庫の中、殆ど缶コーヒーばっかりだったぞ」

「今度はお説教ですか！？　別に良いだろ。外食施設が充実してるんだから。それに龍宮だって俺の食生活とそう変わらないんじゃないのか？」

「さあな。何故教えなければならない？」

「……、この女はあ……」

やはりカイにとって真名は天敵である事を再確認する。

ある意味仲が良いと言えばそうなのだろうが、カイからしたら悪友にしか思えない。これが恋愛に至るかと言えば……、至らないのだろう。

会えば口喧嘩するような間柄から、甘い甘い恋愛イベントが発生するように仕組まれていない。

恋愛に発展するよりはこうやって口喧嘩している方がカイと真名らしい。

真名はどう思っているか分からないが、少なくともカイはそう思っているだろう。

ともかくカイは真名が作った卵粥を食べてみる。むぐむぐと食べてごっくんと飲み込む。

「……悔しいけど美味しいです」

真名が作った卵粥が美味しい事に何故か悔しがっているカイに、真名は不満を抱きつつも美味いとカイが言った事は素直に受け取る。表情も可愛らしく微笑んでいる。

その滅多に見れない真名の微笑みにカイは面を食らい、思わず目を逸らす。

何か女の子っぽくないか？　とカイは心の中で自問自答を繰り返す。いや、真名も女性なので微笑みを浮かべる事も有るだろう。そういう考えに何故かカイは持っていけない。

「どうかしたのか？」

「ふえ？　いや、何でもない」

カイがぶつぶつと何かを言っている事に気付いた真名が疑問符を浮かべているが、カイは何でもないと答えて卵粥を食べる。

何となく柔らかい雰囲気がカイの部屋に流れている中、真名が仕事をしている時のような冷たい目をしながらカイに問う。

「カイ、昨日の侵入者はいったい誰なんだ？」

「……」

真名の質問に卵粥を食べているカイの手が止まる。

真名は更に続ける。

「何故お前は倒れていたんだ？　『未来を視る』事が出来るお前が何故負けたんだ？」

真名の疑問は尤もで、カイが倒れていたという事は負けたという事。未来の紋章が使えるカイなら勝てる事は無くても、負ける事は無いものと真名は思っていた。

確かにカイの力を知る者からしたら、数秒先の未来が分かっているんだから負ける事は無いと思うのも無理はない。

その真名の問いにカイは一息吐いてから答える。

「簡潔に答えるよ。女魔法使いの名前はマリア・フォースト。狙いは俺こと篠宮カイ。負けた理由は女魔法使いのアーティファクトと俺が弱いから。以上」

「……色々と突っ込みたい事が満載なんだが？」

「だいたい分かるだろ。マリアは俺が宿す未来の紋章を狙っている。だから堂々と侵入して此処の魔法使いを殺した。俺をおびき寄せる為にな。そして負けた理由は未来を視れても躱せない攻撃をされたから。そんでもってマリア・フォーストを殺しきる事が出来なかったから俺は負けた。これで良い？」

「何となく話は掴めたけど、その女のアーティファクトって言うのは？」

「名称は太極訃音。全ての魔法を無詠唱で発動する事の出来るアーティファクト」

カイがマリアのアーティファクトの説明をした時、真名が息を呑む音が聞こえた気がした。

「……それって上級魔法もか？」

「全てって言ったろ？　恐ろしいことにな。例え未来を視れても無詠唱で上級魔法を発動されれば、今の俺に躱せる術は無い。本当に死ぬかと思ったよ」

未来が視えても無詠唱上級魔法が発動されればどうしようもなく、連続で発動されたら完全に死亡してしまう。今思えばマリアが連続で発動しなくて良かったと思う。連続魔法を発動したらカイは完全に死んでいただろうから。

カイから昨日の侵入者の話を聞いた真名は、目を細めどこか怒っているように見える。

いや、怒っている。雰囲気がそう言っている。カイには何故真名が怒っているのか分からないが、妙に居たたまれない気持ちになる。

すると真名がゆっくりと口を開く。

「……お前とその女との間に浅はからぬ因縁がある事は分かった。危険な奴と分かっていながら何故一人で戦うような真似をした？お前の裏の顔を知っている私なら共に戦う事が出来た筈だ！　死ぬかと思っているなら尚更！」

真名は何故こんな声を荒げているのか自分でも分からない。自分の心に込み上げてきた物を目の前に居る女男に吐き出したかった。

この感情の正体なんて知りたくないし、知りたいとも思わない。

だがキョトンと首を傾げて此方を見るカイに言わなければならない。

「お前は大事な事は隠して一人で戦っているな？　今の力じゃ強敵に勝てないくせに。それでもお前は一人で戦おうとして。何故誰にも助けてもらおうとしない？　そんなにここの人間が……私達が信用出来ないか？」

「……、何を熱くなっているんだ？　らしくない」

「誤魔化さずに答えろ」

妙に真剣になっている真名にカイはどうしたのかと思うが、真剣な眼で貫いてくる真名に変に茶化す事は出来ない。

カイはバリボリと髪を掻いて、真名の眼を見つめ返して答える。

「信用は出来ると思うよ。けど今回のは俺個人の戦いでね。他人を巻き込みたくない」

「既に巻き込んでるだろ」

「……そうだね。確かにそうだ。死人も出てるしね」

「だったら――」

「だったら俺と一緒に地獄の果てまで着いて来てくれるか？」

真名の言葉を遮り、カイは微笑みながら訊ねた。

ただ悪意も善意もなく、ただ単に微笑みながらカイが訊ねた言葉に、真名の心に何かが深く突き刺さった。カイの一言……、一言に真名の気持ちが揺らいでしまう。

それはカイの一言に隠された意味を理解してしまったからかもしれない。

こっちに来るな……と。

ただ真名はカイが死のうとしているようにも見えた。マリアに完膚無きまでに負かされて死にかけているくせに、また一人で戦おうとしている。

そんなカイを助けたいと思えた。それはかつて『立派な魔法使い』の従者として活動していた時の心が残っているのか、はたまた何か

の感情が有るのかは分からない。

いつもは口喧嘩をし合うカイでも、死なせるのは駄目だと思えた。だからその女と戦うような事になれば手助けぐらいはしようと思っていた。

しかしカイは一言で真名の気持ちを揺るがして鈍らせる。

顔を強ばらせ何も言えなくなった真名に、カイはフッと微笑み、

「ご馳走様でした。さっ、龍宮も早く帰った方が良いんじゃない？こんな所に居ると変な噂が立って困るぞ？」

いつの間にかカイは卵粥を完食しており、早々に真名に帰るように促す。

カイの言葉に真名は、あ、あぁ……、と呟いて立ち上がり、窓の方へと足を進める。流石に玄関から出る訳にはいかず、窓から帰るしかない。真名なら六階から飛び降りても問題は無いだろう。

真名が窓から立ち去ろうとした時、カイが呼び止める。

「龍宮」

「？　何だ？」

「ちゃんと礼を言ってなかったな。だから……、ありがとう」

そう言えば礼を言ってなかったな、と思い出したカイは、恥ずかしがりながらも改めて真名に礼を述べた。

そんなカイに真名は思わずフッと微笑み、

「礼なら餡蜜を奢ってくれ」

「どんだけ餡蜜好きなんだよお前は……」

真名の餡蜜好きにはカイも少し苦い顔を浮かべる。

「じゃあな」

「ああ」

そして真名は窓から颯爽と去っていった。

カイは深く溜め息を吐くと、今度は学園長に報告するべく、着替えを始める。

携帯電話で報告しても良いのだが、誰かに聴かれたりでもしたら困るので、学園長と直で報告する事が良い。

なのでカイは制服に着替え、額に巻かれている包帯を取る。流石に頭に包帯が巻かれているのは目立つので、此処だけは取る。

そして準備を整えたカイは学園長室へ部屋を出て行った。

密かに動く陰謀（後書き）

……真名の性格が変わってるなと思います。すいません。

粗末ですが次回も見て頂けるとありがたいです。

修学旅行先は京都に（前書き）

今回は短めです。

修学旅行先は京都に

学園長室に辿り着いたカイは昨日の件を事細かく報告していく。

昨日の侵入者、マリア・フォーストの事、マリアが使ったアーティファクトの事。そしてマリアに完膚無きまでに負かされた事。

それらの報告をカイから受け、学園長はうーむと声を漏らした。

「少なくとも昨日の女魔法使いは学園の敵という事はないのじゃな？」

「さあ？　少なくとも俺の敵である事は変わりありませんが」

マリア・フォーストの標的はあくまで篠宮カイだけ。本来なら麻帆良学園と敵対するつもりは無い。

例え敵対したとしてもマリアの圧勝だろう。マリアには広大な麻帆良学園を消し飛ばす破壊力を有しているのだから。

麻帆良学園がマリアに宣戦布告したとしても、マリアは眼中にない。マリア本人は格下相手なんてどうでもいいと思っているから。

ただマリアの主であるレアンの命令があれば何でも遂行する。レアンが麻帆良を破壊しろと命じれば、容赦なく破壊しに来るだろう。

その危険な性格をカイは覚えている為、レアンに祈るしかないだろう。

あの女に変な命令を下さないように……と。

「ふむ……、しかしワシの部下が四人も命を落としてしまった。お主を誘き出す為と言っても殺す必要は無いじゃろうに」

「あの女は俺と同じように人を殺す事を躊躇いません。相手が何も関係ない女子供を殺す事すら……」

「……とんでもない女じゃのぅ。しかし何故お主を殺さなかったんじゃ？　殺さなくても連れ去る事ぐらい簡単な筈じゃろうに」

「それは俺も疑問に思っている事です。あの女が俺を殺さず、未来の紋章を奪う事もなく、そのまま去っていったとは到底思えないんです。何か起こったのか……」

カイにはマリアにやられて気を失ってから、自分の部屋で目覚めるまでの記憶は無い。それ故にカイの額に宿る未来の紋章の意思が、カイの体を動かしてマリアを退けた……という事を知らないのだ。

だからいくら考えてもカイに解る筈もなく、この問題はそのまま迷宮入りになってしまうだろう。

「それに女魔法使いが持っていたアーティファクト……太極訃音の事じゃが、あれは魔法界でも授与される事を禁止する物じゃ。しかも強力な封印によって外に出る事も無い筈……。それは本物なのかのぅ？」

マリアが持つ太極訃音は凶悪な力を持つ為に、魔法世界では禁忌として封印されている品物だ。

仮契約の副賞、アーティファクトとして授与される事は絶対ないと、学園長は思っている。

しかしカイは記憶している。太極訃音が具現される前はカードであり、マリアが『アデアット』と口にしたのを。

あれは紛れもなく仮契約および本契約によるアーティファクトの物だ。

「俺はアーティファクトには詳しくないんで分かりませんが、本物だと思いますよ。あの馬鹿げた力が偽物と思えないですし」

「ふむ、一応本国で調べてみるとするかの」

ともかく、と学園長は口を開く。

「お主が侵入者を撃退したのは間違いないじゃろ。報酬を受け取ってくれ」

学園長は引き出しから封筒を取り出し、カイに渡す。カイは中身を確認すると一万円札が数十枚入っている。

これはカイとしては首を傾げて疑問符を浮かべる。

「いつもより多くないですか？」

「今回は此方も被害を出したからのぅ。危険因子を排除してくれた報酬としては、いい感じな筈じゃ」

いつもなら一〇万から二〇万ぐらいの報酬だったのだが、今回は

五〇万ぐらいは入っている。

金はいくら有っても困りはしないのだから素直に受け取れば良いのだが、今回のカイは報酬分の仕事を出来てはいない。

マリアに負かされ意識を失っていたというのに、いつもより多く報酬を貰うのは何か納得出来ない。カイのチンケなプライドが邪魔しているのだろう。

どうすればいいんだ？　と悩んでいる表情が出ていたらしく、

「気にせんで良いぞ。お主にはいつも頑張ってもらっているからな。ボーナスとして考えればよろしい」

学園長はボーナスとして考えれば良いと言った。これにはカイも受け取るしかないと判断し、

「分かりました。この報酬、受け取らせていただきます」

カイは謹んで報酬を受け取る事にした。

それからカイは学園長に頼み事を告げる。

「学園長、一つ頼みを聞いてもらっても良いですか？」

「何じゃ？」

「転移魔法符を数枚取り寄せて欲しいのですが」

「転移魔法符を？」

転移魔法符と言うのは転移魔法を覚えていなくとも空間移動が出来る札。一枚八〇万と高価な上に使い捨てだ。

それでも今のカイには十分戦力になれる要素の一つだ。

「ええ、今の俺には空間移動する術を持ち合わせていないので、それがあれば……。それに俺の本性を隠している以上、魔法関連の物を買う訳にはいきませんので」

カイが麻帆良で裏の顔を隠しながら住んでいる以上、魔法関連の物を直接購入は出来ない。必要以上な人間に正体をバラしたくない。

その事は学園長も分かっているので、カイの頼みを了承する。

「分かった、直ぐにでも取り寄せよう」

「ええ、お願いします」

転移魔法符の発注を学園長に任せたカイは用が済んだので、早々に立ち去ろうと思う。

カイはこれで失礼します、と頭を下げて学園長室から出て行った。

翌日になりカイは普通に学校へと行っていた。

現在は一時限目。本来は数学の授業ではあるのだが、今日は修学旅行の行き先を決める為に、ホームルームの時間となっている。

この学校は人数が多いので、複数の土地から生徒達の選択式となっている。定番の京都や沖縄、それから海を渡ってハワイまで行ける。

人気なのはハワイなのだが学校の予算のことも有るので、四クラスしか行けない。従ってハワイに行きたければ早く申請しなければならない。

だが時既に遅く、もうハワイ行きのクラスは決まっており、カイのクラスがハワイへ行く事は出来なくなっている。

カイはハワイへ行きたかったのだが、もうハワイへ行けない事によって気分が滅入っている。滅入っているので外の景色を眺めている。

（ああ……、金髪のお姉さん見たかったな……）

カイが少々邪な事を考えているが気にしてはいけない。単に外人金髪美女が好きなだけである。

因みに好きなタイプは包容力のある家庭的な女性。どうでもいい事だが。

そんな中、カイは一昨日の戦闘を振り返る。

マリアとの戦闘は誰が見ても完敗だった。一発だけマリアの顔面に拳を入れられたのも、正直言ってマリアの油断なのだろう。

いくら魔法発動時には風が消えるからと言って、防ごうと思えば防げた筈だ。それなのにカイに拳を入れられるのは、マリアの油断に他ならない。

それからカイが発動した未来の紋章魔法を打ち砕いた事。本来は真の紋章魔法には真の紋章魔法で対抗するしかない筈なのに、マリアは普通の魔法で打ち砕いた。

あの凶悪なアーティファクトを有しているからと言って、真の紋章を持たないマリアが打ち砕く事なんて出来ない筈だった。マリアは『カイの魔力が無いから』と言ったが、実はカイが完全に未来の紋章を使いこなせていないだけかもしれない。

いや、『神と同等の存在』である真の紋章を、一介の人間が使いこなすのは無理な事かもしれない。カイ以外の真の紋章を持つ者だって完全には使いこなせていないだろう。

ある者は真の紋章の暴走で戦場を一瞬にして焼け野原にし、ある者は一瞬にして国を滅ぼした。別にその者達が劣っていたとかそんな話ではない。真の紋章に選ばれた宿主であるにも関わらず、御しきれないのだ。そう言った歴史がある以上、人間が『真の紋章を使いこなす』のは無理な事かもしれない。

カイもその一人なのだろう。だからマリアに破られてしまったのだ。

カイはそっと額に宿る紋章に触れる。この紋章は真の紋章の中でも異質だ。所有者に未来を『視せる』だけではなく、『定められた未来』を変えられる力も持っているからだ。

最低最悪な未来が待っていようとも未来の紋章は最高最良の未来に変える事が出来る。

そう、未来の紋章がそう言った意思を持っているなら。

そう言った力を持ってるくせに宿主であるカイを最高最良の未来には導いてくれない。逆に最低最悪な未来へ動かしているようにも感じる。

いつだってカイは誰かに追いかけられ、誰かに殺されかけている。どこへ逃げても誰かが追いかけ、カイを殺そうとする奴を殺しても別の誰かに殺されかける。そんな人生を歩んできて、これからも歩み続けるのだろう。

何処にも暖かい幸せな未来はない。逆に冷たい不幸な未来しかない。それでも未来の紋章はカイを生かし続ける。まるでカイを玩具にしているかのように。

人は未来に希望を持っている者が多い。それは未来が分からないからだ。未来が分からなければ希望に縋れるから。

もちろんカイもそうだった。未来の紋章は戦闘以外の未来を視せ

てくれない為、希望に縋った事もある。だがどんなに幸せな未来を思ったところで、結局は幸せになる事は無かった。

だから絶望へと身を堕とした。幸せになる未来を捨てた。

（そういえば紋章に振り回されながらも、最後には幸せを得た奴らが居たっけ？）

ふと、カイは頭に浮かべる。真の紋章を巡る戦いに振り回されながらも、多くの仲間に支えられ、強い信念を持って戦争を戦い抜いた少年達のことを。

彼らは戦いの中で大切な存在を失し、それでも戦い抜き、最後には幸せを得ていた。

ある少年は家族を失ったが、それでも最愛の妹を救い、その妹と共に国を護っている。

ある少年は父を失い親友を失い、そして小さくから仕えてくれた青年を失って、でも最後はその青年を取り戻し、戦争に勝った後はその青年と共に放浪の旅へと出て行った。

ある少年は戦乱により親友と望まぬが敵対する関係になり少年は義姉を失ったが、しかし少年が選んだ結末は敵対していた親友を許し、そして死んだと思われていた義姉が生きていて、その三人で放浪の旅に出ている。決して楽ではないが、それでもその三人は幸せだろう。共に歩む事が出来るのだから。

どれもこれも本来はこんな結末になる筈が無かった。定められた運命はそうではなかった。だけども彼らはその運命を変えた。

それはカイにも驚く事だった。紋章なんか関係ない。人の想いで運命を変えてしまったのだから。

そんな彼らにカイは憧れていた頃があった。辛い事があっても前に進み、苦しい事があっても立ち上がった。その姿がカイやカイ以外の人達を惹き付けた。

そんな彼らを思い出したカイはフッと微笑む。

（懐かしいね……、皆いったいどうしているんだろうか？　マクドールの坊ちゃん以外はいい歳になっていると思うけど……）

カイが彼らと一緒に戦ってから数十年は経っている。何処かで生きているかもしれないし、もしかしたら死んでいるのかもしれない。

死んでいるとしても彼らが幸せだったならそれで良いだろう。幸せであれば……。

「篠宮君」

カイもその頃は彼らみたいになりたくて、希望だけでも持っていた。やっぱりその希望は色褪せていったが……。

「篠宮君？」

やはり彼らにはなれないんだなと自嘲気味に思う。彼らは強い信念を持っていた。しかし今のカイにはそんな物は無い。

どうあってもカイが彼らみたいになる事は無いのだ。

「篠宮カイ君！！」

「あだっ！？」

突如、怒声と共に頭に小さな痛みが襲ってきた。

何なんだよ、ったく……、と内心呟きながらも、カイは視線を外から内に向ける。小さな痛みの原因は白いチョーク。白いチョークが飛ばされカイの頭に当たったのだ。

そう言えば前にもこんな事あったな、とカイは思いながらも前を向く。その先には明らかに怒っているお坊っちゃんの姿が在った。

「相変わらずいい度胸ですね。大事な修学旅行の行き先を決めてる最中に外の光景を眺めているんですから」

「いや、お坊っちゃん、別に俺の意見が加わったとこで行き先が決定する訳じゃないから、別に――」

「そうですか、篠宮君は修学旅行に行きたくないんですね。分かりました、それなら――」

「沖縄！　沖縄が良いです！」

お坊っちゃんの言葉を遮り、カイは即座に自分の意見を言う。

カイとしてはハワイに行けないのなら暖かい沖縄に行って、のんびりしたいと考えた。

だがカイの意見が通る事はない。何故なら……。

「残念ですが篠宮君、僕達3－Aは京都・奈良行きに決定しているのですよ」

「だったら何故聞いてきた!?」

さらっと言ったお坊っちゃんの言葉に、カイは机をバンッと叩き叫ぶ。

黒板には京都・奈良と沖縄と北海道が書いてあるが、京都・奈良に赤いチョークではなまるが囲われていた。

カイが在籍しているクラスの人数は三〇人。その半数の一五人、黒板には感じの『正』が三つ書かれていて、京都・奈良行きを支持していた。

沖縄や北海道にも数票入っているが、京都・奈良には遠く及ばない。

既にカイに聞く前に3年A組は京都・奈良行きに決定していたのであった。

カイが怒鳴りながら聞いてきた為、お坊っちゃんは少し溜め息を吐いて答える。

「篠宮君もこのクラスの一員、意見は言ってもらいたかっただけです」

「お坊っちゃん……」

「まあ既に行き先が決まっているのに、馬鹿みたいに意見を言うのを見たかっただけかもしれませんが」

「そっちが本音だろ、おい」

お坊っちゃんにからかわれたかと思うと腹が立って仕方ない。やり場のない怒りを堪えつつ、カイは黙って椅子に座る。

しかし京都・奈良が修学旅行先となると、何か嫌な予感しかない。京都には関西呪術協会の総本山があるからだ。

関西呪術協会は西洋魔術師を中心とする関東魔法協会と対になっている組織で、陰陽師など古来から日本に存在する者が中心。関東魔法協会とは睨み合いを続けている。

それでもカイには関係ないが、一応関東魔法協会に属しているので十分に注意したい。

（そう言えば関西呪術協会の長って二〇年前の……）

カイはそう考えた所で中断する。どうせ会う気は無いのだ。考えても仕方ない事なのだから……。

修学旅行先は京都に（後書き）

これでカイは京都行きになってしまいました。

次は修学旅行の話になりますが、見せ場なんて総本山陥落あたりだけですよね。そもそもちゃんと見せ場に出来るか不安ですが……。

そこまでは更にぐだぐだになると思いますが、見てやっても良いという人は見てやってください。

いざ、京都へ

四月二十二日。

修学旅行一日目。

カイが在籍する麻帆良学園本校男子中等部三年Ａ組は今日から京都・奈良へ行く事となっている。皆、それぞれ楽しい事を考え、気分がハイになっている頃であろう。

意中の人に告白して、あんな事やこんな事を……など、思春期の学生によくある考えを持っている者もいる。

色々とイベントが起きそうな修学旅行を向かえた訳だが、乗り気ではない人物が居る。

「ああ……、鬱だ」

その人物は制服姿の篠宮カイ。

まるでこの世の終わりを見たかのような絶望な顔をしているが、それはカイの目の前に散乱としている物が原因だ。

それは服やらタオルやら修学旅行用のしおりだった。そう、全くカイは準備をしていなかった。

どうせすぐに準備出来ると高を括っていたカイは馬鹿みたいに夜通しゲームをやっていた。そのゲームに夢中になりすぎて、気付けば朝の六時三〇分。集合地は大宮駅で各自に集合しなければならな

い。

集合時間は八時。残り時間は一時間三〇分。今から早く支度しないと遅刻しかねない。

しかしこんな荷物の量を鞄に詰め込まないといけないのが、面倒で面倒で仕方ない。適当に突っ込めば良いかとカイは髪を掻いて、荷造りに掛かる。

「誰か手伝ってくれないかな……」

自業自得のくせに誰かに手伝ってもらいたいと考えているカイが居る。だがそんなカイを助けてくれる優しい人は居なく、孤独に荷造りをする。

適当に服やらタオルやらしおりを詰め込んで、カイは手を止める。

（仕事着を持っていく必要は……無いよな？　いや、でも……うーん……）

もし京都で裏の仕事を依頼されたら請けるしかない。例え修学旅行中であろうとしても。そうなった場合、仕事着を着ていこうと思ったが、別に仕事着に着替えなくても戦える事は戦えるし、私服だけで良いかと自己完結で終わった。

この修学旅行中に裏の仕事を依頼された場合を考え、戦う為の道具を持っていかないといけない。

銀糸が内蔵された黒い手袋に攻撃・防御両用の札、投擲用のナイフ数十本に、それから学園長に頼んで取り寄せてもらった転移魔法

符。これらを利用すれば高レベルの実力者以外は何とか倒せるだろう。

ただマリアみたいな飛び抜けた実力者では勝ち目は無いかもしれない。この装備では少々……かなり不安だ。

そこでカイは通帳やら保険証等が入っていそうな小さな金庫から、手のひらに収まる程の小さいビンを取り出す。そのビンの中には酷く濁った紅い液体。人に流れている赤い血液よりも濁った液体が入っている。

その紅い液体をまじまじと見つめ、握り締める。

この紅い液体はアンチスキルスロットを一時的に中和してくれる薬品。アンチスキルスロットを受けてからの二年間、何も対策はしてこなかった訳ではない。カイは数十年生きてきた知識を搾って、この薬を作り出した。

飲めばカイの魔力は元通りになるが、効力は一〇分程度。一〇分を過ぎれば、アンチスキルスロットの呪いが再動し魔力は失われる。

そしてこの薬には副作用がある。飲んでみて分かった事はその副作用は様々で、一週間全身に激痛が走ったり、または三日間嘔吐を繰り返した事があった。

一度飲めば別の副作用がカイの身体を蝕んでいく。この副作用を何とかして失したいのだが、今は研究中である。

ともかくこの紅い液体の薬を飲めば魔力は一時的だが元に戻る事が出来る。先日マリアと戦った時に使用すれば良かったのだが、こ

れは切り札として使用しておきたかった。それにあの時は侵入者がマリアだとは判断出来なかった為、この薬を持ち出す事はしなかった。

この薬はあくまで切り札。他にもストックはあるが、出来るだけ使いたくない。

取り敢えず緊急時の為にカイは紅い液体の薬を鞄に入れる。出来れば使いたくない事を祈って……。

「あとは何か忘れた物があったか？」

取り敢えず適当に散乱していた荷物を鞄に詰め込み終わり、後は忘れ物が無いか確認するだけだ。まあ忘れたとしても困った事は起きないだろう。

「おーい、カイ、準備出来てるか？」

カイが確認作業をしていると浩輝が部屋に入ってくる。その他にもお坊っちゃんも入ってくる。

カイは訝しいと言った顔をして訊ねる。

「何、お二人さん。わざわざ此処に来て」

「何、じゃありませんよ。篠宮君はクラス一の遅刻者ではありませんか。この修学旅行初日に遅刻されたら困るので、委員長である僕自ら来たんですよ」

どうやらお坊っちゃんはクラス一遅刻しているカイが修学旅行初

日に遅刻しないか心配で、わざわざカイの部屋に来たらしい。

別に遅刻常習者じゃないんだけど、とカイは弁明するがお坊っちゃんの耳には入らない。カイは遅刻する時はあるが、それでも月に二回ぐらいだ。毎日遅刻する訳でもない。

そもそもカイのクラスの人間が他のクラスより真面目な奴が集まっているせいで、カイが不良扱いされているのだ。カイとしてはいい迷惑だ。

「浩輝は何で居るんだ？」

カイはお坊っちゃんから浩輝に視線を移す。浩輝は苦笑いを浮かべて答える。

「俺は邪魔者か？　まあ俺もお坊っちゃんと一緒だけどな」

浩輝もお坊っちゃんと同じくカイが寝坊して遅刻しないか、この部屋に来たらしい。

どこまで信用されてないんだ、俺……、とカイは内心呟きながら目を細める。まあ信用されなくて構わないんだけどね、と何処か拗ねた感じを表して立ち上がり、鞄を持つ。

「それじゃ行こうか」

「拗ねんなよ」

「拗ねてない」

「拗ねないでください」

「だから拗ねてねえって言ってるだろ！」

「分かった分かった、分かったから早く行こうぜ」

うきぃー、とカイはその場で地団駄を踏んで悔しさを現しているが、二人は無視してそれぞれ荷物を持って歩いて出て行った。

何か朝から不快な気分になってしまったが、それでも行くしかないとカイは二人を追い掛けた。

駅に着けば既にクラスの全員が集まっていた。いや、他の京都・奈良行きのクラスも集まっており、一番最後に来たのがカイ達だった。

何とか集合時刻の八時までは間に合ったので良しとしよう。

ふと、カイは同級生達の顔を見る。皆いつもよりも表情が輝いているようにも見える。はしゃいでいるようにも見える。

どこまで楽しみにしてやがんだコイツら……、とカイは思う。学生にとって修学旅行は一大イベントなので無理も無いだろう。

しかし人が多いなと思う。今回の京都・奈良行きは五つのクラスが行く事となっており、総勢一五〇人は超えている。これだけ集まると騒々しいと思えるが、学生が集まれば騒々しくても仕方ない。

「何が楽しくて京都に行かなきゃならないんだ?」

「カイは京都嫌なのか?」

突然口を開いたカイに右隣に居る浩輝が訊ねてくる。

「ああ、嫌だな。何というかお寺とか見るのが退屈で……」

つまりカイは歴史に興味が無いのだ。修学旅行で京都に行く理由と言うのは大体が有名な寺や神社を見る事だ。もちろんそれだけではないが、カイ個人の意見としてはつまらないのだ。

神社仏閣などを見ても何とも思わない。『歴史を感じるな』とか『何か神通力を感じる』とか、カイにとってはどうでもいい。それだったら沖縄の海でのんびりと寝ていた方がマシだ。

そう言うカイに浩輝は苦笑せざるを得ない。

カイの話を聞いていたお坊っちゃんも話に加わる。

「別にお寺や神社だけを回るわけではないので、そんなに落ち込む必要も無いのですが」

「いや、落ち込んではいないけどさ。美味しい食い物食べまくるから」

「……篠宮君、修学旅行は食べ歩きで行くわけではないんですがね」

カイの脳内では京都の美味しい物を食べる事しか無いことを知ったお坊っちゃんは深い溜め息を吐く。

その時、野太い男性の声が聞こえてくる。

「京都行きの３－Ａ、３－Ｂ、３－Ｅ、３－Ｋ、３－Ｒの男共、各クラスの班ごとに点呼を取ってからホームへ向かえ」

カイ達が話し込んでいると担任の神多羅木が珍しく大きな声で生徒達を促している。

もう時間になったので先生方も少し慌ただしくなる。

「僕達も行きましょう」

お坊っちゃんがカイと浩輝を促して、残りの班のメンバーの所へ連れて行く。

カイが属する班のメンバーはカイ、浩輝、お坊っちゃんと後二人の五人。基本的に一つの班に五人で六つの班で構成されている。

そしてカイの班の残りのメンバーがこの二人。

「お？　やっと来たんだ。来ないかと思ったぞ？」

クラス一の情報通で報道部、ネズミこと木村耕太。

「……」

クラス一の無口、滅多に話すどころか声を出す事が無い茶髪少年、桐原悠里。

この二人が加わった計五人がカイの班のメンバーである。

（果てしなく不安であります。このメンバーでやっていけるのか……）

自分が属する班のメンバーを見てカイは不安に思っていた。浩輝とお坊っちゃんは兎も角、性分によるものか自由奔放としている耕太と、無口で喜怒哀楽を見せない悠里が一緒だと心配で仕方ない。

それでも決まったものは覆らないので、諦めてこの者達と行動を共にするしかない。

「これで全員揃ったので行きましょう」

そう言ってお坊っちゃんは駅のホームへ歩き出す。カイ達もそれに続く。

此処からはまず新幹線に乗って東京駅で乗り換えして、また新幹線に乗って京都へ向かう事となる。

特に何事もなく東京駅に辿り着き、現在は京都行きの新幹線の中。

その中では各々自由に過ごしていた。ある者は京都に着くまでひたすら眠る者。ある者は車内で買った弁当やらお菓子やら食べる者。ある者は携帯ゲームをする者。ある者は数人でカードゲームをする者、様々である。

昨日から夜通しでゲームをしていたカイは朝ご飯を何も食べていないので、駅弁を全力で食べている。隣に誰が居ようがお構いなしに食べている。

「もうちょっと行儀良い食べ方が出来ないんですか？」

カイの食べっぷりをカイと対面に座っているお坊っちゃんは、そことなく注意してみた。

「腹が減っては寝る事も出来ないって」

カイは食べる事を止めずに答える。

「何ですか、その理屈は？」

「屁理屈」

「……だれがその事を答えてほしいと言いましたか？」

よく分からないカイの理屈にお坊っちゃんは頭にカチンと来たが、ここは何とか堪える。ここで怒ってしまえば今後の予定で、カイがどんな行動に出るか懸念しているからだ。

別にカイには反抗する度胸もないので心配する必要は無いのだが、クラスの委員長であるお坊っちゃんにとってはそうはいかない。

委員長であるが為に今回の修学旅行は何としてでも無事に成功させたいと思っているのだ。だから穏便に、冷静になろうと深呼吸をする。深呼吸をしたお坊っちゃんはだいぶ冷静になる事が出来たようだ。

その頃にはカイも駅弁を完食していて、呑気にお茶を飲んでいる。

「相変わらず篠宮君は食べるのが早いですね。早食いのくせに何故太らないのか分からないですよ」

あっさりと駅弁を完食してみせたカイにお坊っちゃんは疑問に思った。カイが体型に似合わず大食いなのは知っていたが、何故か太る気配を見せない。それどころか痩せ気味の体が余計におかしい。

そう疑問を抱いているお坊っちゃんにカイが答える。

「そんなの体質なんだよ。結構いるだろ？　どんだけ食べても太らない人」

嘘を吐いた。ただ不老の為に身体は成長しない。身体が成長しないのなら太る事も痩せる事も無い筈。

それが答えなのだがお坊っちゃんに不老という事実を教えてはい

ない為、嘘を言う。自らの保身の為に。

「結構と言うのはどれぐらいの人数か気になりますが……、それよりも常々聞きたい事が有るのですが」

「ん？　何？」

「篠宮君は……」

篠宮君は……、の後が続かなかった。何故か聞いてはいけないような気がしたからだ。

この質問をしてしまったら目の前に居るクラスメートとの関係が崩れ去ってしまうと感じたから。だから躊躇ってしまった。

いきなり口を閉じたお坊っちゃんに疑問符を感じながらも、カイは聞くような真似はしなかった。どうせ聞いたところではぐらかされるだけなのだから、無駄な事はしない。

しっかし煩いな、とカイは周りを見渡す。男共が巻き起こす喧騒さには耳を塞いでも入ってくる。

こんな煩いなら音楽プレーヤーでも持ってくれば良かったと後悔する。未来の紋章がこういった『未来』を見せてくれたなら、ちゃんと持ってくる事も出来ただろう。

だが未来の紋章が『未来』を見せてくるのは限って戦闘の時だけ。戦闘の時や戦いが起きる直前の時だけだ。新幹線の車内で喧騒が起こるという『未来』は見せてくれない。競馬や競艇でどの馬が、誰が勝つかという『未来』も見せてくれない。ただ戦いの時だけ『未来』は見せてくれる。

『真なる未来の紋章』と他人からしたらなかなか便利そうな名前をしているくせに、実は戦いの時だけしか本領発揮してくれない。

だからカイはこの紋章は戦いを好んでいるのではないかと考えている。そして未来の紋章が願う『未来』はきっとろくでもないのだろうと。

ふと、お腹がぎゅるると動き出す。

（やばい……これは急いで行かないと）

突然便意を催したカイは座席から立ち上がり、一直線にトイレへと向かった。

いきなり立ち上がり何処かへっと行ったカイに、周りの者は一同に思う。

早食いし過ぎだ、バーカ。

何とか漏らさずトイレで出し切ったカイは、安堵しきった表情でトイレから出て来る。女性より女らしい女顔して中身はおっさんである。

自分の座席へと戻ろうとカイは一歩踏み出そうとするが、車両から同じ班の桐原悠里が此方に歩いてくる。変わらず無口で喜怒哀楽の表情を表さない能面、目も輝きを映していない。顔は良いのだが、

どうも性格が駄目みたいだ。

そんな悠里に道を開けてカイは通り過ぎようとする。

その時、悠里がボソリと呟く。

「もうすぐだから……気を付けて……」

顔を動かさず、目もくれず、悠里はカイと通り過ぎる際に本当に小さい声で呟いた。そして悠里はトイレへと入っていった。

カイもまた顔も動かさず、目もくれず、何も返答せずにそのまま通り過ぎた。

「くぁ……、しんど……」

そう漏らすはカイの言葉。

新幹線で約二時間半の時間を経てカイ達は京都にたどり着いていた。

せっかく京都駅に着いたのだから一日目をこの京都駅散策で良いんじゃないかと考えている。色んな施設が入っている京都駅なら一日潰せるのは間違いないだろう。

金閣寺やら清水寺といった有名所を見て行くのも悪くはないのだろうが、それでもカイにとっては駅ビルで過ごした方が充実出来ると思う。

そう独りよがりな事を考えていると、お坊っちゃんによって引っ張られてしまう。修学旅行は団体行動が基本だ。一人勝手な行動は禁じられているのだ。

どうせ四日目には完全自由行動日なのだから、少しは我慢くらいしてみろと浩輝に言われ、カイは渋々ながらも着いて行く。

それから最初は金閣寺に行ったのだが、特に何も思う所は無かった。これがカイにとって損得があるものなら関心が湧くのだが、残念ながら関心が沸かなかった。

そして次に清水寺へ行く事となり、現在に至る。

清水の舞台から京都の街並みを眺めながら呟いたカイに、浩輝も呆れながら口を開く。

「新幹線の中であれだけ熟睡していた奴が、しんどいなんてよく言えるな？」

実はカイは駅弁を食べてトイレに行った後、京都に着くまで熟睡していた。馬鹿みたいに徹夜してゲームをしていたツケが回ってきていた。

一応睡眠は取れたのだから十分だろうと浩輝は思っているのだが、カイとしては一時間半程度の睡眠では疲れは取れない。

「早く旅館に着いて寝てえ……」

（コイツ……修学旅行を楽しむ気ねえな）

欠伸をしながら答えるカイに浩輝はそんな事を思っていた。

そんな時、後ろに居るクラスメート達が騒がしくなる。

その喧騒さにカイと浩輝は目を細くして振り返る。

「……、何だ？」

「どうやら女子達が来たようですね。此処で少し時間を取りすぎたかもしれません」

どうやら男子達は後から来た女子達に興奮しているらしい。別に興奮する必要はねえだろとカイは思いながらも、視線を京都の街並みに戻す。

内心ビクビクしながら、浩輝の親衛隊の子が居ませんように、とお祈りしているのは内緒だ。

「ん？　あの子たちは３－Ａの子達だね。かわいこ揃いで有名な」

後から来た女子達の顔を見ていた耕太が口にした。その途端、ビクンとカイの身体が強張る。

３－Ａの女子ってアイツらじゃねえか……、とカイは深く溜め息を吐く。カイの頭に浮かぶ厄介な女性達。カイが祈ったように浩輝の親衛隊の子は居ないが、それでもカイにとっては同等以上に苦しい相手達だ。

何とか彼女達に気付かれないように気配を断って、彼女達を視界に入れないように、こっそりと逃げるように去ろうとする。とにかく頭に浮かんできた厄介な女達が声を掛けてこないように、祈りながら去ろうとする。

だがそんなカイの祈りは容易く崩壊する。

「あっ、『お姫様』が居る！」

「ホントですー！」

呆気なく小学生並みの身長しかない鳴滝姉妹に見つかってしまい、カイはうげっと苦い顔を浮かべる。

そして鳴滝姉妹はカイに飛びかかり、髪を引っ張るなどもみくちゃにする。

「だぁっ！　てめえら髪を引っ張んな！　いてえぞ、こら！」

髪を引っ張られ痛がるカイを見て更に鳴滝姉妹の悪戯はエスカレートしていく。

助けてくれとカイは目でクラスメート達に助けを求めるが、逆にカイに敵意ある視線で助けようとしない。

クラスメート達の心の中では『なに女子とイチャイチャしてんだよ、ゴルァ！』と怨念が渦巻いている。クラスメート達にとってはカイが鳴滝姉妹とイチャイチャしているようにしか見えないのだろう。

頼みの綱でもある浩輝やお坊っちゃんは知らんぷり。それでも友達ですか!?　と心の中で叫ぶカイだった。

そんな苦痛の時間も唐突に終わる。

「あ、あの風香さん、史伽さん、それぐらいにした方が……」

まだ変声期を向かえていない少年の声がしたかと思うと、風香と史伽が嫌そうにぷくっと頬を膨らます。

「だって『お姫様』の髪サラサラだよ？　女の子みたい」

「やかましい。男で髪サラサラな奴なんて他にもいるっつーの！」

「でも『お姫様』の髪はホントにサラサラなんですよー？」

「とにかく離れろ」

いつまでも髪を引っ張ってくる風香と史伽をカイは強引に引き剥がす。すると風香と史伽は笑いながらカイから離れていった。

くそ、面倒くさいなとカイは思いつつ乱れた髪を手櫛で直していると、赤髪で鼻眼鏡を付けているスーツを着た、何故か肩にオコジョを乗せた少年がカイに頭を下げてくる。

「すいません！　僕の生徒が貴方に乱暴なことを！　僕が代わって謝罪を！！」

ペコペコと深く頭を下げてくる謎の少年にカイは疑問符を抱く。

何なんだこのガキは？　と訝しんだが、少年が言った言葉に『僕の生徒』と言ったので、もしかしたらこの少年が例の子供先生、ネギ・スプリングフィールドなのだろうかと感づく。

今も尚頭を下げているネギにカイも何か感じが悪いので、溜め息を吐いて口を開く。

「別に謝らなくて結構ですよ」

「え……？　で、でも……」

「どうせあの双子は説教したって聞かないですよ。あの性格は一生治らないと思いますから」

「あぅ……」

「篠宮君が毒づいてどうするんですか？」

カイの言葉に子供先生、ネギ・スプリングフィールドが凹んでいると、隣からお坊っちゃんが横入りする。

「いや、本当のことだし――」

「知りませんよ。それより僕らも次の場所へ行きましょう。まさか此処で他のクラスと鉢合わせするとは思ってもいないんですから、この子供先生は放っておいてください」

「……放っておいてって、俺よりお坊っちゃんの方が酷いと思うんだけど？」

「酷くありませんよ。さっさと脚を動かしてください」

カイがごちゃごちゃと言っているがお坊っちゃんは一切無視、カイの背中を押してバスがある方向へ進ませる。カイのクラスメート達もバスの方へ歩いている。

ったく何なんだよ、とカイは背中を押されながら思いつつも、仕方なくバスがある方向へ向かう。

その途中、糸目忍者女や長身褐色女や半デコ剣士がカイを見ていたが、カイはそれを完全に無視。相手にする暇はなく、今は徹底的に無視します。

一方、麻帆良男子中三年A組が立ち去った後、麻帆良女子中三年A組の担任であるネギ・スプリングフィールドはカイの事を考えていた。

そのカイの顔についてだ。

「あの人、何か可愛かったね、カモ君？」

ふと、自分の肩に乗っているオコジョ妖精、アルベール・カモミールに話し掛ける。

そのオコジョは人の言葉を話す事が出来て、中身はエロイおっさんだ。

「ありゃ『男の娘』っていう属性だな。あの容姿で男なんだから凄ぇよな」

「僕も男子の制服を着ていたから男の人だって分かったけど、私服だったら見抜けなかったかも」

「多分あんたじゃ初めて見ただけじゃ性別なんて分からないわよ」

「あ、明日菜さん」

ネギとカモが密かに話していると、ネギの保護者役となっているツインテールの少女、神楽坂明日菜が話に入ってくる。

「アイツは篠宮カイっていう名前でさ。麻帆良に住んでる人間では篠宮君の事を知らない人が居ないって言われる程の有名人なのよ」

「そうなんですか？　何か凄い人なんですか？」

「凄いって言うかアイツ女顔でしょ？　アイツ色んな事をやってきたのよ」

「色んな事？」

「例えば去年の学祭の時だったら大食い大会優勝とか、あとはベストカップルコンテストで篠宮君が女性役になって、『プリンス』って呼ばれてる加藤君と組んで優勝した事があったり。あの双子が篠宮君を『お姫様』って呼んでたでしょ？　そのベストカップルで篠宮君がウエディングドレスを着たのよ。確かに凄く可愛かったんだけど衝撃的だったわよ。篠宮君の目も死んでたしね」

「な……、何か変な感じですね……」

明日菜から聞いたカイの凄さ（？）を聞いたネギは、顔を引きつらせていた。もっと武勇伝的な事を考えていたのだが、どうも違うらしくて何か落ち込んでしまった。

鳴滝姉妹がカイを『お姫様』と呼ぶのは、昨年のベストカップルコンテストの時にカイが純白のウエディングドレスを着ていた事が発端だった。それがあまりにも『お姫様』だったので、双子がカイを呼ぶ時は『お姫様』と呼んでいるのだ。

その『お姫様』は麻帆良学園・オブ・ザ・イヤーに選ばれた栄光を持っていた。もちろんカイにとっては消したい過去の一つではあるが……。

それよりもネギはカイの事で気掛かりなことがあった。

（あの人から何か変な感覚がしたんだけど……、気のせいかな？）

清水寺を出発してから有名所を二ヶ所ほど回ってから、漸く宿泊先の旅館に辿り着いた。

旅館に辿り着いたカイは即刻割り当てられた部屋へ行き、ぐうたらと寝転がる。今日は色々と疲れる事が起こったので、カイは羽を伸ばして休みたかった。

「くぁー、早く風呂に入りたいなー」

「入浴時間は八時からです。それまでは入る事は出来ませんよ。それと自分の荷物を忘れないでください」

カイの独り言に遅れて部屋に入ってきたお坊っちゃんが呆れながら答える。お坊っちゃんの後ろには浩輝と耕太と悠里も居る。

カイがあまりにも部屋で休みたかった為、荷物を忘れていたのだが、代わりにお坊っちゃんがカイの荷物を持ってきてくれた。嬉しい限りです、と返答し、カイはお坊っちゃんから荷物を受け取る。

「次からは気を付けてくださいよ？」

「気を付けます」

お坊っちゃんに注意を受けカイは一応反省の意を示していると、耕太がお坊っちゃんに質問する。

「で、お坊っちゃん、これから夕食まで自由時間だったっけ？」

「ええ。自由時間ですよ」

耕太の質問にお坊っちゃんは簡潔に答える。すると耕太はデジカメを手にして、

「そんじゃ皆の写真を撮りに行ってくるかね」

颯爽と部屋を飛び出していった。ここまでの間に結構デジカメで撮っていた筈なのに、まだ撮るつもりかと残された四人は思う。

耕太はこの修学旅行ではカメラマン役を任されているので、撮れる物は撮っておきたいのだろう。それが彼の仕事なのだから。

「それでは僕は先生方と話をしに行ってきます」

次にお坊っちゃんも部屋を出て行く。委員長なので色々と忙しいみたいだ。

次に悠里も無言のまま部屋を出て行った。無口な彼がいったい何処に行くのか気になるところだ。

「俺は自販機のとこ行くけど、何か欲しいもんあるか？」

最後に浩輝も一階の自販機の所に行くみたいだが、カイにも欲し

い物がないか訊ねる。訊ねられたカイは再び寝転がりながら、

「缶コーヒー」

と、一言だけ答えた。

コイツ、いつか絶対に太るだろ、と浩輝は内心思っていたが、それを口に出さず、おう、と答えて部屋を出て行った。

部屋に一人取り残されたカイは呆然と天井を見つめる。ただ何を思う訳でもなく、ぼーっと天井を見つめる。

そしてそのまま眠気に襲われ、意識を落としていく。今はただ惰眠を貪る為に……。

その景色は灰色だった。

建物も地面も土から生えている木も空の色も、全て灰色。灰色一

色しかない。その世界に人や動物、生命体と呼ばれる物は一切存在しない。あまりに希望がない世界に女顔の少年は一人で立っていた。

『灰色の世界』。

それがこの世界の通称だ。この世界は真の紋章が覚えているという、究極の未来。『法』と『混沌』による最終戦争の果てなのか、それとも他の因果によるものか。

一人突っ立っている少年は歩き始める。目的地もなく、ただ自然と動く脚の赴くまま歩き続ける。考える事を放棄して無意識に歩いていく。

どれだけ歩き続けただろう?

一向にゴールが見えないのに少年の足は動き続ける。疲れを知らず、ただただ歩き続ける。このまま永遠に歩き続けるのだろうか、と少年はぼーっとした頭で考えていたが、歩み続ける脚に何か当たり、動きは停止する。

少年は訝しみ足元を見れば、頭が後ろに伸びている何処かで見た老人の『死骸』が転がっていた。目立った外傷もなく、だが白目を剥いている老人は確かに『死んでいる』。確かめるまでもなく直感的に『死んでいる』と判断出来た。

少年は老人の『死骸』を無感情で一瞥した後、老人を跨いで更に歩き続ける。少年に人間らしい感情はなく、機械的に歩き続ける。

『秩序』も『混沌』もない世界を歩き続ける。

歩き、続ける。

いざ、京都へ（後書き）

またオリキャラ登場。口下手な少年です。

それと少しですがネギと関わり合いましたね。カイが男子校に通っていると、そうそう関わり合うことないですしね。

最後のを書いているとこの物語はバッドエンド一直線な感じしてきました。

……世界滅亡エンドってね。病んでますね。

ともかく此処まで読んでいただきありがとうございます。

次もまた読んで頂けると嬉しいです

八房の悪鬼

修学旅行二日目。

この日は班行動が中心で奈良を歩き回る事になっている。今日も奈良の大仏や鹿公園など有名所を歩き回るのだ。

ただやはりこの少年だけは面白くないようである。

「……、駄目だ、疲れた」

そう呟くは篠宮カイ。少年の手にはソフトクリームが二つ。

どうも興味が出ない事には何かを食べないと、やる気も出ないらしい。

現在カイ達の班は奈良市内を適当に歩いている。お坊っちゃんの先導の元、カイ達はそれに着いて行っているのだ。

「ったく、まだ一時間ほどしか歩いていないんだぞ？」

呑気にソフトクリームを食べているカイの隣で浩輝が呆れている。いくら興味が無いからって、こんな我が儘を言ってはならないと浩輝は思っている。

この班にはお坊っちゃんも居るのだから、余計な事を言われないようにと、浩輝は気を遣おうとしている。

浩輝に言われカイは、うーんと悩んでお坊っちゃんの顔をチラッ

と見る。カイが疲れたと呟いた事に気付いて居らず、耕太と話をしていた。その後ろには相変わらず無口を貫いている悠里が居る。無表情で何を考えているのか分からない。

「取り敢えずお坊っちゃんの耳に入らなければ良いよな？」

「……まあお前が良いなら良いんじゃねえの？」

「なら……ん？」

浩輝と話をしている時、ふとカイは後ろを振り返る。何かチリチリっと不可解な視線を感じて、後ろを振り向いた。

だが後ろには特に変わった事はなく、普通のありふれた光景が広がっているだけだ。

（気のせいなのか？　だが未来の紋章も何か反応しているし……）

カイの額に宿る未来の紋章も『何か』を感知して、疼いている。マリアの時とは違いカイに頭痛はなく、別の『何か』がいるのかもしれない。

その『何か』が自分を見ているのだとすれば、カイとしては自力で解決しなければならない。今も尚誰かに見られている感が拭えない為、この状態で修学旅行を続けられる程、カイの精神面は強くない。

だからカイは意を決して行動に出る。

「浩輝、これ食べて良いから大声出すなよ？」

カイはお坊っちゃんに聞かれないように小さい声で、両手に持っているソフトクリームを浩輝に押し付ける。

浩輝は何のことかさっぱり分からず、わけが分からないままカイから押し付けられたソフトクリームを受け取る。

「じゃ、よろしくな」

「え、ちょ、おい！？」

食べかけのソフトクリームを浩輝に押し付けたカイは、手を振って走り去っていった。浩輝の制止の声も聞かずに、カイは走り去っていった。

浩輝はどんどん遠くなっていくカイの背中を眺めながら、視線はカイが食べていたソフトクリームに移す。いくらカイの親友だからと言って、男の食べかけを食べる気はない。

この処理をどうしようかと浩輝は考えていると、ふと横から視線を感じる。

桐原悠里だ。

どうやら悠里はカイが此処から走り去る一連の流れを見ていたようで、変わらず無表情のまま浩輝を見つめている。

えっと、どうしようか？　と浩輝は悠里への処理に頭を悩ませ、

「……これ、食うか？」

苦し紛れにカイの食べかけソフトクリームを差し出す。

どうせ受け取る訳無いだろうけどな、と浩輝は心の中で苦笑していると、悠里はカイの食べかけソフトクリームを受け取った。しかも二つとも。

「……え？」

無口で特に趣味も無さそうな悠里だから無視でもするかと思っていた浩輝は、思わず声を漏らしてしまった。まさか悠里が食べかけソフトクリームを受け取るとは思わなかったのだ。しかも二つとも。

「……ソフトクリームは好きだから」

顔に合った透き通った声で言うと、悠里はソフトクリームを食べながら歩き始める。

浩輝は悠里が喋った事やカイの食べかけソフトクリームを食べたりと、色々な事が浩輝の頭の中を駆け回り混乱に陥れる。

（よく分かんねーけど、取り敢えずお坊っちゃん達に追い付くか）

もう悠里について考える事を放棄した浩輝は、ずいぶん前まで行っているお坊っちゃんと耕太に追い付く為、走り出した。

その頃、カイは自分に注がれる視線を探す為に、その脚を必死に動かしていた。

だがその視線の主にはたどり着いていない。確かに今でも嫌な、呪い殺して来るような視線がするのだが、全く見付からない。

未来の紋章も視せてくれないので、正体を割り出せないでいる。気配を遡っても逃げられてしまう。

これでは鼬ごっこだ。追い付けない。だからカイはだんだんと苛立ちが募っていく。

（くそ、何だって見付からない！？　俺がポンコツだからか！？そうなのか、おい！？）

もう誰にあたっているのか分からない程に錯乱しており、するとカイは立ち止まって額の紋章に手を当てると、人目はばからず叫ぶ。

「オイ、テメエ！　俺に宿ってるんなら少し先の未来を視せてみろ！　それが出来ないほど落ちぶれてんじゃねえだろうな！？」

いきなり立ち止まり大声で叫ぶ女顔の少年に、普通に歩いている一般の人達も立ち止まりカイに目を向ける。

大勢の人達に注目されているにも関わらずカイは気にせず続ける。

「大体テメエは戦いの時だけ未来を視せてきて、それ以外は視せないってどういうつもりだ！？　この俺に宿ってるんなら偶には俺の指示に従って未来を視せやがれ、このポンコツ紋章が！！」

これまでの未来の紋章に対する不満が爆発したかのように、カイは一般の人達が居るにも関わらず、なかなか危険な事を言っている。

カイの周りにいる一般人は、何を言っているのかしら、とか、頭おかしいんじゃね？　とか言われたい放題だが、それでもカイは気にしない。気にしていられない。

するとカイの言葉に応えたのか、額の紋章から青白い光が発光して、カイの脳内に『未来が流れ込んでくる』。未来の紋章がカイの命令に従って未来を視せたのは、初めてかもしれない。

今までは未来の紋章の魔法を使う事はカイの命令に従った事はあるが、カイの命令で『未来を視せた事は無い』。未来の紋章が勝手に視ていた未来をカイの脳内に焼き付けて、カイはそれを視ていた。そう、未来の紋章の一方通行のみだった。

カイが『未来が視たい』と言っても、未来の紋章がそれに応じて未来を視せる事は無かった。だから今回初めてカイからの命令で未来の紋章は未来を視せたのだ。

一方、一般人達はカイの額から謎の青白い光が発光している事に、声を出して驚き、携帯電話のカメラでパシャパシャと撮っている。撮られている事にも気にせず、カイは未来を視る。

（……、コイツは！？）

未来を視たカイは驚愕の表情を浮かべ、歯を噛み締める。

大体犯人の居場所が分かったカイはズボンのポケットから一枚の札を取り出す。

「……テメエら、これは見せ物じゃないんだ。少し眠っていてもらおう」

唐突に冷静になったカイは札を高々と掲げると札が光り出し、周囲一〇〇メートルに濃い霧が発生する。その濃霧に一般人は混乱していると、だんだんと意識が朦朧としていき意識を落とす。

カイが発動した札は対象者を眠らせる事が出来る。無論魔法耐性がある者には効かないだろうが、それでも一般人には効果は絶大だ。周囲一〇〇メートル内にいる一般人は全員が眠っている。

カイは黒い手袋を装着して、表に出ている携帯電話を全て回収する。回収した携帯電話を一ヵ所に集め、また札を取り出す。

そして一般人の携帯電話に札を張り付けると、札から炎が具現して携帯電話を焼き尽くしていく。証拠隠滅を図ったのだ。持ち主のデータなどカイには知ったことない。

俺を撮った罰だ、と何とも身勝手な事を考えながら、カイは焼き尽くされていく携帯電話を眺める。一般人の記憶には残るだろうが今の時代、映像や画像のデータなど証拠が無いと信じてはもらえない。誰かが言い触らしてもそいつが馬鹿にされるだけだ。

もう使い物にならない事を確認したカイは、未来の紋章が視せた場所へ向かう。

カイが視た未来が本当なのかを……。

今は使われなくなった廃工場。そこから漂う匂いは油臭く、鼻が良い人間はひん曲がりそうになる程。辺りは薄暗く、天井の屋根の隙間から射し込む日の光だけで照らされている。

そんな場所にカイの姿は在った。この工場が未来の紋章が視せてくれた場所だからだ。そして此処に『この世界に居てはならない人物』が視えたので、どうしても確かめなくてはならない。

すると突然、カイから五メートル先の空間が渦を巻くように歪み始め、そこから長身の男が現れる。

金髪で三つ編みにした黒ずくめの男。黒い山高帽子を深々と被っている為、その表情は伺いにくいが、それでも不気味な笑みを浮かべているのは分かる。

この男が現れた瞬間、この場に流れる雰囲気が殺伐としたものに変わり、身が竦み上がる程の殺気が男から放たれている。

男の殺気を一身に受けているカイは無意識に脂汗が流れ出ている。こんな人間では出せないような殺気に竦み上がりそうになるのは、

実に久しぶりだ。マリアと戦う時よりも素直に怖いと思ってしまう。

カイに怖いと思わせる程の男を、カイは知っている。

恐怖に心が支配されているのを表に出さないように、カイは冷静な表情で口を開く。

「久しぶりだね……ユーバー」

黒ずくめの男、名前はユーバー。

戦いを好み、世界を混沌に陥れる事を望む、人の形をした人ならざる者。

ユーバーは僅かに顔を上げ、紅い蛇のような右目と銀色の左目でカイを見据える。

「ほぉ……、まさかこんな世界で呪われし紋章の子と会えるとは思わなかったぞ？」

「よく言う。俺に気味悪い視線を送ってきたくせに」

「フッ……」

カイに不気味な視線を送ってきたのは、目の前に居るユーバーだった。カイが追いかけてもユーバーは空間移動を使える術を持っているので、逃げられるのは必至だった。

それはともかく本当にこの男がこの世界に居る事が、カイにとっては驚きだった。本来カイが居るべき世界にもユーバーの姿を見掛

けた、と言うよりも戦った事がある。それなのに何故この世界にユーバーが居るのか、カイには分からなかった。

だからカイは問う。

「何故悪鬼がこの世界に居るんだ？　相変わらず混沌を求めて行動しているのか？」

「貴様には関係のないこと。だがまあ貴様が居るのなら、俺が行動を起こす必要は無さそうだな」

「何だと……？」

「貴様に宿る紋章は混沌を求めている。その紋章を宿している貴様なら分かるだろ？」

ユーバーは口角を上げ、笑みを浮かべながら言った。カイに宿る未来の紋章が混沌を求めていると。

その事はカイも何となくは分かっていた。この世界に来てしまった時から、その兆候は現れていた。だからカイはユーバーに違うと否定する事が出来なかった。

「貴様に宿る紋章は俺と同じ思想だ。この世界はいずれ混沌に陥るだろうよ」

「そんな事、俺がさせると思ってるのか？」

例え未来の紋章が混沌を求めていてもカイがそれをさせないと答える。

だがユーバーの一言で一蹴される。

「紋章を完全に使いこなせない人間如きに出来るとでも？」

「……ッ！」

ユーバーのこの一言にカイはギクリと固まってしまった。

未来の紋章を継承してから数十年経った今も使いこなせていない事は、カイが一番よく知っている。それを目の前に居る悪鬼に言われるのがムカついた。

だからカイは逆襲する。

「だったらお前は『八房の紋章』を使いこなせているのか？　人間では使いこなせない真の紋章を、人外のお前なら使いこなせるのか？」

そう言ってのけたカイの言葉にユーバーの目の色が変わる。それはユーバーにとって触れてはならない禁句で、カイを眼光で殺せる程に睨み付ける。

ユーバーもカイと同様に真の紋章の一つ、八房の紋章を宿す者。だがユーバーは真の紋章を激しく憎んでいる。自分も真の紋章を宿しているくせに。

ユーバーに睨み付けられカイは思わず後退りしたいが踏みとどまり、表情を不敵な笑みに変える。

「お前も真なる二十七の紋章の一つ、『八房の紋章』を宿している

んだろ？　それでもお前が『八房の紋章』を使っている所は見た事がない。だから俺なりに考えたよ。お前は『八房の紋章』を使わないんじゃなくて、使えないんじゃないかってな」

「貴様ッ！！」

カイの言葉にユーバーの逆鱗に触れ、黒服の袖から二振りの剣が現れる。

そしてユーバーがカイに斬り掛かってきた為、カイは本能で躱す。ユーバーの逆鱗に触れた事が分かり、カイは必死でユーバーの速い攻撃を躱す。それから未来の紋章の先読みにより、ユーバーの攻撃が必然と躱せるようになる。

後は反撃するだけなのだが、反撃の策が思いつかない。それはユーバーが持つ剣の特性が原因だ。

その剣の名称はクリムゾン。紋章の魔力を封じている剣。紋章魔法を使ってもユーバーの持つクリムゾンで封じられてしまう。それが真の紋章の魔力であっても。

だから札を使った攻撃でもクリムゾンに封じられてしまったら、カイには銀糸しか攻撃手段がない。

とにかく札がユーバーに通用するかやってみないと分からないので、カイは札を取り出して機会を待つ。

「貴様は未来の紋章が無ければ何も出来ない虫けらだと思い知らせてやる！」

鬼のような形相でユーバーがカイに斬り掛かるが、未来の紋章の力で軽々とカイは回避する。確かにカイは未来の紋章が無ければ、今頃はユーバーに斬り殺されているだろう。

それでも何も出来ない事はない。

隙の無いユーバーの隙を探すのが面倒だが、未来が視えるカイには何処で隙が生まれるのか分かる。

そしてユーバーの隙を突いて、カイは札を放つ。

札を放ってきたカイにユーバーは鼻で笑う。

「ふん、そんな札、斬り捨ててやる」

ユーバーはクリムゾンで札を簡単に斬り裂くが、その瞬間、ユーバーの身体を包み込むように爆発が発生した。

「……一応は通用するみたいだな」

札がクリムゾンに斬り裂かれたが発動したので、カイは動きを止めて呟いた。クリムゾンは紋章の力を封じるが、紋章の力ではない魔力の札なら通じる。何とか札は通用出来るので、戦術パターンを減らさずに済んだ。

取り敢えず今の状態はカイが態勢を立て直す機会なので、カイはポケットから紅い液体が入った瓶を取り出す。こんな緊急事態が有った時の為に、一応は持っていた。

マリア対策の為に使おうとしたのだが、相手はユーバー。使って

も問題は無いだろう。その分、これ以降マリアが襲ってきたら確実に死亡エンドが待っているが。

それでもユーバー相手に魔力無しで戦おうなんて、それこそ死亡エンドが待っているので、カイは瓶の蓋を外して紅い液体を一気に飲み込む。

するとアンチスキルスロットの影響で失われた魔力がどんどん戻ってくる。これで多少なりともユーバーに対抗は出来るだろう。

（さて、これからが本番か……）

延々と燃え続ける炎を見てユーバーの安否が気になるが、ユーバーはこの程度では死ぬ事は無いだろう。

だから警戒していると炎が突風によってかき消されていく。其処から全く無傷のユーバーが現れる。

やはり無傷ですか、とカイは内心毒づく。魔力が有れば多少なりともダメージを与える事が出来るのだが、魔力を戻す前に札を発動したので全くのダメージを与える事が出来なかった。

カイは空きになった瓶を投げ捨て、黒い手袋を装着して一〇本の銀糸を垂れ流す。

一方ユーバーはカイを忌々しく睨み付ける。未来の紋章を宿すカイには他の真の紋章持ちよりも激しい憎悪を抱いている。

「……未来の紋章を宿しておきながら、何故混沌へ陥れない？」

ふと、ユーバーがポツリと呟く。その呟きにカイは訝しむが、ユーバーの言葉は続く。

「未来の紋章は『混沌側』。『秩序側』とは対する紋章を宿しておきながら、何故貴様は『秩序側』に立とうとする？」

「あ？　話すり替えてんじゃねえよ」

「フッ、すり替えるか。まあいい、貴様には此処で死んでもらうがな！」

そう言ったユーバーは目にも見えない速さでカイに斬り掛かる。だがカイは未来が視える為にユーバーの攻撃を躱し続ける。

ユーバーの攻撃を躱しながらカイは一〇本の銀糸で反撃を行う。

チッ、と舌打ちをしてユーバーは大きく後退してカイから距離を取る。それでも一〇本の銀糸は追撃を止めない。

ヒュンヒュンと空気を切り裂きながら、ユーバーの身体を切り刻もうと這いずり回る。

（これがただの糸なら斬ってしまえば良いだけなんだろ）

銀糸が目前と迫る中、ユーバーはそう考え、二振りのクリムゾンで銀糸を斬ろうとする。

だが……、

「！　斬れない！？」

ユーバーが振るったクリムゾンでも銀糸を斬る事が出来なかった。カイ『自身』の魔力を銀糸に流しているので、耐久力が強化されている。それ故にユーバーのクリムゾンでも銀糸を断ち切る事が出来なかった。

そして銀糸はユーバーの身体を切り刻んでいく。頬、腕、脚、胴体と銀糸がユーバーの身体を切り刻んでいく。

「クッ！」

身を切り刻まれ苦痛の声を漏らしたユーバーは、その場から消えて銀糸から逃れる。

「相変わらず転移術は上手いな。けど何処に転移するかはお見通しだけど」

そう言ってカイは右へ跳んだ瞬間、左方からユーバーが現れ剣が空を切る。

本当に未来の紋章があって良かったとカイは実感するが、今はそんな事を思っている場合ではない。負傷している体でユーバーは正常時と同じ速度でカイに仕掛けてくるのだ。

血がどばどばと流れているにも関わらず、ユーバーの速さは変わらない。

「貴様だけは必ず殺してやる！　絶対にだ！！」

しかも激怒しているのでユーバーの形相が本当に怖い。

これは早く決着を着けないといけないと感じたカイは、ユーバーの攻撃を躱しながらチラッと左の方にある壁際に存在する複数のドラム缶を見る。

此処は廃工場。そして油の匂いがキツい事から、何処かにガソリンが有る筈なのだ。だからガソリンが入っていそうなドラム缶に、カイはユーバーの剣を躱しながら移動する。

ユーバーは頭に血が昇っている状態で冷静に周りの状況を考えられない。

（一か八かやってみるか）

カイはズボンのポケットから発火する札と転移魔法符を取り出す。

そしてドラム缶がある場所まで後退し、カイはチラッと一瞬でドラム缶の中を見る。ドラム缶の中身には大量のガソリンが入っており、この中に火を放り込めば辺り一面は爆発する。

これでユーバーを撃退に追い込もうと考えているのだ。

一方ユーバーは壁際までカイを追い詰めた事で、すっかりと勝利を確信した。ユーバーは高々とクリムゾンを振り上げる。

「死ね！　カイ・メルフェス！」

狂気の笑みを浮かべたユーバーはクリムゾンを振り下ろす。目前に迫るクリムゾンを見て、カイは一言漏らす。

「それは勘弁です」

そう言ってカイは右手に持っていた発火の札を発動して、ガソリンが入っているドラム缶の中に入れ、左手に持っている転移魔法符を発動して、この場から消え去る。

その瞬間、火を放たれたガソリンは爆発して、他のガソリン入りドラム缶に連鎖して爆発を起こす。そして廃工場はドカンと大きい音を辺りに響き渡らせながら爆発した。ユーバーごと廃工場は爆発した……。

「うっは……、やりすぎたか？」

廃工場から少し離れた場所に転移したカイは、自分が引き起こした惨事を見て他人事みたいに呟いた。

もくもくと炎と黒煙が立ち上り、カイは早々に此処から立ち去るべく走る。

恐らくユーバーはあの中でも生きているだろうが、それでもダメージを与える事には成功した筈。これ以上の怪我を負ってまでカイを追い掛けようとはしない筈なので、カイは工場爆発に駆け付ける野次馬が来る前に走り去る。

この事がカイのやった事と知られれば、流石にカイも対処出来ない。

だから一刻も早くカイは此処から走り去った。

「はぁ、はぁ……、疲れた……」

カイは大きな公園のベンチに座って、疲れた身体を休めている。ユーバーという強敵から何とか逃げ切れたので、極限に高まった緊張が解かれて体が余計に疲れているのだ。

あの廃工場から出来るだけ遠くに逃げて、漸くこの公園に辿り着く事が出来た。それは浩輝の親衛隊から逃げる程の速さで逃げてやった。

本当に少しイカれた奴と戦うのは怖いよな、とカイは息切れを起こしながら呟いた瞬間、口から大量の血を地面に吐き捨てた。

「ゴホッ！　ゴホッ！　――カハッ！」

カイは口に手を当て、必死に血を吐くのを止めようとするが、全く止まる気配を見せない。どんなに堪えようとしても血反吐が止まらない。

ここに来て一〇分が経過し、薬の副作用がカイの身体を襲ったの

だ。今回の副作用は血を吐き捨てる副作用。

ここで全ての血を吐き捨てればアンチスキルスロットの呪いも何とかなるんじゃないか？　とカイは考えるが、そんな事をすれば間違い無く失血死する。呪いは消え去ったとしても、カイが死んだら意味がない。それこそレアンやマリアの思惑通りになってしまう。

それだけは何としても避けたいので、カイは必死に血反吐を吐かないように堪える。

それから数分後、カイは何とか血反吐を堪える事に成功し、口元に付いた血を拭って、深呼吸をして息を整える。

息を整え、平常時に戻ったカイは足下を見る。其処には隠せない程の大量の紅黒い血。一体何ミリリットル吐き出したのか分からない。

分からないが、立ち上がろうとすると血が足りないのか、目眩がして立ち上がれない。顔も青ざめていて常人の顔つきではない。

下手したらこのまま死んでしまいかねないが、恐らく未来の紋章がカイを死なせない。カイに何らかの役目が有るのなら、カイを死なせるような真似はしない。

兎も角これからどうやって帰ろうかと悩んでいると、誰かがカイの存在に気付き、声を掛けてくる。

「あれ？　篠宮君じゃん？」

声からして女の声でカイは其方に振り向くと、そこに居たのは麻

帆良女子中三年A組の運動部四人組と長身褐色女の姿が在った。

運動部四人組は良いとして長身褐色女が居る事に、カイはうげっと苦い顔を浮かべる。

「何だ？　そんなに私が居るのが不満か？」

長身褐色女こと龍宮真名はカイの応対に不機嫌オーラを辺りに撒き散らす。カイは兎も角、同じクラスの運動部四人組の子達は真名がこんなにもあからさまな不機嫌を表すのは初めて見。いつもは冷静な彼女がこんな感情を表すのは無いと思っていたからだ。

その部分を引き出したカイと何か有るのだろうか？　と乙女心が騒ぎ出す。麻帆良で有名な女顔男子中学生とクラス一クールな女子。思春期全盛期の乙女達は危ない妄想を始める。

だがどんなにカイと真名を合わせても、精々が姉妹止まり。恋人には絶対に見えない。

そもそもカイと真名の身長が三〇センチ以上は離れている。姉妹にしか見えない。どんなラ〇コンですか、と乙女達はツッコム。

そんな妄想を繰り広げている乙女達をよそに、カイと真名は口論を繰り広げる。

「いやー？　吃驚しただけですよ。まさかこの運動部四人組と班が一緒になっているとは思っても見なかっただけだ」

「本当にそれだけか？　もっと暗に秘めたる事を思っていただろ？」

「例えば？」

「『またこの褐色女が居るよ。うぜっ』みたいな事だ」

「自分で言って悲しくならない？」

「ふん、お前みたいに精神面は弱くないんだ」

「悪かったな、精神面が弱い駄目男でさ」

「自分で言って悲しくならないのか？」

「……うっぜ」

「フッ……、私の勝ちだな」

「何でお前が勝つ事になってんだよ！？」

「もうお前に言葉のレパートリーは無いだろ？　だから私の勝ちだ」

カイはキシャーっと犬歯を剥き出しにして真名を睨み付け、真名は不敵な笑みを浮かべて高い位置からカイを見下ろす。

二人の背景には龍と虎が睨み合っているような図が頭に浮かんできそうだ。

端から見ると仲の良い友達（もしくは姉妹）にしか見えず、やっぱり恋人の様には見えない。

今も睨み合っているカイと真名に運動部四人組の一人、髪を右に括っている少女、明石裕奈が訊ねる。

「えっと、二人は付き合っていたり――」

「「してないから」」

息はピッタリでした。

裕奈の質問を遮ってカイと真名は全く同じ言葉でキッパリ否定した。これには訊ねた裕奈も顔を引きつらせて苦笑せざるを得ない。

そんな時、髪をポニーテイルにしている長身の少女、大河内アキラはカイの顔が青ざめている事に気付く。

「えと、カイ君、気分が悪いんじゃ……？　顔も青ざめているし……」

「え？　あ、あぁ……」

アキラに気付かれてしまい、カイはどう答えようか悩んだ。

真名には答えられるだろうが、運動部四人組は裏の世界を知らない一般人。つい先程まで悪鬼と戦っていました、なんて言える筈もない。

だからカイは適当に嘘を並べてやり過ごすしか選択肢は無かった。

「ちょっとバスに酔ってね。俺は班から外れて此処で休憩していたんだ」

「え？　でも篠宮くんを放っとくなんて酷くない？」

適当に嘘を並べたカイの言葉に何故か関西弁を喋る少女、和泉亜子が疑問に感じた。

やっぱり嘘は苦手だな、とカイは思いながらも嘘を貫き通す。

「いや、折角の修学旅行なのに俺のせいでアイツらの思い出がメチャクチャになったら嫌なんだよ。だから俺は此処で休んでるんだ」

「へー、篠宮くんって優しいんだねー」

カイの嘘にバカピンクと呼ばれている少女、佐々木まき絵はカイの嘘に気付かず、笑顔でカイを優しいと評した。

その言葉がカイの少ない良心に罪悪感を孕み、何だか申し訳ない気持ちになってしまう。

真名はカイの嘘に気付いているが、それでもこの場での追求はしてこない。流石に一般人の手前、裏の事は話せない。

しかしカイの気分が優れない事を指摘したアキラは、何だかカイが嘘を吐いているように感じていた。

「カイ君……、嘘吐いてない？」

アキラの直球にカイもビクンと心臓が高く鼓動したが、ここは数十年生きている篠宮カイ、しっかりと演技をして真剣に答える。

「ううん、嘘じゃないよ」

「……そう」

真剣な表情で言ったカイの言葉に、アキラは納得はいかないがこれ以上は聞いてこなかった。

（うあー、アキラって勘が鋭いところが有るんだよなぁー。ヒャー、危なかった―）

内心ビビりまくっているカイだったが、数十年生きているカイは動揺を表には出さない。

因みにアキラは『カイ君』と、カイは『アキラ』とお互い下の名前を呼んでいるが、実は中一の時に知り合いになっていたりしたからだ。カイが直ぐに運動部四人組だと分かったのは、アキラを通して面識が出来たからなのである。

それは兎も角、カイはもう目眩はしないかなと思い立ち上がると、やはり目眩は起こる。全く血の生成が間に合っていない。これでは帰る事なんて出来ない。

暫くは歩く事も叶わないな、とカイは考えて再びベンチに座る。

「やっぱり気分が優れないの？」

「ああ、暫くは歩く事もままならない」

「だったらウチ達が気分良くなるまで居ったろうか？」

「大丈夫だよ、そんな事してくれなくても。俺は平気だからさ」

「でもこんな状態の篠宮君を放っておくのも後味が悪いよ。ね、アキラ？」

「うん。もし私達が放っておいて行って、その後に悪い人に襲われたらカイ君じゃ対処出来ないと思う」

「うっ……」

何とか運動部四人組プラス真名を帰したいのだが、お節介な事にカイを介抱しようとしている。これだけは避けたいのだがアキラの言葉にはカイも反論出来ない。

確かに今のカイではチンピラも追い払う事は出来ない。殺す事なら出来るが。

アキラの言葉に内心涙が止まらないカイに、一連の流れを見ていた真名はくっくっと笑い堪えている。そんな真名にカイは拳を握り締めて震えるが、それだけしか出来ない。

「まあ兎に角、こうして苦しんでいる篠宮君に出会っちゃった訳だし、元気になるまで介抱しちゃおう！」

「「おー！」」

「……はは……」

妙にやる気になっている裕奈と亜子とまき絵に、カイは苦笑いを浮かべるしか出来なかった。

こうして『カイの介抱大作戦』は決行された……。

もう陽が暮れそうな時刻。

夕焼けが地面を照らし出し、少し寂しい気持ちにさせる。

運動部四人組プラス真名の五人の介抱（半分遊び）によってカイは歩けるまで回復し、あの五人に対して借りが出来てしまった。

しかも真名に関してはマリアに倒された際に部屋に運んでもらった礼もまだしていない為、カイは真名に対しては借りが二回となってしまっている。

全く余計なお節介を、とカイは口では言っているものの、表情は綻んでいる。久し振りに他人の暖かさを感じた気がするのだ。

もちろん浩輝達にも感じるのだが、妙に違う感覚に陥っていた。言葉では上手く表せれないが、別の種類の暖かさが浩輝達にはある。

不老となって歳を取らなくなったカイは心の奥底では他人と仲良くなってはいけないと思っていた。そうすれば失った時の悲しみは減るからだ。

だが、やはり歳を取らなくなったからと言って人間である事には変わらず、誰かと仲良くなって生きていかなくてはいけないかもしれない。人間である以上は。

そしてカイは歩いて旅館にたどり着くと、旅館の入り口には委員長のお坊っちゃんが立ちはだかっていた。

そう、カイに説教をする為に。

どうやらカイの班の人間は皆帰ってきているようで、残りはカイだけだったらしい。

（忘れてたよ。最悪だ。どうしよう。このままじゃ俺、死んじゃう）

どんどん絶望感に頭が囚われていくカイは、お坊っちゃんに見付からないように後ろを向いて逃げようとするが、

「何処に行こうとしているのですか、篠宮君？」

いつの間にかカイの背後には冷徹な仮面を付けたお坊っちゃんが立っていた。カイは恐る恐る振り返ると、背中には闇魔大王様が憑依しているように見える。

やっべ、俺の物語はここで終わるかも、とカイは表情を固まらせながら思っていた。

「さて、篠宮君。何か弁明は有りますか？」

「え、えっと……、俺のファンが熱ーい視線を送っていてですね？それを止めるように単独行動をしてみたー……、みたいな？」

「……」

カイは少々事実を混ぜてみつつ、弁明をするがお坊っちゃんの心には届かない。何を言っても届かない。

届かないと判断したカイは身を正して、

「すいませんでした」

角度九〇度の頭を下げる行為をひたすら繰り返した。

だがこんな事でお坊っちゃんが許す筈も無く。

「厳しく説教します。部屋に着いて来てください」

「……はい」

カイに待っていたのはお坊っちゃんによる長時間説教コースだった……。

それから二時間後。

ひたすらお坊っちゃんの説教を食らったカイは漸く解放されて、ぐったりとしていた。その表情に生気は無く、死人みたいだ。

部屋を出てカイを待っていたのは浩輝だった。

その手にはカイの好きな缶コーヒーを持って。

「よ、お疲れさん」

「ありがと」

浩輝から缶コーヒーを貰い、プシュッとプルタブを起こしてコーヒーを飲む。コーヒーの独特の苦味が口の中に広がるのが堪らない。

カイは一気に飲み干すと、ゴミ箱へと捨てた。

「お坊っちゃんの説教は今までの中でも最長じゃないか？」

「ああ、修学旅行中だし仕方ないんだろうけど」

これまでカイは幾度となくお坊っちゃんの説教は受けてきていたが、今回ほど長く時間が掛かった事はない。最高でも一時間なので、今回は倍も更新している。

流石にカイも疲れてしまっている。

何となく柔らかい雰囲気が流れている中、浩輝は質問する。

「しかし何故いきなり別行動取ったんだ？」

「ああ、俺の熱烈ファンが――――」

「嘘だな」

あっさりと嘘がバレました。

そんなに俺の嘘は見抜きやすいのか、と自分の嘘に疑問を抱きながらも、取り敢えずある程度本当の事を話す。

「……変な視線を感じたからな」

「視線？」

「ああ、それを送ってくるのが誰なのかを突き止める為に別行動を取ったんだ」

「で？　そいつは見付かったのか？」

「いや、見つからなかったよ。どれだけ探しても見つからないから諦めたよ」

カイはさり気なく嘘を吐く。本当は視線の正体を判明し、犯人であるユーバーと戦っていたのだが、この事は一般人の浩輝には教える事ではないと判断し、カイは嘘を吐く。

そもそもユーバーとの問題はこの世界の人間には関係ないので、誰にも関わってほしくない。

そんなカイの嘘に気付かない浩輝はふーんと相槌を打って、

「まあ気を付けろよ？　変な輩もこの世の中には居るんだからな」

「分かってるよ、ありがとう」

浩輝の忠告を受けてカイは頷き、歩き出す。

「どこに行くんだ？」

「トイレ。我慢してたからな」

浩輝の質問にカイは簡潔に答える。どうやらこの二時間はトイレに行くのを我慢して、お坊っちゃんの説教を受けていた。

だからカイの膀胱はパンパンに膨らんでいる。

そんなカイに浩輝は苦笑しつつも部屋へ向かう。今頃は機嫌が悪いお坊っちゃんが居るだろうが、気にせず入っていった……。

トイレに入ったカイは用を足す為にさっさと済ませようとしたが、トイレには無口君の桐原悠里が先客として居た。

取り敢えずカイは用を済ませる。その最中に悠里がトイレに誰も居ない事を確認して、カイに近付く。

近付くなよ、と内心思いながらも、カイは無表情を貫き通す。そんなカイに悠里は訊ねる。

「カイ君、あの薬、使ったの？」

この悠里の言葉にカイは、やっぱり来たか、と思い、用を済ませたカイは手を洗って悠里に振り向く。

「ああ。緊急時だったからな。どうしても使わないといけない相手だった」

「そして薬の副作用で血を吐いたの？　血の匂いがする」

いつもは絶対に見せない饒舌な悠里に驚く事はなく、カイは返答する。

「ああ。どれだけ吐いたか分からない程にな」

「よくこの旅館まで戻ってこれたね？」

「余計なお節介さん達が居たからな。何とか此処まで戻ってこれた」

「そう……。それよりあの薬は一つしか持ってきてないんじゃないの？」

「ああ、もし敵が俺を襲ってきたら俺は太刀打ち出来ない」

「そんな事だろうと持ってきておいたよ」

そう言って悠里はポケットからカプセル型の薬をカイに渡す。

「これは？」

「カイ君が作ったあの紅い液体の薬と同じ効果だよ。そっちの方が飲みやすいと思ってね。後は副作用を少しでも抑えるようにしておいた。試作品のような感じだけど……」

「こんな物を作っていたのか？　取り敢えず助かる。これであの女が襲ってきても対処出来る」

「それから君の呪いを完全に解く薬は僕が必ず作ってみせるよ。必ずね」

悠里はカイの呪いについてまで詳しく知っている。

桐原悠里の正体は魔法による呪いを解く為の薬学者。彼に掛かれば様々な呪いを解く事が出来る薬を作るスペシャリスト。

その秘密を知ったカイは悠里に呪いを解く薬を作って欲しいと依頼した。最初は悠里もカイに掛けられた呪いを解けると思っていたのだが、これが難敵で悠里は解く薬を作る事が出来なかった。

その事が悠里の魂に火を付けてしまい、以降、カイに掛けられた呪いを解く為に心血を注いでいる。

因みにエヴァンジェリンに掛けられた呪いを解く事も出来るらしいが、学園長によって止められているらしく、エヴァンジェリンの呪いを解く薬は作っていない。

カイに掛けられたアンチスキルスロットを知っているという事は、悠里は裏の人間でカイの正体を知っている数人の一人だ。

それと裏の時はこれだけ喋れるのに表の時に喋らないのは、単に面倒だからとのこと。

「それとカイ君」

「ん？　何だ？」

「ソフトクリーム美味しかったよ。ありがとう」

そう言いながら悠里はトイレから出て行った。

お前が食ったんかい、とカイはツッコミつつ、薬をポケットに仕舞う。これでマリアが襲ってきたとしても、何とか対抗出来るかもしれない。

カイは額に刻まれた紋章を触りながらトイレを出て行った。

その頃、黒ずくめの男、ユーバーは火傷を負いながら歩いていた。カイの推察通りユーバーは生きていたが、ちゃんとあの爆発でダメージを与える事には成功した。

カイにまんまとやられてしまったユーバーはカイに恨み言を呟きながら歩く。

周りには一人も居ない為、ユーバーの恨み言を聞いてしまったら、余計に怖く感じてしまうだろう。

そんな時、ユーバーの前に白髪の少年が現れる。見た目十歳くらいの少年で、ユーバーみたいに殺伐とした雰囲気は纏っていない。

それでも人形のような感情が薄い子供。それが不気味さを引き立たせる。

「無様にやられているみたいだね、ユーバー。だから彼には手を出すなって言っておいたのに」

「黙れ。貴様には関係ないだろう」

白髪の少年は無表情ながらもユーバーを貶すように言葉を選んだ。それに対しユーバーは目の前の少年を睨みながらも、大人しくしている。

珍しくもユーバーが大人しいのは、この白髪の少年に何かが有るのだろう。

「まあいいよ。明日には決行するらしいから、それまで彼に傷つけられた身体を癒やしておくと良いよ」

「ふん……」

白髪の少年はユーバーから視線を逸らし、手を振る。ユーバーは

特に何も言う事はなく、転移魔法でこの場を去っていった。

本当にユーバーは何もする事なく、斬り掛かる事も、殺す事もせず、ユーバーは去っていった。

そして一人になった白髪の少年はポツリと呟く。

「彼もまた明日の戦いに参加するのかな？　その前に彼と話しておくのも悪くはないかな？」

八房の悪鬼（後書き）

今回はユーバーを出してみました。

正直やっちゃったかな、と思っております。独自解釈も入ってますしね。その独自解釈もめちゃくちゃですし……。

後は悠里の正体を早々に発表です。もう少し引っ張ろうかと思いましたが、此処で正体を明かす事になりました。

ユーバーの時に薬を使わなければ、もう少しは引っ張れたんですがね。

ともかく此処まで読んでいただきありがとうございます。

次も読んで頂けると嬉しいです。

総本山襲撃

修学旅行三日目。

この日は班別完全自由行動日。

その日の内に旅館に帰って来られる範囲なら何処に行っても構わないという、それなりに羽目を外せる日。

色んな班は様々な所へ行っているが、カイ達の班はというと……。

「疲れんだよ、テーマパークってのは……」

黒のワイシャツと紺色のジーンズを履いた、ファッションセンスなんて皆無な少年、篠宮カイはテーマパーク内に設置されているテーブルにぐったりと身を任せて、疲れた表情を浮かべながら呟いている。

彼が居る場所は大阪にある国内でも有数のテーマパーク、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン。通称ＵＳＪ。カイの班は何故かＵＳＪに遊びに来ていた。

こういうテーマパークは委員長のお坊っちゃんが許しそうにも無かったのだが、存外許可を下し、あまつさえ自分もハシャいで遊んでいたりする。

キャラ崩壊してんなあ……、とカイは今まで見せた事が無かった顔をしているお坊っちゃんに、内心引いていたのは誰にも内緒だ。

勿論カイも皆と一緒になって遊んでいたのだが、あまりの人の多さと待ち時間にダウン。今はこうして食事施設のテーブルに顔を乗せて休んでいる。

浩輝達はカイを置いて四人で楽しく遊んでいる。悠里は間違いなく無表情で楽しそうにはしていないだろうが……。

（人多すぎて酔いそう……）

カイは横目でＵＳＪに来ている客達をチラッと見る。数千人、数万人という人が此処に来て、誰かと一緒に笑顔で楽しんでいる。嫌な事も忘れ、誰もが楽しく過ごしている。

この幸せな場所を壊せたらどれだけ混沌が生まれるのだろうか？

（……って何を考えてやがるんだ俺は？　ユーバーの言葉なんかに踊らされてんじゃねえよ）

ハッとカイは我に返り、雑念を振り払うように目をキツく閉じる。昨日ユーバーが言っていたように『未来の紋章が混沌側』だと考えると、どうしても下手に『混沌』を考えるようになってしまっている。

完全にユーバーの思惑通りになってしまっている為、カイはこれ以上考える事を放棄する。これ以上考えれば　”この世界に混沌を生み出しそうになるから”　。

そんな時、ぐったりと休んでいるカイに女性の声が掛かる。

「こんな所で一人で居るなんて哀れだな？」

突如自分に降りかかった蔑みの言葉に、カイは目を細くして声の主の方へ顔を向ける。

そして其処に居たのはもはやカイの天敵と化している褐色女、龍宮真名だった。何故かバイオリンケースを持っているが気にしてはいけない。中にはいつ仕事が来ても良いように各種の銃が入っているだけだ。だから気にしてはいけない。

それよりも何故龍宮が此処に居るんだ？　とカイの頭は疑問符に満たされている。

「何故こんな場所にお前が居るんだ？」

「それはあの子達に聞いてくれ。私は着いて来ているだけだからな」

「あの子達って運動部四人組の事か？」

カイの質問に真名は、そうだ、と答えてカイと対面の椅子に座る。

どうやら真名の他にも運動部四人組の子達も此処に来ているようで、真名も仕方なく着いて来たと言う。何たる因縁か……、と呟きたくなるのを我慢してカイは話を続ける。

「昨日は不本意だったけど助かった。礼を言うよ」

「相変わらずお前には心が込もっていないな？　もっと心を込めて礼を言えないのか？」

「ありがとうございましたー」

「……」

カイの心が込められていない礼に、真名も呆れて何も言えない。最初から分かりきっていた事だ。カイが素直になる事など無いことを。

そもそもこの女男が真名に対して素直になることなど殆どない。礼の件については諦めた真名だが、昨日の件で気になる事はある。

「それよりもお前、何であんな大量の血を吐いていたんだ？」

この真名の疑問にカイは一拍置いて答える。

「個人の事情によりお答え出来ません」

まるで事務的な返答の内容に真名もカチンと頭にくる。頭にくるが、今は冷静に訊ねてみる。

「またそれか。マリアとかいう女にやられたのか？」

「いや、違うよ。それに誰もやられたとは言ってないし」

「どういう事だ？」

さらっと流すように答えるカイに真名はまたも頭に疑問符を浮かべる。

真名はカイがアンチスキルスロットを一時中和する薬を作っている事を知らない。この事を知っているのはカイと悠里の二人だけ。

他は誰も知らないのだ。

故にアンチスキルスロットを一時中和する薬の副作用によるものだと、真名が気付く筈もない。

それにこの世界の者ではないユーバーの存在を、わざわざ真名に知らせる必要もない。

だから真名がこれ以上聞いてきたとしてもカイに答える事は出来ず、事務的な返答しか出来ない。

「これ以上は俺の根幹に関わる事ですので、追求はご遠慮ください」

「……」

真名は堪える。目の前にいる男は絶対に本心を見せる事はしない。昨日みたいに真名と何でも言い合っているように見えるカイも、これが本性とは思えない。

いや、殆どはさらけ出しているとは思う。だが何処か演技をしているような、そんな感じに真名は受け取っていた。まるで〝カイの本性は喪失しているかのように〟。

「龍宮さあーん！　お待たせ……、って篠宮君も居たんだ？」

妙に雰囲気が険悪化している時、救世主の如く真名と同じ班の裕奈が近付いてきた。もちろん裕奈の周りには他の三人も居る。

カイにとっては本当に救世主で、一般人の裕奈達が居る以上、真名が追求してくる事は無い。だから心の底からホッと安堵している。

真名の方は消化不良といった表情を浮かべているが……。

「ああ、昨日ぶりだね」

「もう体調は大丈夫なん？」

「問題はないよ。今日は元気だから」

「それは良かったよ。それじゃ龍宮さん、そろそろ帰ろ？」

「時間がきたから……」

「あ、あぁ……」

どうやらもう時間が限界らしく、そろそろ旅館に戻らなくてはならないらしい。本当に良いタイミングです、とカイは思う。

真名は椅子から立ち上がり、何か憎々しい形相でカイを睨み付けるが、当のカイは涼しい顔で流している。内心、さっさと帰ってくださいと願う。

「それじゃ篠宮君、バイバイ」

「ああ、バイバイ」

別れの挨拶をしてから去っていく裕奈達にカイは手を振る。もちろん真名には勝ち誇ったような顔で見送ってやる。そうすれば真名は、絶対に殺してやるといった感じにカイを睨み付けてくるので面白い。

まあ何だかんだで邪魔者は消えてくれて、カイはホッと一息吐く。最近の真名は何か事ある毎にカイに近付こうとする傾向にある。カイとしては真名にはある程度情報を開示して、それなりに役に立ってくれたら良いと思っている。だが真名が必要以上に自分に近付く事を良しとはしない。

必要以上に近付かれて予測不可能な行動を起こしたくはない。必要以上に近付かれて変な感情は芽生えて欲しくはない。必要以上に近付かれて自分の戦いに巻き込みたくはない。

それにいずれはこの世界から去るつもりだ。こんな世界に居たところでカイの居場所は無いのだから。まあ本来居るべき世界にも居場所なんて存在しないが。

だから必要以上に近付かれて、この世界に留まりたいなんて思ってはならない。

「ほんと、うざったいな……」

「何がうざったいんだい？」

ポツリと呟いたカイの言葉に、誰とも知れぬ少年の声で返ってくる。

あァ？　とカイは少年が声がしてきた方へ振り返ると、先程真名が座っていた椅子に今度は白髪の少年が座っていた。

その白髪の少年にカイは何処かで見覚えがあった。カイは思い出

そうと記憶の中から引き出そうとする。

そして思い出す。確かカイがこの世界……、と言うより魔法世界と呼ばれる異世界に来てしまってから一ヶ月か経った後のことだ。当時はカイにしてはよく分からない戦争に巻き込まれ、問答無用に真の紋章魔法で襲ってくる兵士やら騎士団やらを葬っていた時に、目の前の白髪の少年を大きくしたような青年に戦いを挑まれた事があった。

その当時はカイも魔力が充溢しており未来の紋章も有れば負ける事が無かったので、その青年に負ける事は無かった。逆に勝つ事も出来なかったのだが。

その青年と白髪の少年が酷似しているのだ。

（うわー凄い嫌な予感しかしねえよ。もうこの世界から離れたいよ……帰りたい）

もうカイの精神状態が危うく、若干ホームシックに掛かっている。

そんなカイに白髪の少年は口を開く。

「やあ、久しぶり……と言った方が良いかな？」

「俺に聞くな。久しぶりで良いんじゃないの、確か……アーウェルンクス、だったか？」

「覚えているんだ？　もう二〇年前の事の筈なのに……。そう、フェイト・アーウェルンクスって言うんだ」

白髪の少年は自己紹介をしてくれた。名前はフェイト・アーウェルンクス。意外と真面目な性格をしているのだろうか。

そんなフェイトにカイは思う。何で背が縮んでるんだろうか？

カイは二〇年前、魔法世界と言う世界で戦争に巻き込まれ、襲ってくる奴らを全て葬った。その際にアーウェルンクスと戦ったのだが、その時はカイよりも高い身長だった。それが今は自分よりも小さいとはどういう事なのだろうかと思う。

だからカイは聞いてみた。

「何で背、縮んでるんだ？」

「……、そう言えば君は戦争に巻き込まれた形だったっけ。最後まで戦争に参加していた訳でも無いらしいし」

「そう言えばあの戦争も原因知らないな。ま、どうでも良いけどさ」

「どうでも良いなら僕についてもどうでも良いよね」

「……まあな」

カイは知らないのだ。魔法世界で起きた戦争に巻き込まれたが、別にその戦争を終結に導こうかという英雄的行動は起こさなかった。既に何処かの誰かさん達が行動を起こしていて、別にカイが参戦する理由は無かった。

それにその戦争は真の紋章が原因で起きた戦争ではない。だからカイが介入したところで、理由なんて有りはしない。

だからカイは途中で戦争から離脱し、その後の戦争がどうなったのか知らない。目の前に居るフェイトと名乗る少年に何が有ったとか、そもそも何者なのかも知らない。

取り敢えずカイは二〇年前の知り合いが今頃になって現れたのか、一応訊ねてみる。

「それでアーウェルンクス君は俺の前に現れて何がしたいんだ？」

「……、君はレアンという男を知っているかな？」

一応訊ねてみた質問が、まさかカイにとって因縁のある男の名が返ってくるとは思わず、カイは目を見開く。

「お前、奴の事を知っているのか！？」

「その様子だと知っているようだね」

「奴は今何処に居る！？　答えろ！！」

今にも白髪の少年の胸倉を掴みに掛かりそうな勢いでカイは問い質す。

場所を忘れ、感情に身を任せているカイに白髪の少年は呆れながら答える。

「教えたところで君にはどうする事も出来ないと思うよ？　もし彼を殺しに行くつもりだったら、今の君じゃ彼を殺す事は出来ない。それぐらい分かっているよね？」

「――――ッ！」

フェイトの言葉にカイは体が凍り付いたかのように感じた。フェイトもレアンの力を知っている為、今のカイがレアンに立ち向かえば瞬殺されてしまうだろう。

レアンの力が何なのかカイも知っている為、今はおろか前の状態でも勝てない。だから歯を噛み締めるだけに留まっている。

そんなカイを放っておいてフェイトは続ける。

「本来は君をレアンの元に連れて行かなければいけないんだけどね。僕も彼には良い印象を持っていない」

「……それで？」

「君を見逃そうと思うよ。今日はただ君の顔を見に来ただけだしね」

だったら来るなよ、とカイは呟く。フェイトが何しに来たのか分からない。そんな困った顔を浮かべる。

捕獲しに来たのか、忠告しに来たのか、本当にフェイトが何しに来たのかカイには分からない。

そして徐にフェイトは椅子から立ち上がり、最後にカイに言葉を掛ける。

「それとユーバーも昨日やられた借りを返すと言っていたよ。だか

ら気を付けた方が良いよ」

そう言いながらフェイトはカイから去っていった。

ユーバーという名前にカイはフェイトの方へ振り向くが、既にフェイトの姿は無かった。もう此処には居ない。

（ユーバーの奴、アーウェルンクスの所に居るのか？　しかし何で……）

カイはいくら考えても答えは見付からない。ユーバーが何故フェイトの所に居るとか、他にも様々な事を考えてみるが答えは見付からない。

フェイトによって頭が混乱するカイだった。

もう陽も暮れ、夜へと移る。

関西呪術協会の総本山を目の前に、フェイトとユーバー、そして眼鏡を掛けた女が木の上から総本山を見下ろしていた。

総本山は立派な屋敷で無駄に広く、桜まで綺麗に咲いている。そんな綺麗な屋敷もこれから混沌になるという事はフェイトとユーバー以外は知らない。

そんな事も知らずに女は苛つく。

「ちっ、コラ新入り！　あんたが追わんでえーゆーから放っといたら、本山に入られて手出し出来んやんか！　親書も渡ってしもたしーっ！」

フェイトに八つ当たりする女の名前は天ヶ崎千草。

この女は西洋魔法使いに恨みが有るらしく、その巣窟である関東魔法協会を潰そうと画策している。その為にこの修学旅行中、近衛木乃香という関西呪術協会の長、近衛詠春の娘を誘拐しようとしたり、関東魔法協会から特使として京都に来たネギ・スプリングフィールドから親書を奪おうとしたのだが、いずれも失敗に終わっていた。

そして今日も近衛木乃香を誘拐しようと実行したのだが、失敗。あまつさえ近衛木乃香並びにネギ・スプリングフィールドに関西呪術協会の総本山に踏み入れられてしまい、手が出せなくなった。

天ヶ崎は関西呪術協会の人間であるが、今回の事件に関して単独行動であり、関西呪術協会の命令ではない。それ故に総本山に踏み入れられてしまえば、どうしようにも手が出せないのだ。

そんな怒っている天ヶ崎にフェイトは言う。

「大丈夫ですよ。僕達に任せてください」

フェイトは無表情に答えて木の上から飛び降りる。そしてユーバーも防止を深々と被り、フェイトの後を追う。昨日カイにやられたユーバーだが、その傷は完全に回復している。

妙に自信に満ち溢れていたフェイトに天ヶ崎は少し心配になる。何故ならこの総本山には強力な結界が仕掛けられており、手出し出来にくい。天ヶ崎は自分に出来ない結界破壊を、フェイトとユーバーに出来る訳がないと思っているからだ。

だが天ヶ崎は二人の実力を知らなさすぎた。総本山の結界など簡単に破壊出来る実力が有るのだから……。

一方、フェイトとユーバーは結界の前まで来ていた。一歩でも脚を踏み入れれば総本山だが、間には結界がある。

これは並みの術者ならば破壊なんて出来ない。だがフェイトとユーバーは並みの実力者ではない。

ユーバーは袖から二振りのクリムゾンを取り出し、剣を振るう。すると結界はビリビリっと紙を破るような音を立て、結界は消滅する。

「ふん、つまらんな。これが結界とは笑える」

いとも簡単に結界を切り裂いたユーバーは、本当につまらなそうな表情をしている。

そんなユーバーにフェイトも同じように、

「所詮、僕達の敵ではないと言うことだよ」

関西呪術協会を軽視する発言をする。この二人にしてみれば関西呪術協会なんて敵にもならないかもしれない。

「どっちでもいいさ。忌々しいシンダルの結界よりは楽だからな」

「……君の世界の事についてはどうでも良いけど、ちゃんと仕事はしてよ？」

「分かっている。それが契約だからな」

ユーバーがフェイトと共に居る理由は契約があるからだ。契約内容は『フェイトが天ヶ崎の下に居る間は共に行動する』という内容。フェイトはユーバーと出会い、その実力を買って契約した。ユーバーはユーバーで混沌を生み出せるかもしれないと思い、その契約に同意したのだ。

「目的は近衛木乃香を生きたまま強奪。他はどうでもいいから」

「ああ。近衛木乃香という女以外は殺しても構わないんだな？」

「……良いよ」

ユーバーの問いにフェイトは少し間を置いて答える。ユーバーは混沌を生み出す以外は興味が無いので、つい近衛木乃香を殺してしまわないか心配になる。

そんなフェイトの心情を察したのか、ユーバーは口角を上げ口を開く。

「安心しろ。近衛木乃香を殺しては大いなる混沌は生み出せないからな。ちゃんと生かして捕らえるさ」

「なら構わないよ。それじゃ行動開始だ」

ユーバーの言葉を聞き、フェイトは行動開始と告げる。その瞬間、二人は別行動で近衛木乃香を捕らえる作戦を開始した。

夜桜が咲き散る中、ユーバーは屋敷の廊下をゆっくりと歩いていた。その手には人を殺す為の剣、クリムゾン。

これからユーバーにとって好きな匂いが漂うとすれば、心が踊り狂いそうになる。間もなくこの屋敷は混沌と化する。ユーバーの心を癒やす事が出来る混沌を。

ユーバーは適当に部屋へ押し入ると、屋敷の侍女達が居た。侍女達はユーバーの姿と手に持っている剣を見て、一瞬にして恐怖に陥

る。

「な、何なんですか！？」

震え上がった侍女の声を聞いて、ユーバーは不気味な笑みを浮かべる。

これだ、この感じだ、とユーバーの求める物が見れて歓喜する。これが混沌を生み出すキッカケになるのだから。

そしてユーバーはクリムゾンで侍女達を毒牙に掛ける。悲鳴も上げさせず、この部屋にいる侍女全てを殺した。

畳は侍女に流れていた血で染まり上げ、ユーバーが持つ剣には侍女の血が滴り落ちている。部屋には血の匂いが充満していて、その匂いはユーバーにとっては快楽に等しい。

ひとしきり血の匂いを嗅いだユーバーは邪魔な侍女の死体を蹴って退かし、次の場所へ向かう。

次の部屋にはコンコンと戸を叩いて人が出てくるまで待つ。

「あ、はーい」

そして少女の声が聞こえてきて、戸が開かれる。

「えーと屋敷の人ですか？」

そう問うてくる眼鏡を掛けた少女にユーバーは剣で少女の体をズブッと一刺しする。

「……え？」

突然剣で体を貫かれ、眼鏡を掛けた少女、早乙女ハルナは訳が分からなかった。この黒ずくめの男は何なんだ？　そもそも何で私は剣で体を貫かれているのだろう？

早乙女には全く分からなかった。

早乙女は悪くない。悪くないのだが、この屋敷に来てしまったのが運の尽きなのだろう。いや、フェイトではなくユーバーと出会ってしまった事が運の尽きか。

そしてその部屋に居た早乙女以外の少女も、漸く事態を理解する。早乙女がユーバーによって刺された事で、他の少女達は呆然としていた。

当然だ。平和に慣れ親しんだ『日常』から正反対の『非日常』へと変わったのだから、頭が追いつく筈がない。それでも時間が経つにつれ、少女の思考も戻ってくる。

そんな中、ユーバーは早乙女の体から剣を引き抜き、早乙女の体を蹴る。漸く痛みを実感してきた早乙女は立って居られる程力が入らず、そのまま仰向けに倒れる。

傷口から大量の血が流れ出し、どくどくと血溜まりが形成されていく。早乙女の哀れな状態を見て親友の少女は悲鳴を上げる

「キャアアアア！！」

悲鳴を上げた少女、宮崎のどかに視線を移したユーバーは、色の違う両目で宮崎を睨み付ける。睨まれた宮崎はひっ！　と竦み上がって悲鳴が止まる。

ユーバーは宮崎を捉える中、パイナップルみたいな髪型の少女、朝倉和美は側にいる少女、綾瀬夕映を窓から逃がす為に小声で口を開く。

「ゆえっち、あんたは逃げろ」

「し、しかし――」

「あんたちっこいし頭回るし体力あるだろ」

「でも……」

「良いから！」

渋る綾瀬に朝倉は綾瀬の体を窓から突き飛ばす。その光景を見ていたユーバーは舌打ちをして、

「無駄な悪あがきを」

そう呟いて剣を振るって宮崎の体を斬る。ブシュっと切り口から鮮血が噴出し、宮崎は畳に倒れる。

そしてその流れで朝倉の体をも斬り裂いた。そこに何の躊躇いもなく、余計な感情はない。ただ混沌を生み出せるのなら、ユーバーはそれに従って行動しているだけ。

動かなくなった三人の体を冷たく見下ろし、一人逃げた少女について考える。

（一人逃げられたが……、まあいいか）

ユーバーは綾瀬を見逃し、クリムゾンを袖の中に戻す。ある程度は人間を殺せたのだ。それなりに混沌は生み出せたので十分だ。残るは近衛木乃香を見付けるのみ。

その頃、フェイトはフェイトで屋敷に居る侍女を石化の魔法で、行動不能にしていた。

フェイトは近衛木乃香を見付ける前に、関西呪術協会の長で二〇年前に『紅き翼』に居た近衛詠春の無力化を優先していた。ユーバーが詠春を殺してくれているのならそれで構わないし、まだ殺していなくてもフェイトがやるので問題はない。

そんな時、廊下の角から近衛詠春が出てくる。どうやらユーバーと相対しておらず、まだ無事なようだった。

詠春は敵意を剥きだしてフェイトに問う。

「屋敷に居た侍女達を殺したのは君か？」

「僕じゃないよ。まあ僕の仲間が殺したんだろうけどね」

「ッ！　なんてことを！！」

相変わらずの無表情で詠春の問いに答えるフェイト。その言葉に詠春は悔しさを滲ませる。

その様子がフェイトにはおかしく見えた。

「無駄に平和に慣れすぎた貴方が招いた事でしょう？　そうでなければ少なくとも一方的にやられる事もないでしょうに」

そう、詠春は関西呪術協会の長となって十数年、一度も剣を握った事は無かった。戦いの日々から離れ、平和に慣れすぎた人間にこの様な襲撃は対処出来ない。

まあフェイトにとってそんな事はどうでもいいので、この詠春を無力化する為に石化魔法を唱える。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト……」

フェイトが始動キーを唱えた瞬間、詠春は焦ったように顔を変えてフェイトの妨害をしようと脚を動かす。

だが平和に馴染んだ体と年老いた体では無理がある。

それ故にフェイトの詠唱の妨害に間に合わず、フェイトの魔法は完成する。

「石の息吹」

フェイトの指先が光り、詠春の周囲に煙が巻き起こる。その際にパキンと乾いた音がしたが、恐らく詠春が石化魔法を食らう前にレジストしたのだろう。

煙が段々と晴れていくと、詠春の脚が石化を始めている。レジストしても意味が無かったのだ。これで詠春は戦う事も出来ない。

「……、元『紅き翼』だった貴方がここまで簡単にやられるとは……失望したよ、近衛詠春」

もうちょっと抵抗してみて欲しかったのだが、詠春の不甲斐なさに失望してフェイトはこの場を後にする。これ以上詠春を放っておいても大した障害にはならない。

だからフェイトはさっさと目的である近衛木乃香を捜しに、石化していく詠春を背にして後にした。

総本山襲撃（後書き）

今回ばかりはやっちまった感があります。後悔はしていませんが。

ユーバーがフェイトと共に襲撃に加わった以上、石化だけでは済みません。性格的に。

これから段々と原作崩壊していきます。しかも改悪方面に。

それでも見てくださるのであれば、お願いします。

戦いの渦中へ

関西呪術協会の総本山がフェイトとユーバーによって血塗られた地に変わっている事なんて知らないカイは、麻帆良男子校生徒が泊まっている旅館の部屋で呑気にゲームをしていた。

ＵＳＪでフェイトに会った事を気にしていたのだが、今となってはどうでも良くなっていた。ＵＳＪで発生したストレスをゲームで解消しようと勤しんでいるのだ。

現在部屋にはカイの他に二人居る。お坊っちゃんと悠里。

お坊っちゃんは世間ではあまり知られてはいない有能な学者が著作した哲学書を呼んでおり、悠里は無表情で布団に入りながらテレビ番組を見ている。

浩輝と耕太は部屋には居らず、何処かの班と適当に話して過ごしているのだろう。特に気にする必要は無い。

三者三様、それぞれ時間を潰して就寝時間が来るまで過ごそうとしているのだ。そんな時、ゲームの音やテレビの音で入り混じった部屋に、もう一つ音が入り混じる。

それはカイの携帯電話の着信音。

カイはゲームから傍にある携帯電話へと視線を移す。誰だよこの忙しい時に、と客観的に全く忙しくないくせに忙しいと思っているカイは、鬱陶しさを抱えて携帯電話を取る。

そして誰が発信してきたのか確認もせず、通話ボタンを押して耳に持っていく。

「はい、もしもし」

『緊急依頼じゃ！　直ぐに準備をしてくれんか！？』

通話口から聞こえてきたのは、妙に慌てている学園長の声。その慌てようにカイもゲームを止めて、部屋を飛び出す。

部屋に居たお坊っちゃんが何か言っていたが、一切合切無視する。

部屋を飛び出したカイは人気の無い場所……、適当に見渡しが出来る廊下に移動し、辺りをキョロキョロと見渡しながら口を開く。

「いったい何なんですか？　修学旅行中だと言うのに」

『すまん、時間が無いんじゃ！　簡潔に説明するぞい。現在、関西呪術協会の総本山が襲撃を受けているんじゃ！』

「……はぁ」

いきなり関西呪術協会の総本山が襲撃を受けている、と言われてもカイにとってはどうでもいい事。

だからどうした、と思っている。

『恐らく総本山を襲撃した奴らの目的は木乃香の誘拐じゃ！　篠宮君も今すぐ総本山に向かってくれんか！？』

「話がメチャクチャじゃないですか。まあ何とか理解はしましたが……」

学園長の言葉があまりにもメチャクチャなので、カイは脳内処理をする。

大体学園長が言いたい事はこういう事だろう。

先ず近衛木乃香には桁外れの魔力を有している。それを狙う輩が木乃香が現在居ると思われる関西呪術協会の総本山を襲撃し、木乃香を誘拐しようとしている。それを防ぐ為にも修学旅行中であるカイに依頼しに電話してきたのだ。

恐らくこんな感じだろう。木乃香には『千の呪文の男』よりも高い魔力を持っている事は、カイも知っている。だからその魔力を狙って誘拐する者が現れても仕方ない。そして現実のものとなり、誘拐されようとしているのだ。

ここで疑問がある。何故学園長はカイに緊急の依頼をしてきたのか？

関西呪術協会の総本山ともあれば警備も厳戒で、襲撃者も一筋縄ではいかない筈だ。総本山なんだから凄腕の実力者が駐在しているだろう。別にカイが出向かなくても凄腕の実力者が撃退すれば、問題は無い筈なのだ。

しかも何故麻帆良学園に居る学園長が総本山の襲撃を知っているのか。まあ誰かが知らせたのは間違いないだろうが、知らせる暇が有るなら襲撃者の撃退に当たれよと思う。

もう色々と疑問が沸いてきたので、カイは質問する。

「別に俺が行かなくても関西呪術協会の総本山なんですから、凄腕の実力者とか居るでしょ？」

『それがどうも出払っておったらしくてのぅ。その時は実力者は居なかった話じゃ』

馬鹿だ、とカイは率直に思った。関西呪術協会の長は人的配置が出来ないのだろうか。

いくら関西呪術協会の総本山だからって常時、相当の実力者を五、六人は配置しておくものだ。いや、配置しておかなければならない。総本山なんだから此処を落とされれば即座に敗北だ。

それなのに出払って居なかったなんて、悪いが長と呼ばれる人物は馬鹿としか思えない。そりゃ襲撃者が異常な実力者だとしたら負けても仕方ないが、それでも最優先人物を逃がす時間は作れる筈。

しかし相当な実力者という『駒』を配置していないが為に、この様な結果を招いたのだ。いわば自業自得。カイにとってあまり受けたくない依頼だ。

「それで近衛木乃香は無事なんですか？」

『分からん状況じゃ。ネギ君の話によると西の長は石にされ、ネギ君のクラスの一般生徒が……殺されたようじゃ』

は？　とカイは思う。意味が分からなかった。関西呪術協会という裏の世界の住人達が住む場所に、何故一般人の生徒が居て殺され

たのか……。

ネギ君のクラスの生徒……、つまりは女子中三年A組の女子生徒。今回の騒動には何も関係ない女子が殺された。これはとんでもない問題だ。

「これは……、どう処理をなさるおつもりで？」

『……ともかくじゃ。今すぐに総本山に向かってくれんかの？』

はぐらかされてしまった。一般生徒が殺された事を学園長はどう処理をしてくれるのか、カイは他人事のように思い傍観する事に決めた。

今回の事件は学園長にも責任は有るだろう。その甘ったるい認識を持っていた学園長が、どの様な責任を取るか興味がある。そして殺された生徒の担任のネギ・スプリングフィールドに、英雄の子供にどの様な責任を取らせるのか。それも楽しみだ。

もしかしたら責任を負わせないように隠蔽工作をするかもしれない。未来の『立派な魔法使い』を守る為に……。

ともかくカイは学園長の依頼を受ける事にする。今のカイは真名みたいに金で雇われて動く殺人者だ。受けない道理はない。

「分かりました。ただし破格の報酬を要求しますので、覚悟しておいてください」

『うむ。何としても木乃香を助けてくれ！』

「それでは」

どうも学園長は孫娘が大事らしい。当然身内は大事だろうし心配だろうが、何とも薄情な気がする。自分が治める学園の生徒が殺されたというのに、自分の孫娘の安全を優先するとは……。

まあ学園長もただの人間という事か、とカイは無理矢理そう結論付けて、頭を切り替える。

これから堅気にも手を出す殺人鬼と戦わなければならない。生半可な気持ちで挑む訳にはいかない。

「これから外出……、しかも危ない所に行くのは感心しませんね？」

突如、冷たい声にカイの身体がゾクッと凍り付いた。この声には聞き覚えがある。と言うより無かったらおかしい。

この声はカイのクラスメートで、クラスを束ねる者で……。

カイはゆっくりと顔を横に向ける。其処には何の気配も感じさせず、カイと学園長の会話を盗み聞きしていたかのように耳を立てていたクラスメートの顔。

「……お坊っちゃん……」

カイの凍り付いた思考は見事にフリーズし、まともに考える事も出来なくなっていた。それでも考えなければならない。

何故お坊っちゃんは気配を隠し、カイにも気付かれず、こんなカイとお坊っちゃんの顔が三〇センチぐらいの距離に居るのか。

カイはこれでも気配を察知する能力には長けている方だ。未来の紋章もあるし、カイ個人の能力も気配察知能力は高い方だ。なのにこんな近くまでお坊っちゃんの接近を許したのか。

学園長と電話している際も警戒していた。それだと言うのにカイはお坊っちゃんの接近を許してしまった。

訳が分からない。

そんな唖然としているカイに、お坊っちゃんは微笑んで口を開く。

「何を驚いているんですか？　僕は篠宮君と同じ『裏の人間』ですから」

「……は？」

普通に言ってのけるお坊っちゃんの言葉に、カイは今度こそ思考が停止した。

何を言っているんだ？

お坊っちゃんが『裏の人間』？

そんな馬鹿な事がある訳ないじゃないか、そう呟くカイに、お坊っちゃんはアハハと笑って、

「それじゃコレを見てくれたら信用出来ますか？」

そう言ったお坊っちゃんは瞬時にカイの目の前から姿を消した。
紛れもない、それは転移魔法だ。

唖然と、得体の知れない生き物に出会ったような恐怖を表す顔をしていると、後ろから右の肩をポンと優しく叩かれる。

「これで信用してくれましたか？」

そのまま顔を後ろに向ければにっこり笑顔のお坊っちゃん。間違いなくお坊っちゃんは『裏の人間』であり『魔法使い』だった。

だがカイは何故お坊っちゃんが『裏の人間』だと気付かなかったのだろうか。転移魔法を使えるなら魔力も充溢している筈。だが魔力なんて二年間一切として感じさせなかった。

それに学園長からは麻帆良学園の魔法先生、並びに魔法生徒の全員のリストを拝見した事が有るのだが、一切としてお坊っちゃんの名前は無かった。

だがよく考えればお坊っちゃんは日本でも有数の資産家の息子だ。裏の事にも相当詳しいし、魔法関連の事も当然知っている筈なのだ。完全にカイは思い違いをしていたのだ。魔力が無いから、お坊っちゃんは一般人だと判断してしまった。

これはお坊っちゃんの正体を見抜けなかったカイの傲りか。

最悪だ、と溜め息を尽きながらカイは落胆する。

「お坊っちゃんが裏の人間だという事は分かったけど、どうやって

この二年間魔力を隠していたんだ？」

やはりカイはお坊っちゃんがどうやって魔力を隠していたのか気になっている。

そんなカイにお坊っちゃんはこんな事をしている場合ではないと諭す。

「答えても良いですが、今はその様な時間が無いと思うのですが。急いでいるんでしょう？」

確かにお坊っちゃんの言う通り、学園長の依頼を受けた以上、いつまでもお坊っちゃんの謎について訊ねている場合ではない。

「ああ、そうだな」

「僕の転移魔法でお送りしましょうか？　目的地もさっき聞きましたので」

「……、お願いします」

盗み聞きされたのは不覚だがお坊っちゃんも裏の人間なら話は早い。お坊っちゃんの転移魔法で関西呪術協会の総本山に転移してもらえれば、転移魔法符を使わずに済む。

だからカイはお坊っちゃんに転移魔法をお願いする。お坊っちゃんは分かったと言って、転移魔法の生成を開始する。

「っておいおい、こんな目の付く所で発動して良いのか？」

此処は旅館の廊下。いくら人気が無いからといって、必ずしも人が通らないとは限りない。それなのにお坊っちゃんは所構わず転移魔法の生成を始めた。

いったいどういうつもりなのか。

「別に見られたとしてももみ消せば良いだけの話です。僕の家にはその力が有るので」

カイは顔を引きつらせながら、そうですかと呟いた。本当に金持ちは敵に回したくないと思う。

そうこうしている内に床に転移魔法陣が描かれ、淡い光を発していく。

「行きますよ」

転移魔法陣は完成し、カイとお坊っちゃんは総本山へ転移する。向かうは戦場。『混沌』で渦巻いている不気味な総本山へと、二人は転移した。

宵闇を切り裂くような眩い光と共に、カイとお坊っちゃんはパッと姿を現した。場所はしっかりと関西呪術協会の総本山へと転移出来て、カイとしては満足だ。

「此処が関西呪術協会の総本山……、これはまた『混沌』としているな……」

カイは周りを見渡しながら漂う気配を感じる。この総本山には普通の人間が味わってはいけない『混沌』が漂っている。周りは夜桜が咲き乱れ幻想的な風景を映しているのだが、此処に居ても漂ってくる血の匂いが吐き気を催してくる。しかも全く音がしない静寂が更に不気味さを増す。

漆黒の闇と無音。これだけで人という生き物は緊張に駆られ、冷静さを失う。幾度も戦場を渡り歩いたカイでも、過度の緊張感を持っている。

妙な胸騒ぎがする中、お坊っちゃんは空を仰ぎながら口を開く。

「ふむ。敵は総本山の守護結界を破壊して乗り込んだようですね」

「お坊っちゃんはそんな事が分かるのか？」

お坊っちゃんの言葉にカイはへぇ、と感心したように呟いて訊ねる。

「此処の関西呪術協会の総本山は守護結界という絶大な防御壁を有

しているんです。此処の長は守護結界を過信していたみたいで、色々と腕を立つ人を地方に派遣していたそうです」

いったいどうやって情報を集めたのかとカイは思う。いくら財閥の息子だからと言って、関西呪術協会の内部の情報を持っているなんて恐ろしい。

しかしこれでカイの疑問の一つは解消された。何故関西呪術協会の長は総本山の警備を手薄にしていたのかを。それは総本山を覆う守護結界が存在しているからだ。絶大な守護結界というシステムがあるから、長は総本山の警備に人員を割かなかったのだ。

やはり愚かしいと思うのはいけない事か。

見たところ総本山は陥落して、静寂が支配している。この混沌した空気は関西呪術協会の長の慢心が招いた悲劇に過ぎない。いや、悲劇と語るには汚すぎるか。

とりあえず、とカイは紡いで、

「この屋敷を見て回ろう。いったいどんな状態なのか、この目で確かめないといけない」

「そうですね。見て回りましょうか」

お坊っちゃんと共にこの屋敷を見て回る事にした。

この秩序が喪失した無駄に広い屋敷を探索して、どんな状況か確認しないといけない。

そしてカイは銀糸が内蔵された黒い手袋を装着して、お坊っちゃんもカイの後ろに着いて行動を開始する。

夜桜が咲き乱れ、散りゆく中、屋敷の廊下を警戒しながら少年二人は歩く。二人の間に言葉はない。殺伐とした雰囲気が二人の口を閉ざしているのか、それとも他の因果があるのか。ともかく二人に会話はない。

ふと、戸が開いている部屋を見付ける。その部屋を二人は見て絶句する。部屋に灯りはなく薄暗い闇が支配しているが、完全に見えない訳ではない。

其処から微かに巫女装束を着た……、一般的な巫女タイプの服を着た侍女が服を裂かれ、身体を傷付けられ、血溜まりを形成しながら死んでいる。その様な侍女が何人も居る。

薄暗い闇が支配しているのに侍女から吹き出ている血が鮮明に二人の視界に入ってくる。澱みのある濁りに濁った深い紅。

これは常人に見せるには酷なようで、お坊っちゃんは巫女達の死体から目を逸らして口に手を当てている。吐き気を催したようだ。

そんなお坊っちゃんの様子にカイは気付き、声を掛ける。

「死体は初めて見たのか？」

「……、恥ずかしながら魔法の知識なら有るのですが、僕はこれまで一度も戦場に立った事が無いんです……。人を殺した事もなく、死体を見るのもドラマなどで、実際には……」

お坊っちゃんはポツリと呟いていく。裏の世界を『知識』としては知っていたが、『現実』としては知らなかったみたいだ。そんなお坊っちゃんは自分の命を懸けた戦いをした事がなく、ましてや生で死体を見た事がなかった。

初めて見た人間の死体、しかも残酷な殺され方をされている死体を見てしまったら、吐き気を催しても仕方がない。自分と同じ人間が無惨に殺されているのだから。

「……、ま、これが普通の人間の反応か」

疼いているお坊っちゃんを尻目に、カイは部屋の中へ入る。カイはこの死体を目にしても身体から色々な物を吐き出したい気持ちにはならない。

今更人間の死体を見たところで平常心で居られる。慣れとは恐いものだ。最初はカイも死体を見るのは億劫だったが、次第に時間が経つにつれて慣れていく。人間、異常とも思える場所に長く居れば異常に慣れるのだ。まるで狂っていくかのように。

だからカイは平気で侍女の死体を触れるし、べっとりと指に纏わりつく血も平気だ。

カイは一人の侍女の死体から出血口を探す。この侍女はどうやって殺されたのか、カイは気になったからだ。敵の武器が分かれば、ある程度の戦術は立てられる。敵の特性を分かればカイでも勝算は

作れる筈だ。

巫女装束ごしから指を這わせて傷口を探す。そして傷口を見つけたら今度は人差し指を傷口に突き刺す。

（武器は剣……、魔力がみたいな物が残っている？　この魔力って紋章の力じゃ……）

カイは気付く。この侍女の死体からこの世界の魔力ではない魔力、紋章の力の残滓を見付ける。

間違いない、此処に居る侍女達を殺したのは金髪の悪鬼、ユーバーだ。ユーバーの愛剣クリムゾンの刃で、侍女達を毒牙にかけたのだ。

となれば学園の生徒達が死んだという話もユーバーによるものか。ユーバーは人間で男も女も関係なく殺す。ただ『混沌』を求める為に……。

ズブリと侍女の死体から人差し指を引き抜くと、お坊っちゃんの元へと歩く。お坊っちゃんの表情が少し悪い感じがするが、今は気にしていられない。

「お坊っちゃん、今日中に旅館に帰れるか分からなくなった」

「……、どういう事ですか？」

「敵はこの世界でも相当ヤバい奴だ。お坊っちゃんは俺の偽者と旅館に帰ってくれるか？」

「……、まあ僕は転移魔法だけ特化しているのですが、他は全くなので篠宮君の助けにならないんですよ」

「……」

だったら何で此処まで着いて来たんだよ、とカイは内心愚痴を零す。別にカイを総本山まで送ってそのまま旅館に帰ってくれたら良かった筈。

それなのにこのお坊っちゃんは戦う力が無いくせに着いて来たのは、いったいどういう事か？

まあ今は考えている場合ではないので、カイはズボンのポケットから札を取り出して呪を唱える。すると札がカイと同じ姿形を取る。身長も体重も顔も髪型も、今の服装までもが『カイ』となっている。

「これと共に旅館へ帰ってくれ」

「ええ、分かりました。こちらの事は気にせず、篠宮君は戦いに集中してください」

「分かっているよ」

「それとちゃんと戻ってきてください。では」

お坊っちゃんは分身のカイと共に転移魔法で、さっさと旅館へと戻っていった。

この戦いが終わったらお坊っちゃんに色々と訊ねないといけないなとカイは思う。

ともかくカイはこの屋敷の探索を続ける。学園の生徒が殺されているなら、しっかりとこの目で確認しなければならない。

本当にユーバーに殺されたのか、それとも他の誰かに殺されたのか、そもそも死んでいるのか。しっかりと確認しないとならない。

だから急ぎ足で少女を捜す。

そして見付ける。無惨にだらんと転がっている三つの死体を。カイは膝を付いて死体を調べると、確かに死体の顔は少女そのもの。その顔に触れてみるとまだ人としての温もりがあるが、冷たさも帯びてきている。息もしておらず、心臓の鼓動がしていない。間違いなくこの少女達は死んでいた。

何故着物を着ているのか分からないが、この少女達が麻帆良学園の生徒なのだろう。

この三つの死体……、殺された三人とカイは直接面識は無い。だから悲しむ事も無ければ、悔やむ事も無い。何とも無情な人間だと思うだろうが、所詮人間なんて自分に関わってきた人間以外の人間が何処で死のうと、どうでもいいと思う生き物だ。

いちいち無関係の人間が死んだ事に悲しんでいられる程、綺麗な生き物ではない。

そして三つの死体にはそれぞれ剣で身体を傷つけられて、命を落としたという事が分かった。どれもこれも一撃で殺されている。一撃必殺。

もう間違いない、ユーバーが殺ったのだ。

ここでカイは思う。

此処に居なければ死ぬ事も無かったのに……。

何故関西呪術協会の総本山に居るのか分からないが、居なければ間違いなくユーバーの毒牙にかかる事は無かった。もし、此処に好奇心で来たのだとすれば……。

「好奇心は人を殺す……、ってか？」

カイはポツリと呟く。

好奇心が無ければ人は成長する事は出来ないが、行き過ぎた好奇心は危険を伴う。行き過ぎれば行き過ぎる程に……。

「……、まあ良いか。そろそろ向かわないと」

カイは立ち上がり、額に宿る未来の紋章に手を当てる。

「未来の紋章よ……、戦乱となる地を我に示せ」

カイの言葉に応えたのか、額にある紋章が青白く光り、カイの脳内に鮮明に映し出される。

其処は湖のような大きな場所で、大きな岩がぽつんと有る。それには何か大きな力を持った者が封印されていて、木乃香の魔力を使って封印を解こうとする者達がいる。

その者達は白髪の少年と、カイも存じない眼鏡を掛けた女、そして金髪の悪鬼、ユーバー。

これだけ分かれば場所も判明し、其処に向かう事が出来る。

「ユーバー、覚悟しておけよ。俺も人の事言えないけど、やっぱりお前は許せない」

カイは両の拳を握り締めながら言う。

別にユーバーに殺された少女達の仇を討つつもりはない。これはあくまでカイ個人の想い。カイよりも酷い残虐性を見せつけているユーバーを、これ以上放っておく訳にはいかないだけだ。

カイはこの部屋を飛び出し、未来の紋章が視せた地へと必死に脚を動かした。

戦いの渦中へ（後書き）

此処まで読んでいただきありがとうございます。

今回はお坊っちゃんも裏を知る人間だというお話です。転移魔法が得意なサポートキャラです。

カイの周りには裏の事を知る人間がなかなか居るようです。

次はユーバーと戦う話になりそうです。

次もこんな駄作を読んで頂けると嬉しいです。

ところでキーワードに“原作崩壊”と入れた方が良いでしょうか？

ユーバー戦1

総本山から何か儀式を行おうとしている場所までカイは、必死に息を切らせながら走る。

学園長の依頼を優先しつつ、私情を挟んで戦場へと向かう。

カイの目的は一つ。ユーバーをこの世界から追い払う事。そろそろユーバーにはこの世界から退場願いたいと思っているのだ。

ユーバーが表舞台に立って行動していると、余計な事が起こる。真の紋章と関係ないこんな世界で、真の紋章を巡った戦いを起こす訳にはいかない。

いや、この世界でレアンが未来の紋章を求めてカイに仕掛けているのだから、既に戦いは起こっている。取り敢えず出来るだけ他人を巻き込ませないようにしなければならない。

そんな戦いに今度はユーバーも参戦したら、もう収拾がつかない。だからここでユーバーをこの世界から追い出さなければならない。

しかしカイ一人でユーバーに勝てるだろうか？

昨日は場所が場所だったので上手く退けたが、今回はカイ自身の力で戦わなければならないだろう。もしそうなればカイに勝算は殆ど無い。

ユーバーには未来の紋章魔法はクリムゾンで封じられてしまうし、銀糸や札の魔法では致命的な傷を負わせる事が出来ない。薬を飲ん

で魔力が戻ったとしても、ユーバーに勝てる確率はやはり低い。

だったらどうするのか？

カイは走りながら独り言を呟く。

「未来の紋章よ……、俺の声が聞こえているなら聞いてくれ。もしユーバーとの戦いで俺が死にそうになったら、今回限りは俺の身体を貸してやる」

カイは自分の額に宿る未来の紋章に言葉を投げかけた。

カイは薄々気付いていた。先日の大停電の時、マリアと戦い意識を失ったカイが何故助かったのか。それは額に宿る未来の紋章の意思が、カイの表層部分に現れ、身体を乗っ取ってマリアを撃退した事を。それしか考えられる可能性しか無いのだ。、

だから今回も同じよう事になった時、未来の紋章の意思に任せようとしている。自分では勝てないが、『神と同等の存在』なら勝てると信じて。

『だったら今から代わってくれないか？』

突然、カイの頭に声が響く。男とも女とも取れるような声に、カイはよろめいて態勢を崩しかけながらも態勢を立て直し、額に手を当てる。

「いきなり表層に出てくるんじゃねえよ！　誰がいきなり変わるか！？」

『ふむ。それでは宿主様は死にかけるまで痛みを負う趣味が有ると？』

「ちっがう！　お前が俺の身体を乗っ取って戦うと、そこら一帯焦土と化すから戦わさないだけだ！」

『こないだは焦土と化さなかったが？』

「結果論だろうが！　つうかやっぱりお前が俺の身体を使ってたのかよ……。良いか？　お前の出番はまだ後だ。今は黙って深層に戻っていやがれ、バーカ！」

『馬鹿って言う方が馬鹿なんだがな』

うぎゃー、とこれから戦いに行く雰囲気を壊しながら発狂するカイ。

未来の紋章の意思はカイの深層へと戻り、カイがいくら呼び掛けても反応はしなくなった。

このように未来の紋章の意思が表層に出てきている場合は、カイは未来の紋章と話をする事が出来る。ただ未来の紋章の意思が表層に出ている時は、カイの精神疲労が激しく、なるべく深層に留まってもらっている。

（何でこんな馬鹿な事をやってるんだろ……）

ふと、カイは寂しく思う。端から見れば一人で怒って喋っているイタい人にしか見えない事に気付く。これから命を懸けた戦いをするのに、何でわざわざ自分から士気を下げるような真似をしている

のだろうか？

ともかく考えても仕方ないので今は戦場となる場所へと向かう。

その場所へと向かっている途中、遠くから喧騒の音が聴こえる。

ドガンと普通の日常では聴かれないその音は、紛れもない戦いの音。

遠くの方で誰かが戦っている。

「……、少し見に行ってみるか」

カイの目的とする場所ではないものの、少し気になった為、方向転換してその場所へと向かった。

「てやあぁッ！！」

「奥義、雷鳴剣！」

現在召喚された鬼達と戦っている二人の少女が居る。

名前は神楽坂明日菜と桜咲刹那。

神楽坂明日菜は長袖のTシャツにスカートと至って普通の服装だが、何故かハリセンで鬼達と戦い、これまた何故かノーパンという、端から見たら変態的な趣味を持っているように見える。

対して桜咲刹那は白のカッターシャツに赤い校章が入ったネクタイ、赤いプリーツスカートと麻帆良女子中の制服を着て、小柄な体には似合わない野太刀を巧みに操って鬼達と戦う。

一〇〇近く居る鬼達と対等に渡り合っている少女達は、実に凄いと思える。いくら下級の鬼達だからと言って、二人だけで対等に渡り合えるのは感嘆に値する。

ましてや神楽坂明日菜はネギ・スプリングフィールドが麻帆良学園に来るまで普通の一般人だったにも関わらず、持ち前の才能と一撃で召喚された鬼を還すハリセンで戦えているのだ。必死に修行して、訓練して、やっと魔物と戦える……、そういった人達を嘲笑う才能を明日菜は持っている。

全く羨ましい限りだが、天賦の才を持っていたとしても鬼達も相当の経験を持っている。

「ぎゃ、きゃあああッ！！」

黒い翼を持った鳥の形をした人外が明日菜に迫り、明日菜のハリセンを剣で弾いて明日菜の腹に蹴りを入れる。弾丸のように蹴り飛ばされた明日菜は一〇メートル後ろの岩に身体をぶつけ倒れる。

「む……烏族！？　明日菜さん！！」

明日菜が危ないと気付いた刹那は駆けつけようとするが、狐の形をした人外が妨害して、明日菜の元に駆け寄れない。

刹那はこの狐に舌打ちする。刹那の脳裏に浮かぶは女のような顔をした少年。少年が裏の仕事をする時はいつも狐の面をしていたので、妨害してくる狐と重ね合わせてしまう。

刹那はあの少年に対して良い感情を持ち合わせていない。最初に会った時から『半デコ』と言われ、カチンと頭にきてその少年に刃を向けた。だがその少年には未来を見通す力があり、剣では一度も当てる事さえ出来なかった。それが刹那にとって悔しかった。

未熟とはいえ彼女が扱う神鳴流剣術が、なよっとした少年に一撃も当てられなかったのだ。それから幾度となく勝負を挑んでいるが、一方的に負かされている。魔力が極端に少なく気もない弱っちい少年のくせに、一撃も当てられないのが悔しい。

（くそ、忌々しい女男め。今頃あいつの顔が思い浮かぶとは腹が立つ！）

刹那の頭の中ではゲラゲラと嘲笑っている少年の姿が浮かび上がる。意地汚く自分だけが生き残る事を考えているあの少年を……。

明日菜の方を見れば烏族に腕を掴まれ、宙吊りにされている。やはり一般人故か、こういう時の対処法が分かっていない為、烏族から抜け出せないでいる。

そして刹那は狐の人外によって明日菜を助けにはいけない。

絶体絶命かと思われたその時、ヒュンと何かが空を切り裂き、明日菜を掴み上げていた烏族の首がスパッと吹き飛ぶ。

「……え？」

烏族の手から解放され、地面に尻餅をつく明日菜は、今何が起こったのか分からなかった。ただ目の前には烏族の首が転がって、塵となって消えていく光景は映る。明日菜はただただ混乱するしかなかった。

そして刹那は月の光で微かに光る銀の糸に気付き、その糸を目で追っていく。辿り着いた先、明日菜が凭れている岩の上には一〇本の銀糸を垂れ流した、黒のワイシャツに紺色のジーパンを穿いて普通のスニーカーを履く少年の姿が在った。

「やあ、随分苦戦しているじゃないか。らしくないな、桜咲刹那」

黒髪の少年は重苦しい戦場には似つかわしくない軽い口調で刹那に話し掛ける。

「貴様は篠宮カイ！　何故貴様が此処に!?」

「何故って学園長から依頼されたから此処に居るんだけど？」

「……、くっ、学園長は何故こんな奴を……」

「……え？　何で篠宮君が此処に？　ってかもしかして篠宮君も魔法使い……？」

刹那が学園長に不信感を抱いている頃、明日菜は明日菜で頭が混

乱している。

悠々と佇んでいるカイの姿を見上げて、明日菜はカイも魔法使いなのではと疑っている。そんな明日菜にカイは目を細めて怪訝に思いながら見下ろす。

「それはコッチの台詞なんだけど？　なに？　君も実は魔法生徒でしたーってオチ？」

「ち、違うわよ！　私はただこのかを助けたくて戦っているっていうか……」

「……戦っている、ね……」

明日菜の言葉にカイはつまらなそうに息を吐く。

「それよりも篠宮君こそどうなのよ？」

「俺？　俺は今この場所に居る事こそが証明なんだけど……、良いよ、確実な証明を見せてあげるよ」

明日菜の疑問を解消出来るように、カイは両腕を広げて額の紋章を青白く発光させる。

「桜咲に一般人Ａ！　其処に居ると巻き込まれるかもよ？」

「明日菜さん！　今すぐ此処から離れて、あのクソ野郎の後ろに行きましょう！」

「え！？　いったい何が起こるって言うのよ！？　ってか篠宮君の

額が光ってるんだけど何で!?　それより刹那さん、言葉遣いが悪くなってる!」

刹那に促され明日菜は色々と叫びながらもカイの後ろへと退避する。刹那と明日菜がその場所から離れたのを確認したカイは、これで遠慮なしに群がる鬼達を葬る事が出来る。

「おい姉ちゃん。何やるつもりか知らんけど、このまま黙って見てるワシらではないで!」

カイが登場してから今の今まで黙って見過ごしていた鬼達が動き出す。何となく優しさを感じた鬼達に対して、カイは不敵に笑い、

「我が真なる未来の紋章よ。その力を我に示せ!」

青白い光が一層輝きを増し、そしてレーザーのような野太い光線が額から一直線に放たれる。カイの直線上に居た鬼達は青白い光線に呑み込まれ、一瞬にして消え去った。

たった一撃で約四〇もの鬼を葬り去った。その威力を見て明日菜は唖然とする。

「な……、何なのよ今のレーザーは!?　あれも魔法だって言うの!?　ってか篠宮君て強いんじゃない?　弱いって事でも有名なのに……」

明日菜の篠宮カイというイメージは女顔で女の子らしく、一部の女子から嫌われている男の子。それから朝倉調べによると喧嘩については弱いらしく、負けてしまう事が殆ど。

絶対に戦闘なんて出来ないイメージが有ったので、今のように敵を圧倒するのが意外に感じるのだ。

そんなイメージを持っている明日菜に、カイは振り返って言う。

「良いかい、一般人。確かに俺は身体能力は麻帆良に住んでる人間の中でも下位だし、魔力や気も無い。喧嘩なんて同級生にも負けてしまう。でもね、そんな俺でも普通の喧嘩に今の魔法を使うほど、おかしくなったつもりは無いんだよ」

「それはそうだけど……、って何あの光!?」

ふと、明日菜は気付く。祭壇が有る場所から眩しい程の光の柱が上がっている事に。

カイもつられて見ると確かに天高くまで光の柱が立ち上っていて、儀式が始まってしまったのだろう。

「まずいな……、時間を無駄に使ってしまったか」

ああ、こんな事なら寄り道せずに祭壇に直行すれば良かった、と後先立たない後悔をするカイだが、今は祭壇へと急がなければならない。

「それじゃお二人さん、雑魚掃除は頑張って」

「ちょ、ちょっと待ってよ!?　手伝ってくれないの!?」

今にも光の柱の元へ向かおうとしているカイに、明日菜は手伝ってと止める。明日菜の中ではカイは増援として自分達と一緒に戦っ

てくれるものだと思っていたのだろう。

カイの真の紋章魔法は絶大な力を持つ。使い方を誤れば世界を壊せる程に。そんな力を使えるカイなら明日菜達を手伝うのが道理だと明日菜は思っているようだが、そんな事はカイには通用しない。

「何で俺がやらないといけないのさ？　二人で十分なんじゃない？」

「私達二人だったらいつか終わっちゃうわよ」

「君はそうかもしれないけど、桜咲は大丈夫なんじゃない？」

「当たり前だ。こんな奴ら、お前が居なくても何とかなる」

「だってさ。だから大丈夫なんじゃない？」

「でも……」

「大丈夫だよ、心配しなくても。数分後には俺よりも心強い助っ人が来るから」

「え……？」

カイの言葉に明日菜は首を傾げる。

明日菜は知らないのだ。カイが未来を視れる事に。

カイにはこの数分後には今のカイよりもずっと強い、最強の助っ人が来る事を未来視していた。だから自分がこの場に居なくても何とかなるのだ。

刹那もカイの未来を視れる力を知っているので、不服ながらもカイの言葉を信じている。

「それじゃ俺は向こうに行くから。じゃ、頑張って」

そう言ってカイは早々と祭壇へと向かう。明日菜がカイを呼び止めようとするが、そんな事で止まる筈もなくカイは去っていった。

不気味な夜空にまるでニヤリと不敵な笑みを浮かべているように見える三日月の光を受けて、森の中をカイは走る。時折木々の間から見える三日月が、何か憎々しい。

壊してしまいたいなとカイは思ってしまうが、真なる月の紋章を宿した妖怪オババに喧嘩を売ってしまっているようで、やむなく思う事だけで胸の内に留めておく。

雑念が纏わりついているカイだが、その雑念も一気に吹っ飛び、走っていた足も止める。カイの前方に何も無かった空間から黒ずくめのユーバーが現れたからだ。

カイはジーパンのポケットから悠里から貰った薬を手中に掴む。

「何だ？　待ち伏せですか、ユーバー？」

警戒心剥き出しに殺意を振りまきながらカイはユーバーに話し掛ける。

「ふん、来るとは思っていたぞ。この地の伝説の鬼神とやらが召喚されては、貴様ぐらいしか止められないだろうからな」

「鬼神？」

ユーバーの言葉にカイは訝しむ。何かを召喚するつもりなのは分かっていたのだが、それは鬼神なのだとユーバーは言う。

ユーバーは黒い帽子を押さえつけ、

「とんでもない大きい化け物を召喚するつもりらしいな。それを使って東の西洋魔術師を滅ぼすつもりらしい。フッ……、虫けらの考える事は分からん」

女が何故鬼神を木乃香を使って召喚するのかを、ユーバーは丁寧に語ってくれた。相変わらず人間を『虫けら』と呼ぶのは変わらないが。

ともかくユーバーの言葉が真実ならば麻帆良は大変な事になってしまう。下手したら麻帆良学園は消え去ってしまうかもしれない。

今のカイには麻帆良学園を消滅させる訳にはいかないので、何と

しても食い止めなければならない。

今麻帆良学園を潰されたらカイの受けたアンチスキルスロットの呪いを完全に解く術を失ってしまう。だから鬼神を使って麻帆良学園を潰させる訳にはいかない。

「なる程、お前がフェイトと契約したのは、その鬼神を使って混沌を生み出そうとしているからか」

「ふん、そういう事だ」

「相変わらず歪な事をしやがるな」

混沌を生み出す為なら何だってやるし、誰にでも着くユーバーに呆れ気味に息を吐く。

それよりも、とカイは話を変える。

「ユーバー、”お前この世界にどうやって来た?”」

カイがユーバーに訊ねたのは”どうやってこの世界に来たのか”という事。妙に真剣な表情で聞いてくるカイにユーバーは訝しむ。

いったいその問いの答えを聞いて何になるのかと。

「そんな事を聞いてどうするつもりだ?」

「どうもしないさ。ただ人外だからと言って、そう簡単に異世界へ行ける訳ないから。だからどうやってこの世界に来たのか気になっ

たんだよ」

「……」

ユーバーは一時沈黙するが、フッと口角を上げて、

「『トビラ』を使った。あれを使えば『百万世界』を自由に行き来出来るからな」

ユーバーはどうやってこの世界に来たのかを答えた。その答えにカイは少し目を見開く。

「『トビラ』がこの世界にも有るのか？」

「当然だ。各世界に一つは有るからな。……そんな驚くという事は貴様は違う方法で来たと言うのか？」

「あー……、まあなあ……」

ユーバーに鋭い指摘をされ、カイは彼方の方へ視線を向ける。カイにとって意図してこの世界に来た訳ではないし、この世界に来る経緯が嫌な思い出しかない。

この世界以外にも『百万世界』と呼ばれる程、無数の異次元世界が存在するが、異世界間の移動はそう簡単ではない。いや、むしろ難しい。

異世界に行く為には『トビラ』を使って行くのだが、その制御が難しい。一歩間違えれば命を落としてしまう程に。

「それでその『トビラ』は何処に有るんだよ？」

「これ以上答えるつもりはない」

カイの質問をユーバーは一蹴して、袖から二振りのクリムゾンを取り出す。

そしてユーバーは異様な殺気を放ち、

「貴様は此処で死ぬんだからな！」

地面を蹴って弾丸の如くカイに接敵する。

カイとユーバーの距離は一〇メートル程有ったのだが、一瞬にしてその距離を縮める。カイも急いでカプセルの薬を口の中に放り込み、飲み込む。薬の効果が現れるまではユーバーの双剣を躱し続けなければならない。

未来の紋章の力でユーバーの攻撃は躱せるのだが、カイの攻撃がユーバーに届く事がない。銀糸でユーバーの身体を切り刻もうとも、見切られてしまい通用しない。

「貴様の糸なぞ、通用するとでも思っているのか？」

「別に通用するとは思っていない。ただ少し時間が欲しかっただけだ」

カイはバックステップで後退してユーバーと距離を取る。

（ようやく薬が効いてきたか）

少し時間が経って薬が効いてきたカイに魔力が戻ってくる。身体の熱が湧き上がり、一種の高揚感がカイを包み込む。

この高揚感にカイは笑みを零しそうになるが、それを堪えてユーバーを睨み付ける。ユーバーからしたら今のカイは不敵に笑みを浮かべているように見えるので、面白くない。

「何がおかしい？」

ユーバーの問いにカイは首を横に振って、

「別に？　ただこれからどうやってお前を殺してやろうかと考えてるだけだ」

「……、虫けらの分際が！！」

くっくっと笑うカイに頭に来たのか、ユーバーは激昂して一気にカイとの距離を詰める。

カイはもちろん視えているので、ユーバーの攻撃は怖くないから避けれる。そりゃ紋章魔法を撃たれたら流石にヤバいが、ユーバーが紋章魔法を持ってはいない筈だ。

（……あれ？）

此処でカイは疑問に思う。

（そう言えばユーバーって五行の紋章のどれかを持っていたような……）

五行の紋章……、火、水、風、土、雷の五つで、ユーバーはこの内のどれかを宿していたようにカイは怪しんでいる。カイとユーバーが本来居るべき世界で戦った時、五行の紋章を使っていたとカイは記憶している。

そして未来を視てカイは凍り付く。

（ヤバい……、雷鳴の紋章、持ってるじゃないか……）

カイがそう思っている所にユーバーがいつの間にか左手を光らせている。

「いちいち躱してんじゃねえぞ、虫けらが！！」

詠唱を早くして完成させたユーバーは左手を翳して、雷鳴の紋章を発動する。ユーバーの左手から幾つもの雷撃がカイを襲う。

「なんで雷鳴なんて宿しているんだよ！？」

カイは文句を言いながら避けようと走るが、雷撃は追尾性能を持っていて逃げられない。だからカイは仕方なく逃げる事を止め、雷撃を迎え撃つ為に前面に魔法障壁を展開する。

魔力が回復したカイならこの程度の紋章魔法をレジストする事も可能だ。カイは歯を食いしばって魔法障壁を展開すると、バチンと激しい音を立て雷撃を防ぐ。

幾つもの雷撃を防いだ瞬間、辺りに薄暗い闇を切り裂く白い閃光が眩く走る。雷撃を防いだカイは次にユーバーがどのような行動に

移るかを視る。

次にユーバーは『三人』に分裂して、カイに遅い掛かってくる。

……三人？

「……三人って……」

カイが嫌な予感に胸を馳せていると、雷撃が止んで辺りに薄暗い闇が戻る。ふと、ユーバーの方を見ると既に三人に分裂していて、不敵な笑みを浮かべている。同じ姿のユーバーが三人も居ると、恐怖心倍増だ。

「いくら未来を視れても手数の多い攻撃は躱せはしないよな？」

ユーバーは八房の紋章を用いて三人に分裂した。どれもこれもが実体で、それぞれ意志を持っている。

「……、こんなの無理ゲーだよ……」

これから襲い掛かるユーバーの攻撃にカイは絶望感を抱いた。一人なら楽に躱せるのだが、ユーバーが三人になると六本のクリムゾンがカイを襲ってくるのだ。いくらカイが魔力を回復したからって躱せる筈がない。

ジリ、ジリっとカイは一歩ずつ後退し、ユーバーは一歩ずつ前進する。その際、カイは転移魔法符をポケットから取り出す。ここは一旦この場所を離れようと思ったのだ。

そしてジリ、ジリっと後退していたカイは後ろの木に止められ、

これ以上後退出来ない。それと同時に三人に分裂したユーバーは、一斉にカイに襲い掛かった。

その瞬間、カイは急いで転移魔法符を発動してその場から消え去った。攻撃を空振った三人のユーバーはそれぞれ舌打ちして、闇へと溶けていった。

逃げたカイを殺す為にユーバーも後を追い始めた……。

転移魔法符を発動してユーバーから逃げたカイは、いまだに森の中に居て、一度態勢を立て直す為に気配を消して木に凭れかかる。

「何なんだよ……、三人に分裂って。ラスボスじゃん。勝てねーよ」

『だから言っただろ？　最初から変われって』

カイがユーバーに対して一人愚痴を零していると、突如未来の紋章の声が頭に響き渡る。

「いきなり出てくんなって言っただろ？」

『それよりも宿主様には奴の相手をするには荷が勝ちすぎてるようだな。さっさと入れ替わる事をお勧めする』

「出来るか。さっきも言ったけどお前が戦うと、色々と壊すだろ？」

『安心しろ。宿主様には迷惑掛けないようにする』

「信用出来ないです……」

未来の紋章と話をするのも疲れたカイは夜空を見上げる。いつユーバーが襲い掛かってくるか分からない状況で、呑気に夜空を見上げるのは気がどうかしている。

それでも今は気分を落ち着かせる為に夜空を見上げる。

「……、ん？」

ふと、祭壇の方から猛々しい気配が現れ、カイは祭壇の方を見る。其処には約五〇メートル程の高さがある、顔が二つ、手が四つある、白く輝く鬼神が立っていた。

ユーバーが言っていたように正しく鬼神であり、二〇〇メートル程離れているカイの位置からでも圧倒される。

「凄いな……、これを倒すには未来の紋章に身体を委ねるしかないか……」

『そういう事だ。さっさと身体を渡せ』

「命令されるのは癪なんだけど……」

あの鬼神を倒すには自分では駄目だとカイは悟る。未来の紋章の意思に任せるしかないと判断して、カイは目を閉じる。

その判断がいけなかった。

「駄目だな、その判断は命取りってな」

突然カイの背後に現れた三人の黒ずくめの男の凶刃が、カイの全身を貫いた。

ユーバー戦１（後書き）

とりあえず今回はここまでです。

未来の紋章は意思が有るので話す事は出来ます。隙あらばカイの体を乗っ取ろうとしています。

それと八房の紋章ですが名前だけしか判明してませんので、八房の紋章の能力は作者のオリジナルです。

あと『トビラ』の事も私、ティアクライスをやっていないので、間違っているかもしれません。その辺について教えてくださると有り難かったりします。

しかしこの主人公、雑魚には強いですが、強敵には弱いですね。

今後もボコボコにされそうな気がします。

ユーバー戦2

「……あ？」

カイはゆっくりと視線を下ろして何が起こっているのかを確認する。いや、確認するまでもない。全身が灼けるような痛みが襲っているのだ。

これは剣によって身体を貫かれた痛み。全身を貫かれているが、心臓を貫かれていないだけ幸いか。流石に心臓を貫かれれば不老のカイも死ぬ。人間みたいに死ぬ。

ユーバーなら心臓を狙うのは造作ない事なので、敢えて外したという事か。

「おい、虫けら、何か言い残したい事は有るか？」

ユーバーは冷たい残虐な視線でカイを見下ろすが、カイは全くの無反応。人間らしく痛みに悶え苦しんだりするかと思っていたが、身体を貫かれた少年は全く動じない。普通の人間なら死んでいるような傷なのに。

ユーバーの言葉にも反応しない為、ユーバーは舌打ちして剣をカイから引き抜く。剣を引き抜いた瞬間、ドバッと血が噴き出す。これは動脈も損傷しているだろう。

ユーバーはカイの血で紅く染まった剣をヒュッと薙いで、血を落とす。

次いで剣を引き抜かれ傷口からドバドバと血が噴き出しているにも関わらず、カイは呆然と突っ立っていた。普通なら地面に崩れ落ちるものだが、カイはずっと突っ立っている。不気味に思える程に。

これにはユーバーも目を細めてカイの動向を伺う。あまりにも不可解なカイの状態に、ユーバーも警戒せざるを得ない。

すると突然カイを中心にドクンと地面が脈動する。”まるで何かに憑依されたかのように”。三人のユーバーはマズいと本能が警鐘を鳴らすので、急いでカイにトドメを刺そうと接敵する。

だがユーバーがカイにトドメを刺せる事はない。

カイはゆっくりとユーバーの方へ振り返り、

「くたばれ、八房の眷属が」

その言葉と共にカイは中心とした周囲一〇メートル程に光の爆発を起こす。ユーバーを巻き込んで。

「――――クソッ！　今のは何なんだ……！？」

謎の光の爆発に巻き込まれたユーバーは身体を引きずりながら敗走していた。三人に分裂していたユーバーも、今は一人になっている。

思った以上のダメージを負ってしまったユーバーは、先程の爆発について考える。

あの光の爆発は紋章の力を感じた。真の紋章の威力そのままに。

ユーバーには紋章の魔力を封じた剣、クリムゾンを有している。紋章の魔力を封じれるクリムゾンなら今の爆発も封じれる筈。それが真の紋章魔法だったとしても。

それでもユーバーがダメージを負ったという事は、光の爆発はクリムゾンの許容量以上の魔力を含有していたのか。それとも他に理由が有るのか、ユーバーには分からない。

だが間違いなく光の爆発を引き起こしたのはカイだ。カイなのだが様子がおかしかった。雰囲気もおかしかったのだが、目が変わっていた。

ユーバーの右目みたいな紅い蛇目みたいに、カイの両目も蛇の目になっていた。〝完全に人外になったかのように〟。

だとしたら考えられる可能性は一つ。

「未来の紋章に身体を渡したのか……」

そう、カイが自分の身体を未来の紋章の意思に渡したのだ。その実態がカイの目に現れた。

馬鹿な事をしたな、とユーバーは呟く。その呟きに上空から声が降りかかる。

「そうだな、この宿主は馬鹿だからな。まあ楽で良いが」

突如降りかかった声にユーバーは上へ振り向くと、其処にはニヤリと口角を上げて嘲笑うカイの姿が在った。だがその姿が異常。背中から青白い輝く翼が生えていた。

片翼一〇メートルはある輝く翼の様は正しく天使のよう。だけどどう見ても天使のようには見えない。今のカイに天使なんて似合わないのだ。

傷の方はそのまま血を垂れ流しにしているようだが、苦痛の表情は浮かべていない。特にユーバーに貫かれた身体を回復するつもりも無いみたいだ。

その異様とも思える存在にユーバーはぐっと睨み付ける。

「呪われし紋章め……、化身しやがって……！」

「化身？　馬鹿を言うな。この翼は我の一部だが宿主の身体はそのままだ。化身などではない」

「……、その姿となったからには、俺もろともこの場所を消滅させるつもりか？」

「宿主様には止められているが、それでも貴様を消滅出来れば我は構わない。貴様だって混沌を生み出すのは本望だろう？」

青白い翼を羽ばたかせ話すカイ……、未来の紋章はユーバーを殺せるなら、この場所を消滅させても良いと考えている。

カイの言葉をそれなりに考慮しつつも、未来の紋章はユーバーを殺す為に土地の破壊も問題ないと思っているのだ。

そんな事をすれば混沌は生まれるが、それは小さな事。今はユーバーを殺す事が重要で、小さな混沌が生まれようが関係ない。

くっくっ、と笑いを噛み殺し、青白い翼が生えた未来の紋章は両腕を広げる。

「そろそろお喋りは終いにしよう。貴様は此処で死ぬべき存在だからな！」

そう謳うように言った未来紋章は直径五メートル程の光球を生成する。神々しい物ではなく白濁とした気持ち悪い光球を生成している。

また爆発を起こすつもりか、とユーバーは直感し、急いで未来の紋章の元に飛ぶ。ユーバーは浮遊術も使えるのか、空に浮かぶ事も可能としている。

再び弾丸の如く接敵するユーバーに未来の紋章はニヤリと口角を上げて、嘲笑う。

「愚かな悪鬼よ。身の程を思い知れ」

白濁の光球が完成し、未来の紋章は弾丸の如く近付くユーバーに光球を放つ。ユーバーは自分に向かってくる白濁の光球をクリムゾンで斬ろうと腕を振るう。

ユーバーのクリムゾンが白濁の光球を斬りに掛かった瞬間、白濁の光球はユーバーを巻き込んで爆発した。

「――な、んだ、と……！？」

爆発に巻き込まれ地面に落ちていくユーバーは、苦い顔を浮かべる。未来の紋章が造った光球ならクリムゾンで消せるとユーバーは思ったのだが、光球を消す事は出来なかった。

紋章の魔力を封じる剣……、ならば紋章の魔力で出来た光球を消す事くらい造作ないものだ。それなのに光球を消すどころか爆発してしまったのが解せない。

地面に落ちていくユーバーを冷酷な目で見下ろす未来の紋章は、今度は青白い翼が一層輝きを増す。そこら辺にある魔力をかき集め、魔力を青白い翼に収縮する。

「まだまだ宿主の身体が受けたダメージには割に合ってないんだ。もっと付き合ってもらうぞ」

そう言う未来の紋章は魔力を集めた青白い翼から、地面に落ちていくユーバーに向けて青白い光線を放つ。カイが下級の鬼達を葬った紋章魔法よりも太く、威力の高い光線がユーバーに近付く。

「――――チッ！」

目前に迫った青白い光線を今更転移魔法で回避しようもないので、ユーバーは魔法障壁を展開して無理矢理耐えようとする。魔法障壁を展開した瞬間、光線はユーバーの魔法障壁を貫通しようと激しく火花を散らしている。

バチンと光線と魔法障壁が音を立てて、激しい攻防が繰り広げられている光景を見て、未来の紋章は目を細くする。

「ふむ、耐えるか。ならば出力を強くしてみるか」

ユーバーが耐えるのが面白くないのか、未来の紋章は更に両翼から放たれている光線の威力を強くする。すると強化された光線はユーバーの魔法障壁を食い潰そうと、魔法障壁が壊されていく。だがユーバーにとって魔法障壁が壊されようが構わなかった。

ユーバーには魔法障壁で光線を一時的に防げた事が活路に繋がった。

魔法障壁が光線を防げたという事で少しの時間が出来た。その時間を使って転移魔法を発動して、未来の紋章の後ろに回り込めるからだ。

だからユーバーは一時の出来た時間で転移魔法を発動し、未来の紋章の後ろに回り込む。

しかし未来の紋章は未来を司る紋章。未来を視るのは造作ない事でユーバーの転移場所も判っている。ユーバーが二振りの剣で斬りかかるが、未来の紋章は青白い翼で受け止める。

「なにっ!?」

青白い翼で軽々と受け止められ、ユーバーは驚く。

「何も驚く必要は無いだろう？　我と貴様の実力を考えれば分かる事だろうに。たかだか眷属の分際で我を殺せると思う事こそ愚かなんだよ」

未来の紋章は嘲笑うように言って、

「そろそろ終焉としようか」

途端に冷徹の表情を浮かべた未来の紋章は腕を振り上げ、軽く振り下ろす。

たったそれだけの動作でユーバーは何倍もの重力に引かれたかのように地面に叩き付けられる。ドゴン、と爆音を辺りに響かせながら地面に叩き付けられたユーバーは、立ち上がる事さえ出来ない。今も尚、何倍、何十倍もの重力に圧されているからだ。

苦痛の表情を浮かべるユーバーを空中から眺めている未来の紋章は、フッと口角を上げて再び両翼を輝かせる。

トドメを刺そうと思っている未来の紋章を尻目に見ているユーバーは、苦悶の表情を浮かべながら疑問に感じていた。

（未来の紋章がこんな事出来るのか……！？）

未来の紋章が何故此処まで出来るのか疑問に思っていた。

ユーバーの中では未来の紋章という存在は一部の間では知られている通り、真なる二十七の紋章の中でも異質なのは分かっている。『未来を視通せること』、『未来を変革出来ること』、そして『人間にとって最悪の未来を望んでいること』。

この三つの要素についてはユーバーも分かっているのだ。だが未来の紋章に青白い翼がある事も、重力を操れる事も、明らかに未来を司るものとは管轄外だ。

それなのに未来の紋章は青白い翼を使って攻撃と防御も出来て、ましてや重力を操れるなど、おかしい事だらけだ。

（……、未来の紋章については謎が多すぎる。真の紋章にはまだ俺の知らない事があると言うのか……？）

真の紋章についてはユーバーもカイも含めて殆どの人間が知らないこと。だからユーバーが分からなくても仕方ないと言えば仕方ない。

今ユーバーにとっては未来の紋章の攻撃から命からがら逃げ切ること。

無様に地面に臥せていながら未来の紋章について考えていたユーバーは、尻目にトドメを刺そうとしている未来の紋章を見る。

未来の紋章は両腕を広げ、大気を震わせながら先程の白濁の光球を生成している。だが大きさが全く違う。先程の光球の約五倍ぐらいの大きさを生成している。それに比例して威力も数倍に引き上げされている。

（……、ここまでか）

ユーバーは諦めの表情を浮かべる。

完膚なきまでに、容赦なくユーバーを滅せようとしているのだ。その光球を一撃でも受ければユーバーは間違いなく死ぬ。魔法障壁を展開して防御するとか、そういうレベルではない。

それにユーバーを殺すどころか、周辺地域をも消滅に追い込みそうな威力はある。

「これで終わりだ、八房の眷属よ。塵以下となって消滅してしまえ」

そう謳った未来の紋章は何の感情に抑揚もなく、無差別テロよろしくと言った感じに完成された白濁の光球をユーバーに放った。

轟ッ！　と、空を掻き裂いてユーバーに近付く白濁の光球。

その白濁の光球は何の妨害もなく、地面にぶつかり爆ぜる。白濁の光球が爆ぜた瞬間、辺りに光が照らされ、まるで昼のような明るさが宿った。その状態が数秒は続いたが、直ぐに夜の姿へと変える。

白濁の光球で砂煙などが舞っていてユーバーの姿が全く見えないが、未来の紋章はあまり良い表情は浮かべていない。いや、苦い表情を浮かべている。

「……チッ、逃げられたか……」

そう唾を吐くように呟いた未来の紋章は溜め息を吐く。折角トドメを刺そうと攻撃したのに、逃げられてしまっては意味がない。

白濁の光球がユーバーに激突する前にユーバーは転移魔法で撤退していた。重力で押し潰されていようとも転移魔法は使用出来たようで、逃げる事が出来たのだ。

ユーバーはカイを殺す事を諦め、逃げる事にしたのだ。諦めて死のうとした訳ではない。

もう周りにユーバーの気配も感じないので、完全に逃げ去ったのだろう。

「……、我が敵を逃がすとは……ってあの女も逃がしているから、我は駄目ではないか」

ユーバーを逃がした未来の紋章は青白い翼を消して、地面に降り立つ。地面はユーバーが居た場所を中心に窪みが出来ていて、地面に降りでクレーターのよう。攻撃範囲だった周りの森も根こそぎ消滅していて、まるで荒野のよう。

「……、流石にやりすぎたか？」

未来の紋章は髪を掻いて、

「宿主様には黙っておこう。色々と愚痴を零されるのは面倒だ」

もうカイの言葉なんか無視して色々と破壊してしまった為に、未来の紋章は黙っている事にした。きっと今の戦闘をカイが見ていたら未来の紋章を止めようとしていただろう。

だが今はカイの意識は深層で眠っているので、戦闘を見ている事は無い。だから黙っている事にしたのだ。

「さて、これからどうするか……」

未来の紋章はこれからの行動を考えていた。カイと未来の紋章が入れ替わる直前に見せた鬼神を見ていたので、あれもついでに滅ぼしておくかと鬼神が召喚された祭壇を見るが、今はもうその姿は無い。

あの鬼神はそう簡単に倒せるようなものではないと未来の紋章も思っていたのだが、誰がやったのだろうか？

未来の紋章は『未来』と『過去』を司る紋章。その気にならなくても誰が鬼神を倒したか分かる筈なのだが、今はそんな気分ではない。

いや、そうではない。数分後の『未来』に気になる事が視えたからだ。それはカイを圧倒した者が現れるということ。

カイの代わりに決着を着けようと、未来の紋章は『篠宮カイ』になりきって祭壇の方へと歩き出す。

「あの女は潰さないとならないな」

その頃、祭壇ではフェイトの石化魔法を掠めてしまったネギは倒れてしまった。徐々に石化が進行していき、遂には首もとまで石化が進行してしまった。

ネギの魔法抵抗力が高い為に石化の進行速度が非常に遅く、この

ままでは首が石化してしまったら呼吸が出来なくなってしまい、窒息死してしまう可能性がある。

「ど、どうにかならないのエヴァちゃん!?」

オロオロ、とネギの保護者役をやっている明日菜は、隣りに居るエヴァンジェリンに訊ねる。そのエヴァンジェリンも分からずオロオロと戸惑っている。

「わっ、わわ、私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。不死身だからな」

「そんなっ……」

エヴァンジェリンは不老不死の吸血鬼。従って回復魔法を覚える必要がなく長い時を生きて来られた。石化を治す魔法なんてエヴァンジェリンには必要無かった。

「お嬢様……」

「うん」

何か良い方法が無いのかと模索している時、刹那が木乃香に目配せする。木乃香もそれに応え、明日菜に提案する。

「あんな、アスナ……」

「え?」

「ウチ……、ネギ君にチューしてもええ?」

言葉だけで考えると状況的におかしい事を言う木乃香に、周りに居る少女達は一瞬呆然となる。

それでも明日菜は一足先に我に返り、木乃香に詰め寄る。

「なっ、何言ってんのよ、このか！　こんな時に――」

「あわわ、ちゃうちゃう、あのホラ、パ……、パクテオーとかいうやつや」

「え……」

「みんな……ウチ、せっちゃんに色々聞きました。……ありがとう。今日はこんなにたくさんのクラスのみんなに助けてもらって……ウチにはこれくらいしかできひんから……」

木乃香には類い希なる魔力をその身に秘めている。そして木乃香には治癒能力が特化している才能をも秘めている。

仮契約をする時に対象者の潜在力を引き出す効果が有るので、それを使って石化進行中のネギを治そうと言うのだ。

木乃香はネギの元に身を屈めて唇を近付ける。その裏ではオコジョ妖精が仮契約の魔法陣を異常な速さで描いていく。

「ネギ君……しっかり」

そして木乃香の唇とネギの唇が合わさった瞬間、仮契約の光が辺りを照らし出した。

するとネギの石化が退いていき、意識も戻っていく。

「よかった……、無事だったんですね……」

この瞬間、少女達の間で歓喜の声が上がった。ユーバーによって犠牲になった少女達がいるが、それでもみすみす死んでしまう少年を助ける事が出来たのだ。少女達にとって嬉しい事なのだろう。

エヴァンジェリンや真名も溜め息を吐きながらも、素直に嬉しさを表している。

これで戦いは終わった……、誰もが安堵に満ちていた。

「なにハッピーエンドっぽく終わろうとしているのですか？」

歓喜の雰囲気をぶち壊す冷酷な女の言葉に、祭壇周辺に居る少女達は凍り付くように固まった。

不敵な笑みを浮かべている三日月を背景に白いローブの女は悠々

と空中に浮遊していた。地上から役五〇メートルぐらいの高さで浮いている女は少女達を冷たく見下ろしている。

ライトグリーンの長髪を風でゆらゆら靡かせるが、足元まである白いローブが風で捲れることはない。女がどんな体格をしているか分からないが、端正な顔立ちからモデルのような体格をしているかもしれない。

そんな綺麗な顔立ちでありながらも、金色の眼で鋭く放つ眼光と相当な実力者をも震わせる雰囲気で少女達を威圧する。

ドロリと何か気味悪い生き物が背中に這いずり回っているように、少女達は身を竦み上がらせてしまう。

「あ、アンタ何者よ!?」

声が裏返りながらもハリセンを構えながら訊ねる明日菜。勇気があるのか、それとも単に無謀なだけなのか分からない。

「何者でも良いでしょう？　あなた達はただ犠牲になるだけなのですから」

白いローブの女は最初から手に持っていたカードを表に出して『アデアット』と呟く。すると女の両手に内部構造が見える透明の球体が現れる。

女がアーティファクトを出現させた事で少女達は戦闘が起きると思い、武器を構える。

「アーティファクト!?」

「いったいどんな効果が？」

オコジョ妖精は女がアーティファクトを出現させた事に驚き、刹那は女のアーティファクトの効果が気になる。

ここで真名は気付く。空中に悠々と浮かんでいるあの女が、いったい何者なのかを。

「……、もしかしてカイを狙ってる奴か？」

ポツリと呟いた真名の言葉を拾った女は、少し目を見開き、ニヤリと口角を上げる。

「……、へぇ、知っているんですね？　そんな情報を教えるという事は、あなたはカイに〝それなりに〟信頼されているんですね」

対して真名は少し影を落としながら、

「……、さあな。あなたの事は無理やり聞いたものだからな。あいつが私を信頼しているとは思えないが」

自嘲気味に答えた。あの不老で死を恐れている奴が、誰かを信頼出来るのか。

真名の言葉を聞いて女はフッと笑みを浮かべ、そうですねと呟く。

「さて、そのカイが来るまであなた達と遊んで時間を潰しておきましょうか」

白いローブの女はそう言うと、歌うように魔法名を紡ぐ。

「燃える天空」

そう歌った瞬間、女の両手に持つ球体から紅蓮の炎が少女達の身体を骨までも燃やし尽くそうと迫る。

「――――チッ！」

エヴァンジェリンが舌打ちしながらも前に出て魔法障壁を展開する。迫りくる紅蓮の炎とエヴァンジェリンが展開した魔法障壁がぶつかり、黒煙が空を覆う。

何とか防いだは良かったものの、魔法を知る者は衝撃を隠せなかった。

「あの女！　無詠唱で上級魔法を撃ちやがった！？」

オコジョ妖精は女が無詠唱で炎系上級魔法を発動した事に驚いている。それも当然の話。

魔法という魔術回路を開き、精霊に協力してもらう為の詠唱を唱え、やっと発動する事が出来る。それなのに魔法理論を根底から覆した女に、魔法を知る者は驚きを隠せない。初級魔法なら無詠唱で唱えられるが、上級魔法を無詠唱で発動なんて考えられないのだ。

「龍宮真名！　あの女の情報は無いのか！？」

女の魔法を防いだエヴァンジェリンは真名の方に振り返り、情報を寄越せと詰め寄る。

「確かあいつが言っていたのは……」

エヴァンジェリンに言われ真名はカイが言っていた事を思い出し、仕方なしにこの場に居る者達に話す。

女の名前はマリア・フォーストと名乗っていること。アーティファクト、太極訃音によって全ての魔法を無詠唱で発動出来ること。

取り敢えずマリアについての簡単な情報を話したところで、オコジョ妖精は身を震わせて叫ぶ。

「じょ、冗談じゃねえよ！　あのマリアって女は　”全ての魔法を無詠唱で発動出来る”　って言うのかよ！？」

「そう言ったつもりなんだがな。まあ胡散臭いとは思っていたが、実際見てしまったら信じない訳にはいかないだろう？」

「う、うぅ……」

真名の言葉にオコジョも唸り声を上げながら黙る。流石に炎系上級魔法を無詠唱で発動する場面を見てしまえば、黙るのも仕方ない。

「ちょ、ちょっとそれってヤバいんじゃないの！？　なんかあの人、篠宮君に知らせないと！」

「明日菜さん、その時間は無いようです」

え？　と明日菜は刹那の言葉に首を傾げマリアの方へ見ると、黒煙が晴れていきマリアの姿が見えてくる。マリアは変わらず絶対の

自信からか、余裕の笑みを浮かべている。

「さて、あなた達はコレをご存知しますか？」

突然マリアは白いローブの中から水晶玉みたいな玉を取り出し、少女達に見せ付ける。

だが全員が全員その水晶玉を知らず、それがいったい何なのか分からない。

その反応にマリアはニヤリと笑って言う。

「コレは『復活の玉』と言います。効果は『死んでいった全ての生命体を復活させる事が出来る』、です」

「……それが何だって言うのよ？」

「分かりませんか？　この復活の玉をこの湖に落とせば、〝何が復活するでしょうか？〟」

「！　まさか！？」

マリアは得意げに言って水晶玉を落とすと、エヴァンジェリンは無詠唱の魔法の射手、真名がライフルで水晶玉を壊そうとする。

だが魔法の射手もライフルの弾もマリアの魔法に撃ち落とされ、水晶玉を壊す事は出来ない。

そして水晶玉が落ちた途端、湖が光り出し、少女達にとって再び戦わなければならない敵が復活する。

「復活しなさい、リョウメンスクナノカミ」

湖からニョキニョキと白く輝く鬼神、リョウメンスクナノカミが再び姿を現す。

いとも簡単に復活してみせたリョウメンスクナノカミを見て、少女達は唖然とする。

「な、何でもありなの！？　魔法ってやつは！？」

「そんな訳ねえだろ姐さん！　そんな簡単に鬼神を復活なんて出来ねえよ！」

「でも簡単に復活しちゃったじゃないのよ！！」

「うるさい小娘たちですね。せめてカイが来るまでは遊んでいようと思いましたが、もう我慢の限界です。真のリョウメンスクナノカミの力を受けて死になさい」

ギャーギャーと騒ぐ少女達（主に明日菜とオコジョ）に面倒になったマリアは、リョウメンスクナノカミに少女達を殺せと命じる。

命令を受諾したリョウメンスクナノカミは口に光を収束して、何かを発射する態勢になる。

「ちょっとエヴァちゃん！　さっきみたいにやっつけちゃってよ」

「無理だ！　詠唱が間に合わない！」

明日菜は先ほどみたいにエヴァンジェリンの魔法で鬼神を倒して
と期待するが、エヴァンジェリンは詠唱が間に合わないからと言っ
て明日菜の期待を裏切る。

「それに結界弾も一発分しか無いので、動きを止める事も不可能か
と」

「それって……、ゲームオーバーってこと……？」

明日菜の言葉に少女達は沈黙する。圧倒的な力を見せ付けようと
しているリョウメンスクナノカミは直ぐにでも光線的なものを発射
しようとしている。

これは今すぐ逃げても無駄だろう。攻撃を受けてしまう。

ああ、もう無理か、と諦めムードが場を支配しかけたその時、少
女達の後ろから青白い光線が夜闇を切り裂き、リョウメンスクナノ
カミに激突する。青白い光線に当たったリョウメンスクナノカミは
直前に迫った発射態勢を強制中断された。

いったい何が起こったのかと少女達は後ろを振り向くと、其処に
居たのは、

「なあに『俺』抜きで楽しい事をやっているんだよ。『俺』も混ぜ
てよ」

額を青白く光らせ、不気味な程に満面の笑みを浮かべて此方の方
に歩いてくる『篠宮カイ』の姿だった……。

ユーバー戦2（後書き）

後半ぐだぐだしてしまいましたね。さっさと修学旅行編を終わらせようとして後半がぐだぐだしました。

本当は一場面に登場キャラが多いと処理が出来ないだけなんですが。今まで場面場面登場人物が少ないのもそのためです。

故にハーレムみたいに一場面に登場人物が多いと、描写がぐだぐだしてしまうんです。私の能力が低いだけですが。

さて、前半はカイ（未来の紋章）の独壇場でした。もう戦闘は未来の紋章に任せても良いと思う。結局ユーバーに逃げられてしまいましたが。

後半はマリアが鬼神を復活させるというチートな事をしました。やりたい放題です。

そろそろ自重していただきたいですね

滑稽な未来

「やっと来ましたか」

ライトグリーンの髪を靡かせて呆れ気味に呟く女、マリア・フォーストは漸く目当ての人物が来て自然と笑みが零れる。

艶のある漆黒の髪に絹のようなツルツルの白い肌、ぷくっとした唇と女顔のカイだが、目が違った。眼光だけで人を殺しそうな蛇の眼をしている。いつものくりっとした目ではなく、ユーバーみたいな蛇模様の眼。

それは『篠宮カイ』ではなく『未来の紋章』だという事を語っている。

マリアは遠目ながらもカイの目が変わっている事に気付き、自然と口角が上がってしまう。

それは兎も角カイは目を閉じゆっくりと橋の上を歩いて、少女達が居る祭壇まで向かう。

「ちょ、ちょっと、篠宮君！　何なのあの女の人！　知り合い？」

ゆっくりと歩いてきたカイに明日菜が近付いてきて問い詰める。

そんな明日菜にカイは少し目を開いて答える。

「ああ、知り合いと言うか敵なんだけどな。あの女を前にしてまだ生きてるって、実は君達って凄いのかな？」

「え、助けてくれたのは篠宮君じゃん」

「……、そういう事を言ったんじゃないんだけど」

何故か明日菜と会話が噛み合わない事に溜め息を吐いたカイは、明日菜の相手を止めて前へと出る。

「篠宮」

その途中、褐色長身少女の真名に呼び止められ、カイは足を止める。

真名は現在のカイの雰囲気がいつもの状態や裏の仕事の時と全く違う雰囲気となっていることに気付いている。これはエヴァンジェリンや刹那、楓も気付いている。

明らかに殺伐としている雰囲気がカイから漏れている事について真名は問う。

「お前、もしかして――」

真名が何か言おうとした時、カイはキッと睨み付け左手の人差し指で真名の口を当て、言葉を言えなくする。

そしてカイは声を出さず唇を動かして真名だけに伝える。

少し黙ってろ。

真名は読唇術の心得も持っているので、カイの唇の動きで言葉も理解する。真名も目だけで頷くとカイは一息吐いて真名の口から人

差し指を離す。

今のカイは未来の紋章の意思が動かしているようなもので、中身は未来の紋章なのだ。よって今のカイは未来の紋章の演技である。

そしてカイは一番前へ出て、少女達の方へ振り返る。

「今からお前達は大人しく逃げ帰ってくれ」

「え、ちょ、ちょっと、あんなの一人で相手にする気!?」

突然告げられたカイの言葉に明日菜は言いかかってくる。明らかに異常な奴を一人で相手にするなんて、おかしいと思っているのだろう。

それに対してカイは首を傾げ、

「そうだが？　あの女は俺の敵だ。君達が戦う理由なんて無いし、死にたくないだろう？」

『篠宮カイ』として明日菜を説得する。そしてカイは続ける。

「それに今から起こるのは『戦闘』じゃない。『戦争』だ。一般人が関わってはいけない」

カイはありったけの殺意を明日菜にぶつけながら言った。これ以上関係ない奴らに居てもらいたくないカイは、さっさと帰っていただきたいのだ。

だからカイは蛇目で明日菜を睨み付ける。この煩い女を黙らせれ

ば、何とかなるだろうと思ったから。

カイの予想通りに明日菜は一歩後退ってカイの殺気に呑まれている。これ以上は関わるなと本能が警鐘を鳴らしているのだ。大人しく明日菜も引き下がろうと口を閉ざした。

「本当に問題ないでござるか？」

次に楓がカイに声をかけるが、カイは表情も変えずに答える。

「問題ない。一人で片付けられるレベルだ。お前達はさっさと戻ってしまえ」

「カイ殿はクールでござるなぁ」

楓が何かぼやいているが無視。

次にエヴァンジェリンが仏頂面しながら声を掛ける。

「一人でいけるんだな？」

同じような質問に飽き飽きしてきたカイは髪を掻きながら、

「何度も言わせるな。一人で何とか出来る。と言うより一人の方が楽なんだ。だからさっさと帰ってくれ」

今のカイだったらマリアと復活したリョウメンスクナノカミを一人で相手にする事も可能。今はアンチスキルスロットの呪いから解放されているのと、未来の紋章がカイの身体を動かしているので一人で相手にする事も可能なのだ。

薄々だがエヴァンジェリンも楓も刹那も真名も、今のカイがいつもの弱いカイではない事に気付いている。カイの身体から魔力も充溢しており、今までのカイとは違うのだと。

だからエヴァンジェリンはフン、と踵を返し、

「貴様ら！　さっさと此処から離れるぞ！」

「で、でも……」

「いいから離れるぞ！」

まだ諦めきれないのか明日菜が粘ろうとするが、エヴァンジェリンによって強制離脱されてしまう。明日菜はハッピーエンド主義者なのか、全員が生き残って帰る事を望んでいる。だからカイと一緒にマリアやリョウメンスクナノカミと戦って、一緒に帰る事を望んでいるのだ。

だがその望みは既に断たれている。三人の少女が既に死んでいるのに、ハッピーエンドになる筈がない。

神楽坂明日菜の望みは叶わない事をカイは知りながら見送る。それから他の少女達もエヴァンジェリンと明日菜の後を追う。その途中、真名がチラッとカイを見ていたが、何も言わずに走り去っていく。

これで良い、と溜め息を吐いてカイは、いや未来の紋章は素に戻ってマリアの方を見上げる。

「よく何もしないで待っていてくれたな？」

そんな未来の紋章の疑問にマリアはフフッと笑い、

「あの少女達は本来攻撃する必要は無いのですよ。あなたが来るまで暇つぶしの相手になってもらっただけです」

「ふん、あの男の命令になかったから殺さなかったのか。相も変わらず至上主義なんだな」

「レアン様は私の恩人。恩人に仕えるのは当然なのです。あなたには分からないのでしょうが」

「ああ、分からないな。敵の考える事は知る必要はない。もし知ってしまったら、敵として見れなくなってしまう可能性があるからな」

マリアが何故レアンを恩人だなんて、そんなもの未来の紋章も現在意識を失っているカイもどうだって良い。マリアの過去も経緯も未来の紋章とカイには知る必要は無い。

ただ自分達を狙う者は全て敵だと認識しておけば。

「さて、それじゃこの間の続きと行こうか」

未来の紋章がそう言ったと同時に、ドン！　と周囲に何十倍もの重力が発生したかのような、重苦しい殺気が展開されていく。限界までに引き上げられた口角が未来の紋章を更に不気味に思わせる。

人間には絶対に出せない内蔵を抉るような殺気。人間の道から外れたカイでも出せない殺気にマリアは身を竦み上げる。『神と同等の存在』と言われている未来の紋章が出す殺気は、人間が受けて良いものではない。

マリアもまた人間である以上、この殺意ある殺気は一秒たりとも受けてはいけない。マリアの頬から嫌な汗が珠となって吹き出す。

自分から仕掛けたのだから怯えてはならないのだが、どうにも太極訃音を持つ両の手が震えが止まらない。

（相対すれば分かりますが、これを捕縛するのは難しいですね）

目下にいる女顔の少年に潜む大いなる力を生け捕るのは、数万の軍勢を相手にするよりも難しい。相手はその気になれば世界を破壊する事が出来る存在。はっきり言って勝ち目がない。

ましてや未来の紋章の宿主を生かしたまま捕らえるのは、これまた難しい。レアンの命令でなければカイを殺すつもりでいた。

それでもレアンの命令を遂行する為にマリアは紡ぐ。

「えいえんのひょうが」

魔法名を呟いた瞬間、未来の紋章を捕らえようと絶対零度の氷の空間が発生する。

だが未来を視る事が出来る未来の紋章は青白い翼を具現して、空中へと難を逃れる。片翼一〇メートルの一般に思われる天使のよう

な翼に、マリアも初めて見て絶句する。

やっぱり自分が相手にしている存在に簡単に手を出してはいけないのではないかと自覚させられる。

唖然としているマリアに未来の紋章は笑顔で、

「おいおい、この翼を見ただけで唖然とすんなよ。そんな程度では我も楽しめない」

「――――くっ！　リョウメンスクナノカミよ、喰らい尽くしなさい！」

挑発を受けたマリアはリョウメンスクナノカミに命令を下す。喰らえと命令したが本当に喰らわれては元も子もない。だが相手は未来の紋章。本気でいかないと勝てない。

だからリョウメンスクナノカミにも本気で戦わせるように命令を下したのだ。

グオオオオ！　と獰猛な雄叫びを上げて近付いてくるリョウメンスクナノカミに未来の紋章は、ニッと笑みを浮かべる。

「そうこなくてはな。我も楽しめない」

両手を広げ白濁の光球を生成しようとする未来の紋章に、紅蓮の炎が目前に迫ってきていた。その紅蓮の炎は未来の紋章が展開した魔法障壁に阻まれたが、激突した瞬間に黒煙が幕となってマリアとリョウメンスクナノカミの姿が見えなくなってしまう。

チッ、と舌打ちをして青白い翼を羽ばたかせて、更に高度を上げる。だが高度を上げた先に待っていたのは、夜闇を切り裂く鋭い稲妻だった。

マリアは未来の紋章が燃える天空を魔法障壁で防ぐと同時に、空高く飛ぶ事を見越して落雷を放った。全ての魔法を無詠唱で発動する事が出来るマリアの戦術パターン。

刹那で迫ってくる一〇億ボルトの電圧を防がないと、カイの身体が使い物にならなくなるので、未来の紋章は無意識に魔法障壁を展開する。

ズドン！　と鼓膜が破けてしまうくらいの爆音が響き渡るが、稲妻を防ぐ事には成功する。だがマリアは未来の紋章に攻撃する時間を与えず、未来の紋章と同じ高度から千本の雷を放つ。

「おいおい、やりすぎだろ」

思わず呟いてしまった未来の紋章は愚痴を零すように言いながらも、右方にも魔法障壁を展開して千本の雷を防御する。

激しく火花が散る中、後方からリョウメンスクナノカミが光線を放つ為、光を収束している。もう発射寸前の状態になっているリョウメンスクナノカミに危機を抱いた未来の紋章は今いる地点から離れたかった。

だが太極訃音を用いるマリアの連続魔法に足止めを食らってしまい、この場から逃げられない。

太極訃音の恐ろしい点は〝無詠唱で発動出来る魔法〟と〝

術後硬直無しで次の魔法を発動する事が出来る”　という二つの点。魔法を発動した直後は一瞬だが身体が硬直するのだが、太極訃音を使った場合はそれが無いのだ。要するに魔法をバンバン撃てるということ。

その為、マリアの連続魔法を防ぐのに集中してしまい、転移魔法を発動する事も出来ない。

そうこうしている内にリョウメンスクナノカミも充填完了したのか、光が拡散し始める。

次の瞬間、リョウメンスクナノカミの口から眩い光り輝く光線が未来の紋章目掛けて放たれた。

直感的にヤバいと判断した未来の紋章は背中から具現している青白い翼を盾にして、光線を受け止める。魔法障壁よりも青白い翼の方が遥かに耐久力がある。

それなのにジリジリと青白い翼を光線が焼き尽くしていくのを感じ取り、転移魔法符を取り出し、その場から転移する。

上空一〇〇〇メートル。

マリアとリョウメンスクナノカミの姿が遥か下に居るのを確認してから、未来の紋章は翼を確認する。青白い翼は黒ずんでしまい、ところどころ穴が空いてしまっている。

「――ちっ、鬼神と言われるだけはあるか。我が翼もボロボロに

されてしまうとは……、修復しないとな」

リョウメンスクナノカミの攻撃力を舐めていたわけでは無いが、やはり翼がボロボロになるまで焼き尽くされるとは思わなかったのだ。

未来の紋章は青白い翼を修復する作業を始めるが、当然妨害は起こる。

「残念ですが修復なんてさせませんよ」

転移魔法で同じ高度に転移してきたマリアが、再び無詠唱上級魔法を撃ってくる。

未来の紋章はボロボロの青白い翼を羽ばたかせて回避する。先程みたいに一度でも防御して足を止めてしまえば、集中砲火を浴びてしまい動けなくなってしまう。

それ故に動きを止めず、躱して反撃しなければならない。

「ほんと、あの世界でこんな風に戦える人間なんて居ないぞ……」

そう愚痴を零しながらも未来の紋章は高速で動き回って、マリアの攻撃魔法を躱していく。

炎やら風やら水やら雷やら、色々な系統の上級魔法が未来の紋章を狙うが、全てを紙一重で躱していく。未来を視る事が存在が紙一重で躱すことなど容易だ。

だがマリアが攻撃魔法を発動し、未来の紋章が躱す…、そんな堂々巡りパターンに入ってしまったので、未来の紋章は自分からも攻

撃を仕掛ける。

マリアは防御策として湖の水を竜巻のように数本を巻き上げて、自分の周囲に配置している。当たれば身は切り刻まれ、血肉が飛び散る。それにあの厄介な風も健在で、普通なら迂闊に近接戦はしていけない。

未来の紋章は戦いに勝てれば良いと思う考えの持ち主。自分の身体（カイの身体）が切り刻まれようとも勝てれば良いという考えである。

よって未来の紋章は紅蓮の炎を躱し、千本の雷も回転しながら躱し、湖の水の竜巻と竜巻の間を掻い潜り、マリアを守護する風に身を切り刻まれながらも、マリアの懐に入る。

「――――なっ！　此処まで入ってくるとは！」

懐へと侵入を許してしまったマリアは苦汁を舐めたかのような苦い顔をする。

そして漆黒の魔手がマリアの首を掴む。

「捕らえたぞ、女ァ！！」

狂笑。それがとても似合う程に口角が限界にまで引き上げられ、女を掴む手に更に力が加えられる。

気管を強く絞められ、もがき苦しむマリアは魔法名を口にする事が出来ない。魔法名を口に出来なければ太極訃音で無詠唱魔法を発動する事も出来ない。

要は口か喉を潰してしまえばマリアは魔法を使えなくなるのだ。

「無様に死に果てろ、マリア・フォースト！」

勝利を確信した未来の紋章は左手に魔力を集め、爆殺してやろうと実行する……。

その時、一〇〇〇メートル下から高威力の砲撃が迫っていた。

「――――くそッ！」

白の光が真下から凄まじい勢いで迫ってくる恐怖に、未来の紋章は首を掴んでいたマリアを突き飛ばし、未来の紋章もその場から後ろに跳ぶ。

刹那、巨大な光の柱が通り過ぎ、雲を切り裂いていった。

未来の紋章は視線を下に移すと、遥か下には此方へ顔を向けるリョウメンスクナノカミの姿。すっかり存在を失念していた。

目の前の女を殺す前に邪魔な白い鬼神を排除する事を優先しなければならない。だがリョウメンスクナノカミを排除しようとすれば、間違いなくマリアが邪魔をする。

（このままでは我も危ない。『あの剣』を使えば楽なのだが、まだ敵に知られる訳にはいかないしな。となれば我の本気を見せてやるとするか）

未来の紋章は両手を広げ、巨大な白濁の光球を生成する。その大

きさはユーバーにトドメを刺そうとした光球よりも遥かに大きい。その大きさは直径にして約一〇〇メートル程。

この白濁の光球でリョウメンスクナノカミの魂もろとも消滅させようと目論んでいる。

だが当然の如く、マリアは妨害する。

「あなたを捕らえるまでリョウメンスクナノカミを殺させる訳にはいかない！」

まるで仲間を助けるべく立ちはだかるヒーローみたいな口調で言ったが、実のところは違う。ただ単にリョウメンスクナノカミを殺されたら、戦力が半減して未来の紋章を捕まえる事が出来なくなるからだ。

マリア一人では確実に未来の紋章を捕まえる事は出来ない。だが何か『駒』さえ有れば、任務達成率はぐんと上がる。だからわざわざエヴァンジェリンが倒したリョウメンスクナノカミを復活させたのだ。別にあの少女達を殺す為だけに復活させた訳ではないのだ。

全てはカイ、及び未来の紋章と戦う為の『捨て駒』であった。

まだ捨て駒を失う訳にはいかないマリアに対して、未来の紋章は目を細くしてアドバイスを送る。

「今、我はこの光球を生成してる故に無防備。如何なる攻撃も受けてしまうであろう。だから貴様は我に直接攻撃を仕掛ければ良い」

「なに！？」

未来の紋章の言葉にマリアは驚くが、未来の紋章は続ける。

「だから勝負だ。我がこの光球を完成させて鬼神を滅ぼすが先か、貴様が我の宿主の身体を壊すが先か。それでこの戦いは決するだろう」

この光球を生成している間は未来の紋章も無防備な状態となる。その為、どんな攻撃でも加えられれば光球の生成を強制中断してしまう。

それなのに未来の紋章はわざわざ弱点を晒して勝負を挑んできた。この勝負は明らかにマリアの方に分がある。

だが相手は未来の紋章、未来を視る事の出来る存在。勝負の行方を知っているから、こんな馬鹿な勝負を仕掛けることが出来るのだ。でなければこんな勝負を仕掛けることも弱点を晒すこともない。

マリアは必死に脳を働かせる。こんな勝負、受けて相手をボコボコにしてやれば良いが、相手は自信満々に笑みを浮かべている。

それが恐い。

「おいおい、悩んでいる時間なんて無いんじゃないのか？　こっちはどんどん完成に向かっているんだぞ？」

未来の紋章にハッと我に返ったマリアは急いで様々な上級魔法を紡ぐ。

炎、雷、氷、闇……、様々な魔法を未来の紋章に浴びせる。

「――ぐ、……はぅ！」

言った通り、マリアの魔法を防ぐ事は無く、未来の紋章の身体はモロに受けてしまう。それでも白濁の光球の生成が途切れる事はなく、完成へと近付いて行っている。

白濁の光球の生成が止まらない事に苛立ち、マリアは更に魔法を放つ。だが未来の紋章は魔法を受けるものの、光球の生成は途切れない。

「どうして！？　何故中断されないの！？」

おかしい。何かがおかしい。

マリアは未来の紋章に攻撃が通っているにも関わらず、光球の生成が中断されない事に疑念を抱く。

未来の紋章は弱点を晒し、自信満々で勝負を仕掛けた。そして未来の紋章が言った通りに無防備で、どんどん魔法が通っていく。それなのに光球の生成が中断されないのは何故か。

（もしかして　”効いていない？”　）

ふと　思いついたこの言葉でマリアは閃いた。

そう、　”この世界の魔法には未来の紋章には効いていないのだ”　。

真の紋章に対抗するには真の紋章で対抗するしかない。つまり真

の紋章には真の紋章魔法でしか通用しないという事になる。

だが真の紋章の宿主は普通の人間。紋章自身には効いていなくても宿主の身体には通用してしまう。今の戦闘ではそんな場面が何度かあった。

リョウメンスクナノカミの砲撃。

未来の紋章自身には通用しなくても宿主であるカイの身体は通用してしまう。カイの身体を失わせないように魔法障壁や青白い翼で一撃必殺の攻撃を防いできたのだ。

となればマリアが何度『普通の魔法』を撃ったとしても、カイの身体を破壊するだけであって未来の紋章自身には通じず、光球の生成を中断する事にはならない。

”真の紋章には真の紋章魔法で対抗を”　。

（レアン様が仰っていたことを忘れるなんて……、私もまだまだということですか）

マリアは自嘲気味に笑う。

マリアの主であるレアンはその事を知っていて、マリアに注意していたのだ。

『この先、必ず未来の紋章と戦う日が来る。その日が来た時は普通の魔法ではなく、真の紋章魔法で撃つんだ。そうすれば倒せなくてもダメージを与える事が出来るのだから……』

マリアはこの事を思い出し、未来の紋章を睨み付ける。

あと数秒の生成で白濁の光球が完成するところまで迫った未来の紋章は今度こそ勝利を確信した。

直径一〇〇メートルにまで膨れ上がった光球をリョウメンスクナノカミにぶつければ、間違いなく魂もろとも消滅する。そうなれば後はマリアを爆殺すれば、この戦いは終わる。これ以上宿主の身体を傷つけずに済むのだ。

リョウメンスクナノカミを抹消するとは言え、宿主の身体を犠牲にする事は未来の紋章は反省している。まだ宿主のカイには生きていてもらわなくてはならず、こんな所で死なす訳にもいかない。

暫くは表に出る事を自重してやるか、等と思っていると白濁の光球が完成し、あとはリョウメンスクナノカミに放つだけとなった。

「残念だが我の勝ちのようだな。下にいる鬼神を消滅させてから、貴様を殺してやる」

余裕綽々、自信たっぷりと宣言する未来の紋章に、マリアはフッと微笑みを浮かべるだけ。

それが未来の紋章の癪に障る。

「……、何がおかしい？」

「いえ、別に。あなたはこれからリョウメンスクナノカミを消滅さ

せるのでしょう。魂もろとも……。しかしそこまでです。あなたに私を殺す事までは叶いません」

妙な自信を表すマリアに未来の紋章は訝しみ目を眇めるが、取り敢えず邪魔なリョウメンスクナノカミを消滅させる事を優先させる。

「くたばれ」

冷酷な声質で告げた未来の紋章は直径一〇〇メートルの白濁の光球をリョウメンスクナノカミ目掛けて投げる。

未来の紋章が白濁の光球投げたと同時にリョウメンスクナノカミも光線を発射する。どうやら未来の紋章が白濁の光球を生成している時も、リョウメンスクナノカミの方も光を収束していたようだ。

だがその光線も白濁の光球の前には霧散していき、消滅する。

距離にして約一〇〇〇メートルもある差も一〇秒程で真下のリョウメンスクナノカミに衝突する。リョウメンスクナノカミに衝突した白濁の光球は辺り一面に光を放ち、爆ぜていく。

湖の水も干からび、祭壇や大岩も一瞬で崩壊し、更には地面までもが消滅していく。それらと共に鬼神リョウメンスクナノカミも光の中へ消えていった。

白濁の光球が起こした眩い光が消えると、そこには大きくぽっかりと空いた円形の穴だけがあった。湖も祭壇も大岩も、それの土台となっていた地面も消失して、先が見えない漆黒の闇が広がっていた。

「――――ク、フフ、ハハハハハ！！」

リョウメンスクナノカミを消滅させた未来の紋章はあまりの呆気ない結末に、思わず高笑いをしてしまう。何故かは分からない。ただ笑いを堪える事が出来ず、声を大にして笑ってしまう。

改めて未来の紋章の力をまざまざと見せつけられたマリアは、やはりとんでもない相手と戦っている事を思い知らされる。恐らくリョウメンスクナノカミを完全に抹殺する為だけに直径一〇〇メートル程の光球を作り上げたのなら、世界を壊せる程の光球を作り上げるのではないかと、マリアは考える。

（何が〝未来〟の紋章ですか。絶対に名称を間違えていますよ）

そう思わざるを得ない程に衝撃を受けたマリアだったが、今未来の紋章は高笑いを続けている。

今が絶好の機会なのだ。だからマリアは紡ぐ。

「裁き」

「ハハハハハ……、はァ？」

未来の紋章の高笑いがこの場を支配する中、マリアの透き通るような声が耳に響く。

マリアが『裁き』と言った瞬間、未来の紋章を黒の膜が覆う。

未来の紋章はこの魔法を知っている。見た事がある。この魔法は未来の紋章と同じ『真なる二十七の紋章』の一つ、『ソウルイータ

ー』が使う真の紋章魔法なのだと。

これには未来の紋章も顔色を変える。

「……、馬鹿な。ソウルイーターも……、いや、それよりも前提が間違っている。何故貴様が真の紋章魔法を使えるんだ!?」

怒っているような、戸惑っているような、焦燥しているような、不安を抱いているような、そんな負の感情が顔に出ている。

それを見てマリアはニヤっと笑い、

「このアーティファクトは『全ての魔法を使える』って言わなかったでしょうか？　もちろん”真の紋章魔法も例外ではありません”」

「……、そんな事が……」

「もちろん威力は本物よりも劣りますが、あなた自身にダメージを与える事が可能となるでしょう」

マリアのアーティファクト、太極計音は『全ての魔法を使える』と言っても、未来の紋章もカイも『この世界の魔法を全て使える』と思っていた。

その認識が間違っていて、『あらゆる異世界の全ての魔法を使える』が正解なのだ。

これがアーティファクト、太極計音の恐さということか。

「それではそろそろ始めましょう。威力が劣るとはいえ、その魔法

は最上位に値する筈です。あなたもただでは済まないでしょう」

マリアがそう言った瞬間、幾つもの光が未来の紋章を襲う。

「――――が、アアッ、アアアアッ！！」

この世界の魔法とは違う、威力は劣るが『神と同等の存在』の魔法を受けて、未来の紋章は悲鳴を上げる。まるで人間が絶望した時に上げるような悲鳴を……。

本来なら威力が劣るマリアの真の紋章魔法など打ち砕いて反撃すれば良いのだが、宿主の身体がついて行けなかった。カイの身体はもう限界で、全身切り刻まれ、肌が焼け剥がれ、電撃の痕まで刻み付けられている。

各神経細胞も数多く破壊され、これから生きて行けるか心配しなければならない状態なのだ。

これ以上未来の紋章の意思がカイの身体を動かすという事が出来なくなってしまう。

そしてマリアが発動した真の紋章魔法の攻撃が終わり、黒い膜が消失すると、未来の紋章はだらんと手足を投げ出し、ぽっかりと穴が空いた漆黒の闇へと落下していく。青白い翼も消失し落ちて……、堕ちていく『神と同等の存在』。

どんどん落ちて、堕ちていく……。

『神と同等の存在』がぽっかりと空いた漆黒の闇を見下ろしているマリアは、深々と安堵の息を吐く。漸く終わったのだと。

人間の身で『神と同等の存在』に勝てたのは二つの理由がある。

一つは太極計音。この高性能のアーティファクトを用いたからこそ勝てたのだ。もう一つは未来の紋章が油断をしていたから。リョウメンスクナノカミを滅ぼし、一対一となった故に勝利を確信し、馬鹿みたいに高笑いをしたからだ。

あの時、”マリアが真の紋章魔法を使う”という未来を視れたにも関わらず、食らって下へ落ちたのは油断していた事に他ならない。

油断せずに最後までマリアと戦っていれば勝てたと言うのに……。

ともあれ最後に勝ったのはマリアという事になり、勝者のマリアは太極計音を仕舞い、星空を見上げる。

無数の星達が燦々と輝いており、まるで勝者であるマリアを祝福

しているようだ。思わずマリアも顔が綻ぶ。これだけ見ると綺麗な女性なのだと思わせる。

「後はカイの身体ごと未来の紋章をレアン様の元へ運ぶだけですね」

レアンから命じられた任務を忠実に遂行する為にマリアは、星空から真下の黒い穴へと視線を移す。落ちていったカイを見つけて運んでレアンに献上すれば、この任務は終了だ。

きっとレアン様も喜んでくださる、とマリアは胸を喜ばせながら黒い穴へ向かおうとした。

……だが。

ドスっという身を貫く音が聴こえたかと思うと、胸と腹から二つの手が出てきた。いや、二つの腕に背中から貫かれた。

「……、え？」

じわじわと灼けるような痛みにマリアは目を見開いて、ゆっくりと後ろに振り向く。恐いけど見なくてはならない、そんな思いに駆られたマリアは見てしまった。

俯いていて顔は見えないが、全身血まみれになっている標的の少年。怒っている訳でもなく、狂ったような笑みを浮かべている訳でもなく、無表情でいる少年が其処に居た。女顔の少年の両腕がマリアの身体を貫いていた。

ゴボッと口から血を吐きながらも、マリアは訊ねずにはいられなかった。

「……、ど、どうし…て……、ここ…に……？」

「……、転移魔法符」

途切れ途切れになりながらもマリアは問うたのに対し、少年は一言だけ、だが明確に答えた。少年は顔を上げてマリアの顔を見る。

その少年の目を見てマリアは呟く。

「――――元の、人格に…戻った……、のですか……」

マリアが少年の目を見て、蛇の目ではなくいつものくりっとした目である事で、今の少年が未来の紋章からカイに戻っている事に気付く。

「……へへッ、奪い、返してやったよ……」

そう、カイは落ちている最中に未来の紋章から身体を奪い返し、転移魔法符を使ってマリアの元へと転移して身体を貫いたのだ。傷だらけの身体で。

そうですか、と呟いたマリアは目を閉じる。カイが貫いた場所は鍛えても弱点であり続ける急所なので、早く回復魔法でも施さないと死ぬ事を分かっている。無駄な悪あがきをするのも面倒だと感じてしまったのかもしれない。

そんなマリアに対してカイは、

「……俺と、一緒に……、地獄へ落ちてくれ……」

そう呟くとカイはマリアの身体から腕を引き抜き、二人は身を宙に放り出して落ちていく。

行き先は地獄か、それとも他の場所か。

少なくとも天国ではない事は間違いないだろう。

滑稽な未来（後書き）

……やっぱりこの主人公は主人公らしくないですね。自分で書いてるくせに何言ってるんだって話ですが。

最後らへんはマリアが主人公っぽい感じになっちゃいましたしね。

後一話ほど修学旅行編が続きます。

戦いの夜から明けて

チュン、チュンと小鳥が囀り鳴く中、身体に走る激しい痛みにうっと唸りながらカイは目を覚ます。

「……、こ、こは……？」

カイは無理矢理体を起こそうとすると、壮絶な痛みに苦悶の表情を浮かべて起き上がれない。取り敢えず今見れる視界だけで、此処が何処なのか把握しなければならない。

まずは目に映るのが天井だ。欅の木でも使っているような板の天井。次に左に視線を流せば古風漂う襖。あとは掛け軸やら高そうな坪など置いている辺り、此処が何処なのか大体判明した。

関西呪術協会の総本山。此処はその一室なのだろう。

しかしカイは何故こんな所で眠っているのだろうかと疑問に感じる。

カイは全力を振り絞ってマリアと相討ちになり、二人して地上へと落下したのだ。其処でカイは意識を落とし、気が付けば布団に寝かされ、今の状態になっている。

途中で死んだんじゃないかと思ったが、こうしてしぶとく生き続けている。不老なのは間違いないが、時々不死も備わっているのではないかと思う事さえある。

こうも生き続けるなんて運命でも狂っているのではないかと思う。

そんな時、襖が開かれ、一人の中年の男性が入ってくる。眼鏡を掛け、痩せこけた顔をしている中年の男性。白色無紋の衣冠を着用している等から、神職に就いているかと思われる。

その男がカイが寝ている布団の側に座り始めたので、カイは起き上がって正座して礼儀を取ろうと思ったが、起き上がろうとすると身体に激痛が走り、やはり起き上がる事は出来ない。

「そのままで結構ですよ」

激痛に苦悶の表情を浮かべていると、中年の男性がカイを制した。無理に起き上がろうとしていたカイも、この言葉で起き上がろうとせず、中年の男性へと視線を移す。

カイはこの男性を何処かで見た事があるような気がする。何十年か前に何処かで……。

「お久しぶりですね、カイ。私の事が分かりますか？」

「……、いえ、申し訳ないですが……」

「なら近衛詠春という名に聞き覚えがありますか？」

「それは関西呪術協会の……、ってお前が近衛詠春か！？」

カイは漸く気付く。この中年男性こそが関西呪術協会の長、近衛詠春であると。そして二〇年前の大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールドが率いていた『紅き翼』の一人であった詠春のことも。

カイの中の詠春は二〇年前の姿で記憶されていた為、二〇年経った今、こうして会って一瞬誰か分からなかった。

だって……。

「お前老けたな!?　二〇年経ってるから老けるのは当然だが、何ていうか……、老けすぎ」

カイが散々老けると言いすぎる為、詠春の顔も引きつっていく。

だが詠春もいい大人だ。ここは堪える。

「あなたは二〇年前とは変わらずですね？」

「ああ、俺はずっとこのままだからな」

「二〇年前は私達と戦っていたあなたと、こうして再び会う事になるとは思いませんでした」

「……、そうだな、俺も会うつもりは無かったんだが……」

カイと詠春は二〇年前に有った事を思い出す。

二〇年前、魔法世界で起きた大戦に巻き込まれたカイは、後に英雄となる『紅き翼』と戦った事があった。その当時はカイも未来の紋章を駆使して戦い、結局は引き分けに終わった。

馬鹿みたいに強かった『紅き翼』に引き分けたのは、カイにとっては勝利に近しい事だった。まあ実際はカイはナギ達の攻撃を躱し続けただけなのだが……。

それから何度か戦闘が有ったが、終戦後その関係も無くなり、この二〇年間、カイは彼らと会う事は無かった。

そしてこの二人は二〇年ぶりに再会を果たす事となってしまった。

「お互い苦労しているようですね」

「そっちの方がよほど辛いんだろうけど。人を束ねるのは大変だって分かってるから」

カイはかつて人を束ねて戦っていた少年達を思い出しながら答えた。カイはそういう役職には就いていなかったので苦労は分からないが、それでも少年達の当時の顔を見ていたら辛いというのは分かっていた。

だから詠春もまた多くの人を束ねる者として、多くの辛い事を経験しているのだろう。カイよりも余程に……。

「それよりも体調の方はどうですか？　一応うちの治療部隊に君の怪我を治させたのですが」

「傷跡の方は綺麗に無くなっているみたいだけど、何故か激痛が走って起き上がれない」

「神経系も損傷しているので、それが原因なのかもしれませんね。そこまで治せる力は無かったようです。申し訳ないですね」

「……、このまま寝たきりになるような事にはならないだろうな？」

「大丈夫でしょう。カイも規格外の部類に入るのですから」

「入らねえよ！　俺は不老だけど生身の人間だぞ？　あの赤髪とかと一緒にするなよ」

「しかしあの規格外と戦って引き分けに持ち込んだのですよ？　十分にカイも規格外だとは思うのですがね」

「あの時はだな……、もういい」

詠春に色々と弁解しようとしたがカイは諦めた。もう詠春に何を言っても無駄だろうと悟ったから。

それよりも、とカイは話を切り替える。

「何で俺は此処で眠ってたんだ？　理解出来ないんだけど」

昨日記憶している限りではマリアの体を貫いて、一緒に黒い穴へ落ちていったのは覚えている。そこで意識を失い、目覚めたら現在に至っているのだ。

カイとしては何故関西呪術協会の総本山で眠っていたのか分からないのだ。

「何でって君が門の所で大量の血を噴き出しながら倒れていたから、助けたんだが……？」

「……、俺がこの総本山で倒れていたと言うのか？」

「そう言ったんですが」

詠春が言っていた事にカイは更に怪訝に思う。

詠春の言った事が本当ならば、カイが意識を失った後に何か起こった事になる。

恐らくは誰かがカイを運んだ事になる。誰がカイを運んだのが気になるが、詠春の言葉からその人物を特定する事は出来ないだろう。

カイが総本山の入り口の門で血まみれになって倒れていたとなると、其処にカイが置かれてから大分時間が経っていただろう。カイを運んできた人物はその間に立ち去り、特定する事は出来ない。

（いったい誰が？　あの場には俺とマリア以外は居なかったと思うし、誰も俺を助けてくれる奴は居ないと思うが……、あれ？　マリアはどうなった？　そもそもユーバーはどうなったんだよ？）

カイが誰を運んできたか特定しようとすると、今度はマリアの安否も気になり出し始めた。カイとしてはあのままマリアにはぐちゃりとトマトのように潰れて死んでいてほしい。

例え死んでいなかったとしても、急所を二ヶ所も貫いたのだ。暫くは動けなく表に出て来れないと信じたい。

もしこれで近日中に再び相対したらカイは今度こそ覚悟しなければならない。

それにユーバーに関してもカイの中ではどうなったのか分からない。ユーバーに刺されたのは覚えているが、それ以降は未来の紋章の意思が表に出てきたので、例によって覚えていない。

「それよりもカイ、女顔のくせになかなかやるじゃないか？」

「……あ？　いきなり何言ってるんだ？」

カイが色んな事に悩んで考えている中、詠春がいきなり話を変えるような事を口にした。

しかも変な事を言われたカイは余計に頭が混乱してしまう。

「ついさっきまで身長の高い褐色の女の子がカイの看病をしていたんだ。今は旅館で何か有ったようで、帰ったようですが。二〇年前までは一匹狼だったのに、今では女の子に看病してもらえるとは……、羨ましい」

「身長の高い褐色って……、龍宮が……？」

詠春の言葉から真名がカイの看病をしていた事を知らされ、カイは首を傾げる。何故真名が自分の看病をしていたのだろうかと、カイにはわけが分からない。

ちなみに詠春が最後につい漏らした言葉は聞かなかった事にしておこうとカイは胸の奥に深くしまい込む。

「で？　彼女とはどういう関係なんだ？」

詠春が思春期真っ盛りな中学生みたいにキラキラした目で質問してきた事に、カイは深く深く溜め息を吐く。

「別に。会えば口喧嘩するような間柄だよ。想像しているような甘

い関係ではないことは確かなんだよ」

「そうか？　私が見る限りはとてもカイを心配しているように見えたのだが？」

「そう見えただけじゃない？　口喧嘩の相手が居なくなるから心配してたとか」

「どんだけ女心が分からないんだお前は……」

「女じゃないので女心なんて分かりません」

「長生きしてるくせに子供みたいな屁理屈を……」

本当に子供みたいな屁理屈を述べるカイに詠春は溜め息を吐いて呆れる。こんな考えを持つ少年では彼女も報われないと詠春は思う。

「もっと女心を分かった方が良いんじゃないか？　なかなかにパートナーとして良さそうじゃないか」

「おいこら、何の話してやがる？　何でいきなりパートナーの話になってやがるんだ？」

「いや、カイもそろそろ子孫などを遺しても良いんじゃないかと思ってね」

「何でいきなりそういう話になってやがんだ！？」

もはやエロ親父と化してしまった詠春にカイは痛みを忘れて起き上がり、激昂する。

だいたい自分が誰かと結ばれ子を成す事が有り得ない、とカイは他人事のように思う。自分の子孫を残そうとするなら、とっくの昔にやっている筈だ。

カイが女顔でそんなにモテないからと言っても、それなりに長生きしている分、一人や二人は好意を寄せられる事もあった。だがカイはその好意に応える事はなく、結局はそういう子供を成す事もしなかった。

そんなカイが今更誰かと結ばれ子を成す事なんて有り得る筈が無いのだ。

そもそもカイは精神面でも普通の人より脆い面がある。もし誰かと結ばれ子を成したとしても、いずれはその女も子供もカイを残して先に逝くだろう。精神的に弱いカイが愛する女と子供を失えば、カイの精神面が崩壊してしまいかねない。

無駄に長生きしているくせに精神面で成長する事は無かった。そんなカイが大切な人と過ごした思い出を糧に生き続けるか微妙なところだ。

「取り敢えずそういう話は終わりだ。それよりも結局は近衛木乃香は無事だったのか？」

自分の身の上話を強制的に終わらせて、カイは詠春に依頼だった木乃香の救出は成功したのか成功しなかったのか知りたかった。

この話に詠春も真剣な態度で、

「木乃香は無事でした。魔法の存在を知られてしまいましたが、木乃香が無事で本当に良かった」

だが親の顔をしながら答える詠春に、カイも心から良かったとは思える。

「そうか。結局は俺も力不足で何の役にも立たなかったが……」

「いや、鬼神リョウメンスクナノカミを完全に消滅させたじゃないか。それはカイがやった事なのだろう？」

「え？　あ、あぁ……、俺と言えば俺なんだけど……（鬼神ってあのデカブツだよな？　未来の紋章め……、あれを消滅させたのか……）」

「全く……、私やナギですら封印するに留まったのに、カイが消滅させたから私達は形無しだ」

「はは……」

詠春はカイがリョウメンスクナノカミを消滅させたと思い込み、カイは苦笑せざるを得なかった。

その誤解をいちいち解くのに弁明する気も無いので、このまま詠春には誤解してもらおうとカイは思った。

「それで？　此処の被害はどうなんだ？」

このカイの質問に詠春の表情も曇る。

「……端的に言えば最悪ですね。石化されていた侍女はともかく、斬殺された侍女達の数が多いんです。こんな事になるとは思いませんでしたよ」

「……、それに麻帆良学園の女子生徒も殺された」

「知っていましたか。正直この問題の処理には困る事になると思います。西と東、これから仲良くやって行こうとした矢先にこれですからね。しかも被害者の中には一般人が居たのですから、処理を間違えると大変な事になりそうです」

「……、処理、ねえ……」

この『処理』という言葉にカイは疑心を抱く。

学園長の甘ったるい考えと詠春の慢心によって引き起こされた事件だ。それを『処理』で済まそうというのは如何なものか。

「まあ良いさ、色々と悩んで一番良い処理をすれば良い」

「まったく……、カイは裏の人間としては秘匿にされているからって、一応事件の関係者だぞ？」

「だからって彼女達を死なせてしまったのは俺じゃない」

「それはそうだが……」

（いや、俺があの時、廃工場でユーバーを始末出来ていれば、彼女達も死ぬ事はなかった？　あぁ、俺にも責任が出来ちゃったかな……）

彼女達を殺したユーバーを先に始末出来なかったカイにも非があると言えばあるかもしれない。

だがカイ自身にはユーバーを殺せるだけの実力を持ち合わせてはいない。あくまでカイはユーバーを『この世界から追い払う事』を目的としていた。

殺しても死ぬような奴じゃないって事は分かっているので、ユーバーには『抹殺』ではなく『撃退』を目標としていた。そんなカイに廃工場でユーバーを始末出来る訳もない。

いや、これは単なる言い訳。逃げの言い文句にしか過ぎない。

三人の少女達が死んだ今、カイ自身も覚悟を決めてユーバーを『抹殺』しなければならない。

そんな事をカイが考えている事も知らず、詠春はカイに訊ねる。

「ところでカイ、君も学生をしているならクラスメートの子達が心配していないか？」

「……あ」

失念していました、そう思わせるように顔が一気に青ざめていき、ズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

そして連絡先はもちろんお坊っちゃん。

もしもし、と一回のコールで出てくれたお坊っちゃんの声は、ま

さに不機嫌、怒っている、静かに激怒しています。

「もしもし、お坊っちゃん――――いや、委員長。そっちの様子はどうかな？」

『此方は篠宮君の偽物を監視しているので、今日の僕の完全自由行動日が滅茶苦茶です』

口調は涼やかだが非常にお坊っちゃんは怒っている。申し訳ない気持ちで一杯になりながらも、カイはお坊っちゃんに更に訊ねる。

「……、偽物君は誰かと行動しているのか？」

『今は加藤君と行動を共にしています』

更に声のトーンが下がった。

「……、浩輝にはバレてないよな？」

『大丈夫だと思いますよ。僕が見てる限りは偽物の篠宮君も本物と遜色ない言動ですので、加藤君も本物の篠宮君だと思っているんじゃないですか？』

「ありがとう、お坊っちゃん。この礼は必ずするよ」

『別に礼はいりませんよ。早く戻ってきて僕を自由にしてくれれば』

「あ、あぁ、直ぐに戻ります」

重く、冷めた言葉にカイは冷や汗をかきながら、直ぐに戻ると言

って通話を切る。

やべー、早く戻らないと、とカイは内心焦る。

「学生は大変そうですね、カイ君？」

「うるさい。とにかく俺はこのまま戻るからな」

やはり激痛が走る身体だったが、無理やり我慢して立ち上がる。

そして戸を開けて去ろうとするカイに、詠春が呼び止める。

「カイ」

「ん？　何だ？」

「落ち着いたら酒を酌み交わさないかい？　高級な酒で」

この詠春の申し出にカイは少しの間沈黙して、

「残念だが俺は永遠の一五歳だ。この国の法律では二〇歳からだから、永遠に飲めないので遠慮させてもらう」

天使のようにも悪魔のようにも見える微笑みで答えたカイは、外へと飛び出していき、靴を履いて風のように去っていった。

その後ろ姿を詠春も微笑みながら見送った。

戦いの夜から明けて（後書き）

これで修学旅行編は終了となります。

四日目の完全自由行動日も書こうかと思いましたが、更にぐだぐだになりそうなので止めました。

次からは麻帆良祭までの日常編となりそうですが、何となく短い感じがします。

それからオリジナルばかりな話になりそうです。……それは最初からか。

ここまで読んでいただきありがとうございます。

これからも読んで頂けると嬉しいです。

非情な『処理』

その部屋には照明がない。

だが部屋の灯りはパソコンのモニタや何かしらの機械のボタンの光で満たされていた。

大小数千に及ぶ機械類からコードやケーブルが血管のように床や天井を這い、それらは全て中央の空間へと集まっていた。

その中央の空間には巨大な円筒状の容器がある。直径三メートル、高さ一〇メートルにも及ぶその容器には、奇妙な緑色の液体が入っていた。

その緑色の液体が入った容器に眠っている女性が浮いていた。

名前はマリア・フォースト。

カイを苦しめ、未来の紋章を苦しめ、追い詰める所まで行き、最後はカイに身体を貫かれて負けてしまった女性。

そのマリアは何処かの患者が着るような患者衣を身に纏い、緑色の液体の中で浮かんで眠っている。

そのマリアを側で見つめている男が居た。

その男の名はレアン。

艶のある漆黒の髪、透き通る肌、普通の人間には絶対に手に入ら

ないような血よりも紅い双眸が特徴的な男。

何も穢れていない純白のローブを纏い、何ともつまらなそうに円筒状の容器に入るマリアを眺めている。

自分のパートナーでもあるマリアがカイに身体を貫かれ重体であると言うのに、レアンはつまらない表情を浮かべる。

だがそれはマリアに向けられた物ではない。

「私の目測に誤りがあったか？　未来の紋章……、マリアのアーティファクトを使った真の紋章魔法は本物よりも威力が劣る。それにも関わらずマリアに負けた。いくら宿主であるカイの身体がボロボロだからと言って、あの様な負け方は……」

まるで近くで未来の紋章とマリアの戦闘を見ていたかのような言葉。そう、レアンは近くで未来の紋章とマリアの戦いを感づかれないように見ていた。

その戦闘を最後まで見ていたレアンは未来の紋章の評価を改める。

「私は未来の紋章を過大評価していたのだろうか？」

レアンは目を細くして、呆れたように呟く。

いくらマリアのアーティファクトで発動した真の紋章魔法を受けたからと言って、本物の真の紋章魔法よりは確実に威力が劣る。それでも未来の紋章の意思は敗れ、結果的にカイの意識が戻る事になった。

レアンの中で未来の紋章への評価が下がったが、逆にカイへの評価は上がっていた。

未来の紋章がマリアの攻撃を受け落下していった時、レアンは確実に終わりだと思っていた。だがカイは最後の最後で自我を取り戻し、油断しているマリアを一瞬で瀕死に追い詰めた。

そして二人は意識を失い未来の紋章が発生させた黒い大穴へ落下していくのだが、黒い大穴に突入する直前にレアンがカイとマリアを救出したのだ。

理由は簡単。まだ二人には死なれては困るからだ。

マリアは自分の言うことを何でも遂行する貴重な駒。カイは自分が手中に収めたい未来の紋章を宿している為、それにレアン自身もカイを気に入っている為、死なせるのは駄目なのだ。

こうやって目的である未来の紋章を宿したカイを手に入れた訳なのだが、どういう訳かレアンはカイを関西呪術協会の総本山に置いていった。

その理由は……。

『レアン……、様……』

その時、一台のモニタが拡大され、通信が入る。シルエットは黒く塗りつぶされ、声も機械的に変声されている為、男か女なのかも分からない。

ただシルエットの色で誰なのか判別出来るので、レアンもフッと

柔和な笑みに変えて対応する。

「君か。ふふっ、無理に『様』を付けなくても良いよ。君は私の従者じゃないんだから」

『それもそうですね』

「それで”修学旅行”は楽しかったかい？」

『はい、普通の学生みたく楽しむ事が出来ました。これもレアンさんのお陰だと実感します』

「それは良かった。君には今まで普通の人生を送れなかったからね。楽しむと良いよ」

『はい。機が熟す時まで楽しませてもらいます』

レアンとモニタの人物は軽く雑談をした後、レアンは本題に移る。

「それよりもカイの様子はどうかな？　あれから変わりは無いかな？」

『そうですね、表面的にはいつもと変わらないです。しかし本格的にアンチスキルスロットの呪いを解こうと密かに動いています』

「ふーん、アンチスキルスロットをね。それは楽しみだね」

モニタの人物から報告されたカイの現状に、レアンは近い将来を楽しみにしていた。

解呪不可能と言われるアンチスキルスロットをどの様にして解いてくれるのか、レアンはカイに期待を抱く。もしくは解けなかったとしても、今後はどの様な戦いをしてくれるか楽しみで仕方ない。

そんなレアンにモニタの人物は疑問に思った事をぶつける。

『レアンさん、一つ聞いてもよろしいですか？』

「何かな？」

『マリアさんと相討ちになった篠宮カイをどうして見逃すような事をしたのですか？』

モニタの人物の疑問は何故カイを見逃すような事をしたのかという事。折角手に入ったカイを関西呪術協会の総本山に捨て置いたのか、モニタの人物は疑問に思っていた。

その問いにレアンはフッと口角を上げ、

「そんなの決まっているじゃないか。まだそんな時期になっていないからだよ」

さも当然のように答えた。それがモニタの人物の疑問が深まる。

『しかしあれだけ固執していたレアンさんが、見逃すような真似をするとは思えないのですが？』

「君には分からないと思うけど私もカイも　”永遠の時を歩む者だ”　。こんな形で　”ゲームを終わらせたくないだろ？”　」

『……、ゲームですか？』

レアンの言葉にモニタの人物も困惑する。

尚、レアンの言葉は続く。

「カイの方はゲームとは思ってもいないだろうが、私からすればゲームだ。互いの全てを賭けた命懸けのゲームなんだよ。そのゲームをこんな形で終わらせるのは勿体無いとは思わないかい？」

『……』

「何十年と続いたゲームをこんな形で、こんな世界で終わらせたくはないんだよ。ただそれだけ」

淡々と答えるレアンにモニタの人物は狂ってると思った。

最優先目標を手に入れたかと思えば、ゲームとしてつまらないから、終わらせたくないと捨て置く……、そんなレアンの考えがモニタの人物には分からなかった。

不老にでもなればそんな考えが浮かぶのか、とモニタの人物は内心毒づく。そんなのんびり構えていると反撃を食らってしまう可能性を孕んでいるにも関わらず、レアンはカイを捨て置いた。

本当にこの男はカイを手に入れるつもりが有るのか、と疑問に思うことさえ出てくる。

そんな中、モニタの人物は話を変えてマリアの様子を訊ねる。

『ところでマリアさんの容態はどうですか？』

「ふふっ、”母親”が気になるかい？」

『……、はい』

レアンの”母親”という言葉にモニタの人物は声を詰まらせる。

別にマリアがモニタの人物の”実の母親”という訳ではない。ただモニタの人物にとってマリアは”母親みたいな存在”だと思っている事は確かだ。

故にカイに瀕死の状態に追われたマリアの心配をしてもおかしい事はない。

その事を分かっているレアンは正直にマリアの容態を話す。

「安心するといい。今は生命力も維持しているし、心拍も落ち着いてる。直に目を覚ます」

『そうですか……、良かった』

母親という存在であるマリアが現在は安定しているという事で、モニタの人物も安堵の息を吐く。本当に心配していたのだろう。

「マリアがカイの手によって死の間際まで追い込まれたからって、逆上してカイを殺してはいけないからね？」

『分かっています。向こうは此方の事情なんて知らないでしょうし、

殺すつもりはありませんよ』

「そうか、それで良い」

話が一段落したところで、それよりも、とレアンは話を変える。

「君の方こそ良いのかい？　本当の目的は〝カイの監視〟ではなく、他に目的が有るのだろう？」

レアンはモニタの人物が〝カイの監視〟以外にも、個人的に何かをやろうとしているのを知っている。

今のところは何も行動を起こしていないので、レアンとしては少々気掛かりだった。

だがそれも杞憂に終わる。

『まだ遂行するつもりはありません。〝彼〟がもう少し強くなった時、完膚無きまでに潰す予定ですが』

モニタの人物の目的は〝彼〟と呼ばれる人間を潰す事。その人物が誰なのかもレアンは知っている。

ただレアンはモニタの人物がやろうとしている事には興味を抱かない。さしてカイに影響しない事なので、興味も抱かないのだ。

だからレアンは早々に話を終わらせる。

「そうか……、それじゃ〝カイの監視〟と〝君自身の目的〟、どちらとも頑張ってくれ」

『はい、分かりました』

こうして通信が途切れ、拡大されたモニタも消失する。

通信を終わらせたレアンは一人、微笑みを浮かべて呟く。

「さて、私も準備しなきゃね。〝腐った魔法世界の消滅させる為に〟」

四月二十七日。日曜日。

この日、学園長室にて布団に寝て腰に氷嚢を当てている学園長、近衛近右衛門と、黒の半袖Tシャツに紺色のジーンズというラフな格好の篠宮カイの二人が居た。

何故学園長は布団に寝たきりになって腰に氷嚢を当てているかと言うと、関西呪術協会の総本山襲撃の際、増援要員としてエヴァン

ジェリンを京都に送った。

その際、エヴァンジェリンは麻帆良から一歩も外に出られない『登校地獄』という呪いを受けている。その呪いを一時的に解除する為に学園長が呪いの精霊を騙す儀式を行っていた。

その内容は五秒に一回『エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である』という書類にハンコを絶えず押し続けるというもの。

その事を聞いてカイは正直に、阿保だ……、と思ってしまった。

そんな馬鹿みたいな儀式でエヴァンジェリンを麻帆良の外に送り出せるなら、カイのアンチスキルスロットも簡単に解除出来るのではないかと考えてしまう。

それでも一時的なものだろうから、結局は意味がない。

「ところで今後どうするつもりですか？　麻帆良女子中３－Ａの子達が死んだ事について」

来賓用のソファにドカッと座り脚を組みながらカイは学園長に訊ねる。

カイの手には三枚の書類。書類には修学旅行で死亡した三人の少女の情報が記載されていた。

死亡した少女の名前は、朝倉和美、早乙女ハルナ、宮崎のどかの三名。共に年齢は一四歳とのこと。

やはりカイはこの三名の少女など知らず、会った事すらない。だ

が朝倉和美という少女については名前だけは知っている。

彼女は木村耕太と同じ報道部の人間でパパラッチと呼ばれていたのを知識として記憶している。

そんな彼女にはカイは一度も会った事もない。恐らくカイのクラスには同じ報道部の耕太が居る為、取材をする事はしなかったのだ。

そして残りの二人は名前すら知らなかった。

それも当然だ。麻帆良学園に通う生徒は数千人、いや、数万人もの人間が通っている。いちいち生徒一人一人覚えていられない。ましてや赤の他人のことを覚える事すらしない。

だがこれから彼女達を覚えておかなくてはならない。せめてユーバーを殺すまでは。

少々冷酷な目になっているカイなんて知らず、学園長はうつ伏せ寝ながら答える。

「既に手を打っておる」

「ほう、どんな手を？」

カイは変わらず冷酷な目を浮かべながら学園長に視線を移す。

「既に彼女達が死んだという事は学園内に流れておる。その情報は事故死ということで　”これ”　は魔法先生や魔法生徒達に勤めさせておる」

「ですが彼女達の家族にはどの様な説明を？」

「説明するつもりはない」

……え？　とカイは学園長の言葉に疑問符を浮かべる。説明するつもりは無いとはいったいどういう事かカイには分からなかった。

普通なら家族には謝罪をしたり状況説明をしなければならないのだが、学園長は家族に一切説明をしないと言うのだ。

カイは考える。学園長が何故この様な事を言ったのかを。

そしてカイは一つの考えを思いつく。その考えは最低最悪なものだった。

「まさか　”彼女達の存在を学園外から消すつもりですか？”」

無表情ながらもカイは冷酷に紡いだ。その言葉に学園長はカイの姿を一瞥して答える。

「その通りじゃ。死亡してしまった生徒達のご家族には、その生徒の事を綺麗さっぱり忘れてもらう。記憶だけではなく所有物、写真など生徒達の関係する物を全て残らず処分するつもりじゃ」

何とも冷酷な『処理』。これはカイの予想以上の返答で、本気でやるつもりかと疑ってしまう。

朝倉、早乙女、宮崎の三名の家族から記憶を奪い去ろうと言うのだ。家族の記憶だけでなく家族で撮った写真や、三人が使っていた家具などを処分するつもりでいる。

何とも残酷な『処理』。家族から最愛の娘を存在ごと奪い去ろうとするのだから。

本当に実行するつもりなのかと、カイは学園長に目で問うと、学園長の目はカイが標的を殺す時のような濁った目をしており、本当に実行するつもりなんだとカイは理解する。

これが学園長が下した『処理』。これが将来有望な子供先生を守る為の『処理』だと言うのか。

「学園長。これは例の子供先生を守る為の処理ですか？」

「それもあるがワシは麻帆良学園を護る立場にある。生徒を死なせてしまった等と外に流れれば、今後麻帆良学園に子供達が来なくなるかもしれん。それだけは何としても避けねばならんからのう」

「……、そんな処理をしてもいずれは明るみに出ますよ？」

「そうならないよう、ワシの直属部隊に徹底させる。麻帆良学園に不利益を生じさせないようにのう」

麻帆良学園を護るため……、聞こえは良いが、やっている事は不誠実な対応。正義を掲げる『立派な魔法使い』が、魔法を悪用する事に学園長はどの様に考えているのだろうか。

案外何も考えていないかもしれない。学園長の直属部隊が暗躍する辺り、正義とか悪とか考えていないのだろう。

今は麻帆良学園のイメージを壊さないようにする為と、子供先生

の将来を守る為しか考えていないのだろう。

カイは学園長がどの様に答えを出すかは楽しみにしていた。いったいどの様な責任を取るのかと。

だが学園長は子供先生はおろか、自分も責任を取らずに闇に葬ろうとしているのだ。間違いなく悪がやるような事だ。『立派な魔法使い』が嫌う悪を……。

この対応には散々人を殺してきたカイも内心、怒りが込み上げてきている。それでも表情には出さない。ここで敵意を見せてしまって麻帆良から追い出されてしまったら、アンチスキルスロットの呪いを解けなくなってしまう。

なので学園長に敵意を見せずにカイは呟く。

「今の学園長、俺よりも冷酷ですね」

この言葉に学園長はフッと笑みを零す。

「全くじゃな。ワシもそう思っておるよ」

そう思っているなら今すぐに中断しろ。

そう思うカイは学園長に無駄だと思いつつも訊ねてみる。

「止めるおつもりは？」

「止めるつもりはない。既に命令しておるからな」

「手回しの早いことで」

学園長の口振りからして既に学園長の直属部隊が、死んだ三人の家族へ向かっているみたいだ。

もしカイが急に正義感に駆られて止めようとしても、既に手遅れになってしまっているのだ。もう止める手だても無い。

何だか居心地が悪くなってきたカイは三枚の書類をテーブルに置いて立ち上がる。

そして扉の所まで歩くと立ち止まり、カイは最後に学園長に質問を投げ掛ける。

「学園長、何故子供先生をそこまでして庇うのですか？」

カイにとってネギ・スプリングフィールドはそんなに大事な存在なのかと疑問に思ってしまう。

そんなに英雄の息子が凄いのか。そんなに重要視されるのか。

英雄は英雄、英雄の息子は英雄……、になるとは到底思えない。自分の生徒を守れない人間が英雄になれる筈がないと……。

そんな風にカイが思っているとも知らず、学園長は質問に答える。

「ネギ君はナギと並ぶ程の英雄になれる存在じゃ。だからワシらが大切に育てていかねばならん。彼が成長して他の魔法使いをリードしていけるように」

この学園の言葉を聞いてカイは思う。

この箱庭（せかい）は子供先生には甘いんだな……。

「そんな教育じゃ子供先生は良い『立派な魔法使い』に育ちはしませんよ？　まあ俺からしたらこの世界に本当に『立派な魔法使い』が存在しているのか疑問ですがね。それと報酬はしっかりと口座に振り込んでおいてください。その身体じゃ暫くは安静にしないといけないみたいなんで」

カイはそう言い捨てて学園長室から去っていった。

カイにとってこの世界に『立派な魔法使い』が居るのか疑問に思っている。カイがコイツは『立派な魔法使い』だと思っていた人間も、既に死んでいる。

もちろん探せば居るのだろうが、恐らくごく少数だろう。そんな大多数の『立派ではない魔法使い』達を今後はあの子供先生に引っ張らせるとか、笑い話にもならない。

英雄は英雄、英雄の息子はただの英雄の息子にしか過ぎない。

たかが一〇歳の子供に何の期待を押し付けているのやら。

学園長室からカイは出て行き、学園長が一人残される。

静かになった学園長室で一人、誰に聴かれることなく呟く。

「篠宮君、お主も分かるじゃろ。英雄の息子と言うのは存在しているだけで利用価値がある。いつの時代だって英雄は必要じゃ。その為に育てているのだと、お主も分かっておるじゃろ？」

非情な『処理』（後書き）

……学園長の性格が悪くなってしまいましたね。

別に嫌いではないキャラなのですが、このような感じになってしまいました。

学園長が好きな人がいたらごめんなさい。

修学旅行明けの休日

学園長室から市街地へと出て行ったカイは、嫌な気分を首を横に振って無理やり気分を転換させる。

別に学園長を信じていた訳ではない。学園長も人間故に悪い事だってするだろう。しかし今回の話は正直に駄目だ。

三人の少女の家族から記憶を操作して、子供の存在を消そうと言うのだ。流石のカイもそこまではしない。

だいたい人を殺す時は殺す人物に関わっていた人達に恨まれる事を承知しながら殺している。恨まれて襲われようともカイは構わない。返り討ちにはするが。

だが学園長は子供先生の責任はおろか、自分の責任も取ろうとはしなかった。それどころか少女達の家族の記憶を操作して、逃げたのだ。許される事ではない。

仮にも『立派な魔法使い』を育てている立場の人間が、その様な悪事に手を染めてはいけない。それなのに学園長は悪事に手を染めてしまった。

そんな学園長にカイは失望してしまった。散々人を殺して血に染まっているカイが、学園長に失望した。人の事を言えない身だというのに。

やっぱり人間ってどの世界でも本質的には同じなんだな、とカイは雲一つ無い青空を見上げながら漠然と思う。

誰かを守る為に禁じられている事をしたり、はたまた自分の保身の為に悪事を働いたり。そんな人間はどこの世界でも同じなんだと、カイは再認識した。

（学園長、きっと良い死に方しないんだろうなぁ）

くすくすと嘲笑うカイ。

そう思う本人もきっと良い死に方はしないだろう。無様にくたばって、誰に看取られることなく、孤独に死んでいくのだろう。そこに救いなんてない。

そんな事はカイも重々承知で自分も無様に死んでいく。だがそれは先の話。だいぶ後の事だろう。

しかし学園長に関しては直ぐの話になりそうな気がしていた。根拠はない。それでも学園長は近い未来、死に近い事が起こるのではないかとカイは感じた。

「まあ学園長がどの様な死に方をするのか、なんて俺には関係ないけどね」

そう呟いてカイは学園長について考えるのを止める。これ以上学園長について考えても仕方ないのだ。

ぶらぶらと学園都市を歩き回って、カイは適当に街並みを見ていく。街並みを見て、カイは違和感を感じた。

「……、カメラが増えてる……？」

そう、麻帆良学園都市に設置されている監視カメラが、やけに多くなったような感じがした。街角や各店舗には勿論、普通の道路にも全方位見られるタイプの監視カメラも増えているのだ。

以前は設置されていなかった所にも監視カメラが設置されていたりと、何か何処に行っても監視されているようで気味が悪い。

カイは新しく設置されている監視カメラなどを尻目に歩き去る。

（いったいこの麻帆良はどうなっていくんだ？　俺が居る間は何も無ければ良いのだが……）

何十台も監視カメラが設置されていく麻帆良学園に危惧しつつも、カイはゆったりと歩く。

ゆったりのんびりと休日の学園都市を歩いていると、前方から渦中の子供先生と保護者役の少女と子供先生の右肩に乗っているオコジョ妖精が歩いてくる。

関わり合いたくない奴らに出会しちゃったな……、とまるで他人事のようにカイは思っている。だが関わり合いたくないのは本心で、出来るだけ気配を消してすれ違おうとする。

しかしカイは麻帆良学園内では有名人。簡単に上手くいく筈もなく。

「あっ、篠宮君！　良いところに出会したわね」

あっさりと見付かってしまいました。

すれ違い様に子供先生の保護者役の少女に見付かってしまい、カイは内心深い溜め息を吐く。何故こうも上手くいかないのだろうか、とカイは自分の失態に傷付きながらも子供先生達の方へ振り向く。

「あ、あの、先日の修学旅行では助けていただき、ありがとうございます！」

何とも子供らしからぬ真面目な態度で礼を申し上げる子供先生、ネギ・スプリングフィールドにカイは無表情で答える。

「別に君を助けた訳ではないですけどね。ただ学園長から依頼されたから戦った訳ですので」

最初はもちろん学園長の依頼で関西呪術協会の総本山へと向かったわけだが、襲撃者がユーバーだと判断すると、私情を持ち込んで戦場へと向かった。

それからはユーバーと戦い、全身をズブッと刺され気を失い、いつの間にか総本山で目を覚ました。そんなカイは先の戦いで誰かを助けたという記憶は全くない。だって未来の紋章の意思が表層に出ていたから。

そんな事を知る由もない神楽坂明日菜は、

「でも助けてくれた事には変わりないでしょ？　鬼達とかデカブツからも助けてくれたし」

屈託ない笑顔で明日菜は言う。だがカイはその笑顔を捉えず、明日菜の言葉に思考が囚われる。

デカブツから助けてくれたって、どういうこと？

デカブツと言うのは鬼神リョウメンスクナノカミの事だろう。それくらいはカイでも分かる。

問題はリョウメンスクナノカミから明日菜を守ったということ。

その時のカイは未来の紋章に身体を明け渡し、自分は深層で眠っていた。つまりカイが明日菜を助けたという記憶は存在しない。

本来は明日菜だけではなく祭壇に居た他の少女達も結果的に助けたのだが、未来の紋章がリョウメンスクナノカミに攻撃しただけで、別に少女達を助けようとした意志はない。

（未来の紋章がこの少女を助けたのか？　でもそれは結果的で、別に助けようとしたつもりは無いだろうし）

カイも未来の紋章が人助けだなんてする筈がないと考えているし、結局は明日菜の勘違いで終わっていく。

すると黙っていたオコジョ妖精、アルベール・カモミールが口を開く。

「それよりも男の娘の兄ちゃん。あんた一体何者だい？　あのデカブツを一人で完全消滅させたって西の長が言ってたぜ？　にしては今のあんたには魔力が全然ない。一体どうなってやがる？」

おしゃべり詠春め、余計なことを、とカイは心の中で愚痴を零しつつも返す。

「それは秘密だよオコジョ君。君達が俺の事を知る必要は一切無いんだ。そうだろう？」

「むっ……、確かにそうだが……」

カイはカモに自身の秘密を話す事はなく、軽くあしらう。

このオコジョに自身の秘密を話すのは危険だとカイ察知し、ただただ黙っている事にする。それにカイの秘密を知る者にはカモやネギ達には話さないように根回ししておかなければならない。

それだけこのオコジョ妖精にある意味で危険視している。全く信用出来ない。

それよりも、とカイは話を変えて、

「良いんですか？　先生のクラスから死人が出たって言うじゃないですか。こんな所で油を売っている場合ではないでしょうに」

わざとこの話題を持ち上げる。そのカイの言葉にネギはピキッと凍り付いた。

自分のクラスの生徒から死人が出て、今は大変な事になっている。しかも自分の責任でもある為、ネギは苛まれていたりする。

自分のせいで三人もの生徒が死んでしまい、本来なら泣きじゃくりたいが自分は先生、泣いている暇など無いと思っている。

だがカイにはネギの考えている事などどうでもいい。

「いったいどの様な責任をお取りになるつもりなのでしょうか？」

更に言葉を続けるカイにネギは本当に泣きそうになる。

カイは分かっている。今回の事件は誰も責任を取らず、闇に葬られてしまう事を。だからこんな事を言っても無駄だと分かっているのに、カイは言わざるを得なかった。

もちろんカイにもそれなりの責任が有るのだが、今は棚上げしてネギを追い詰めようとする。なんと最低な性格をしているのだろうか。

「ちょ、ちょっと篠宮君！　別にネギだけの責任って訳じゃ！」

今にも泣きそうになっているネギを見て、保護者役の明日菜が間に入ってネギを庇う。

それからカモも明日菜の右肩に乗ってカイに文句を言う。

「やいやい！　兄貴を泣かそうとするならオレっちが許さねえぜ！！」

まるで悪役じゃないか、とカイは愚痴気味に零し、一度目を閉じる。

直後、カイを中心に呼吸をする事すら苦しくなる程の重圧感が発生し、ネギ達を襲う。

「な、何？　何か苦しい……」

今まで味わった事のない重苦しい感覚に、明日菜は暑くもないのに額から汗が噴出する。明日菜だけでなく、ネギとカモも汗が出てくる。

息も出来なければ声を出す事すら億劫に感じる程に。それでもカモは振り絞って言葉を紡ぐ。

「こ、こりゃあエヴァンジェリンよりも強い殺気じゃねえか！？」

そのカモの言葉にカイは嘲笑う。

「ふざけないでよ。この程度が殺気な訳ないだろう。殺気って言ったらこんな感じだろ？」

ひとしきり嘲笑ったカイが目を開けた瞬間、カイ周辺の空気が重くなる。

身体が押し潰されそうになるのを必死に堪えるネギ達。全身から嫌な汗が流れ出し、恐怖を植え付けられていく。エヴァンジェリンでも明瞭にはしなかった殺気を、カイはネギ達に本当の殺気を当てている。

今まで味わった事がない殺気にネギ達は完全に凍りつくように固まってしまった。

ネギ達が固まり、何も出来なくなった事でカイは殺気を閉じる。

「まあ別に俺はネギ先生がどう責任を取ろうとも取らないとも関係ありませんから、どっちでも良いのですが。取り敢えず俺に厄介ごとを振りまかなければ良いです」

カイにとって他人が巻き起こす騒動に自分が巻き込まれなければ、何をしようとも構わない。ネギ達がドタバタ騒動を起こそうとも、カイに災難が降りかからなければ構わないのだ。

だからカイがネギに説教じみた事を言う資格は無いのだが、自然と口にしてしまった。何故かはカイも分からない。

未だにカイの殺気に当てられ、凍り付いたように固まっているネギ達を放置して、カイは早々に立ち去る。これ以上彼らと関わっている場合ではない。

（しかしあの程度の殺気で固まるなんて、魔法使いとしてやっていけるのか？　俺の殺気なんて威嚇程度にもならない筈なのに……）

自分の殺気で硬直していたネギにカイは魔法使いとして駄目だと呆れてしまう。

少なくともネギに当てた殺気は本物だったにしろ、エヴァンジェリンなどから比べたら全然だろう。

それに殺気は有っても無くても戦いは出来るので、必要はない。まあ一般人を脅す程度には使えそうなので、有れば便利なのかもしれないが。

「まっいいか。他人のこと気にしてられる程、俺は強い訳じゃないし、自分の心配した方が良いか……」

石化したかのように硬直したネギ達を放置し、カイは歩きで男子寮へと帰ろうとしていた。

偶には歩いて帰るのも興だろうと馬鹿みたいに思ったカイは、本当に歩きで帰ろうとする。もう正真正銘の馬鹿としか思えない。

そんなこんなで歩いて帰っていると、大きな公園の前まで歩く。休日という事もあって妙に人が多いので通り抜けるのを止めようと思ったが、公園を抜けた方が早く男子寮に帰れるのでカイは公園に入る。

「ちょっと、待つです」

――――入る手前、後ろから誰かに声を掛けられた感じがするので、カイは後ろに振り向く。

後ろに振り向くとカイより一〇センチほど小さい少女が息を切らしながら立っていた。紫色の髪に黒いワンピース、ニーソックスを穿いた少女。

だがカイはこの少女に面識はない。全くない。見た事すらないと

思う。

「え、と……、誰？」

だからカイは訊ねる事しか出来なかった。だって本当に知らないのですもの。

息を整えた少女は毅然とした態度で口を開く。

「私は綾瀬夕映と言います。少しお話をよろしいですか？　篠宮カイさん」

「……、はあ……」

こうして少女、綾瀬夕映に呼び掛けられてしまい、カイは何故かこれに付き合う羽目になってしまった。

「話と言うのは修学旅行の件です」

カイと夕映は公園の前に居るので、公園のベンチに座って話をする事になった。

「今広まっている通り、修学旅行で私のクラスから死者が出たです」

子供達がボールで遊んでいたり、砂場で砂遊びをしている。

「その死んでしまった人は私の親友でした」

空は変わらず雲一つない快晴の空。それも当然、学園長室から出てから一時間程度しか経っていない。

「学園内では不慮の事故死という情報が流れているです。しかしそれは嘘です。私は見たんです！　金髪の黒ずくめの男がハルナを剣で貫いたのを！　そしてのどかも朝倉さんも……、って聞いてるですか、篠宮さん？」

途中から熱く語っていた夕映だが、隣に座っているカイが正面一点しか見ていない事に気付き、ちゃんと聞いているのか訊ねる。

「うん、聞いてるよ。金髪の黒ずくめの男が君の親友を剣で貫いたんだろう？」

カイは聞いていないようで夕映の話を聞いていたので、夕映は話を続ける。

「そうです。私は朝倉さんに窓から突き飛ばされ、生き延びる事が出来ました……」

「それじゃ君もあの場所に居たんだ？」

「はい。訳も分からず助けを求めました。ただ警察は相手にしてくれそうになかったので、楓さんに助けを求めました。それからネギ先生が犬耳の少年と戦おうとしていたり、白いデカブツが復活して危なかったり、その白いデカブツを篠宮さんが倒したとかいう話になってたり、この修学旅行で様々な『非日常』を体験したです」

（デカブツを倒したのは俺であって俺じゃないです）

「しかし学園に帰ってみると嘘の情報が流れていました。のどかやハルナ、朝倉さんの死は不慮の事故死。黒ずくめの男に殺されたという真実が無かったです」

「まあな、殺されたって情報を流せば秘密にしている事項まで明るみになってしまう恐れがあるからな」

「……、魔法、ですか……？」

恐る恐る呟いた夕映にカイは少し顔を顰める。

夕映が語る言葉から魔法について知っているものだとカイは思ったのだが、今思えばこの少女は一般人だった感じがする。失言だったかとカイは顔を顰めるが、

「魔法と言うのは一応自分なりに出した答えです。別に篠宮さんが原因で魔法の存在に気付いた訳ではありませんよ」

どうやらカイが原因で魔法の存在に気付いた訳じゃないらしい。

「まあ今の篠宮さんの態度で確信に変わりましたが」

「……」

どうやらカイの態度で夕映の考えは確信に変わったらしい。哀れだ。

はぁ、と一息吐いてカイは夕映に質問する。

「それで君は何故俺に声を掛けた？」

ここまで夕映の話を聞いてきたカイであったが、何故夕映がカイに声を掛けてきたのか分からない。魔法のことを聞きたいなら子供先生にでも聞けば良いのだ。

そのカイの質問に、夕映はカイに向き直って真剣な面持ちで答える。

「あの時、篠宮さんは一般人の私ですらもすごく強い印象を受けました。あなたならあの黒ずくめの男をも倒せると思ったです」

「……、それで？」

「すごく虫の良い話だとは思います。思うのですがどうかのどか達の仇を取っていただけませんか？」

つまりは復讐の依頼。

親友を目の前で殺されてしまった夕映が、黒ずくめの男に対して復讐心を抱かない道理はない。復讐したくてしたくてたまらない。

祭壇で見掛けた時、夕映はカイに対して恐ろしいという感情を持ち合わせていた。まるで人間じゃないような気を放っていたり、額が青白く発光していたりと、普通人である夕映からしたらカイに対して恐れを抱いても仕方ない。

しかもカイは夕映も知っている程の有名人、まさかこんな裏の顔を持っているとは到底思わなかっただろう。

だが、そんなカイだからこそ夕映は黒ずくめの男、ユーバーを倒せるのではないかと思ったのだ。

「そんなの無理に決まってるじゃん」

……え？

軽い口調で答えたカイに夕映は呆然としてしまう。

呆然としている夕映を尻目にカイは続ける。

「だって俺、弱いもん」

「弱いって……、あのデカブツを倒したのでは？」

「ソレはソレ、コレはコレ。それに他人の復讐には興味ないです、はい」

「それじゃのどか達の仇はどう取れば良いですか！？」

「そんなに仇を討ちたければ自分でやれば良いんじゃないかな？瞬殺されてしまうんだろうけど」

今にも泣きそうになっている夕映に対してカイは非情なまでに冷たい対応を取る。

だがここでしっかりと夕映から黒ずくめの男に対して復讐心を取

り除かないとならない。下手に黒ずくめの男に手を出してしまったら、夕映は一秒も持たずに親友の元へ行く事になる。

そんな事が目に見えてる結末にさせる訳にはいかないだろう。

だからカイは冷たい態度を取ろうとも、夕映の復讐心を取り除かないとならない。

すると俯いていた夕映が肩をビクビクと震わせながら言葉を漏らす。

「……そ、それでは……私はどうすれば……！　私には力も何も無いのに！」

「ただ泣きじゃくって親友の死を労れば良い。魔法という裏の世界に関わらず、今まで通り表の世界で暮らせば良い。普通の人間として一生を過ごせば良い。わざわざ泥を被ってまで裏の世界に足を踏み入れなくても良い。君が無闇に足を突っ込んで死ぬのが見え見えだ」

一般人が無闇に裏の世界に足を突っ込んでしまったら死んでしまう。

漫画やゲームみたいに平和に慣れている人間が、何の力も無しに裏の世界に関わってしまったら生き抜ける筈がない。ここで夕映には魔法に関わらないように釘を刺さなければいけない。

カイは夕映に目線を合わせて諭すように言う。

「いいか、綾瀬夕映。君は親友の分まで一生を遂げろ。普通に過ご

していく中で親友を想い続ければ、その親友はそれだけで浮かばれる。人は想われる、それだけで救われるんだ」

まるで偽善めいた言葉。どこか宗教の教祖が言いそうな文句に、カイは自分で言っていて嫌悪感が体中に走る。

こんな人を諭すような謡い文句など言えるような性格ではないことは重々承知なのだが、目の前の少女をこちら側に入れない為にも、カイは偽善者を演じる。

そんな偽善めいた言葉でも夕映の心には届いたようで、首を縦に振る。

「……、分かったです。ごめんなさいです、このような話をしてしまいまして……」

「いや、別に構わない」

「ありがとうです。ほんの少しだけ気持ちが晴れた感じがするです。それでは私はこれで」

夕映はベンチから立ち上がり、涙を目に浮かべながらも笑ってカイから去っていった。

それから一人残されたカイは時間が経つにつれて、身震いを起こす。

「くはっ！　俺が人を諭すようなことを言うなんて、気持ち悪い…

…」

カイは先ほど夕映に言った事に対して、本当に気分が悪くなり口に手を当てる。

あんな偽善じみた言葉なんてカイの性格ではない。

「……、それでも綾瀬がこちら側に足を踏み込まなければ、ユーバーに手を出さないとなれば俺の言ったことも無駄ではないかな……」

ただ一般人の夕映が裏の世界に来なければ良いと思うのは、カイの本心である。

本当に来ないでほしいと願うばかり……。

修学旅行明けの休日（後書き）

夕映にフラグが立ちかけたようで立っていません。

まあ何が書きたかったかと申し上げると、夕映に魔法側に来させないようにしたんですね。

この小説ではのどかも死にハルナも死んでいます。原作では魔法に興味が出て関わっていきますが、親友が死んでユーバーに対して復讐心しか湧かないと思うんですね。そういう理由で関わらせても…ね。

なのでカイには夕映を諭してみせました。こんなので諭せるのか？という疑問が湧きそうですが、その辺はご容赦ください。

暗躍始動

はぁ、と深い溜め息を吐いたカイはさっさと学生寮へ帰ろうと、ベンチから立ち上がろうとする。

「ちょっと待つネ」

そんな時に限って再び後ろから誰かに声を掛けられ、カイは今日は厄日なのではないかと思い始める。

しかも語尾に何処かの中国人が言うような口調に、カイは本当に嫌な予感しか湧かない。振り向きたくないが振り向かなければ何か始まらないような気がして、ゆっくりと後ろを振り返る。

後ろに居たのはカイも知っている『超包子』のオーナー、超鈴音だった。

お料理研究会、中国武術研究会、ロボット工学研究会、東洋医学研究会、生物工学研究会、量子力学研究会に所属するスーパー中学生。頭脳明晰で中学一はもちろん、高校生、大学生、大人すらも敵わないという。それから運動神経も良く中国武術も上手。文武両道を往く少女なのだ。

その少女は葉加瀬聡美という少女と共にエヴァンジェリンの従者、茶々丸を制作した事から魔法についても知っている。その事実はカイもエヴァンジェリン経由で知っており、この少女に警戒心を抱かないとならない。

それに私服姿がチャイナドレスってどうよ、という疑念が沸いて

くる中、超は何気なくカイの隣に座る。

「やあ初めまして、『お姫様』の篠宮カイ君。いや、”カイ・メルフェス”と呼んだ方が嬉しいカナ？」

「ッ！！」

普通の表情で言った超の言葉にカイは顔を強張らせ、超から距離を取る。

いったい何なんだこの女は、とカイはベンチに座り実に楽しそうな顔を浮かべている少女を怪しむ。

この少女については自分に纏わる秘密など話した事は一切ない。ましてや『カイ・メルフェス』というカイの本名なんて知っているのは麻帆良内では学園長、真名の二人だけな筈。それ以外の人物は知らない筈なのだ。

だと言うのに目の前に居る中国人風の少女はカイの本名を知っていた。いったい何処から情報を仕入れたと言うのか。

学園長か真名が情報を流した？　十分にあり得るから困ってしまう。ただ今頃になってカイの情報を流すのはどうなのだろうか。この考えは早計か。

ならこの少女はいったい……。

「そんなに強張らなくていいネ。篠宮君が実は異世界人であったり、未来の紋章という絶対的な力と呪いの影響で永遠にその姿であったり、対魔法使い専用のアンチスキルスロットを受けて魔力が激減し

ていたり、私はその程度の情報しか持ち合わせていないね」

「もう殆ど俺の情報持ってんじゃねえか！」

殆ど自分に関する情報を手に入れている超に、カイは警戒レベルを引き上げる。ここまで知られていると敵かどうなのかを見極めなければならない。

もう臨戦態勢に入っているカイに超は、アハハハと笑って両手を上げる。

「私は別に篠宮君の敵ではないヨ。この情報を他人に流したりもしない。ただ私の計画に協力してほしいと話しかけただけに過ぎないネ」

「……、計画？」

超の言葉にカイは眉を顰めて訝しむ。

インチキ占い師を見てしまったような疑心で満ちた顔をするカイに、超は質問する。

「篠宮君はこの世界の未来を知っているか？」

その質問にカイは警戒しながら答える。

「……、悪いけど俺はこの世界の未来なんてどうでも良い。栄えようが衰退しようが関係ないね」

カイにとってこの世界の人間でない以上、未来がどうなろうと構

わない。冷たいような印象を受けるが、未来を視たとしてもやはり何かをするつもりはない。

それが相当酷い未来だったとしても、カイが自分から何か行動を起こそうとは思わない。わざわざ他の世界を救う理由なんてない。

そう警戒を続けながら冷たく答えるカイに、超は予想通りと言わんばかりの顔をする。

「流石は異世界人ネ、この世界が滅びようとも構わないか」

何気なく言った超の言葉にカイは何か引っかかる感じがする。

滅びようも構わない？

「何だ？　この世界の未来を知っているような口振りだな？　お前も未来を視る事が出来るんです、って言うんじゃねえだろうな？」

「いやいや、そんな力はないが　”未来から来た故に未来で何が起こるのか知っているヨ”　」

「……、はあ？」

何を仰っているのですかこの中国人少女は、とカイは呆然としながら思った。

何？　未来人という奴ですか？　もうあり得ないんですけど。電波ですか？　これが電波という奴ですか？

超の言葉にカイの頭の中では様々な事を考えている。ただ電波に

ついてはカイも当てはまる事を忘れてはならない。

未来の紋章の力で未来を視れるなんて、他人からしたら電波以外に他ならない。その事実をカイは忘れている。

超の言葉に翻弄されているカイに対して、超は平然と言う。

「そんなに未来人がおかしいカナ？　吸血鬼や異世界人が居るぐらいだから未来人が居てもおかしくないダロ？」

「確かにそうだが時を移動する術なんてこの世界には居ない筈なのに……」

「未来は科学技術も今より発展する。時を移動する機械ぐらい作れるネ。これがその機械ヨ」

そう言って超は懐中時計のような物をカイに見せ付ける。

「何だこれ？」

「懐中時計型航時機カシオペア。使用者とそれに密着した同行者を時間跳躍させる驚異の超科学アイテムヨ」

「……、動いていないんですけど？」

「これは学祭期間、つまり世界樹の魔力が溢れ出す使えないネ」

「……」

もう何だろうか、相手にするのが疲れてきました。

うんざりと目を眇めて超を見つめるカイ。その顔は本当にタイムマシンかよ、と疑っている。

このカシオペアというタイムマシンが動いていない以上、超の言う事を信用してはならない。

そもそも時を移動するなんてこの世界では信じたくない。いったい何処の天然ドジっ子魔法少女なんだよと思ってしまう。

そんなカイに超はぷくっと頬を膨らませ、

「だが篠宮君に宿る力なら今でも動かせる事が出来るかもしれないヨ？」

そう言ってベンチから立ち上がり、カイに無理やりカシオペアを渡す。

「ったく、未来の紋章はそんな都合がいい力を持ってねえよ」

「いいからやってみるネ」

「こんな人目がつく場所でやれと言うのか？」

「……ム」

やってみろと推奨する超にカイは冷静に周りを見ながら言った。

それにつられ超も周りを見る。

此処は子供達が遊ぶ公園。無垢な一般人が周りに居る状況で未来

の紋章の力を使う訳にはいかない。

「確かに今ここで魔法という存在を認識させる訳にはいかないネ」

「だろ？　だからバレない場所で試してみたいんだが？」

「分かった、私に着いて来るね」

そして超はカイの右手を掴んで、どんどん歩いていく。

（これじゃ強制連行じゃないか）

超に右手を掴まれ、カイはただただ超に着いて行くしか出来なかった。

カイが超によって連れて来られた場所は麻帆良大学工学部の研究所。

此処の区画は研究が盛んな場所で、無数に建ち並ぶビルの中に研究所が幾つもある。一種の工業都市となっている。

麻帆良は西洋魔法の支部でもあるが、科学の力も強くなってきていて科学の街となってきている。

それもこれも超鈴音が麻帆良に来てからだ。二年前に麻帆良に来てから科学の力が発達してきたと感じる。

この超鈴音は複数の研究会に所属していて、どの研究会でもその頭脳を発揮している。その成績から研究員に絶大に信頼を寄せられており、今の麻帆良科学は超無しでは考えられなくなってきている。

麻帆良の頭脳とも呼ばれる超鈴音。その少女に目を付けられてしまったカイは何たる不幸か。未来の紋章という絶大な力を持ってなければ、こんな事にはならなかったのかもしれない。

とあるビルにある研究所の一室。専門家でないと扱えない機械やパソコンがズラッと並んでいる。

凄いな……、と科学については一般人のカイは見た事もない機械達に目を奪われてしまう。こういう機械を見ると触ってみたいが、無闇に触って機械を暴走させてしまったら大きな責任を背負わされそうなので、カイは理性で我慢する。

「そこら辺に適当に座ってくれて構わないネ」

超の言葉通りにカイはそこら辺の椅子を拝借して座る。

「此処には他に人は居ないのか？」

「ウム、此処は私の私室ネ。私の許可がない限り他人は入って来ないヨ」

この部屋は超の研究部屋兼私室。そう簡単に他人が部屋に入ってくる事は無いらしい。

「一人用の部屋を貰えるなんて、やっぱり超って凄いんだな」

「褒めてくれるか。悪意のない言葉は嬉しいヨ」

何気ないカイの言葉に超は何故か感動して目に涙を浮かべている。

その超の様子にカイはギョッと驚き慌てる。

「ちょ、ちょっと待て！　今の俺の言葉に何の感動がある!?　今あなた様に涙を流されては俺も対処のしようがないのですけど!?」

もう自分で何を言っているのか分からないほど、カイは混乱している。

カイも男なのだろう、女性の涙に弱い。大抵の男は女性の涙に弱いとされているが、カイも例外ではなく弱かった。長生きしているくせに女性の涙にも弱い。カイは弱い人間だ。いや、弱すぎる人間だ。

しかし何故超は涙を浮かべたのだろうか。もし超の涙が演技だったとすれば、これからは超の事を悪女と呼ぶことにする。そうカイは決めた。

「ちょっと感傷に浸ってしまたネ。気にする事ないヨ」

何ですか、この儚げな少女は。

いきなり儚げな少女を見せられても困るのですよ、とカイは内心呟く。初対面でこのような姿を見せられて、いったいどうしろと言うのか。

（いや、普通に気にしなければ良いのか）

カイはドライに、落ち着いて考えた。

いちいち気にする必要はないと超本人も言っている事だし、カイは超の言う通りに気にする事はしない。別にフラグを立てる為に来たのではないのだから。

「本題だけどこのカシオペアって要は世界樹の魔力で動かせるって事か？」

「ウム、物分かりが良くて助かるヨ。だてに歳はとっていないか」

「喧嘩売ってんのかテメェ……、まあいいや。それより世界樹の魔力で動かすカシオペアを、未来の紋章の魔力で動かせると思っているのか？」

「それを試してみるヨ。篠宮君が宿す未来の紋章は特別な力。多分動かせるネ」

「そこまで未来の紋章は万能だとは思わないが……」

取り敢えずカイは今は動かないカシオペアを手にして目を閉じると、未来の紋章の魔力を引き出す。

カイの額に刻まれている紋章が青白く光り出し、超はその様相を観察する。

この世界の人間には使えない絶大な力を扱える少年。超の知る未来の紋章の力なんて全く分からないが、ただ一つ、『未来が視れる』という事だけは分かっている。

それだけでも絶大な力だ。常人には出来ない、占い師よりも確実な未来を視る事が出来るのだから、カイは凄いと超は思う。

しかも額が青白く輝くなんて、もう人間には見えない。人の形をしている人外としか思えない。

それは兎も角この力が有れば未来の『悲劇』が回避出来るかもしれないと超が思っている頃、カイは目を開けてカシオペアを見る。

すると先程まで止まっていたカシオペアの時計の針が動いている。そう、未来の紋章の魔力で。

「うっそ……」

もうカイは信じられないと言った顔をしている。自分に宿る力は異世界の科学アイテムをも動かせる万能さを持っているのかと驚かされてしまう。

『神と同等の存在』……なんて言われている真の紋章に、宿主のカイも謎がどんどん湧いてくる。百万世界の一つとはいえ、こんな

紋章もない世界で、真の紋章の魔力で機械を動かせるとは思わなかった。

もしかしてシンダルに関連する物ですか、と見当外れな考えをしても仕方ない。こんなご都合主義が有って良い筈がないと言うのに……。

まあ今は別に良いかとカイは未来の紋章の謎よりも、カシオペアに集中する。このカシオペアが動いているという事は、時の移動が出来る事になる。超の話が本当ならばだが。

「で、使い方は？」

「右側に付いている一番の下のリューズで時間調整が出来るネ。試しに二四時間前に戻ってみるヨ」

「今使って大丈夫なんだろうな？　このカシオペアを使ったら魔力残滓が残って、魔法使いにバレたりとかしないよな？」

「安心するといいヨ。この部屋には魔力を外に逃さないように処理を施しているネ。だから此処の魔法使いでもバレる、なんて事は無い」

「ふん……、用意周到だな」

超の用心深さにカイも感心する。

確かによく見ると部屋の隅に魔法陣が描かれており、その魔法陣が働いて魔力を外に漏らさないようにしているのかもしれない。

ただカイはこの世界の魔法については詳しく学ぼうとしていないので、本当にあの魔法陣が魔力残滓を外に漏らさないようにしてあるのか分からない。

ともかくカイは超の言う通り右側の一番下に付いているリューズを、反時計回りに回す。カチカチと針を動かす。

（何かアナログっぽいな……、本当に大丈夫なのか不安になってきたぞ）

リューズを回すカイにそのような不安が孕んでいくが、長年生きてきたんだ、こんなアイテムで不安になってはいけない、と自分で叱咤する。

「よし、出来たぞ」

「では上に付いているリューズを押すと昨日に戻れるネ」

「よし、行くぞ」

そしてカイは上に付いているリューズをカチッと押し込む。

その瞬間、周りの空間が歪みぐるぐると渦を巻いたかと思うと、その渦に巻き込まれる感じでカイと超は『現在』の研究所から姿を消した。

「……、本当に戻って来てるんだろうな？」

カシオペアを使い時を移動したと思われるカイと超だったが、その場所は今の今まで居た超の研究室だ。変わり映えしていない。

本当にきちんと移動したのか分からない。いや、何となくは分かる。妙に感覚がおかしくなっているのだ。時間移動出来た証拠なのかもしれない。

ただこれが確実な証拠ではない。単にカイがおかしくなっているのかもしれないのだから。

「間違いないネ。何だったらケータイで確かめてみるといいヨ」

そんなカイの不安を吹き飛ばすかのように、超は携帯電話で確かめろと言う。

超の言う通りに携帯電話を取り出し、画面を見てみると　”全く変わっていなかった”　。”四月二七日”　の一四時二八分。それが携帯電話が示す日時だった。

だがカイは携帯電話の電源を落とし、もう一度電源を入れる。そうすれば自動時刻補正が働いて、”日時が変わっている筈だから”　。

すると画面上に映し出される日時が　”四月二六日”　の一四時二八分となっていた。しっかりと一日前の時間移動を成功させていた。

「……、本当にタイムマシンなのかよ」

「ネ？　私の言った通りになったダロ？」

「信じざるを得ないか……」

カイはカシオペアという超科学のタイムマシンを信じてはいなかったが、自分が体験してしまった事には信じざるを得ない。

だとしたら超が未来から来た未来人だという事も信じざるを得ない。こんな超科学アイテムを今の時代で作る事は不可能だから。

そもそもエヴァンジェリンの従者である茶々丸を造る事も今の時代では難しい筈だ。それが完成して動いているという事はオーバーテクノロジーの部分があるということだ。いや、茶々丸そのものがオーバーテクノロジーか。

今になって茶々丸の存在がおかしい事にカイは気付いた。

カイが本来居るべき世界に『からくり丸』という人の言葉を喋れるからくり人形が在った為に、その世界よりも発達しているこの世界なら、茶々丸みたいな高性能ロボが居てもおかしくないよな、という考えにカイは至っていたのだ。

よくよく考えれば今の時代に目からレーザービームを放つロボットなんて居る訳がない。

俺も麻帆良の能天気さが移ったか？　とカイは溜め息を吐いて頭を切り替える。

「なあ、外に出てみても良いか？」

「どうして？」

「いや、一日前の麻帆良を行動してみたくて」

「それなら構わないが今はまだ私達は修学旅行中。京都から帰ってくる最中ネ。コレを着て行くと良いヨ」

そう言って超はクロゼットからフード付きの白いコートを取り出して、カイに手渡す。

「……、何これ？」

いきなり白いコートを手渡されてカイは思わず訊ねてしまった。

「これはステルス機能付きのコートヨ。私達が外に出て顔がバレてしまったら大変ネ」

超が渡した白いコートはステルス機能付きのコートで、一般人には分からないようになるらしい。

ただ……。

「いや、別に認識阻害の魔法ぐらい使えるんだけど？」

そう、カイは腐っても認識阻害魔法ぐらいは使える。カイの顔であってもカイではないと他人に認識させる魔法ぐらいは使える。

別に超が渡してくれた白いコートを着る必要が全くないのだ。

それに対し超は……。

「……、良いから着るネ！」

強引に白いコートをカイに着用させた。

市街地へと足を運んだカイは白いコートを着て、適当に店を歩き回っている。

時間的には変わりないのだが、店にあるカレンダーや街にある電光掲示板は間違いなく四月二六日を示していた。

間違いなくカイは『過去』に飛んだのだ。そう簡単には出来ない時間移動を行った。

カイには絶対に出来ないような時間移動を。

「……、で？　何でお前まで着いて来るんだ？」

カイは呆れ気味に後ろを振り向き、カイに着いてくる少女に問う。

「ここは『過去』ヨ？　置いて行かれてカシオペアを使って『現在』に戻られたら、私に戻る手段がないネ」

「……」

何となく胡散臭いが一応信じよう。

カイが一人で『現在』に戻ったとしても、超なら何とかして戻ってくる気もしないが、一応胸にしまい込んでおこう。

ともかく今は超と並んで市街地をぶらぶらと歩いている。

「こうして歩いていると何だか恋人っぽいネ？」

「どこがだバカ」

のんびり歩いていると超がいきなり冗談を言うので、カイもすかさず言い捨てて超の頭を小突く。

「――――冗談ネ。冗談が通じないのか？」

「冗談だって分かってるからお前の頭を小突いたんだ」

超の言動に振り回されたカイは深く、深く溜め息を吐く。

ふと、カイは右手にある懐中時計型航時機カシオペアを見る。これが有れば過去に行って、嫌な過去もやり直す事が出来るかもしれ

ない。疎ましい過去をやり直す事が。

やり直せれば未来も変わる。良い未来にも悪い未来にも、どちらにも転ぶようになる。

（カシオペアがあれば過去をやり直す事も出来て未来を変える事が出来る……、もしかして超のやろうとしている計画って……）

カイは考えている中で、超の『計画』に感づく。

カシオペアを使って超が未来から来たのだとすれば、超は過去を変える為に来たのだろう。過去を変える理由は辛い未来を変える為。

――世界が滅びても構わないか。

超が言っていた言葉からするに滅びの未来を回避する為に、わざわざ過去にやって来たという事。

そして超がやろうとしている『計画』を成功させれば世界は救われる”かもしれない”。未来なんてどう転ぶかは分からないのだから。

「なあ超、お前が言っていた『計画』って何だ？」

そろそろ聞かなくてはいけないだろうと思い、カイは超に問う。

「その事は研究室で話すヨ。大事な話だからネ。念話でも通信傍受の恐れがあるから」

対して超は後で話すと言って、この場で話そうとはしなかった。

確かに人気のある場所で大事な話をするのは間違っているのかもしれない。

「だったら研究室に戻ろう。その『計画』を聞かないと俺も協力出来るか分からないし――」

「それより買い物するネ。篠宮君にいっぱい奢ってもらうヨ」

カイが研究室に戻ろうと言うことを遮り、超はカイの左腕を掴んで引っ張り回す。

左腕を掴まれ無理やり引っ張られていくカイは、どうしようもない感情をぶちまけた。

「人の話を聞けよ、このバカ女！」

一時間後、散々超に振り回されたカイだったが、何とか『現在』の研究室へと戻ってくる事が出来た。

色々な物を買わされたが超の満足そうな表情を見ていると、まあ良いかと思えてくる。金なんて裏の仕事の報酬で腐るほどある。使わなければ損だろう。

ともかく、とカイは本題に移る。

「俺に協力を呼びかけたんだ。お前の起こそうとする『計画』について話してもらう」

「ウム、話すヨ」

真剣に話を聞く態勢に入ったカイに超は一息吐いて口を開く。

「単刀直入に言って”この世界の人々に魔法という存在を認識させる”」

「！　本当に単刀直入だな……、っておい！　魔法をバラすってそんな事出来る訳が――」

「出来るヨ。私なら出来る」

超の真っ直ぐな、自信に満ち溢れた瞳に、カイは言葉を詰まらせる。

超の計画……、それはこの世界に魔法という存在をバラす事。カイが予想していたよりも壮大な計画に、凍り付いてしまったかのように固まる。

だって有り得ない。この世界に魔法という存在をバラそうとして

も、その前に魔法使い達が阻止するだろう。ネットに情報を流そうとしたって専門機関が妨害、阻止する。

それに今の時代、魔法なんて信じない人間の方が大多数だ。信じさせるのも難しい。

とんでもなく大規模な事をしなければ、この世界に魔法という存在を認識させる事なんて不可能だ。

……、大規模？

「いや、待てよ？　確か今年の世界樹は二十二年に一度の魔力大放出の年。絶大な魔力を使って認識魔法を世界中に放てば……、いやいや、世界樹だけの魔力では世界中には蔓延しない。だったら世界樹と同等の魔力量を持つ場所とリンクすれば……」

ブツブツと呟くカイに超はニヤッと口角を上げる。

「意外と賢いネ？　見直したヨ。そう、今年の学園祭で世界樹の魔力は極大に達して外に溢れ出す。その魔力を利用して世界中に強制認識魔法をバラまくヨ。確かに世界樹の魔力だけでは世界中には広まらない。だが麻帆良を含めた十二箇所の『聖地』の魔力を共振させれば、世界中に広まる。後はインターネット上に魔法使いについての情報をバラまけば、魔法を知らない人間が検索して分かるようになる。これで世界中の人間に魔法の存在が認識されるヨ」

「……、凄い壮大な『計画』だな。だが魔法使い達が黙ってはいないぞ？　インターネットに流した情報も消されてしまうだろうし」

「それも読んでいるヨ。きちんと高度なプログラムに守護させる。

専門の人間でも破壊出来ないようなネ」

「……」

『麻帆良の頭脳』とも呼ばれている超鈴音。

よくもまあこの様な計画を企てられるなと、カイは恐れを抱く。真に強い敵は頭が切れる人間だ。いくら力があろうとも戦術、戦略に長けた人間には敵わない。

これから魔法使い達はそういう人間と戦う事になるのだから、ご愁傷様だとカイは思う。

しかしカイは疑問に思う事が幾つかある。

「なあ、もしこの『計画』が上手く行くとしてだ。滅びゆく世界を変えられるのか？　魔法が認識された世界は混乱が起きる事は必至。滅びるタイミングが早くなるかもしれない」

カイの疑問一。魔法を世界中に認識させて未来は変わるのかという事。

いや、変わるのは間違いないだろうが、どうも悪い方向にしか変わらなさそうだ。そんな未来は超の望む結末ではないだろう。

「大丈夫、その間は私が”管理”する。そんな結末にはさせないヨ」

だがカイの疑問など吹き飛ばすかのように、自信に満ち溢れた表情で超は答えた。さらに続ける。

「それに”滅びる”については少し盛ったヨ。悪かったネ。まああのまま行けば世界は滅んでしまうかもしれないが……」

「……、ええと、つまりは？」

「私が変えたい未来は今も起こってる『悲劇』と、そう変わらないネ」

「……、『悲劇』ね……」

超の言う『悲劇』がカイには引っかかる。

今でも起こっている『悲劇』という事は紛争ということ。それが超が本来居るべき時代には、世界が滅亡する程に広がっていると言うのか。

未来の紋章の力を使って未来を視れればどんな状態なのか分かるのだが、生憎と簡単に未来を視せてくれる事はない。

いったいこの世界にどんな未来が待ち受けているのか、今のカイには分からない。

それよりも先程の超の言葉について、カイは聞きたい事がある。

「……、それより”管理”ってどういう事だ？」

「もちろん混乱を収める為に私が動くヨ。政治的、軍事的に致命的な不測の事態については私が監視して調整する。大丈夫、十数年だけの間ネ。長年独裁政治を続けるとは言わないヨ」

（まるで何処かの神官長のような物言いだな……）

超の〝管理〟という説明を聞いてカイは本来居る世界の超大国のトップと同じような印象を受ける。

まあ神官長の方が世界そのものを手に入れようと動いているから性質が悪いが……。

「それじゃあ何故俺にこの『計画』の全貌……、とまでは言わないが、秘密にしておかなければならない事を話したんだ？　この事を学園長にでも言えばそれで終わりだ。未来から来た意味が無くなるぞ？」

カイの疑問二。何故この『計画』の殆どを説明したのかということ。

まだカイは超の仲間にはなっていないのだが、超はカイに仲間のように説明してみせた。用意周到な超が不安要素のカイに話す理由が分からない。

その疑問に超は当然のように答える。

「まず君は異世界の人間という事でこの世界に何の未練もない。愛着もないだろう。つまりこれから起きる私と魔法使い達との戦いに介入するつもりはないし理由もない」

「まあな……、魔法が世界にバレようともバレまいとも、どっちでも良いしな」

「だが君は私の側に着く。ある条件を突きつければ君は間違いなく私に着く。それが絶対的だからこそ、私はこの『計画』を君に話した」

「……、何だよ、その条件って？」

カイは実に嫌な予感がした。

間違いなく超はカイの弱点を知っている。カイの状態を知っている。色々と弱点がある中、一番の弱点を突きつければカイは落ちる。

その条件とは……。

「篠宮カイ君……、いやカイ・メルフェス君。”君に施されたアンチスキルスロットの呪いを解いてあげよう”。だから私に着いて力になってほしい」

超は勝利を確信したかのような、限界までに引き上げられた口角を浮かべて、右手を差し出してカイに条件を提示した。

そう、カイの弱点であるアンチスキルスロットの呪い。これを解いてくれるのだと言われたら、間違いなくカイは超の側に着く。だって自分に掛かっている呪いを解く事が出来るのだから。

だがアンチスキルスロットは解呪不可能と言われているアイテム。それを解呪出来るのかカイには疑問に思えた。

薬学において優秀な悠里もまたアンチスキルスロットの呪いを完全に解く事は出来ないでいる。

とても疑問に悩んでカイは顔を顰めていると、超はデスクの引き出しから鈴の付いた黒いチョーカーを取り出す。

「それは？」

「超鈴音特製、これを首に付けている間、アンチスキルスロットの呪いが中和されるヨ」

「首に付けている間って、永遠に首に付ければ中和されると!?」

「そうネ」

超から手渡された黒いチョーカーをまじまじとカイは見つめる。

本当にこれを首に付ければアンチスキルスロットの呪いが中和されるのならば、これはカイが超の側に着く理由が出来てしまう。

強制的に超と魔法使いとの戦いに巻き込まれてしまうが、今のカイは鈴の付いた黒いチョーカーに心を奪われてしまっている。もう逃げられない。

そしてカイは黒いチョーカーを首に装着する。

すると鈴がチリンと鳴った瞬間、カイにのし掛かっていた呪いが消えていく感じがした。それからじわじわっと本来の魔力が甦る。

「……、は、はは、アハハ、アハハハハ！」

本来の魔力が時間制限なしに甦ってきたせいか、研究室に狂笑が木霊する。

それをただただ笑みを浮かべ続ける超。これでカイは自分の側に着くと確信していた。

それからカイの狂笑も止まった所で、超は問う。

「その黒いチョーカーは前渡し。私の計画が無事に成功した暁には完全にアンチスキルスロットの呪いを解いてみせるヨ。どうネ？私の側に着いてくれるか？」

右手を差し出され問われたカイは真剣な目で、

「ああ。良いだろう。協力しよう」

超の側に着くと、超の右手にカイは自身の右手を重ねた。

黒いチョーカーを装着したことで、もうカイには断る道は無い。だから超の側に着くのは当然なのだろう。

こうしてカイと超は互いの目的の為に手を組んだ。超は世界の未来を変える為に、カイは自身に掛けられた呪いを解く為に。

二人は世界の理を変える為、闇の中で動き始める。

暗躍始動（後書き）

書き方が更にめちゃくちゃになってる感じがしますが、今の私の能力です。

ということでカイは呪いが解けることで超の側に着きました。世界がどうなろうと知った事ではないということですね。

カイって何だかユーバーの性格とちょっと似ている所が出てきました。ユーバーは『混沌』を求める為ならどんな奴とも組み、カイもまた自身の呪いを解く為に超と組む。

どちらも自身のためであって大義なるものはありません。

さて、カイが超と組む事で原作とは違った展開になりそうです。

違った展開といえば一つの可能性しかありませんが。

分かりますね？

お坊っちゃんの暴走？

超と手を組んだカイは学生寮へと戻ってきていた。現在、学生寮のエレベーターの中に居る。

しかしその表情は麗しくなく、溜め息を吐くばかり。

カイが溜め息を吐く理由は超と組んで、急に不安になったからではない。問題はカイの右手にある鈴の付いた黒いチョーカーが原因だ。

このチョーカー、確かにカイに掛けられているアンチスキルスロットの呪いを首に装着している限りは中和してくれる。それはカイとしても望ましい限りで最初は良かったと思った。

だがこのチョーカーを首に装着して歩いていると、鈴がチリンチリンと歩く度に鳴ってしまう。それが良くも悪くも人々の好奇心を集めてしまった。カイはその好奇心の視線で精神的に疲れてしまった。

他人からしたら『お姫様』が首に鈴の付いた黒いチョーカーを付けて鈴を鳴らして歩いているとなると、誰かに飼われたのではないかと疑念が湧いてくる。

そう、カイが首にチョーカーを付けていると、冗談には見えない程に『飼い猫』らしく見えてくるのだ。

それが嫌になりカイは黒いチョーカーを外す事にした。外せばまた魔力が激減状態に戻るが、これはこれで良いかもしれない。カイ

の正体を知らない魔法使いが、いきなりカイに魔力がはっきりと確認されて騒動を起こされるよりは、黒いチョーカーを外していつも通りで居た方が良いかもしれない。

取り敢えず学生生活を続ける間は黒いチョーカーを付けない方が良いかもしれない。

とにかく明日以降、変な噂が流れなければ良いな、とカイは半ば諦め気分に思っているとエレベーターが目的の階に止まり、静かに扉が開く。

エレベーターから抜け出るとそのまま自分の部屋へ向かって足を運ぼうとするが、突然カイの携帯電話が鳴り響く。

誰だ？　と思いつつカイはズボンから携帯電話を取り出し、通話ボタンを押す。

「なに、お坊っちゃん？」

『お話があります。僕の部屋まで来てもらえますか？』

相手はお坊っちゃんであり用件だけを伝えられ、一方的に通話が切られてしまった。

一方、ツーツーと機械的な音が耳に木霊しているカイは携帯電話を閉じ、深く溜め息を吐きながら反転してお坊っちゃんの部屋へと向かう。

今日は色々な事があったのでさっさと休みたかったのだが、カイはまだ休んではならないようだ。

ほんと厄日だ、という今日の運勢に恨みつつお坊っちゃんの部屋へと向かう。

「しっかし、静かだ……。みんな何処かに出かけているのか？」

学生寮に帰ってみて分かった事だったが、いつもよりは妙に静かだった。何というか物音一つもしない夜の学校のような。

今日は修学旅行明けの日曜日。みんな疲れて眠ってしまっているのだろうか？

「……、どうでも良いか。変な推測しても仕方ないよな」

だがカイは面倒になったと言わんばかりに思考を停止する。

クラスメートや同級生の事を考えても仕方ない事なのと、カイの目前に目的地であるお坊っちゃんの部屋があるからだ。

取り敢えずインターホンを押して、お坊っちゃんが出て来るのを待つ。それから数秒後にはガチャっと玄関の扉が開かれ、お坊っちゃんの顔がひょこっと現れる。

「来ましたか。入ってください」

カイの姿を確認したお坊っちゃんは手招きでカイを部屋に招き入れる。

何故かお坊っちゃんの雰囲気が妙に怒りを纏っている事に疑念を感じながらもカイはお坊っちゃんの部屋に入る。

部屋の間取りは学生寮だけあってカイとの部屋と全く同じ。同じだが部屋の中はカイとは違い綺麗で、よく整理整頓されている。

流石はお坊っちゃんだけあって綺麗なんだな、とよく分からない勝手なイメージをカイが抱いていると、この部屋にカイとお坊っちゃん以外に見覚えのあるクラスメートが居た。

「何で悠里が此処に居るんだ？」

その人物はカイのクラスメート、桐原悠里。

魔法関連の呪いを解く薬を作る薬学博士で、カイの呪いを解こうとしている者。

クラスでは無口で静か。茶髪で顔立ちは良いのだが、陰気な性格な為に女子から好かれる事はない。

だが陰気な性格はカイと二人きりの時は消失し、素を見せる。

「ああカイ君、三日目は大変だったんでしょ？　大丈夫だった？」

「ああ、問題ない……、って俺の質問に答えてくれ」

「何でって僕は委員長と同じ部屋だよ。ルームメイトなんだから」

「……、あれ？　そうだったっけ？」

「うん」

どうやら悠里がお坊っちゃんと同じルームメイトである事を、カイはすっかり忘れていたようだ。

カイが他の部屋に行く事はそうそうなく、誰と誰がルームメイトなのかを完全に忘れている。まあ覚える必要なんて無いのだから再び覚えるつもりもないが。

そんな中、悠里はカイが右手に持っている黒いチョーカーに気付く。

「あれ？　それって……」

「あ、いや、これは……」

悠里が黒いチョーカーの存在に気付いた事で、カイはドキッと一瞬慌てる。

そんなカイに悠里はアハハと笑って、

「別に隠さないで良いよ。それって超さんが作った物でしょ？　僕それ知ってるし」

「……え？」

さらりと超と関連しているような事を言った悠里に、カイは呆然としてしまう。

それでも悠里は超に関連している人物という事なのかとカイは思考を練る。悠里と超の関係性は何なのかを考える。

（繋がりが有るとしたら部活か？　悠里は確か東洋医学研究会に所属していたような……、ああ、超も東洋医学研究会に所属していたな。いや、でも……）

意外とあっさりと悠里と超についての関係性を判明させてしまったカイ。

だがこれはあくまで推論。実際の答えは違うのかもしれない。カイは基本的に学力に関しては平均的。こんな浅はかな答えでは無いだろうとカイは考える。

もっと違う答えをカイが模索していると、

「僕って東洋医学研究会に所属しているでしょ？　超さんも其処に所属していてね」

悠里があっさりと答える。しかもその内容はカイが最初に出した推論と同じ。

カイは無駄な思考をしたと後悔する。意外と物事は簡単に出来ているのかもしれない。

更に悠里は続ける。

「超さんが何故かカイ君がアンチスキルスロットに掛かっている事を知っていたんだよね。僕も吃驚しちゃったんだけど、カイ君の呪いを解く為に共同作業しているんだ。で、それは薬が完成するまでの代用品って訳だよ」

「……、聞いてない事まで答えてくれてありがとう」

本当によく喋るな、と若干引き気味になりながらもカイは表情に出さずにする。

しかし悠里が超と繋がりが有ったとはカイは知らなかった。もしかしてカイの情報が超に流れているのは、悠里が原因なんじゃないだろうなと疑う。

だが悠里はカイの正体を知っていても、本名や異世界人だという事は知らない。カイはそこまで悠里には教えてはいないのだから。

超がカイは異世界人だという情報を得たのは別ということ。これは独自に調査すべきか本人に聞いてみるべきか。

「でも黒いチョーカーを持っているって事は、もしかして超の計画にカイは賛同したってこと？」

「ああ。アンチスキルスロットを解呪する為に協力するようなもんだが。悠里は協力しないのか？」

「僕は戦力になれないし、それに彼女の計画が成功しようと失敗しようと僕の将来には関係ない。僕が協力する意味が無いんだよ」

カイの問いにも悠里は苦笑しながら答えた。

悠里の将来は今と同じように薬を作って人々を治す仕事に就くこと。超の計画が失敗して今まで通りになったとしても密かに活動すれば良いし、超の計画が成功すれば堂々と表立って活動出来る。

確かに悠里が超に協力する意味は無い。

「僕を無視してないで二人で話さないでください」

そんな時、今まで存在を無視されていたお坊っちゃんが介入する。

流石にこれ以上無視されるのは辛くなったのか。

「ごめんごめん。で？　お坊っちゃんが俺を呼び出した理由って何？」

一応詫びを入れながらカイは話を進めるように促す。

まあ座ってください、とお坊っちゃんはカイを座るように促し、カイもお坊っちゃんも座ると話を切り出す。

「今回の修学旅行の裏で起きた事件、君はどう思いますか、篠宮君？」

「え？　いきなりそんな事を言われても……」

お坊っちゃんが口にした修学旅行について、カイはどう答えようもない。

「ああ、失礼。ならこれならどうですか？　今回の事件の処理について。学園長のした事は本当に正しいのか？」

「……」

「今回の修学旅行で死んだ三人の女生徒。今学園内ではこの話題では持ちきりです。修学旅行中に〝不慮の事故死〟として処理さ

れているのですから。そして死んだ女生徒の家族の記憶から、女生徒の記憶を完全に消去する。この学園と英雄の息子を守る為に」

「その情報を何処で手に入れた？　その情報、極秘な筈だが？」

カイが先程知ったこの処理、何故お坊っちゃんがそんな事を知っているのか、カイは疑問に思った。

この情報は学園の魔法使いでも知らない極秘の案件。これが魔法使い達に知られれば学園長はバッシングを受け責められる。

こんな事は〝正義〟ではないと。

そんな魔法使い達にも知らない事を一応、一般生徒のお坊っちゃんが何故知っているのか？

その問いにはお坊っちゃんは簡潔に答える。

「簡単な話です。学園長が密かに持つ直属部隊。その中に僕に仕える人を潜り込ませているからですよ」

お坊っちゃんが何故そんな事を知り得たかは、学園長が指揮する隠された存在、直属部隊。其処にお坊っちゃんの手の者が潜り込んで居るから。

その者からお坊っちゃんは情報を得たのだ。

そして、と呟いたお坊っちゃんはカイの目を見ながら、

「篠宮君が実は裏の人間だった事もそこから情報を得たんです。学

園長の『懐刀』だという事をね」

お坊っちゃんがカイが裏の人間だと知り得たのも、直属部隊に潜り込んだ人間によるものだった。

「何処まで俺の事を知ってる？」

「君が学園長の『懐刀』であること、この世界にはない魔法を扱えること、不老であること、ぐらいですね。全部とは思いませんが、殆ど篠宮君の情報は持っていると自負しています。因みに知ったのは今年に入ってからです。それまでの約二年間は篠宮君の事を一般人だと思っていましたが……」

もうカイの殆どの情報を持っているお坊っちゃんに、カイは心の内で苦笑していた。

自分の知らないところでお坊っちゃんは自分の情報を得ていた。しかも情報を得ていて修学旅行まで今まで通りクラスメートとして接していたのだから、自分の不甲斐なさに呆れる。

しかし何故お坊っちゃんはカイの情報を持っていながら、何もしなかったのだろうか？

「何でお坊っちゃんは俺の情報を得ながら何もしなかったんだ？」

そんなカイの疑問にお坊っちゃんは愚問だ、と言わんばかりに呆れながら答える。

「そんな事決まってるじゃないですか。篠宮君はクラスメートでこれまで一緒に勉強してきたんですよ。一応友達なんで裏切る訳にも

いかないですしね。それに二年もあれば本当に危険な存在か分かります。篠宮君は何だかんだ言って危険ではないですし」

「は、はは……」

お坊っちゃんの言葉にカイは苦笑しながら、甘いなと思う。

本当に危険かは最後まで分からないものだが、お坊っちゃんはカイを危険な存在ではないと言った。

何だかんだ言いながらお坊っちゃんも身内には甘いのかな、とカイは思うが、それでも自分を”友達”と思ってくれるのが相当嬉しく感じていた。

身体の奥からジワジワと暖かい気分に満たされる感覚になっていた。一瞬の間だけでも友達と思ってくれるのは嬉しいものだ。これから長く生きていく者として、少しでも思い出を増やしていくのも悪くはないのかもしれない。

この人間染みた感覚が有るのなら、カイはまだ人間でいられているのかもしれない。

何か話が脱線したので巻き戻す。

「それで学園長は直属部隊にお坊っちゃんが情報を流している人の事を知ってるのか？」

「いえ、”僕が魔法という存在を知っている”ことは知っていますが、”自分の部隊の中にそういう人が居る”ことは知りません。もし知られてしまえばその者は処刑されてしまうでしょうし」

哀れだ、とカイはお坊っちゃんの言葉を聞いて思った。

自分の指揮する部隊に間者が紛れ込んでいるのだから、カイは学園長に哀れを覚える。おかげで自分の情報も流れてしまっているので、カイはそろそろ学園長を見限らないといけない。

自分の情報が流れるぐらいなら良かったのだが、修学旅行の処理が流石に悪すぎる。これ以上学園長に関わってしまえば、カイの身も今以上に危険に晒されるかもしれない。

レアンに狙われている身でありながら、更に他の人間に狙われるのは癪だ。

「話がかなり脱線しましたが僕は例の子供先生が来てからの学園長に対して不信感を抱いています」

「まあな。一〇歳の子供を先生にするとか、後は修学旅行の際に西の魔法協会に親書を渡させる役を任せるとか。色々とおかしいよな」

「ええ、英雄の息子だから利用する……、正直早すぎですね。せめて一八歳以上になってからでないと」

「そういう問題じゃねえよ！　英雄の息子を利用する段階で駄目なんだろうが！」

いきなりシリアスな雰囲気をぶち壊そうとするお坊っちゃんに、カイはテーブルを叩いてツッコミを入れる。

「そうですか？　でも魔法使い側からしたら利用しない手だては無

いでしょう？　魔法世界を救った英雄の息子。存在しているだけで利用出来ますからね」

「確かにそれもそうだが……、ってまた話が脱線してないか？」

また話が脱線しかかっているので、カイは元に戻そうとする。

するとお坊っちゃんは真剣味を帯びて、

「では結論から言いましょう。学園長を失脚させませんか？」

「……、はい？」

とんでもない爆弾発言を投げつけてきたお坊っちゃんに、カイは思わず聞き返してしまった。

正直お坊っちゃんがそこまで考えているとは思わず、本当に予想外だった。今まで黙って話を聞いていた悠里も驚きを隠せない。

「ちょっと待て委員長！　流石にそれはマズいよ。多分委員長、消されるよ！？　冗談抜きでさ」

「悠里の言うとおりだって、お坊っちゃん！　早まっちゃいけない！　俺達は此処の生徒だぞ？　潰されるって」

「しかし学園長をこのまま野放しにしていたら麻帆良学園は恐らく子供先生の箱庭と化しますよ？」

悠里とカイが何とかお坊っちゃんの暴走を止めようと説得しても、お坊っちゃんは本気で学園長を失脚させようとしている。

って言うか今も十分に箱庭だけどな、とカイはお坊っちゃんの言葉に内心答えながらも口にする事はしない。話をややこしくさせたくないから。

しかしこのお坊っちゃん、妙に正義感が強いように思える。確かに最近の学園長はやってはいけない事をしているとカイも思うが、それでも今ここで学園長に辞めてもらう時期ではない。と言うより辞めてはくれないだろう。

子供先生を『立派な魔法使い』に育てるまで辞めるつもりが無いと考えている。その学園長を失脚させるには大規模な事件を起こさなければならない。

大規模な事件を……。

「因みにお坊っちゃん。学園長を失脚させる策は有るのか？」

「……」

カイは試しに訊ねてみるとお坊っちゃんが急に黙ってしまった。

そう、お坊っちゃんは今回の修学旅行で起きた事件の処理を知ってから、学園長に対して急激に怒り始めたのだ。要は一過性のもの。まだまだ子供だという事。

「お坊っちゃんの気も分からないではないが、少しは冷静になろう。このままお坊っちゃんを無駄死にさせたくないぞ」

「そうだよ。流石に一生徒が学園長を失脚させるのは無謀だよ」

「……、すいません」

カイとお坊っちゃんの言葉に漸くお坊っちゃんも冷静になってきた。

冷静になってきたところで、カイはお坊っちゃんに告げる。

「お坊っちゃんはさ、これからの未来があるんだよ。こんな所で躓いて終わる訳にはいかないだろ？　それでも学園長を失脚させたいと思うなら学園祭まで我慢しろ。学園祭が終わる頃には学園長も居なくなるよ」

「え？」

超の計画が成功した場合、学園に居る魔法使い全員が魔法世界へ強制送還されるだろう。世界に魔法という存在をバラした超を阻止出来なかった責任として。

それは学園長も例外ではなく魔法世界へ強制送還される筈。

超の計画が成功した場合だが、きっとそうなる未来が待っているだろう。

そんな超の計画なんて知らないお坊っちゃんは疑問に思うしかない。いったい何故学園祭が終われば学園長が居なくなるのか。

「まあお兄さんに任せろって事で」

「お兄さんって……、頼りないお兄さんですね……」

何とかお坊っちゃんに変な気を起こさせない為にカイは任せろと言うが、お坊っちゃんに軽く笑われる。

「はは、俺は主人公じゃないんでね。頼りなく見えるのは仕方ないんだよ」

カイは絶対に主人公という性格はしていない。

この世界に来てから自分に利益になるような行動しかしていないカイが、主人公である筈がない。

どうであれカイは超と組んで世界の理を変えようとしているので、その時に学園長には強制送還になってもらう。

それまでは甘い蜜を吸わせて貰いますが……。

「あ、そうだ。お坊っちゃんに頼みたい事が有るんだけど良いかな？」

「さらっと話題を変えてきましたね。それで何ですか？」

「お坊っちゃんの家の力で、ある場所を捜してほしいんだけど。ちょっと待ってて」

そう言ってカイは立ち上がり、お坊っちゃんの部屋から飛び出していった。

いったい何なんだ、とお坊っちゃんと悠里は疑問符を浮かべる。
それから数分後にカイが戻ってくる。

「この絵を見てほしいんだよ」

カイはそう言って大きい模造紙をテーブルに広げてお坊っちゃんに見せる。ついでに悠里もひょこっと顔を出して見る。

その模造紙に描かれていた絵と言うのは、妙に立体感のある建造物。見た感じ古代の遺跡かと思わせるような建物。その建物の真ん中には転送場所のような台もある。

それよりもお坊っちゃんと悠里は絵について他の印象を抱いていた。

「篠宮君って絵心があったんですね？」

「意外……」

「何だよ、俺が絵が上手かったら駄目なのか？」

絵が意外に上手いと言われ、カイは何か妙に腹が立っている。

そう、カイの絵が妙に上手く驚いていたのだ。

建造物を上手く見せる為に影も入れたり、まるで実際に見てきたかのような絵だ。

「それでこの建物が何なんですか？」

「捜してほしいんだよ」

「……、ちょっと疲れて頭でもおかしくなりましたか？」

「おかしくなってねえよ！　お願いですから捜してください！」

何コイツ、頭でもおかしいんじゃね？　的な疑心に満ちた目でお坊っちゃんに見られながらも、カイは必死に頭を下げて頼み込む。

お坊っちゃんの財力なら模造紙に書かれている建造物、『トビラ』の場所が何処かに有るか分かるかもしれない。

カイが元の世界に戻れる唯一の手段だ。何としてもこの『トビラ』を見つけないといけない。そうじゃないと元の世界には戻れないのだから。

実はこの『トビラ』は一度だけ元々居た世界で見た事があった。その当時は使い方も分からず、まさか異世界間を移動するのに使うとは思ってもいなかった。

この絵は当時の光景を思い出しながら描いたのだ。

今までには見た事もないカイの頼み込みに、お坊っちゃんも深く溜め息を吐き、

「分かりましたよ。捜してあげますよ。クラスメートが困っているのでね」

呆れ果てながらもお坊っちゃんは捜してくれる事を約束した。

その言葉を聞いたカイは目を輝かせてお坊っちゃんの手を取り、感謝を表す。

「本当にありがとう！　絶対に見つけてほしいんだよ、これ！」

「そ、そうですか。それよりもこの建物は何ですか？」

若干カイに引き気味になりながらもお坊っちゃんはこの建造物について訊ねる。

するとカイはお坊っちゃんの手を離し、普通の表情に戻って答える。

「トビラ」

「トビラ？　ゲートですか？」

「違う違う。トビラだよ魔法世界に繋がってるゲートじゃない」

（……、捜すの止めようかな？）

お坊っちゃんには何のことかさっぱり分からず、『トビラ』を捜すのを止めようかなと考えとしまう。

確かにこの遺跡は『百万世界』を知る人間じゃないと、ただの遺跡にしか思えない。どれほど重要な物なのかも分からない。

だがまあクラスメートがここまで頭を下げて頼み込んだので、お坊っちゃんも家の力を使って捜そうと思う。

「ではこの『トビラ』は捜させておきます。ですが時間はそれなりに必要ですので待っていてください」

「ああ。頼むよ」

何とか『トビラ』を捜してくれる事を約束してくれたところで、カイは立ち上がる。

「学園長の件だけど暴走はするなよ？」

「分かってますよ」

「うん。それじゃあな」

最後の最後にお坊っちゃんに念押ししてからカイは部屋を出る。

取り敢えずこれで変な暴走はしないだろうとカイは判断し、自分の部屋へと足を運ぶ。

取り敢えず自分の部屋に着いたら直ぐに寝よう。どうせ夜にはクラスメートの誰かが来そうなので、今のうちに寝ておく必要がある。

今日は色んな事があって疲れた。学園長の悪事に子供先生との会話に超の企みやらお坊っちゃんの暴走。

本当に厄日だ、とカイは今日の運勢に恨み言を呟きながら自分の部屋へと入る。

そしてこの後、カイは本当にベッドへ直行し、三秒も待たずに眠りに就いた……。

お坊っちゃんの暴走？（後書き）

今回の話はお坊っちゃんの暴走しかけがメインっぽいですが、話の流れとしてはお坊っちゃんに『トビラ』を見つけさせる事がメインだったり。

『トビラ』がないとカイは元の世界に戻れないですので。

ビッキーが来てくれれば……、異世界にテレポートは無理か……

恋心

五月三日、土曜日。

今日からＧＷという事で三連休である。

三連休なので少しぐらい遠出をしてみようかと思う生徒達も居るだろう。実際カイのクラスの何人かも麻帆良を出て外泊しに行っている。

そんな中、カイはと言うと一人でファミレスでパスタを食べていた。席は窓側で外の光景を見ながら食事をしていた。

麻帆良から出る事もなく、のんびりと過ごしている。店も混雑しておらず、それとなく静かに過ごせている。

（気楽なもんだな。世界が変わるまであと二ヶ月切っているのに）

パスタを食べながらカイは心の中で呟く。

麻帆良の学園祭は六月二十日から六月二十二日までの三日間。もう二ヶ月は切っているのだ。

六月二十三日以降、世界は変わっていく。それが良い方向に傾くのか、悪い方向に傾くのか、それは超次第だろう。超の裁量で世界は決まっていく。

いったいどうなるんだろうな、とカイは他人事のように考える。

カイが超に協力するのは学園祭まで。それ以降は協力してやるつもりもない。カイはあくまでアンチスキルスロットの呪いを解く為に、超に協力しているに過ぎない。

もし呪いが解けて『トビラ』が見付かれば、カイは早々にこの世界から消え去る予定だ。元々居るべきではない世界に二〇年居座っているのだ。

深く関わりすぎた。本来なら今でも去った方がこの世界の為でもあるのだろうが、『トビラ』が見つからないと元の世界には戻れない。

お坊っちゃん側が『トビラ』を見付けてくれるのを祈るばかりだ。

「時間が掛かるから暫くは無理なんだろうな……」

「何が時間が掛かるんだ？」

酷くつまらなそうに独り言を呟くカイに、相槌を打つ者が現れた。

声質でカイは顔を見なくても誰かなのか分かっている。

その人物はカイと同じ裏の人間で、度々仕事をしたことのある、口喧嘩をするような間柄な人物。

「何で此処に来るんだよ、龍宮？」

目を細めてうんざりしていますと言った視線を向ける先には、私服姿の龍宮真名が居た。

デニムのジーンズにジャケットを着ていて、迷彩のバッグを持っている。いったい何処に行って戦って来たのですか？　と思わせるような服装。

いつにも増して疑念に満ちる視線を送るカイに、真名は素知らぬ顔でカイと対面になるように座る。

（ったく、何なんだよ全く……）

何故かカイの前に度々現れる真名に、カイは内心溜め息を吐く。

真名を見てみるとウエイトレスを呼んで、餡蜜を注文している。こいつ餡蜜好きだな……、とカイは呆れてしまう。女という生き物は男であるカイには分からない。

呆れ顔のカイに真名は気にせずに口を開く。

「修学旅行以来だな、お前と会うのも」

「修学旅行……、ああ、二日目に会ったな。すっかり忘れていた」

「……、お前は本当に最低な男だな？」

「褒め言葉として受け取っておく」

「別に褒めてないんだがな」

馬鹿な事を言うカイに真名は呆れつつ、

「それで怪我の方は大丈夫なのか？　三日目の時は死にそうな程の

大怪我だったじゃないか」

「三日目？　何でそれを……」

心配する真名の言葉にカイは疑問を感じる。

カイの記憶では三日目の時、真名とは一度も会ってはいない筈。大怪我を負った事実を何故真名が知っているのか疑問に思った。

三日目の時、祭壇で真名や他多数の女子達と会ったのはカイの体を動かしていた未来の紋章の意思だ。カイに記憶は無くて当然だ。カイにしてみれば〝会ってすらいないのだから〟。

だがカイは詠春の言っていたことを思いだす。

（そう言えば総本山で眠っていた時、龍宮が俺を看てくれていたんだっけ？）

カイが眠っている時に真名が心配そうに看ていた事を、詠春から聞かされていた。だったら自分が怪我していた事を知っていて当然かと、カイは考え始める。

そう考えると急にふと恥ずかしくなってしまう。一人の女に眠っている間を看てくれるのは嬉しさも湧き上がり、恥ずかしさもこみ上げてくる。

（つか何で龍宮が俺を看ていたんだ？　あれか？　こういう一方的に借りを作っておいて、後で何でも言う事を聞かせるようにするって作戦か！？）

恥ずかしさで頭がおかしくなったのか、カイは変な考えを持つようになり、真名を犬歯剥きだしにして警戒する。

一方カイの考えなんて分からない真名は、カイが何故警戒するのか分からない。と言うよりだんだんとムカついてくる。

一方的に警戒心を抱かれるのは人として嫌だろう。

「何でお前はそう警戒するんだ？」

獣をも射殺しそうな眼光を放つ真名に、カイは変わらず警戒心を纏って答える。

「別に。ただ俺に何をさせようとするのか見極めたいだけだ」

「……、はあ？」

カイの意味不明な答えに真名は疑問符を浮かべる。

全く意味が分からないカイの言葉に真名はこれ以上やっても無駄だと判断したので、真名は深く溜め息を吐いてこの話を終わらせる。

「まあお前が元気そうで何よりだよ」

「……、何かねだらないのか？」

「なに？」

「いや！　何でもありません！」

何も要求せずにこの話を終わらせた真名に、カイは自分の考えは間違えだったのかと納得出来ずにいながらも合わせる。

これ以上変に追求すると本当に自分が考えていた事になりそうなので、遠慮させていただきます、とカイは心の中で呟く。

そんな時、真名が頼んでいた餡蜜がウエイトレスに運ばれてきて、真名の前に置かれる。

ごゆっくりどうぞ、と接客マニュアル通りに対応し、営業スマイルを寄越して離れて行った。

届いた餡蜜を早速一口食べる真名の顔は、一四歳の少女そのもの。顔が綻んでいる。

（こうして見ると可愛いんだけどな……、って何を考えているんだ俺は!?）

餡蜜を食べる真名の顔を見て可愛いと思ってしまったカイは急激に顔に熱が昇り、ぶんぶんと首を横に振って思考を飛ばす。

「どうした、そんなに首を振って？」

「いや！　何でもないんで気にしないでください！！」

首をぶんぶんと横に振っているカイに真名は首を傾げながら問うた。

それにカイは慌てて手も横に振って気にするなと答えた。

明らかに挙動不審で怪しいカイだが、それは前と変わらない事だと真名は思って、深く追求せずに餡蜜を食べ続ける。

ふぅ、と溜め息を吐いて冷静さを取り戻す。

（ったく、何で俺が龍宮に対して動揺しなくちゃならないんだよ……。近衛詠春、ぶっ殺す！）

真名に対して変な動揺を起こすようになった原因である詠春に理不尽な怒りをぶつける。

詠春が要らないことを言わなければ……、とカイは両の拳を強く握り締め、何かに堪える図を表している。滑稽に思える。

そんなカイだったがやっと冷静さを取り戻し、真名に少し小さな声で質問してみる。

「なあ龍宮。綾瀬夕映はどうしてる？」

このカイの疑問に真名は餡蜜を食べ進めていた手を止める。

「綾瀬？　綾瀬がどうかしたのか？」

「いや、お前のクラスから死者が出ただろ？　その死者と綾瀬夕映が親友だって本人が言っていたからな。少し今の様子が気になったんだ」

カイが真名に質問したのは夕映のこと。

夕映の親友を殺した黒ずくめで金髪の男、ユーバーに対して復讐

心を抱いていた。本来なら他人の復讐心なんて興味も無いのだが、相手がユーバーなら別。

ユーバーは相当危険な相手。復讐心すら抱いていい相手ではない。

もし夕映とユーバーが相対して夕映がユーバーに敵意を見せたら、その時点で終わりだ。瞬殺されてしまうだろう。

ユーバーに対して復讐心を抱く夕映を放っておく事は出来ず、カイは気になっていた。

そんな夕映を心配するカイに真名は目を細めて不機嫌そうに、

「綾瀬と会っていたのか？」

「向こうから声を掛けられてな」

「……ふん、大河内だけでは飽きたらず綾瀬にまで手を出すか。節操のない男め」

「……、ちょっと待て。手を出すって何だ？　何故アキラの名前が出てくる？　それに節操ないってのはどういう意味だ！？」

「ふん、互いに名前で呼ぶのか？　何だ？　デキてるのか？」

「デキてねえよ！　何で下の名前を言い合うだけで付き合ってるって思われなくちゃならないんだ！？　いやまあアキラは可愛いし俺が普通の人間だったら付き合ってみたいなって思うけどさ！」

「……、好き、なの、か……？」

突然目に涙を浮かべる真名に、カイはギョッとして慌てる。

「何故泣く!?　何処に泣く要素があった!?」

あたふたと慌てながらカイは今にも泣きそうになっている真名に驚く。

冷酷非情な殺し屋さんが何故乙女みたいに涙を浮かべるのか、カイには訳が分からなかった。　つうか龍宮って泣けるんだなと思ってしまう程だ。

「……あ、いや、これは……」

真名も何故急に涙を浮かべたのか分からず、指で涙を拭う。

涙を指で拭う、それだけの事なのにカイはドキッと心臓が高鳴る。不謹慎だと思いつつも涙を拭う真名に可愛いと感じてしまった。

（今日の龍宮は何なんだよ!?　涙を流す事なんて無さそうな龍宮が何で泣くんだよ!?　女って本当に分からねー!!）

髪が乱れるのを構わず両手で頭をガシガシと掻き乱しながら荒れるカイ。いつもとは違い女の子部分を見せる真名に、カイは色々と負けてしまっている。

ふと周りから視線を感じ、チラッと目を動かして見る。それは女性の人権を守るべく店内中の敵意ある視線だった。グサッとカイの心に敵意ある視線が突き刺さる。

「……」

何故だろう、弁明が出来ない。

店内に居る人間の視線にカイは圧されてしまい、弁明する事も此処から逃げ出す事も出来ない。いや、脚を動かす事さえ出来ない。

あの『お姫様』が女の子を泣かしてる、や、あの子可哀想……、などと店内に居る人間のヒソヒソ話がカイの耳に刺さっていく。

（……、もういいや。学園中に広まってしまえ……、はは……）

もう何もかも捨て去った気分になってしまい、カイは疲れてソファに凭れ掛かる。

GW明けが恐いなー、と休み明けの学校に行きたくないなと、未来に不安を抱いてしまう。今頃は学園都市のネットに書かれて広まっているかもしれない。

カイが茫然自失となっても仕方ないだろう。

一方、真名はと言うと涙も止まり、何故涙を流してしまったのかを考えていた。

真名はカイの言葉で心をぐちゃぐちゃにされていた。最初にカイが夕映を心配している事に感づき、不機嫌となっていた。

次にアキラと妙な親密関係が築かれている事に不機嫌の拍車が掛

かる。修学旅行二日目の班行動の際、体調の悪いカイを見つけた。真名は少し心配になり訊ねようと思ったが、運動部四人組が居る手前、下手に聞く事も出来なかった。聞いていったら一般人が知り得ない情報が出てくるのを恐れた為だ。

だから真名は後ろからカイの様子を眺めるしか出来なかった。生憎と裕奈が先導して事情を聞いていたので、真名が訊ねることも無かった。

その時だ。ふと、真名の横に居たアキラの様子が入ってきた。アキラはそわそわしながら体調の悪いカイを心配そうに見つめていた。

ただ普通に大丈夫かな？　というような心配なら真名も気に止めなかった。だがカイを見るアキラの目が、とても他人を心配するような目ではなかった。一言で表すなら好きな人を心配する目。

その目をしていたアキラに気付き、アキラがカイのことを『カイ君』と呼び、そしてカイもアキラのことを『アキラ』と呼んだ。

付き合ってる事は無いにしろカイとアキラが仲が良い事には変わりないだろう。下の名前で呼び合う程なのだから。

それが真名には心苦しかった。その事実が心をめちゃくちゃに掻き乱して、しまいには涙を浮かべてしまった。

つまりは嫉妬。嫉妬心があるという事はカイにそれなりの感情が有るということ。それなりの感情が無ければカイをわざわざカイの部屋に運んだり、総本山でカイを看たりはしないだろう。

真名は認めるしかないだろう。この明確となってしまった感情を

……。

妙に気まずい雰囲気がテーブル周辺を漂っている。薄暗い雲が漂っている感じで、このテーブル周辺が重苦しい。

そんな中、カイが口を開く。

「何でお前が涙を浮かべたのか分からないけど、ごめん」

「よく分かっていないのに謝られても嬉しくないぞ」

「……、そりゃそうか。確かに俺も嬉しくはないな」

一応謝りの言葉を口にしてみたが、真名に的確な返しを受け、カイもそれに納得してしまう。

あっさりと玉砕してしまったカイはどうするか悩む。長年生きているんだからこの場を切り抜ける手段を持っていそうだが、カイの場合は一人で長く生きてきたので、こういった事には慣れていない。無駄に長く生き続けてきた結果がこれだ。

どうするべきか目を閉じて悩むカイに真名はフッと笑んで、

「篠宮、私の名前を呼んでみてくれないか？」

そうカイに要求した。

要求されたカイはポカンと何が何だか分からない。しかし真名の

顔は微笑んでいるのだが、目は真剣味を帯びているのでカイも真剣に、姿勢を正して、

「……、真名」

カイは恐らく初めて面と向かって下の名前で呼んだ。

冷たいようで暖かみを帯びているその言霊を受けて真名は、一度目を見開いたかと思うと柔和な表情を浮かべ、

「うん、気味が悪いな」

「……は？」

そう言い切りました。もちろんカイは何故こんな事を言われたのか分かっていません。

真名が要求した通りに名前で呼んだら、気味が悪いと一蹴された。カイは呆然とするしかない。意味が分からない、と。

「お前に下の名前で呼ばれると気味が悪いと感じただけだぞ？」

「テメエやっぱ喧嘩売ってるだろ！？　せっかく人が要求通りにしたらこの仕打ちか！？」

「別に実害は無いんだから良いじゃないか」

「実害が無い！？　精神的被害は大きいわ！」

「ははは！」

「笑いごとじゃないって！　もういい！　帰る！！」

真名とのやり取りに頭に血が上り、イライラしてきたカイは伝票を持って帰ろうと立ち上がる。

「ああ、篠宮。私の分も頼むよ」

「何で俺がお前の分も払わないといけないんだ！？」

「私を泣かせたから」

「うぐっ！？」

こういう時、女って狡いとカイは思った。こういう事を平然と武器に出来るのだから。

自分の伝票も渡してくる真名に、カイはふんだくるように伝票を取ってレジの所へ向かおうとする。

「じゃあまたな、”カイ”」

去り際に真名から下の名前で呼ばれ、カイは舌打ちしながらも、

「……、じゃあな、”真名”」

お返しと言わんばかりに下の名前で呼んでからレジの所へ向かっていった。

カイが去って一人になった真名は微笑んでいた。カイに名前で呼

ばれた時、意外と嬉しさが胸の奥から込み上げて来ていた。別に気味が悪いとは思っていなかった。

いつもは名字でしか呼ばれない真名だが、意外と名前で呼ばれるのは良いかもしれないと感じている。

「たまには名前で呼ばれるのも良いものじゃないか」

ファミレスを飛び出して行ったカイは何かモヤモヤした気分を解消するべく、歩いて帰路についていた。

その道中、真名について色んな事を考えてしまうが、すぐに首をぶんぶん振って考えを吹き飛ばす。

きっと何か有って精神状態が不安定になったのだろう。そう言う風に考えておく事しか出来ない。

もし、もしもの可能性で真名がカイに好意を寄せていたら、カイ

がそれに応える事はない。

カイは一応死ねる事は出来るが永遠の時を歩く者。例え愛しい者が現れて一緒になろうとも、時間が経つに連れて愛しい者は老いていく。カイを置き去りにして。

それがカイには苦痛でしかなく耐えられない。自分は永遠にこの姿で在り続け、愛しい者は老いていく。そんな苦痛、精神的に弱いカイが耐えられる筈がないのだ。

だから孤独に生きていき、これからも孤独に生き続けなければならない。今更誰かと生きていくのも辛いだろう。

ふと、カイは立ち止まる。

カイの足下に一匹の子猫が存在していた。全身黒い体毛で覆われ、金色の目を細めている。そんな黒い子猫を見て、カイは屈んで子猫を抱き上げる。

ニャーゥ、と鳴き声を上げる黒猫だったが、特に抵抗する様子もなくカイの腕の中にくるまっている。

カイは周りを見渡して見るといつの間にか野良猫達が集まる広場へとやって来ていた事を自覚する。

此処は時々茶々丸が野良猫達に餌をあげている場所。カイも時々この場所に来ていた事があった。最近は来ていなかったが……。

「ん？　お前、怪我してるじゃないか」

腕の中にくるまる黒猫の体には所々傷があった。

誰かに傷付けられたのだろうかとカイは思ったが、麻帆良内にも動物保護団体なるものが存在しており、流石に動物を傷付ける者は居ないだろう。もし動物を傷付けたら公開処刑という辱めを与えられるらしいので、動物を傷付ける者はそうそう居ない。

となると猫同士の喧嘩だろうか。そうなれば治さないで良いかと思ったが、黒猫の怪我を見てしまった以上、治さなければならないだろう。

カイは猫を落とさないようにズボンのポケットから一枚の札を取り出す。周りに誰も居ない事を確認して、カイは札の力で黒猫の怪我を治し始める。

札を黒猫の体に張り付けると淡い光が黒猫の身体を包み込み、見る見るうちに黒猫の怪我が治っていく。

ニャーゥ、と黒猫はカイの腕から元気よく飛び出し、一度カイの方を見てから茂みへと消えて行った。その黒猫に誰にも見せた事のないような微笑みを浮かべて見送った。その微笑みは悪意が全くない綺麗な微笑み。

カイは基本的に猫は好きである。こんな自分に懐いてくれるので気分を和ませる存在としては十分だ。

少しだけだが猫と戯れて気分が優れてきたカイは立ち上がり学生寮に帰ろうとする。

だが突然ズキッと頭痛が起き、視界が一瞬光に包まれ、カイは反

射的に目を閉じる。

「何だ！？」

いきなり自分に起きた異変に驚きつつ、カイは閉じた目を開ける。

すると目の前に広がる光景にカイは唖然とする。

「……、灰色の、世界……」

その光景は土も地面も木も建物も空の色も、全てが灰色一色で染め上げられていた。

カイがポツンと突っ立っている世界、これが『灰色の世界』だ。

カイは呆然と突っ立つ。額にある未来の紋章が疼いていないにも関わらず、灰色の世界を見せられている事に呆然とするしか出来ない。

元々居た世界では何度も未来の紋章によって見せられていた、世界の終焉。希望も何もないこの世界を見させてカイを絶望に落とそうとしていたのか？

未来の紋章の考える事は分からないが、カイは何度も『灰色の世界』を見ていた。もう飽きる程に。

だがこの世界に来てからは一度も無かった。『灰色の世界』を見ることが無かったのだ。何故かは分からない。世界が違うからなのか、それとも……。

それが今になって『灰色の世界』を見る事になるということは……。

（この世界もいずれは『灰色の世界』が訪れるというのか？）

カイは最悪な考えを抱く。

もしカイの考えている事が本当ならば、『灰色の世界』を起こし得るのは真の紋章を持つカイかユーバーの二人。どちらかしか居ない。

ユーバーの目的は『混沌』を求める事だが、灰色の世界がユーバーの求める混沌ではないとすれば、灰色の世界を起こすのはカイだ。

俺が灰色の世界を引き起こす？

カイはそう考えだすと体中が震えだし、絶望感を抱いてしまう。

自分のせいでこの世界が灰色の世界になってしまったら、と考えるだけで頭は混乱してしまう。

カイのせいで世界が……。

「カイ君？」

突然声が聞こえてきてカイは我に返ると、目の前には私服姿のアキラが心配そうにカイを窺っていた。

「大丈夫？　こんな所で突っ立って……」

「え、あ、ああ……」

心配して訊ねるアキラに相槌を打ちつつも、カイは周りを見回す。

土も地面も木も建物も空の色も、全てが元通りになっていて、灰色の世界は消えていた。

（白昼夢……？）

思わずそんな事を思いつつ、カイは現実に戻れて良かったと溜め息を吐く。

安堵の溜め息を吐くカイに、アキラは首を傾げて訊ねる。

「本当に大丈夫？　また気分が悪いとか……」

「大丈夫だよ。心配しないで」

「……うん」

カイの言葉に納得はしていないが、アキラは一応カイの言葉を信用してみる。

そんな事より、とカイは言って、

「アキラはこんな所で何をやっているんだ？　部活とかは？」

何故こんな所に居るんだ、と質問する。

「部活はないよ。此処に居るのもたまたまで……」

カイの質問にはアキラも簡潔に答える。

そう、何故か麻帆良ではＧＷは部活が休みということになっている。普通ならこういう休みにこそ部活の練習をするべきなのではないかとカイは思う。

思うのだがカイは口にしない。どうでもいい事なので。

「それでアキラはこれからどうする？　俺は学生寮に帰る予定だけど」

「私も帰る」

「なら途中まで一緒に帰る？」

「うん……」

と言うわけでカイとアキラは並んでそれぞれの学生寮に帰っていく。

その道中、カイはアキラに綾瀬夕映の現状を訊ねてみようかと思ったが、アキラは一般人で裏の事情なんて知らない。それに綾瀬夕映の現状を聞いたとして、アキラに関連性を探られても困る。

だからカイはアキラに訊ねる事を諦め、大人しく学生寮までの帰路についた……。

恋心（後書き）

……真名のキャラが崩壊しているような感じが否めないですね……。

たまにはこう言った感じを書いてみたかったんですが、実に失敗って感じですか……。

やっぱり恋愛物は書けないですね。

無理して書くこともないかな？

悪鬼襲来

「……、雨か……」

ザーザーと空から降り注ぐ雨が窓を叩く音によって目を覚ましたカイは、ベッドから起き上がりカーテンを開けると、土砂降りの雨がカイの目に入ってきた。

今日の天気は雨。薄暗い部屋を照らすテレビからお天気お姉さんが『今日は夜まで雨なので濡れ濡れにならないように気を付けてねー』と語尾に音符マークが付きそうな程にキャッキャッしながら言っている。

「……、うざい」

テレビに映るお天気お姉さんを一瞥して、カイは再び外に視線を移す。

今日の篠宮カイの機嫌、最悪。

眠い目を擦りながら冷蔵庫まで歩き、冷蔵庫から大量にある缶コーヒーを取り出す。プシュッとプルタブを起こし、ゴクッゴクッと渇いた喉を潤していく。ついでに缶コーヒーの苦味がカイの目を覚ます。

一気に缶コーヒーを飲み干したゴミ箱へ放り投げ、しっかりゴミ箱の中に入っていった。そのゴミ箱の中には缶コーヒーしか入っていない。

次は制服に着替える為にパジャマのボタンを外していく。一つ一つ外していき脱ぐと、ハンガーに掛けられている半袖のカッターシャツを取って着る。スルッと慣れたように腕を通し、ボタンを閉じていく。

次にパジャマのズボンを脱いでハンガーに掛けられている制服のズボンを穿く。ズボンを穿きベルトを通すと着替え完了だ。

後は歯を磨き、適当に朝食を取って学生寮を出るだけである。

歯を磨き、朝食のピーナッツバターを付けた食パン一切れを食べ終わり、テレビを切って鞄を手にする。

時間は七時四五分。

そろそろ出ないと遅刻してしまいかねないので、カイはもう一度冷蔵庫から缶コーヒーを一本取り出して、革靴を履いて傘を持って部屋を出る。

エレベーターの所まで行くとクラスメートで友人の浩輝と出会す。どうやらエレベーターが来るのを待っているらしい。

カイの存在に気付いた浩輝がカイに声を掛ける。

「今日はしっかりと起きれたんだな？」

「失礼な。おれはいつでも一人で起きれるぞ？」

「そうか？　昨日は寝坊して遅刻したくせに」

「……」

浩輝の言葉にカイはムスッと頬を膨らませて機嫌を悪くする。

男であるカイが頬を膨らませるなど気色悪いと思えるが、カイの顔は女顔。妙に可愛く見えてしまう。

（変わらず女顔を武器にしている傾向があるよな、カイって）

頬を膨らますカイに浩輝は顔を引きつらせる。

浩輝はカイと二年の付き合いで結構な頻度でカイと過ごしている為、免疫は出来ている。それでも女顔を武器にした表情に、不本意だがくらっとしてしまう事がある。

浩輝でこれなのにクラスメートの男子達は女顔を武器にしたカイに跪いてしまう。色々な意味で負けてしまうのだ。

この女男、恐るべし。

ふと、浩輝はカイの手にある缶コーヒーに目が移る。

「また缶コーヒーばっか飲んでやがるな？　ほんと好きだな、それ」

「ああ、何となく落ち着くしな」

「体を壊しても知らないぞ？」

「大丈夫だって。それなりに丈夫なんだから」

カイの体を心配する浩輝だが、カイは適当に流す。

そんなカイの態度に浩輝は苦笑していると、エレベーターが着いて扉が開かれる。そのエレベーターに乗り込み、さっさと一階に下りる。

一階に下りて出入り口まで行くと、土砂降りの雨が地面を叩きつけている。この雨の中を歩くとなると制服のズボンが濡れる羽目になるだろう。

学校行くの止めようかな、とカイは憂鬱な気分になりながらも、浩輝と共に傘を開いて歩きだす。

気分は最悪のまま……。

「それでは教科書の一二〇ページを開いてください」

教壇に立っている先生が気だるそうに声を上げている。

現在カイのクラスでは数学の授業が行われており、真面目に受けている者、だらけている者、眠っている者が様々。

カイは教科書を開き、ノートを執り、真面目に授業を受けている態勢だが意識は別にある。今のカイは色々な事を考えている為、授業を受ける気にはなれなかった。

あれから特に何か状況が変わった事は無かった。

未来の紋章も修学旅行以降不気味なほど静かだし、『トビラ』はお坊っちゃんに捜索依頼してから一ヶ月程経ったが進展がないし、『灰色の世界』についてはＧＷで見て以来、一度もない。

それにレアンの配下であるマリアの襲撃も修学旅行以降ない。いったい何を考えているのかカイには分からないが、来ないのなら『トビラ』が見付かり次第この世界から消え去るのみだ。

この世界からカイが消えればレアンは間違いなく追って来る。しつこく追って来る。そうなればこの世界にとっては不利益しか生まない戦いは起きない。

後の問題は……。

（ユーバーか……）

この世界に姿を現した八房の紋章を宿す悪鬼、ユーバーだ。放っ

ておくとこの世界が混沌に陥ってしまいかねないので、何とかして元の世界に強制送還させなければならない。

別にユーバーを殺しても問題はないのだがユーバーを殺した場合、所有している八房の紋章がどうなるのか分からない。

そのまま大人しく元の世界に戻ってくれれば有り難いが、ユーバーという宿主を失った八房の紋章がこの世界で放浪されては困る。それで別の人間に宿られては困るし、余計無意味な戦いが起きてしまう。

だからこの世界でユーバーを殺す訳にはいかない。殺すなら元居た世界で殺さなければならない。

全く面倒だ、とカイは思いながら溜め息を吐く。

問題が全く片付いてない事に憂鬱になっていく。ふと外を見れば土砂降りの雨は勢い止むことなく降り続いている。

（確か夜まで雨だったか……）

更にカイの憂鬱が続く。

今日の授業が終わり生徒達は雨の中、散り散りになっていく。部活に行く者、学生寮に帰る者、雨の中でも遊びに行く者。人それぞれだ。

雨の中、傘を差して一人で学生寮に帰っている少女の姿が在る。

その少女は綾瀬夕映。

紫色の髪で、後ろ髪を鈴の付いた髪留めで二つに留めている、特徴的な髪をした少女。

その少女の表情は浮かなかった。その理由は一つ。一ヶ月程前になる修学旅行で少女の大切な親友二人とクラスメートの少女が殺されたからだ。

京都での修学旅行三日目、夕映と殺された少女達は関西呪術協会の総本山、クラスメートの近衛木乃香の実家に来ていた。

そんな裏の世界でもある場所に一般人である少女達が、何故其処に居たのか。それはシネマ村で刹那と木乃香の間に、ただならぬ禁断の関係が有るんじゃないか？　と夕映の親友……早乙女ハルナが感じたらしい。

また変な妄言を言っているです……、と夕映はハルナに呆れていたが、同じクラスの少女、朝倉和美が同調し、刹那に発信機を付けて刹那と木乃香の後をハルナと共に追ったのだ。

ハルナと朝倉が刹那と木乃香の後を追い始めたので、放っておく訳にはいかず残った共に後を追った。

それがいけなかった。

少女達は一般人だから何も知らなかった……、そう言ってしまえばそれまでだが、少女達は不用心過ぎた。自由行動だからって勝手に観光地外に行くのは危険なんだと自覚していなかったのだ。

いくら治安が良い日本の中だからと言って麻帆良よりは危険だ。見知らぬ土地に行く訳だから、それ相応の覚悟をしておかなければならないのだ。

それから刹那と木乃香に追いつき、子供先生と神楽坂明日菜、そして夕映のもう一人の親友である宮崎のどかとも合流した。

此処で子供先生が強く夕映達に帰れと言っていれば、三人の少女が死ぬ事も無かっただろう。この時、子供先生は総本山が敵地だと思っていた。それなのに一般人の夕映達を連れてのこのこと総本山に行った。

生徒達の身を守る教師としてそれはどうなのか？　教師としての自覚があったのだろうか？

いや、無いのだろう。有ったとしても所詮ちっぽけな物。職を賭する、命を賭ける覚悟までは無いだろう。これも三人の少女が死んだ要因の一つでもあるだろう。

それから夕映達は総本山に入り、歓迎され、宴まで広げられ、夜

遅いからと一泊する事となった。

そして総本山に襲撃してきたユーバーに殺される羽目となった。

一番悪いのは斬殺したユーバーだが、少女達や子供先生にもきちんとした思慮が有れば死ぬ事も無かった。

綾瀬夕映は今になって後悔する。何故あの時無理にでも親友を止めなかったのだろうと。何故総本山に一泊しようと考えたのだろうと。

何故自分一人だけ生きているのだろうか……、と。

あの修学旅行から夕映は滅多に笑わなくなった。もちろんクラスメートから話しかけられれば応えるし、授業は普通に受けている。

それでも親友という存在を失い、心にぽっかりと空いた穴は埋める事が出来ない。何をやろうとしても心に空いた穴を埋められなかった。

心にあるのは虚無感とユーバーに対する復讐心だけだった。

一ヶ月程前に夕映は篠宮カイを見かけ、声を掛けた。声を掛けた理由は親友達が殺された夜、素人から見ても分かる程に禍々しい雰囲気を纏っていたから。この人なら親友を殺した黒ずくめの男を殺してくれるだろうと、直感的に思った。

別に子供先生やあの場に居たエヴァンジェリンや真名などに頼ん

でも良かった筈なのに、夕映はカイに復讐の依頼をした。

だがカイには断られた。偽善的な理由を並べて。

親友を殺した男と同じぐらいの禍々しい気配を纏っていたのに、聖人君子みたいに夕映を諭すような事をカイは言ってのけた。それが夕映にとっては正論であったので、その時は身を引いた。

それでも夕映の復讐心が消える事は無かった。言葉だけで復讐心が消える程、人間は簡単には出来ていない。

「結局あの人の言葉を無視してるですね。でもあの人が言った事も一理あるですし……」

夕映は呟きながら悩む。

復讐心を抱いていても亡くなった友を想う事は出来る。無理にユーバーに復讐しなくても生きてはいける。

そんな時、夕映は前から来た人間と擦れ違う。黒い服に黒い山高帽子、そして金髪の三つ編み。何故か傘を差さず雨に打たれながら歩いている。

この見た事のある人間に夕映はギョッと目を見開いて振り向く。

「ま、待つです！！」

何かを考えるよりも先に夕映はその黒ずくめに向かって声を掛け

た。咄嗟に声を出してしまったので、すぐに後悔の念が湧いてしまう。何故声を掛けてしまったのだろうかと。

黒ずくめの三つ編みをした金髪はゆっくりと夕映の方に振り向く。その顔は夕映も見覚えのある顔で、目の色が特徴的。

右目が紅い蛇のような目で左が銀色の目。明らかに日本人とはかけ離れた顔立ちの男。

黒ずくめの男は訳が分からないと夕映を見ながら訝しんでいる。男からしたら何故夕映に呼び止められたのか分からないのだろう。

夕映はこの男の顔を見て、段々と復讐の念が湧いてくる。

憎い、この男が憎いと、夕映の本能が心に語りかけてくる。

夕映は歯を噛み締めて、

「どうして！　どうしてのどか達を殺したですか！？」

恐怖を振り切って自分の心の憎しみをぶちまける。

男と擦れ違って、そのまま無視すれば良かったのに出来なかった。やはり夕映の中で何も行動せず、のうのうと生きるなんて出来ないと感じたのだろう。

結局カイの願いは叶わない。

夕映には殺された親友を想い続け幸せに生きてくれる……、そういう願いは叶わなかった。

夕映は着実に親友が居る死の世界へ歩いて行く。

「――――ッ！」

突然額の紋章が疼きだしたカイは一緒に帰っている浩輝から背いて額を押さえる。

「どうした？」

「いや、ちょっと頭痛が……」

急に歩みを止め顔を背けるカイに浩輝は心配の声を掛けるが、カイは淡く輝いている未来の紋章を知られたくないので、顔を背けながら適当に嘘を吐く。

まあ額の紋章の疼きが頭に連動しているので、あながち嘘ではないが。

そんな中、カイは突然紋章が疼いた事を考える。

（いったい何なんだ？　未来の紋章が疼きだしたという事は俺に危機的状況が近付いているのか？）

未来の紋章が疼くという事はカイに危機的状況が近付いている事が多かった。

だから今回もカイの危機に陥れる存在が近付いているのだと思ったのだ。

（未来の紋章よ、俺に未来を視せよ！）

いったい自分の身に何が起きるのか、カイは知る必要がある。故にカイは未来の紋章の力を使い、近い未来を視る。

隣には浩輝が居るので傘で顔を隠すように姿勢を保ちながら未来を視る。

（これは……、ユーバーに綾瀬の姿が！？）

カイが視た未来……、それはユーバーと夕映が対立している図で、ユーバーが夕映を刺殺する未来が脳に焼き付けられた。

色んな疑問が湧いてくる。何故ユーバーか麻帆良内に居るのか、何故夕映はユーバーと対立するように居るのか、とか色々。

だが考えている時間はない。ユーバーが夕映を刺殺する未来を視た以上、それは現実のものとなる。

最悪な未来を視てしまった以上、放っておく訳にもいかず、カイは急いで現場に向かわなければならない。

「悪い、浩輝！　先帰っててくれ！」

「お、おい！？」

カイは浩輝に詫びを入れつつ、傘を放り出して走り去る。

浩輝が何か言っていたがカイは一切無視。全速力でユーバーと夕映が居る場所に向かう。

走っている途中、カイは黒い手袋を装着し、超から貰った黒いチョーカーを首に付ける。そうすればアンチスキルスロットで抑えられた魔力も戻り、戦闘準備が整う。

相手はユーバーだ。並大抵の準備で挑む訳にはいかない。

それでも京都ではユーバーに負けた訳だが、今回ばかりは負ける訳にはいかない。

（いざとなれば『呪われた剣』を使わないと……）

『呪われた剣』……、それはカイが密かに持っている切り札。だがそれを使えば使うほどカイに災いが降りかかるので、出来れば使いたくない。

しかしその『呪われた剣』を使わないとカイはユーバーに勝てなさそうなので、積極的に使わざるをえない。

くそっ！　と吐き捨てカイは歯を噛み締めて走る。色々と考えている場合ではない。

今は夕映を助けるべく、二人の場所に向かうだけだ。

「どうして！　どうしてのどか達を殺したのですか！？」

目の前に居る少女、いや虫螻に言われて黒ずくめの男、ユーバーは目を細める。この虫螻は何を言っているのかと疑問符を浮かべる。

ユーバーはこれまで数百、数千、いや数万の人間を殺してきた悪鬼だ。そんな悪鬼がいちいち殺してきた人間の顔を覚えている筈がない。ユーバーが人間の中で顔を覚えているのはカイを含めて極少数だ。

だからユーバーの前に居る、ユーバーに敵愾心をぶちまけて睨み付けている少女が言った『のどか達』なんて分かる筈がない。

覚えてないということは大して印象が無かったのだろう、とユーバーは勝手に結論づける。

ユーバーは目の前の少女を今すぐに殺しても構わないのだが、標的のカイが来るまでの余興として相手になってやろうという、珍しい考えに至る。

いや、カイと言うよりかは未来の紋章に用が有るのだが。用と言っても話し合いではなく、殺し合いだ。ユーバーは未来の紋章と殺し合う事を望んでいる。

京都でカイには圧勝したものの、未来の紋章には大敗を喫した。その屈辱的な借りをユーバーはさっさと返したいのだ。未来の紋章を負かす事によって。

その為だけにユーバーはカイが居る麻帆良に来たのだ。

ユーバーの目的である『混沌』は関係ない。ただ人間じみた復讐心を抱いて麻帆良まで来た。

それはともかくカイが来るまでの間、ユーバーは少女の相手をする事にした。

「ふん、残念だが『のどか』なる虫螻の事など知らんな」

ユーバーは嫌みたらしく、ニヤリと口角を上げて自分が殺した人間を侮辱した。

その言葉を聞いた少女、夕映はカチンと頭にくる。

「む、虫螻ってどういう事ですか！？　撤回してください！」

夕映は感情が高ぶり大声で叫ぶ。それもそうだ、目の前の男に殺された親友達が虫螻呼ばわりされるのは我慢ならないだろう。

大声で叫んだが周りには人が居ないのか、誰か駆け寄ってくる事は無かった。

そんな夕映の言葉にユーバーはクックッと笑いをかみ殺し、

「虫螻は虫螻だろう？　人間は全員虫螻だ。うじゃうじゃと世に蔓延る害虫でしかない。それから剣で一突きしただけで簡単に死んでしまう。これの何処が虫螻でないと言うんだ？」

笑いを堪えながらのどか達だけではなく、人間全員を虫螻扱いするユーバーに夕映は唖然とする。

今を必死に生きている人間達を虫螻扱いするユーバーに、夕映は顔を俯かせ、拳を握り締めて肩を震わせる。

こんな最低な奴にのどか達は殺されたのですか？

心の奥底から無念の想いが込み上げ、更にユーバーに対して憎悪の念を抱く。

力が欲しい。この腐った奴を殺せる程の力が欲しい。夕映はそう願う。

肩を震わせ、歯を噛み締め、拳を握り締めて憎悪が孕んだ瞳でこちらを見てくる少女に、ユーバーは限界までに口角を引き上げる。

「おい、虫螻」

ユーバーは問う。

「そんなに俺が憎いか？」

ユーバーの問いに夕映は首を縦に振るだけの返答する。

「ならコレを使って俺を殺してみろ」

そう言ってユーバーは左袖から紋章の魔力を封じた剣、クリムゾンの一本を夕映に向けて放り投げる。

カランカランとクリムゾンが夕映の前に転がり落ちる。

「……え？」

「それを使って俺を殺してみろと言ったんだ」

いきなり剣を放り投げられ呆然としてしまう夕映に、ユーバーはクリムゾンを拾って殺してみろと告げる。

夕映はユーバーとクリムゾンを交互に見つめ、傘を捨てると恐る恐るクリムゾンに手を伸ばす。罠かと思ったが今の夕映には考えられる状況ではない。目の前にユーバーを殺せる武器が有るのだ。願ったり叶ったりな状況だ。

そして夕映はクリムゾンを拾う。

クリムゾンはズッシリとした重みで、夕映の力では両手で持つのがやっと。ヨロヨロしながらクリムゾンを漫画に出てくる剣士みたいに構える。

「フッ……、所詮は素人だな。その程度で俺を殺せるかな？」

「煩いです！　覚悟してください！」

ユーバーの挑発に乗り、夕映はいきり立ってユーバーに斬りかかる。

夕映は精一杯剣を振り上げ、ユーバーに斬りかかるが、軽々とユーバーに避けられてしまう。地面に叩きつけた剣を今度は横に凪ぐが、これも避けられてしまい空を切る。

その後も夕映はユーバーに斬りかかるが、どれもこれもが大振りで一向にユーバーに当たる気がしない。

それもそうだ、夕映は戦闘なんてしたことのない、ただの一般人。対してユーバーは数万の人間を殺してきた戦闘のプロだ。絶対に勝てる筈がない。手加減しても余裕で勝つのが素人とプロの違いだ。

「ほらほら、どうした？　俺を殺したい程憎いんだろう？」

夕映の大振りの攻撃をニタニタと笑いながら躱し続ける。

「当たれ！　当たれえ！　当たれぇぇぇ！」

一方、夕映はブンブンとクリムゾンを振り回し、ユーバーに当てようと一生懸命になっている。

どんなに最低な男を殺したいと思っても、結局は自分では殺す事が出来ない。夕映に段々と諦めの気持ちが沸いてくる。

それにブンブンと振り回していた夕映は体力が底をついて息切れを起こす。もう剣を振り回す事が出来ない程に。

「やはりその程度か。まあ虫螻にしては頑張った方か……」

疲れて動かなくなった夕映に対してユーバーは溜め息を吐き、夕映の腹を目掛けて蹴りを入れる。

「――――ガ、ッ――――！」

ユーバーに強く腹に蹴りを入れられた夕映は五メートルほど吹っ飛ばされ、受け身も取れずゴロゴロと地面を転がる。その際、持っていたクリムゾンを放してしまい、クリムゾンもカランカランと地面に落ちる。

「――――ぅ、うう、痛い……」

夕映は起き上がろうとするが、ユーバーに腹を蹴られた事により肋骨が折れてしまい、激しい痛みで起き上がる事が出来ない。

体を丸めて疼く夕映に悪鬼の足音が迫る。バシャッと雨によって形成された水たまりを踏み潰し、ユーバーは左手でクリムゾンを拾う。

そしてユーバーは夕映の首を右手で掴んで無理やり起こす。

「……ぅ、ぁ、は……」

ユーバーが右手に力を入れている為、夕映の気管が窒息され、夕映は口をパクパクと動かして息を吸おうとしている。

必死に生きようとしている夕映にユーバーは笑みを深くする。

「フッ、そこまで生にしがみついていたいか。虫螻の分際が必死に生にしがみつくのは笑えるな」

ケタケタと気味悪い笑いをするユーバーに、夕映はこんな所で死にたくないと願う。

人間を虫螻扱いにするような男に殺されるのは嫌だろう。それでも殺されると決まっているのなら、僅かながらでも一矢報いたい。

だから夕映はケタケタと気味悪い笑いをしているユーバーに、弱々しい蹴りを入れる。

すると気味悪い笑いを起こしていたユーバーがピタリと止まり、ギロッと異色の双眸で夕映を睨み付ける。

その睨みが夕映に恐怖心を生み、本当にユーバーに対して恐いと実感した。

そんな夕映の内情など知らず、先ほどの遊びとは違いユーバーは殺気を振り撒く。

「貴様、俺の体を蹴ったな?」

ユーバーは夕映に自分の体を蹴られたのがムカついたらしい。

「虫螻の分際で俺の体に蹴りを入れたな？」

虫螻の人間に蹴りを入れられたのが余程ムカついたらしい。

ユーバーは左手にあるクリムゾンを強く握り締め、

「良いだろう。そんなに早く死にたいならお友達の所に向かわしてやる！」

カッと目を見開いてクリムゾンを夕映の心臓に向けて突き出してくる。

夕映はすぐさま目を閉じて身を貫く痛みに備える。

「……え？」

だがいつまで経っても夕映の体に痛みがやって来ない。だから目を恐る恐る開いてみると、自分と黒ずくめの男以外に第三者の人間がユーバーのクリムゾンを左手で止めていた。

左手はクリムゾンの毒牙にかかり、ポタポタと紅い液体が地面に広がる。非情に見ていて痛々しいが、その本人は痛がる様子はない。

その人物は麻帆良学園内では相当有名な人物で、『お姫様』という通称がある女男。一部の女子から不人気の少年。

雨に打たれ、髪も制服もびしょ濡れになりながらも、少年はユーバーに微笑んで言う。

「こんな小娘よりさ、俺と遊ばない？　八房の悪鬼さん？」

まるで天使にも悪魔にも見える微笑みで言ってのけたのは、ユーバーと同じ真の紋章を所有する異世界の少年、篠宮カイだった。

悪鬼襲来（後書き）

今回はユーバーがカイ（未来の紋章）を求めて麻帆良に来ちゃったお話です。

何かユーバーの性格ってこんな感じだったかと疑問に思ったり。

でも残酷な性格してますし、逆に甘いくらいでしょうか。

次はカイが頑張る話にな……れば良いな。

悪鬼退散

にっこりと天使にも悪魔にも見えるような完璧な微笑みを浮かべるカイ。だが左手はユーバーの剣、クリムゾンを受け止めている為に血がポタポタと雨で形成されている水たまりに落ちて、波紋のように紅い水に変わっていく。その様は実に痛々しい。

何故カイが左手を傷つけてまでユーバーの剣を受け止めているのかと言うと、ユーバーの右手に首を掴まれている少女を毒牙から守った為だ。おかげで左手は血塗れになった訳だが。

今もザーザーと土砂降りの雨が降り続ける中、変わらずにっこり微笑むカイと獲物を喰らう邪魔をされたユーバーが睨み合う。そんな状況の中、ユーバーに掴まれている少女は場違いな程に冷静だった。

変わらずユーバーに掴まれている訳だが、カイがいきなり現れた事によりカイに意識が行って右手の力が少し緩まった。おかげで気管に空気が通るようになり、呼吸が出来るようになっていた。呼吸が出来るようになり少し冷静になる事も出来た。

しかしこの状況は何なんだろう？

自分が殺されそうになった所を助けてくれたカイには感謝するが、この睨み合いはいったい何なんだろうか、と夕映はカイとユーバーを交互に見ながら思う。

互いに睨み合いをしたまま全く動かず、夕映はこのまま逃げ出したいところだが少しでも動けばユーバーに感づかれてしまう。そう

なれば夕映は危険な目に遭い、カイにも迷惑を掛けてしまう。

出来る事なら早く状況が変化してくれるよう夕映は願う。そんな時、夕映の願いが叶ったのか、カイが口を開く。

「綾瀬、一応だけど怪我してる？」

カイは夕映の方を見る事はなく訊ねた。夕映の方を見る余裕はない。ユーバーに対して余裕を見せられる程良い状況ではない。

「え、ええ、肋骨が少々折れているみたいです……」

「ふーん」

質問に答えたと言うのにその態度は何だ？　と夕映は内心に思う。肋骨が折れている重傷だと言うのに、カイはさほど夕映を心配している様子はない。カイにとっては取り敢えず命に関わるような怪我ではないから素っ気ない態度を取るのか。

あまりカイに対して良い印象を抱いていない夕映なんて知らず、カイは口を開く。

「聞いたユーバー？　肋骨折れてるんだって。女の子に対して酷いことするな？」

カイの言葉に夕映は疑問に思う。

カイは今、黒ずくめの男の名前と思われる固有名詞を口にした。黒ずくめの男、ユーバーとカイは知り合いなのかと夕映は考える。

知り合いだとしてもきっと仲間とか友達ではないのだろうと夕映でも分かる。二人の目を見れば素人でも分かる。どちらも己を喰い殺さんばかりに火花を散らせ、禍々しいばかりの殺気を撒き散らしているのだから。

そんな風に考える夕映を放置してユーバーは答える。

「ふん、貴様だって敵ならば女子供を平気で傷付けるだろう?」

ユーバーの言葉に対してカイは、

「当然だろ? 敵なんだから」

何を当たり前の事を、頬を膨らませ当然のように答えてみせた。それが夕映は思わず、そういう問題じゃないだろ! と心の中でツッコミを入れてしまう。

だが声には出さない。変に介入したくないと思ったからだ。

「そう、それと同じなんだよ」

「んな訳あるか、バァカ!」

いきなり状況が一変、カイがユーバーの鳩尾目掛けて左足で蹴りを入れる。魔力で強化された足だ、せいぜい一〇メートルは吹っ飛んでくれる。

その際、ユーバーの右手が弱まり、夕映は解放される。夕映が解放された事でカイは右袖に隠し持っていた札を数枚取り出し、ユー

バーに放つ。

受け身を取ったユーバーの眼前には数枚の札。

「爆発しちゃえ」

「――――ッ！」

カイの言葉と共に札が一斉に爆弾が爆発したかのように爆発し、ユーバーはその爆発に巻き込まれる。

爆発が起きた事でモクモクと黒煙が空へと昇る。一応は目隠しになるような物が出来て時間稼ぎになるようになったので、今のうちに戦略的撤退を行う。

「綾瀬、退くぞ」

そう言ってカイは綾瀬を横抱きして転移魔法符を取り出す。

「ちょ、ちょっと!?」

対して夕映は所謂お姫様抱っこと呼ばれる所業をあまりした事が無いのか、顔に熱が集中して赤くなっている。

そんな夕映を無視してカイは転移魔法符を発動し、二人の姿はこの場から消え去った。

麻帆良学園森林地区。此処は滅多に人が来ず、更に今日の天気は土砂降りの雨で全く人が居ない。

それを考慮済みでカイは一旦この場所に転移してきた。取り敢えず一般人の夕映を何処か安全な場所に置かなければならない。それから夕映の怪我を治せる場所である所。

そうなれば夕映が安全である場所は一つしかない。

カイは夕映を下ろし、携帯電話を取り出してある人物にかける。数回のコール音が耳を貫通していく。

早く出てくれ！　とカイは段々と苛立ちが湧いてきて、片足が小刻みに動く。

「……、いったい誰に電話をかけているですか？」

一人よく分からず流されるままになっている夕映は、取り敢えずカイが誰に電話を掛けているのか気になった。

カイは夕映に視線だけを寄越して、

「君の怪我を治してくれる友人に電話を掛けているんだ――」

取り敢えず最低限な内容を夕映に答えていると、カイが電話をかけている相手に繋がった。

『もしもし……』

「悠里、お前今何処に居る？」

カイが電話をかけた相手はクラスメートの桐原悠里。悠里なら夕映の怪我も治してくれるだろうし匿ってくれるだろう。

カイは慌てたように問うと、電話の向こうにいる悠里は疑問の声を漏らしつつ答える。

「今は研究室だけど――」

「研究室だな？　今其処に人が居るか？」

「僕一人だけ――」

「今から直ぐに行くからな」

「え、ちょ――」

悠里の言葉を遮っては遮り、一方的に通話をブチっと切った。

悠里の居場所を確認したカイは夕映の手を取り、再び転移魔法符を取り出す。

「行くぞ、綾瀬夕映」

「ま、またですか……」

また空間移動をするのか、と思っている夕映を無視して、カイは再び転移魔法符を使って悠里が居る場所へ向かった。

カイと夕映が転移してきた場所は東洋医学研究会の研究室。その一室は二〇畳ほどの広さで怪しい薬品がたくさんあり、とても触れる勇気が湧かない。

複数の試験管には緑色の液体やら紫色の液体が入っていて、『混ぜるな危険！』と注意書きまでされている。

そんな物を作るなよ……、と夕映はゲテモノを見るような目で見ていると、カイが端っこの方に座って研究している、白衣に包まれた茶髪の少年に声を掛ける。

「悠里」

「あ、カイ君、いったい……」

カイの声に振り返った悠里はギョッと目を見開き、

「ちょっ、何でずぶ濡れになってんの！？　って言うか後ろの女子

は誰！？」

全身ずぶ濡れになっているカイにまず驚き、更にカイの後ろに居る夕映に驚く。まさかカイが女子を連れてこんな所に来るとは思わなかっただろう。

それに何故全身ずぶ濡れになっているのか、悠里には理解出来ないだろう。

状況を理解出来ない悠里を放ったらかしにして、カイは話を始める。

「悠里ってさ、人の肋骨を治したり出来るか？」

「……、え？」

カイの言葉に悠里は、何言ってんのこの人、と疑問符を浮かべながら思った。

だが質問された以上、答えなければならない。

悠里の目では別にカイには特別怪我をしているようには見えない。いや、左手から血が出ているので左手には怪我しているだろうが、とても肋骨に怪我をしているようには見えない。

そうなると肋骨を怪我したのは後ろの少女か……。

悠里は訝しい目で夕映の体を観察すると、妙に体が震えている。雨に打たれて濡れた寂しさとは違い、痛みを我慢している震え。

悠里は何となくカイの言いたい事を理解し、視線をカイに戻す。

「僕は魔法使いという訳ではないから瞬時に治せはしないけど、自己治癒能力を上げる薬があるから、それを飲ませれば一週間から二週間で完治するよ。その前に痛みを我慢しているようだから痛み止めを飲ませるけど」

「だそうだ。綾瀬はそれで良いか？」

悠里の説明を聞いてカイは夕映に目を向ける。

「え、あ、構わないですが……」

もう完全に流れに身を任せている夕映は大人しく言う事を聞く。怪我を治してくれるなら何でも良いと思っている。

「それじゃ綾瀬の世話を頼むよ、悠里」

「カイ君はどうするの？」

「俺は俺でやるべき事がある。それを片付ける」

ユーバーを一旦この麻帆良の地から追い払う為に、カイは三度転移魔法符を使ってユーバーの元へと戻る。

光と共にカイは消えていったので、研究室には悠里と夕映の二人しか居ない。

どうしようか、とキョロキョロしながら挙動不審になっている悠里は壁際にある茶色い毛布を見つけ、寒いであろう夕映を心配して

その毛布を取りに行く。

そしてその毛布を夕映に渡す。

「この部屋に綺麗なタオルは無いからまだ髪とか拭けないけど、これで寒さは和らぐと思うよ」

「あ、ありがとうです」

毛布を渡された夕映は礼を述べて毛布にくるまる。

「それじゃ僕はタオルを取りに行ってくるから、君は此処で待ってて。すぐに戻ってくるから」

夕映に毛布を渡した悠里はそう言って研究室を出て行く。

この研究室にあるタオルは全て薬品で汚れてしまっているので、そのタオルで夕映に体を拭かせる訳にはいかない。だから悠里はタオルを取りに出て行った。

毛布にくるまった夕映は近くの椅子に座って、ゆっくり一息吐く。

ユーバーの蹴りによって折られた肋骨の痛みは、思った以上に我慢が出来た。無理に動かなければ痛みは何とか抑えられる。

痛みは抑えられるのだが、今になってユーバーに対しての恐怖が再燃した。言葉には表せない程の恐怖、畏怖が夕映の心を支配する。

初めて戦いという物を理解出来たような気がした。あんな死の恐怖をいつも感じながら戦える人間なんて、夕映は狂ってるとさえ思

える。

戦う人間……、もカイもネギ達も何かが普通の人間と狂っているのではないかと思い始める。そう思い始めると夕映は彼等と普通に接する事が出来なくなってしまう。一般人とは何かが狂っている彼等と。

確かに命を懸けて戦うのは一般人からしたら狂っていると思える。負けたら自分の人生はそこで終えるし、勝っても敗者の命を奪い殺したという重責を一生負い続けなければならない。

漫画やゲームみたいに両者の命を取らずその戦いを終わらせる、そういった美談がおかしいのではないかとさえ思い始めてしまう。そういう戦いもあるかもしれないが、夕映が味わった戦いはそうではない。戦いに負けた敗者の命を容赦なく奪って終わらせる、そういった戦いを味わってしまった。

その戦いに身を投じたカイの頭は本当に狂ってると思える。殺伐とした雰囲気で戦える事自体、カイは狂ってるのかもしれない。

ユーバーの魔手から自分を救ってくれたカイには感謝するが、そういう考えに至ってしまってはカイもユーバー同様、恐怖の対象となってしまう。

カイだけではない、ネギ達もそうだ。ネギ達も魔法使いとして戦っている以上、一般人とは何かが狂っているのだろう。ネギ達もあんな戦いをしていたのかと思うと、恐怖の対象となってしまう。

どちらも自分の危機を救ってくれた。だが頭では良い人なんだと理解していても心が怖いと叫んでいる。

所詮人間はそんなものだ。一度『怖い』と認識してしまったら、なかなか心から離れてはくれない。下手したら一生その人を『怖い』と認識していくのだろう。

きっと後にカイと会ってしまったら夕映は拒絶する。自分の命を危険に晒すような戦いをする人間なんて、夕映にはもう恐ろしいから。

もう夕映はあんな戦う事はしないだろう。本当の戦いの恐怖を知ってしまった以上、夕映は二度とユーバーには刃向かえない。復讐心も抱けなくなる。

これで夕映はユーバーに対して復讐するつもりが無くなった。いや、単に復讐出来なくなってしまったから諦めただけ。夕映の心には諦めの気持ちが広がっていった……。

その頃、カイの札によって爆風を受けたユーバーはドンと地面を

踏んづけていた。地面に亀裂が入る程強く踏んづけたユーバーの機嫌は最悪。

カイに軽々とやられ逃げられたのがユーバーにとっては屈辱以外の何物にもならない。たかが札の魔法で自分が足止めされては、苛立つのも無理はない。

「絶対に殺してやる」

ギリっと奥歯を噛み締めながら言ったユーバーは左袖からもう一つのクリムゾンを取り出す。今度は逃がさないと異色の瞳の眼光を放って、ユーバーはゆっくりと歩き出す。

狙いはカイただ一人。他の人間は全て無視する。

ユーバーにとって目的はカイと未来の紋章なので、他の人間に構ってる場合ではないのだ。そもそも夕映に構ったからユーバーは余裕を見せてしまい、あまつさえ夕映を助けに来たカイに逃げられたのだ。

この結果はユーバーの怠慢によるもの。自分のミスだ。

ぶっ殺してやる、と意気込むユーバーに目的の人物が現れる。

「待たせたな、ユーバー」

突如ユーバーの目の前に現れた全身びしょ濡れ少年、篠宮カイ。

それでも眼光だけはユーバーを射抜くつもりで放っており、鋭いものがある。

綾瀬夕映という足枷が居なくなった以上、カイも自分の為に動く事が出来る。故にここからは本気で戦うことが出来る。

瞬間、カイの周りが歪みだす程の殺気が滲み出し、今すぐにでもユーバーを殺したいと目が語る。

それを見てユーバーはニヤリと口角を上げる。

「……ク、フフフ、クハハハ！　結構だ。それでこそ殺しがいがある。呪われし紋章の子をここで葬る事が出来るのは気分が良いからな！」

「俺を葬る？　出来るのか？　お前如きに」

「忘れたのか？　俺に圧倒的に負けたくせに」

「……、ああ、そうだ。確かに俺は弱いよ。お前にも負けたしマリアにも負ける。結局未来の紋章が無ければ俺は強い奴には全く勝てない」

ユーバーの言葉にカイは思っている事を吐き出すように言った。確かにカイは未来の紋章が無ければ今を生きてはいないだろう。

これまでの戦い、カイは未来の紋章を使って何とか生き抜いてきた。負けながらも未来の紋章に体を乗っ取られていつの間にか勝っていたりもした。

それはこれからもだろう。カイはもう未来の紋章無しでは強敵とは戦えないのだから。

だが今回は違う。

「だがな。俺には未来の紋章しかないと思っていたら、大間違いだ。俺はお前をこの世界から追い払う事が出来るなら、『魔剣』だって使ってみせる」

「……、魔剣だと？」

「そう。呪われた魔剣……、魔剣らしい魔剣だ」

そう言ってカイは今も尚、血がポタポタと落ちる左手を前に翳すと、濁りに濁った闇が現れ、その中から鞘に収められた剣が現れる。

その剣はサーベル型の剣で、黄金の柄に血よりも紅い宝玉が埋められており、鞘も黄金に染められている。だがカイがその剣を鞘から抜くと、漆黒の刀身が露わになり、とても黄金の柄とは合わない。

だが妙にその剣から魔力が滲み出ており、負の圧力も滲み出ている。

「……、何だ、その剣は？」

ユーバーは少し心臓の鼓動を速くさせながら問う。初めて見る武器にユーバーは少し興味が出たようだ。

問われたカイはフッと笑む。

「この剣は『魔剣ティルヴィング』。そう言う名前らしいよ」

カイが右手にしている剣の名称は『ティルヴィング』。鉄をも容

易く切り裂き、錆びることはなく、〝狙ったものは外さない〟剣。

実に使い勝手がありそうな剣なのだが、この剣には代償もある。〝所有者の望みを三度叶えるが所有者に破滅を齎す〟、云われた通りの魔剣。

カイはこの魔剣を持つだけで望みを叶えられてしまうので、仕方なく自分の中に封印を施していた。勝手に望みを三度叶えられ、破滅を齎されるなんて堪ったものじゃない。

だからマリアと戦う時も使う訳にはいかなかった。まだカイは死のうとは思っていないので、ティルヴィングは使えなかった。

だが今回は本気でユーバーをこの世界から追い払いたい。ならば恐ろしい魔剣を使ってでも、というカイの本気さが窺えるのだ。

「……、ク、ククク、ククク！」

ユーバーは不気味な嗤い声を上げ、

「だから何だ！？　魔剣を出したからと言って俺に勝てると思っているのか！？」

弾丸の如く地面を蹴ってカイとの距離を一気に詰める。

それに対してカイはティルヴィングを左手に、鞘を右手に持ち替えて、剣を高々と掲げる。

「分かってないな。この剣を出した時点でお前の勝ち目はないから」

そう言ってカイはティルヴィングを振り下ろす。

ただそれだけで。

「――――ッ！」

ユーバーの右肩から鮮血が噴き出す。何が起きたかも分からずユーバーは足を止めてしまう。

更にカイはティルヴィングを横に振るう。それだけでユーバーの胸辺りに一閃の斬撃が入る。

「――――グゥ！」

本当に何が起きたのか分からないユーバーは自身の体を傷つけられていく為に、一旦カイからバックステップで距離を取る。

全く意味が分からない、とユーバーは焦燥感に包まれる。何故自分の体に斬撃を加えられたのか、ユーバーには分からなかった。

カイとの距離はまだあった。カイが持っていた”剣の攻撃範囲内には入っていなかった”。なのにユーバーの右肩と胸に斬撃の傷跡が残されている。

”カイの攻撃範囲内に入っていない”筈なのに……。

ユーバーが謎の攻撃について考えていると、クックッと笑いをかみ殺すカイの声が聞こえてくる。

「言っただろう？　この剣を出した以上、もうお前に勝ち目は無いって」

「……、その剣が、俺の体を傷付けたと……？」

「そういうこと。例えばこんな風にな」

そう言うとカイはティルヴィングを振るう。振るった瞬間、ユーバーの左肩に斬撃が襲いかかり、ブシュっと鮮血が噴き出す。ユーバーはよく分からないカイの攻撃に苦痛の表情を浮かべる。

その苦痛の表情を見て、カイはフッと口角を上げる。

明らかに攻撃範囲外からカイはユーバーに攻撃をした。未来の紋章魔法でもなく、札による魔法でもなく、銀糸による攻撃でもなく、ただの剣による斬撃。それがユーバーには理解出来なかった。

剣から衝撃波みたいな攻撃が来た訳でなく、カイがティルヴィングを振るった瞬間には斬撃が加えられたのだ。”ただ振るっただけで”。

「……、その剣、いったい何なんだ……？」

「……、まあ良いか、教えてあげる。この剣の特徴は”狙ったものは外さないんだ”。つまり直接攻撃範囲外だからといって剣を振るえば、それだけで敵に攻撃する事が出来る。今みたいにズバッと斬りつけることが出来るって話だ」

ティルヴィングの特徴は離れた位置に居ても敵に攻撃する事が出来る。どれだけ離れていようとも敵の姿について考えてティルヴィ

ングを振るえば、その敵を斬ることが出来る。

所有者が動かずとも敵を斬殺する、とんでもない武器だ。

この時、ユーバーは初めてカイに恐怖を覚えた。見えない攻撃を使用してくるカイにユーバーは恐ろしいとさえ思える。いや、実際にはカイの持つティルヴィングに……、だが。

「貴様、そんな剣を使ってどうなるか分かっているんだろうな？」

「もちろんだ。お前をこの世界から追い払えるなら魔剣の呪いだって使ってやる」

ユーバーの言葉にカイは目を細めながらティルヴィングを掲げ、

「この世界はまだお前が来るべき所じゃない。さっさと消え去れ！八房の悪鬼！」

カイはビュンとティルヴィングを振り下ろす。たったそれだけの動作でユーバーの体は面白いように斬り刻まれていく。

カイがブンブンとティルヴィングを振り回すだけで、ユーバーの体は全身斬り刻まれていく。ユーバーは何も行動を起こせない。起こそうとする前に体を斬り刻まれ、上手く近付けないからだ。

だが何もせずに負けるのはユーバーにとって屈辱だ。しかも虫螻と蔑む人間のカイにやられるなんて最大の屈辱。

このままやられる訳にはいかないので、ユーバーは転移魔法を用いてカイの背後を強襲する。だが未来の紋章を所持するカイにはユ

ーバーの行動はお見通しで、

「無駄だ、もう未来は決まっているんだから」

カイはニタっと笑んで、自身に襲いかかる二振りのクリムゾンをティルヴィングで受け止める。ちゃんと剣としての機能もあるので、鍔迫り合いに持ち込む事も出来る。

拮抗した状態から斬り合いになるが、圧倒的に不利なのはユーバーだ。未来を視れるカイならばユーバーの攻撃を読んで先に手を打つ事が出来るが、そうなった場合ユーバーは後手に回るしかない。

基本的にクリムゾンによる直接攻撃を多用するユーバーは今のカイには致命的なダメージを与える事は出来ない。雷鳴の紋章を使ったとしても、詠唱中に攻撃されて中断されては意味がない。

つまりユーバーは今みたいにカイに斬り掛かり続けなければならない。そうしないとユーバーは完全に勝ち目が無くなってしまうから。

ユーバーとの斬り合いも余裕を持って対応出来ているカイは、右手にあるティルヴィングの鞘を突き立てて魔法陣を展開する。

「悪いけどお前と戦闘を長く続ける気はない。さっさと消え去ってもらう！」

カイはそう言うとユーバーを吹き飛ばし、展開した魔法陣の上に立ちティルヴィングを魔法陣に突き刺す。

「待て！　カイ・メルフェス！」

何かしらの儀式を発動しようとしているカイを止めようと、ユーバーは必死の形相で近付いて来るが、その前にカイは儀式を発動する。

魔法陣が強烈な光を発し、その光がユーバーを包み込もうとする。

「さあティルヴィング、目の前の悪鬼をこの世界から追い払え！」

「次会った時は覚えていろ――――！」

声を高らかにしてカイは望みを言うと、ユーバーは負け惜しみを残し、光に包まれ収束して姿を消した。

ティルヴィングの最大の特徴、それは所有者が望むことを三度叶えること。カイはティルヴィングに『ユーバーをこの世界から追い払う』という望みを叶えてもらった。

目の前からユーバーが居なくなったという事はカイの望みが叶えられ、ユーバーはこの世界から消え去った。

京都の時、ティルヴィングを使っていれば簡単にユーバーに勝てていたが、カイの精神的弱さがティルヴィングを使うのを躊躇っていた。

所有者の望みを三度叶える代わりに破滅が齎される。

そんな恐ろしい魔剣を使うなんて精神的に弱いカイが使える筈がなかった。

だったらティルヴィングを捨てれば良かったのではないのかと思う。カイも捨てようかと思ったのだが、魔剣の意思か、捨てる事が出来なかった。捨ててもいつの間にかカイの元へと帰ってくる。

未来の紋章と同じように、いやそれ以上カイにとっては恐怖の象徴。ティルヴィングを使うのは躊躇ってしまう。

だが今回、ユーバー相手にティルヴィングを使った。今まで使わなかったが今回使ってしまった以上、カイはもうティルヴィングを使うのを躊躇わない。

もう破滅しても良いかな？　と思ってさえいる。

「……、取り敢えず悠里に綾瀬の状況がどうなっているか聞いてみるか」

ティルヴィングを鞘に戻し左手の中に仕舞うと、カイは携帯電話を取り出す。

そして悠里に電話を掛けると直ぐに繋がる。

『あ、カイ君。やるべき事は終わったの？』

「ああ。それよりも綾瀬の方はどうだ？」

『こっちは大丈夫だよ。ちゃんと治療はしてあるから』

「そうか。ならば俺がそちらに行かなくても良いな？」

『うん。それに今、カイ君が来ない方が良いかも』

「……、俺、嫌われたか？」

『多分。戦う人間全員だろうけど』

「分かった。じゃ、頼んだ」

『うん、任せといてよ』

カイは電話を切ると深く溜め息を吐く。悠里の言葉から察するに夕映はユーバーと出会ってしまった事で、裏の世界で戦う人間に拒絶反応が出たのだとカイは解釈する。

裏の人間に恐れるのは当然か、と思いつつカイは学生寮に帰る為に歩きだす。所詮カイみたいな存在は万人に受けるものではない。

裏の世界で戦う人間なんて恐れられて当然。嫌われてなんぼのもの。

カイは今になって当然の事を思い出し、自嘲気味に笑い出す。

「ハハハ！　どんどん嫌いになってくれ。そうすれば俺は……」

自嘲気味に漏らした言葉は今も降り続く雨の音によってかき消された。

悪鬼退散（後書き）

さて、話の方向性がどんどんおかしい方向に向かっているような気がしますが、そこは私の頭がおかしいということで。

今回はカイの新しい武器として『魔剣ティルヴィング』が出ました。

この剣、物語の当初から持っていましたが、所有者に破滅を齎すのでカイに使う勇気が無かったんですね。

三度望みを叶えたら破滅するなんて、怖くて使えませんしね。

この剣は北欧神話の魔剣として登場しますね。

それを元に少々オリジナルを加えさせてもらっています。

紅い宝玉とか離れた位置からティルヴィングを振り回すだけで敵を斬ることが出来るとか。

ほんの少しチート？な感じはしますが、きちんとカイには代償を払ってもらいます。

麻帆良祭に向けて

六月五日。

麻帆良学園の一大イベント、『麻帆良祭』をあと一五日後に控えた今日、カイは呆れたような表情を浮かべながら通学していた。

いつもの登校風景とは少し違い、ありとあらゆる部活やサークルに所属している生徒達が出し物の準備をしており、それだけで騒がしかった。大学部が作った恐竜の被り物で登校していたり、戦隊ものの着ぐるみを着て登校していたりと、もう麻帆良内では『麻帆良祭』に向けてお祭り気分が漂っている。

そして学祭門と呼ばれる高さ二〇メートルはある巨大な門まで作っており、無駄に気力がある。

「……、ほんと学生がやるような事じゃないだろ……」

「だよな。ほんとに此処は飽きないな」

無駄に凄い活気がある生徒達にカイは言葉を漏らすと、隣りに居る浩輝がその言葉で話を広げようとする。

カイはいかがわしい物を見るような目で浩輝を見て、

「そうか？　俺はもう飽きてきたぞ？」

「早いって。お前って本当に飽き性だよな。それともあれか？　昨年の学祭で『お姫様』と二つ名を付けられてしまったイベントがト

ラウマになって――」

「それ以上言うと喋れなくしてやろうか？」

「ふでにふひふはいているだろうあ゛！（既に口を塞いでいるだろうが！）」

カイにとってトラウマ的な出来事を浩輝に言われて、無意識に浩輝の口を塞いでしまう。

カイにとってはある意味忌々しい出来事。公衆の面前でウェディングドレスを着せられた事をカイは根強く恨んでいる。そんなカイの根強い恨みを浩輝が口にした為に、カイは右手で浩輝の口を塞いでやった。

口を塞いでいるカイの右手を浩輝は無理矢理引き剥がし、カイの頭に拳骨を入れる。

「――ッ！　何しやがる！？」

脳が揺れる程に強く殴られ、カイは恨みがましく浩輝を見上げる。

そんなカイに嫌みたらしく口角を上げ、

「やられたら二倍返しにしてやらないとな」

自分の拳を見せ付けるように言った。何か釈然としない気分に苛まれている中、カイは浩輝を置いて男子校へと向かう。

待てよ、怒ってんのか？　と心配しているような浩輝の声が聞こ

えるが、カイはそれを完全に無視。カイは黙々と男子校へと向かっていった。

先日カイがユーバーと戦っていた同日、麻帆良学園内ではもう一つ戦いが行われていたらしい。

らしいと言うのはカイはユーバーと戦って部屋に帰って直ぐにベッドで眠りに就いていた。その間に……、カイが知らぬ間に麻帆良学園内で戦いが起きていたのだ。

戦っていたのはネギ・スプリングフィールドとネギを調査しに来た悪魔のヘルマン。

ヘルマンは誰かからの依頼でネギの力を見定めに来たらしく、ネギに繋がる少女達を人質にした。それを助けるべくネギが狗族の少年と共に戦い、勝利した。その後、ネギはヘルマンを見逃し、事件は解決した……。

この話を後日学園長から聞かされたカイは呆然としてしまっていた。

自分の生徒を人質にされ、戦いに勝利したくせに敵を……、魔法使いにとっては滅ぼすべき悪魔をわざわざ見逃し、ネギは何の罰もなく今を過ごしている。

またか……、とカイは呆れた。またこの学園は子供先生に甘い判断を下し、野放しにしている。これは子供先生が悪いだけではなく、学園側も最低辺までに腐っているのだとカイは思ってしまった。

一〇歳の子供だから、英雄の息子だから、『立派な魔法使い』になれる素質を持っているから、ただそれだけで子供先生に罰を与えないようとはしない。

子供先生は未来を約束された道を歩く者。そんな彼につまらない経歴はいらない。汚れた過去などいらない。

そんな学園側……、または魔法使い側にカイは段々と嫌気がさしてきた。どの世界でも子供先生みたいな子供は居るし、魔法使い達みたいな大人達も居る。

そんな事を思うカイだったが、今回ばかりは抗議も出来なかった。カイも子供先生と同じように綾瀬夕映という少女を巻き込んでしまったからだ。

自分も他人を巻き込んでるくせに、それを棚に上げて学園長に抗議が出来る訳がない。

結局あれからカイは夕映とは話をする事もなく、顔を合わせる事

もなかった。夕映の怪我は悠里の薬によって既に完治しているらしく、いつも通りの日常を過ごしているらしい……、ということを悠里の経過報告から知った。

夕映は裏で戦う人間に嫌悪感を持ったらしく、カイだけでなくネギも嫌うようになった。嫌いになってくれれば裏の世界に足を突っ込む事もないだろう。ユーバーによって殺された親友達をずっと想い続けていく……、そういう人生を送っていくのだろう。

それでいい。命を懸けた戦いなんてしない方が良いに決まっている。戦う理由が何であれ戦いを自らする者は色々な意味でおかしいのだから。

夕映のことは置いといて結局のところ取り敢えず死者も何も出なかった事で、子供先生も学園側も何も罰を受けなかった。

学園側についてはヘルマン侵入やユーバー侵入については確実に学園側の不祥事なのだが、これも無かった事になった。

カイにしても結果的に学園側に助けられる事になった。先日起きた全ての事件が闇に葬られた事で、ユーバーのことも学園側に知られることは無かった。よってカイの裏の顔もバレずに済んだ。

結局、カイは抗議する理由が無くなり、モヤモヤするまま終わった。

まあユーバーをこの世界から追い払う事が出来たのだから、それで良しとしよう。

（ユーバーは俺の望み通りにこの世界から消え去った。ティルヴィ

ングの力によって……。あと二つか）

カイはティルヴィングについて考える。ユーバーを追い払うという望みをティルヴィングが叶えたので、ティルヴィングが望みを叶えるのはあと二回。あと二回、望みを叶えたらカイは破滅へと向かう。

今になってティルヴィングの力は絶大だな、とカイは心の中で笑ってしまう。これなら世界征服だってする事も出来るし大金持ちになる事もなれる。

（まあ三度望みを叶えたら死が待ってるから無駄な望みは持てないんだけど……）

「篠宮君！　君は学祭を楽しむ気が有るんですか！？」

ティルヴィングについて考えていると、ふと怒鳴り声が聞こえてきてカイは我に返り、声がした方へ振り向く。其処に居たのは憤怒の形相を浮かべる学級委員長。

「全く君という人は……、少しぐらい案を出してください」

現在カイのクラスでは出し物を何にするのかという議論が行われている。黒板にはお化け屋敷やら喫茶店など書かれている。

別にカイは麻帆良祭を楽しむつもりが無いのだが、教壇に居るお坊っちゃんが怒気を含んで睨んでいるので答えなければならない。

何を言えば良いのだろうか、とカイは悩みながらクラスメートの顔を見ていく。クラスメート達の顔を見てカイは一つの案に辿り着

く。

「じゃあ『ホストクラブ』なんてどう？」

……。

「全員が全員だんまり決め込まれるのは辛いんだけど……」

クラスメート全員が、コイツ何言ってんだ？　みたいな可哀想な目で見られる中、カイは続ける。

「このクラスはさ、（俺以外）カッコいい顔立ちをしてる奴らが多いだろ？　きっと集客力は見込めると思う。コンセプトはお客様に安らぎの時間を……、てね」

無駄に気合いを入れて雄弁に語るカイ。

だが本心は言っている事と違う。

カイの容姿と言うのは女顔で女子よりも細いのでは？　と思える程の細さ。言ってしまえばホストには向かない容姿。

つまりはカイがサボれる最高の案だ。麻帆良祭を真に楽しむつもりが無いカイはホストの案を提案し、自分はのんびりとサボる。これがカイの本心だ。

どうせ超の計画でクラスの出し物に集中出来ないので、こういった案を出したのもあるが……。

「篠宮君……」

しんと静まり返る中、お坊っちゃんはぽつりと呟く。

ん？　とカイは疑問符を浮かべて首を傾げていると、

「良いでしょう。今年度は麻帆良学園本校男子中等部一集客数が多いクラスを目指します。篠宮君の案で行きましょう」

お坊っちゃんはカイの提案を通し、３－Ａの出し物は『ホストクラブ』となった。

勝った。カイは内心ほくそ笑んだ。これでゆっくりサボれる……。

「では篠宮君、君にはこの案の提案者として最後までやり遂げてください」

「……へ？」

お坊っちゃんの言葉にカイは素っ頓狂な声を上げる。

「”サボる”　なんて許しませんよ？」

「……、はは……」

見透かされていました。

どうやらお坊っちゃんはカイの考えなんてお見通しだったようで、カイを責任者に任命した。

ほんと馬鹿だった、と自分が提案した事を悔いるカイだった……。

麻帆良祭に向けて（後書き）

過去最低の短さに終わってしまった……。

今回やけに短いのはこの後続きを書いていたのですが、その内容はとある世界遺産の地で一つの戦いを書こうとしていたんです。

でも世界遺産の地で戦うって駄目だろ、と思った結果、削ってこんな短いのを更新した訳ですね。

無駄な時間を過ごしてしまいました……。

今回はもうすぐ麻帆良祭が始まりますよ、というお話ですね。

私の文才では上手く麻帆良祭を盛り上げられないでしょうが、私なりに頑張ってみようかと思います。

下手ですが（承知済みか？）それでも見てくださるのであれば、よろしくお願いします。

麻帆良祭前日

六月一九日。

この日、麻帆良祭の前日という事もあって、何処のクラスもそれぞれの出し物に追われていた。学校だけではなく部活やサークルもそれぞれの出し物に準備を追われている。

という事でカイのクラスも例外という訳ではなく、それぞれ最終確認の打ち合わせをしていた。

「ほらほら、そこの二流ホスト！　何かキモいぞ？」

まるで監督のように指揮をしているのは三年Ａ組の出し物『ホストクラブ』を提案してしまった大馬鹿者、篠宮カイ。

人差し指が伸びている指し棒を手にして吼えているカイの姿は学校指定の制服ではなく、本当にホストの人が着るような黒いスーツを着ている。カイだけでなくクラスメート全員がスーツを着用している。

教室も椅子は全て廊下に並べ、机を四つ合わせ白いテーブルクロスを掛けて一つのテーブルにし、何処から調達してきたのかソファも複数配置している。更には飲み物を作る場所としてカウンターバーも設置し、何が何やらな状態となっている。

よくもまあこんな事を学園側は許可してくれたものだと思うが、そこは『麻帆良だから』の一言に尽きるのだろう。こんな事、他の学校では大半は許してくれなさそうなものだが……。

こんな事をしていると本物のホストクラブには負けるが、学生がやるホストクラブならそこそこ良い線だと思う。

しかしながら、やっぱりだと思うが、カイのスーツ姿だけは違和感に思える。女顔のせいなのか体の線が細いからなのか分からないが、やっぱり似合わない。これはカイもよく分かっている事なので一刻も早く脱いで制服に戻りたいが、お坊っちゃんがそれを許してくれなかった。

お坊っちゃん曰く、『自分が提案したのだから最後までやり通せ』、との事。

だからカイは今もこうして似合わないスーツを着て、責任者として指揮をしている訳だが……。

「誰が二流だアホ！　大体篠宮はホスト姿似合ってないぞ？　いっそのこと去年の『お姫様』でやれば良いんだよ」

生意気にもクラスメートがカイの禁忌に触れたので、カイも反論する。

「何で俺がもう一度ウェディングドレスを着なくちゃならないんだよ！？　絶対に着ねえからな！」

「えー？　でも篠宮君のウェディングドレス姿、可愛かったよ？」

カイの言葉にとある女子生徒が話に入る。ここで疑問に思う事が有るだろう。

何故女子生徒が此処に居るのだと。

現在クラスの出し物の準備で実際に色々な女子生徒な協力してもらって、予行演習をしている最中だったのだ。だからクラスの中には男子だけでなく女子（その大半は浩輝の親衛隊）も居る。

という事でカイは溜め息を吐きながら、

「じゃあ何だって？　俺がウェディングドレスを着て客寄せでもしろってか？　無理に決まってんだろうが！　そんな事したら男ばっか来ちまうだろうが！！」

「でもでもやっぱり篠宮君にホスト姿は似合わないし」

「あーもう！　どうせ俺は女顔で客は取れないし、浩輝みたいにナンバーワンホストにはなれねえよ！！」

うわーん！　と叫びながらカイは指し棒を投げ捨て、教室を嵐の如く去っていった。

確かにカイはホスト姿は似合わないし客も取れないだろうし女（殆どは親衛隊だが）を囲ってる浩輝には足下にも及ばないだろうが、それでもカイなりに頑張ろうとしていたのだろう。

それを無残なまでに引き裂いた女子生徒の言葉はカイの頑張りを無碍にするようなもので……。

「駄目だよ。篠宮もあれで頑張っているんだからさ」

教室から走り去っていったカイの頑張りを知っている一人のクラ

スメートは、無意識にカイにとって酷い事を言った女子生徒に優しく諭す。

その女子生徒もシュンと落ち込んだ感じで俯く。彼女なりにカイの気持ちを汲んでくれたのだろうか？

ともかくカイはこの出し物について成功させるべく一生懸命になって頑張っていた事はクラスメート達も知っている。何だかんだ言いながらも出し物を成功させようと頑張っていた。

どうも教室に暗く重たい雰囲気が漂うが、これまでの経緯を見守って来ていた悠里がポツリと隣りに居るお坊っちゃんに呟く。

「委員長……」

「何ですか？」

「カイ君……、本当に傷付いたと思う……？」

「……、え？」

ポツリと呟いた悠里の言葉にお坊っちゃんの心に水の波紋が広がるように、とても嫌な予感が湧いてくる。

何故か教室内ではカイが女子生徒の言葉に傷付いて教室を出て行ったかのように思われているが、果たして本当にカイはこんな事で傷付いたのだろうか？

嫌な予感しか湧かないお坊っちゃんに、ソファに座り親衛隊の女の子を囲っている浩輝から決定的な言葉を告げられる。

「カイって基本的に面倒事から逃げる性格してるよなー」

そう、カイの性格と言うのは基本的にこう言った面倒事は逃げる性格をしている。

学生生活をしているカイは、まあ行事については積極的に参加する事はない。クラスの出し物についてもお坊っちゃんが強制命令しなければ頑張る事もなかった……。

そんなカイが今まで頑張ってきてそれなりに重圧がのし掛かっていた筈だ。その時に先程のようなイベントが起きたらカイの心では色んな事を思い浮かべていただろう。

これはチャンスと思い……、そこまで考えてきたお坊っちゃんは目をギラッと睨みを利かせ、怒りを含めてクラスの皆にこう告げる。

「全員に告げます。あの逃亡者をひっ捕らえて来なさい！」

「サー、イエッサー！」

何処ぞの軍隊のように統率が取れた人員を派遣し、忌まわしき逃亡者を捕らえる作戦に出る。

そう、カイは逃げたのだ。大事な準備を放り出して。なのでお坊っちゃんがクラスメートを使ってカイを捕らえようとする動きを見せない訳がない。クラスメート達もカイの本来の性格を思い出し、

躍起になってカイを探し出すだろう。

先程のシリアスな雰囲気を返せー！　と言わんばかりの怒号が飛び交う中、カイ捕縛作戦に出動しなかった浩輝は親衛隊を囲いながら親友の身を案じる。

恐らく見付かればお坊っちゃんの下、クラスメート達からお仕置きという名の半殺しの目に遭うだろうが仕方ない。カイが悪い事なのだから……。

（ほんと、飽きないな……）

「うふ、うふふ。やっとクラスの準備から逃げる事が出来たぜい。まあ準備なんてもう終わってるし俺はもう必要無いんだけどさ」

怪しい人オーラを放ちながら独り言を呟くカイは人混みが蔓延る学園都市内を歩いていた。

似合わないスーツ姿からいつもの学校指定の制服に着替えており、まあ風景に馴染んでいると言えば馴染んでいる。

取り敢えずクラスから抜け出したカイだが結局のところ準備は既に出来ており、カイはこれでお役御免になる筈だった。しかし学校一集客数を目指すお坊っちゃんは予行演習を強行した。

半端な出し物にはしたくなかったのだろう。

お坊っちゃんは良くも悪くも生真面目な人間だ。ただ単に成功させたいだけなのだろう。

カイもそれについては分かっており協力したい気は有るのだが、それよりも大事な超の計画について関わらないといけない。別にカイにとっては世界が変わろうが変わらないであろうが、正直なところどっちでも構わない。

だが自分に掛けられている呪いを解いてくれるのならば、カイは誰にでも着くのだろう。今回は超に着いただけの話だ。それに前金として黒いチョーカーを貰っているので、裏切る訳にもいかない。

そんなカイは現在超にメールで呼び出され、超が指定した場所へと向かっている最中だ。いったい何をするつもりなのかカイには分からない。いや、何となくには分かるが。

ふとカイは空を見上げる。空には巨大な飛行船が稼動しており、腹には麻帆良祭実行委員会と書かれている。その飛行船から大量の紙吹雪が舞っており、いよいよ麻帆良祭が開催されるのだな、と漸く実感が湧いてくる。

視線を落として横に目を向ければ前夜祭のチケットを売っている店を見付ける。前夜祭と言うのはまんま、麻帆良祭前日の今夜に世界樹周辺で行われるお祭りのこと。

前夜祭なのに規模が大きいのはどうなのだろうか、という疑問が湧くが気にせず店をスルーして流れのまま歩いていく。

歩いて歩いて、たどり着いたのが、廃棄された旧校舎。此処は女子中学校の校舎だった訳だが、古くなった事で破棄され現在使われている校舎に移ったらしい。

周りはあれだけ人混みだらけであった人の姿もなく、此処だけポツンと外界から切り離されたような静けさが漂っている。こんな静かな場所に呼び出されたカイは怪訝に思うが、取り敢えず旧校舎へと足を踏み入れる。

まるで旧時代の遺物かのように歩く度に埃っぽい廊下の足場がギシっという嫌な音を立てるが、カイは気にせず歩く。昇降口まで歩くとそこからは階段を上り続ける。

上って上って、鍵が掛かっていない扉を開けると、屋上へと飛び出した。するとカイを呼び出した超とお下げ髪と丸メガネが特徴の葉加瀬聡美という少女、二人の姿を見付ける。

超と葉加瀬は工学部が作った光学迷彩を搭載したフード付きのコートを着ており、何か小型のモニタを見ている。

見るからに怪しいのだがカイは思い切って声を掛けてみる。

「おい、超鈴音。来たぞ」

「「ひゃい！？」」

突然耳に入ってくるカイの声に、モニタを見る事に集中していた二人の少女は奇声を上げる。

そこまで吃驚するものなのか？　とカイは訝しみつつも、まあ色々な分野で天才の超に奇声を上げさせた事はカイも驚きだ。

葉加瀬という少女はともかく超を驚かせる事は無いのではないかと思っていた。あらゆる分野に精通し、世界を変革しようとする少女がこんな可愛らしい奇声を上げる事さえ予想がつかない。

まさか「ひゃい！？」なんて超の口から聞けるとは……。

「プッ！」

「吹きだし笑いは止めてほしいヨ……」

カイが手で口を押さえながら吹きだすと、顔を引きつらせ額に青筋を立てる超だが、顔を赤らめているので恐さは半減している。そこまで奇声を上げた事が恥ずかしがったのだろうか。

そんな超が可愛いと思ってドキッとするカイだが、そんなことを表に出す訳にはいかないので、心の奥底に仕舞い込む。

「悪かったって。そう怒るな」

そう言ってカイは超の機嫌を取りつつ近付く。

超もはぁ、と溜め息を吐き、

「今回は許すネ。今は戯れている場合じゃないから」

真剣な表情に戻ってカイからモニタに視線を移す。

いったい何なんだ？　とカイは超と葉加瀬の後ろからモニタを覗き込むように見る。

そのモニタには上空からの世界樹広場が映っていて、更に世界樹広場には学園長や子供先生を始め、魔法生徒に魔法先生が集まっている。全員ではないが優秀な魔法使い達が居る。魔法使いだけでなく桜咲刹那や犬上小太郎という狗族の少年が居る事から、裏の人間が集まっているようだ。

しかも裏の人間しか居ない事から人払いの魔法を使って話している。その怪しい集会にカイは超に訊ねる。

「何だこれは？　もしかして計画がバレたとか言わないよな？」

「最初は私もそう思たがどうやら違うみたいネ」

超も魔法使い達の集まりに疑問を持ったらしく、カイと同じように計画がバレてしまったのではないかと思い、わざわざ偵察機を飛ばして観察していたようだ。

「どうやら世界樹の魔力による『必ず告白が成功する』対策の為に召集されたようですね」

「……、はァ？」

葉加瀬の言葉にカイは疑問符を浮かべる。

意味が分からない。『必ず告白が成功する』って何ですか？　と言わんばかりの表情をしているカイに、葉加瀬は問う。

「知りませんか？　世界樹の下で告白すると必ず成功するという噂。生徒達の間では有名みたいですよ？」

「……、世界樹伝説とかって言われてるやつか？　そういやクラスの間でも話題になってたか？　馬鹿だなと思って聞き流していた筈だが……」

生徒達の間で広まる『世界樹伝説』は世界樹の下で告白すると必ず成功するという噂。それはカイのクラスでも広まっていて、だがそれを本気にしている奴らは居なかった。

流石に麻帆良の人間でもこういった噂を本気にはしないようだ。もちろんカイも本気にしておらず、ましてや彼女を作る気もないので無視していた。

「それがどうやら本当らしく二十二年に一度……、一年早まりましたが世界樹から魔力が外に流れ出る影響で人の心を支配し、強制的に告白をＯＫするようですねー。しかもＯＫしてしまった場合は一生その人と付き合わなくてはならないみたいですしー」

（……、くっだらねえ）

葉加瀬の説明を聞いていてカイは心の底からくだらないど思ってしまった。

そりゃあ世界樹の魔力の影響で強制的に恋人になるのはとんでもない事で危ないだろうが、いくら何でもおかしいだろうと思ってしまう。

世界樹の魔力で強制的に恋人になる……、何というかお気楽というか平和だな、と思ってしまう。この麻帆良祭中に世界樹の魔力を利用して世界を変革するというのに……。

「あやー、偵察機破壊！　気付かれました！」

カイが呆れて空を見上げていると、葉加瀬がノイズが走るモニタを見ながら報告した。

どうやら上空に漂わせていた小型の偵察機を魔法使い達に見付かり破壊されたらしく、超も舌を巻いたようで、

「さすがネ。対魔法使いのステルスは完璧と思てたのに」

（小型の偵察機にステルス搭載ですか……、ハイテクってすげー）

感心したように言う超の言葉にカイも別の意味で感心し、顔を引きつらせていた。中身が年寄りのカイにはどうやって偵察機にステルス機能を搭載しているのか分からないだろう。

「ムッ……、マズイヨ！　追っ手がかかたヨ！」

「ええっ!?　どうしましょー?」

珍しくも焦っている超と葉加瀬にカイは一息吐いて立ち上がる。

「仕方ない。俺が囮になってやるよ」

「大丈夫なのカ？　もし捕まったら君の立場は危うくなるネ？」

鈴の付いた黒いチョーカーを首に巻くカイに超は心配そうに声を掛ける。

確かにカイが囮になり、仮に追っ手の魔法使いに捕まってしまえばカイが裏の人間だと知られ、ましてや偵察機を使って何をした！？　と尋問されるだろう。

それとなく心配してくれている超にカイはチリンと鈴を鳴らし、

「俺はさ未来を視る事が出来る。それを使えば逃げる事は簡単だ」

「しかし……」

「大丈夫だって。ハルモニアの犬からも逃げてきたし、たかが魔法使いに捕まるような真似はしない」

「……？」

カイはこの世界にはない異世界の話をしてしまったので、超は首を傾げてしまう。

「ともかくお前達は今は大人しく此処で隠れていろ。それで俺が出来るだけ追っ手を引き付けるから、その隙に逃げろ」

一通りの作戦を伝え、カイは屋上から飛ぼうとしたが、

「少し待つネ」

「ぐふッ……！」

超が手を伸ばしカイの襟首を掴んだ為、今にも飛ぼうとしていたカイは窒息してしまい、地面にのた打ち回る。

「て、めぇ……、何、しやがる！」

涙を目に浮かべながらギロッと睨み見上げるカイに、超は自分が着ている光学迷彩コートを脱ぐ。

赤っぽいチャイナ服が露わになるが、そんな事気にせずコートをカイに渡す。

「迷彩破られても顔は隠せるヨ。これを着て囮になるネ」

「超……」

一応は心配してくれている超にカイは心が動かされるが、今はそんな事をしている場合ではない。

直ぐに追っ手の魔法使いが迫っている事を感じて、カイは急いで起き上がり、超から渡されたコートを着てフードを被って顔を隠す。

迷彩コートを貸して貰ったカイは代わりに札を口元に持っていき何か囁き、その札を超に渡す。

「超、持っておけ」

「この札は？」

「認識阻害の札だ。持っているだけで効果は現れる。大人しくしていれば魔法使い達はお前を認識出来ないだろう」

カイが超に渡したのは認識阻害の札。迷彩コートをカイに渡した事で無防備となった超を心配して、カイは防護策として認識阻害の札を渡したのだ。

超はフッと笑んで、カイから渡された認識阻害の札を大切そうに持つ。

「ありがたく受け取っておくネ」

「……、じゃ、”また後で”」

カイは急いで屋上から空中へと飛んでいく。

浮遊術は覚えていないからか、ずっと空を飛ぶ事は出来ず屋上を転々と跳んで魔法使い達から逃げて行った。その直後、三人の魔法使いが超と葉加瀬に気付かず、顔を隠したカイを追っていく。

その光景を見ることしか出来ない超と葉加瀬は、今は取り敢えず大人しくほとぼりを冷ます為にじっと待つ。

「……、しかし大丈夫なんですかー、篠宮さんは？　そこまで強くないんでしょー？」

ポツリと、葉加瀬はカイについて辛辣な言葉を発する。

葉加瀬も超の計画の協力者でカイも協力者である事は超から聞かされている。しかしカイについてはそんなに強くないと葉加瀬は思っている。

カイの情報なんて男なのに女っぽいとか、昨年の麻帆良祭のイベントで『お姫様』と呼ばれたぐらいのものだ。とても役に立つ人物なのか疑ってしまうだろう。

それに超と葉加瀬が造った茶々丸もとてもじゃないが、カイが計画に役に立つとは判断出来ないでいていた。茶々丸も偶にエヴァンジェリンの呼び出しで来るカイを見ていたりするが、測るまでもなく『弱者』と認識していた。

カイ個人の身体能力、魔力量、普段の佇まい等々、あらゆる計算をしても役に立つとは思えない。それがアンチスキルスロットの呪いで弱体化しているからとはいえ……。

未来を視れる事だってそうだ。未来の紋章とかいうこの世界では不可思議な力を使える事自体、葉加瀬は疑問に思っている。カイの額に刻まれている紋章も学園内では刺青という事で認識されているが、葉加瀬も実際は噂通りなのではないかと思っている。

そんな便利な力があってたまるか、と科学者の魂がそう言っているのかもしれない。まあ葉加瀬はカイの力を直で見ていないからそう思えるだけの話なのだが。

カイに対して疑心に満ちている葉加瀬に超は確かに、と頷き、

「篠宮カイは弱いヨ。アンチスキルスロットにより弱体化しているが、完全状態でさえ精々この学園の魔法使いを倒せるレベル。学園長や高畑先生より劣るネ。魔力量もネギ坊主と比べると劣っているヨ」

「だったら何故――」

「だがそれは〝篠宮カイ個人の能力ヨ〟。彼には〝強大な力を秘めている存在を持っているネ〟」

「……、未来の紋章とかいうやつですか？」

「そう。彼は未来の紋章の魔力を使ってカシオペアを起動させたヨ。二ヶ月ほど前にネ」

「本当ですか！？　カシオペアは学祭中でしか起動しないんじゃ……」

正確には世界樹の魔力が外へ漏れている間だけ、だが。

ともかく学祭期間中でも何でもない二ヶ月前にカイは未来の紋章の魔力を使ってカシオペアを起動させ、実際に『過去』へと時間移動を果たした。それは葉加瀬には信じられない事だろう。

だが超もそれに同行しており、嘘である筈がない。

「本当ネ。あれだけの魔力を持つ計り知れない存在を篠宮カイは有している。それだけで利用価値はある。それに未来を視れるのも嘘ではないと思うヨ」

「むむー、とんでもなく非科学的な存在ですね」

篠宮カイという存在に葉加瀬はムスッと不機嫌になって、だがそのメカニズムを調べてみたいと思い始めた。

いったいあの肉体の何処に強大な力を抑え込められるのか、かなり気になるところだ。

ふと、葉加瀬は疑問に思った事がある。

「そう言えば超さんはどうやって篠宮さんの情報を得たんですかー？」

それは超がどうやってカイの詳しい情報を得たのかという事。

基本的にカイの全容を知る者はこの学園内では少ない。一応全容を知っていると言えば学園長とエヴァンジェリンぐらいなものか。真名にはカイが異世界人だという事は伝えていないし（まあ薄々は気付いているだろうが）、高畑にしろ真名と同じだ。

そんなカイの全容を何故話してもいない超が知っているのか？

一応カイの全容を知るエヴァンジェリンの従者である茶々丸の記憶ドライブから情報を得たのかと考えられるが、だとすれば葉加瀬も知っておかないといけないだろう。基本的に茶々丸のメンテナンスをするのは葉加瀬なのだから……。

そんな葉加瀬の疑問に超は一瞬葉加瀬をチラッと見て、直ぐに前方に戻す。

「簡単な話ヨ。まほネットに載っていたネ。まあ機密レベルはＡＡ。殆どの魔法使いは知らない情報だが……」

さらっと当然の如く超は言い放った。とんでもなく重要な事を。

「……、まほネットにそんな情報が載っているんですか？」

「うむ、それも彼の半生を全て書いているような内容だったネ。彼の出生からどのようにして生きてきたのか、どのような戦いをしてきたのか、事細かに書かれていたヨ。まあネット上に書かれていたのが事実ならば、彼は強いネ」

まほネットには魔法や隠された裏の世界について情報が載せられている。そのまほネットには機密レベルによって一般人はおろか、魔法使いでも閲覧が出来なくなる。

そのまほネットにカイの情報が記されているという。だがカイの機密レベルはＡＡ。魔法世界のトップクラスに君臨する者しか閲覧出来ない筈。

いったいどうやって超がその情報を閲覧したと言うのか？

超が元々居るべき時代である未来で閲覧したのか、それとも……。

「あー、しつこい。こいつら本当にしつこい」

そう愚痴を零すのはフードで顔を隠して魔法使いから逃げているカイだ。

カイの狙い通り追っ手の魔法使い達は囮となったカイを追い掛けて来ている。

追っ手は三人。褐色の肌でフレームの細い知的なメガネを掛け白いスーツを着た男性、麻帆良学園聖ウルスラ女子高等学校指定の制服を着た金髪の女子生徒、麻帆良学園本校女子中等部指定の制服を赤みがかった髪をしている女子生徒、計三人の追っ手がカイを追い掛ける。

そして現在、カイは雑踏に紛れつつ、路地裏で身を隠している。どうやって追っ手から逃げ切るか考えていた。

（しかしガンドルフィーニ先生と操影術を使う高音、それから一三歳で無詠唱魔法を使える佐倉と来たか。相手は実力者。転移魔法符を使って逃げても、魔力の残滓を嗅ぎつけられて追い付かれてしまいかねない）

カイは冷や汗を額から流しながら追っ手の情報を思い出す。

ガンドルフィーニという男は銃を使った魔法先生であり、学園内の魔法使いであれば中ぐらいの位置付け。高音は操影術を使って影の使い魔で攻撃も防御も出来る万能性を持っていて、その実力は高い。佐倉も若年者でありながら無詠唱魔法を使う事が出来る。

これが命を懸けた殺し合いならカイも容赦なく立ち向かえるのだが、今回は逃げるが勝ちなのだ。追い付かれたらカイの負けだ。

今現在、追っ手達は三方に分かれて逃走者を取り押さえようとしている。右に５０、左に８０、上に７０、それがカイと追っ手の距離。今は均衡が保たれているようで、追っ手側も慎重になっているようだ。

「……、仕方ない。転移魔法符を使うか。魔力の残滓を嗅ぎつけられても早く逃げれば何とかなるか」

殺せれば楽なんだけど……、と思いつつカイは転移魔法符を取り出す。

最近乱用しているが仕方ない。金がどんどん無くなっているが、もうカイは気にしていられない。

カイは転移魔法符を使用して、一瞬にして路地裏から姿を消した。

「！　気配が消えた……？」

逃走者を直ぐそこまで追い詰めていた追っ手のガンドルフィーニは、途端に逃走者の気配が消えた事に驚く。

ガンドルフィーニは上から逃走者を追い詰めようと建物の屋根に居た。一応銃を構えつつ、慎重に逃走者を捕まえようとしていた。最後の確認の為、高音と佐倉と念話で打ち合わせをしていたその時だった。

いきなり逃走者の気配が完全に消失した。何となく魔力の痕跡がある事からガンドルフィーニは転移魔法を使ったのではないかと推測する。

相手が転移魔法を使えるとは、　と意外そうに驚いていると、散っていた高音と佐倉がガンドルフィーニの元に駆け寄る。

「ガンドルフィーニ先生。目標、失いました」

「ふむ、意外だったな。相手は超鈴音ではないという事か……」

佐倉の言葉を聞き、ガンドルフィーニは顎に手を当てて考える。ガンドルフィーニは逃走者は超鈴音だと思っていたのだが、とんでもなく見当違いだという事に気付く。

今思えば逃走者を追っている時、妙な違和感をガンドルフィーニは感じていた。

いつもの超鈴音とは違い、逃げる事に慣れているような逃げ方をしていたのだ。長年逃げ続けてきた妙な貫禄を持っていたというか

……。

「どうしますか？　追いますか？」

高音が目つきを鋭くしながらガンドルフィーニに訊ねると、思考に入っていたガンドルフィーニは、

「いや、止めておこう。何故かな、今追っても捕らえられそうにない。きっと無駄だ。超鈴音も今頃は何処かに逃げているだろうしな」

転移魔法を使った逃走者を追う事をスパッと諦め、追跡を中止する。転移魔法の残滓を追っても逃走者を捕まえられないと判断したのだろう。

「しかし誰なんでしょうか？　転移出来る人なんて滅多に居ませんよ？」

「転移符の可能性がありますよ、愛衣」

「でも一枚８０万と高額ですよ？　相手は凄いお金持ちという事になりますよ？」

「……、確かにそうですが」

「話はそこまで。その話は後で話し合う事にしよう。今は戻ろう」

佐倉と高音の話し合いをガンドルフィーニは中断させて戻る事を告げる。

ガンドルフィーニの言葉に二人は了解と返事して、三人は戻る。

（しかし誰なんだ？　転移魔法、もしくは転移魔法符を使える人間……、これは少々危険な匂いがしてきたな）

「何とか逃げ切れたか？」

貴重な転移魔法符を使い逃げたカイは、追っ手が来そうな気配がないので逃げ切ったと判断する。

カイが転移してきたのは麻帆良学園森林地区。麻帆良祭の準備期間であっても此処は人気がないので、転移する場所には最適だ。

コートを脱いで顔を表に晒すと、カイはこれからどうしようか悩む。取り敢えずこのコートを超に返す為に研究室に寄らなければならない。

それからどうしようか、と悩んでいると、携帯電話に着信が来たようでメロディーが響き渡る。

カイは携帯電話を取り出し開くと、どうやらメールのようで発信者は浩輝からだ。

「……、うげっ。やばいな……」

浩輝からのメールを読んだカイは苦い顔をして青ざめる。カイが顔を青ざめる原因となったメールの文面が、

『クラスの誰かに会ったら要注意。強制連行されてお坊っちゃんの説教が待っているから。頑張れ♪』

何を頑張れと言うのだろうか？

ともかく自分の思惑がお坊っちゃんに知られ、激怒し、クラスの皆を使って自分を捕まえようとしているのをカイは何となく理解した。もしクラスの皆に捕まってしまえば、カイはお坊っちゃんの説教を食らってしまうだろうと浩輝は忠告メールを発信した。

浩輝に感謝しつつ超から貸してもらったコートを返しに、カイは研究室まで歩く。

クラスの皆に見付からないように……。

行間一　レアンとカイ

魔法世界、メガロメセンブリア。

とある豪邸の一室に二人の男が話し合っていた。一人は白髪頭に白髭を蓄えた老人。もう一人は漆黒の髪に血よりも濁った紅い双眸を持つ、白いローブを着た青年。名前はレアン。

レアンはドカッとふかふかの椅子に座っており、漆黒の髪を指でくるくると弄りながら、白髪頭の老人の話を聞いている。とても他人の話を聞くような態度ではないが、老人はレアンに対してはキツく言う事は出来ない。レアンに対して敵意を見せると、それだけで命を落としてしまうから。

「それで？　『完全なる世界』は私の要求には応えられないと？」

くるくると髪を弄りながら執務用の机に置かれているチェスの駒を動かす。

「は、はい、レアン様の要求には応えられない……、と」

対して白髪頭の老人は曲がった背中を必死に伸ばし、直立不動して冷や汗をかきながらレアンに報告している。

老人は非常にレアンに対して脅えている。それこそ今すぐにでも殺されてしまうのではないかと。そんな心配さえしている。

この老人はメガロメセンブリア元老院議員の一人。色々と腐っている元老院議員の一人だ。そんな腐っている老人が目の前の青年に

対しては畏怖を抱いている。

それこそ二〇年前に活躍した『紅き翼』以上に……。

「ふーん、ムカつくな、雑魚の分際で私の要求を断るとは」

「は、はい、その通りでございます、レアン様」

相変わらず髪を弄りながらチェスの駒を動かすレアン。レアンの言葉に対し老人はイエスマンの如く、はいとしか言っていない。それだけレアンが恐いと思っているのか。

だらだらと顔全体から汗を噴き出している老人に対して、レアンは老人を一瞥し、

「何でそんなに汗、噴き出しているのかな？」

「あ、あの、これは……」

「……、ねえ？　君、〝新しい世界〟に行ってみない？」

「……！」

レアンが老人を見据えて告げると、老人は顔面蒼白となり、ガタガタと体が震えだす。

その老人の脅える様子を見て、レアンはケタケタと笑う。

「君は駄目だ。使えないね。ほんと役に立たない。だから君は〝新しい世界に飛んでもらうよ〟」

「ゆ、許してください、レアン様！　どうかそれだけは！！」

老人は何が恐いのか、土下座までして許しを懇願している。涙を流しながら額を床に擦り付けている老人に対して、レアンは椅子から立ち上がって冷たい眼光を放つ。

まるで虫螻を見るような、侮蔑の目で。

「残念だが君では役不足のようだ。そうだな……、竜にでも食べられてみるかい？」

「え……？」

レアンの言葉に老人は顔を上げてレアンを見上げる。レアンは口角を引き上げて笑う。

「今から君は〝竜だけが住む世界〟に行ってもらう。竜のエサにでもなってこい」

「ひいッ！」

そう言うとレアンの紅い目に紋様が浮かび上がり、レアンの体が淡く光り出す。

やばい！　と老人は本能的に身体を起こし、此処から逃げようとする。自分の命を守る為、一刻も早く此処から逃げ出したい。

だが老人の願いは届かず、レアンは狂気の笑みを浮かべる。

「消えろ」

その一言を呟いた瞬間、老人の周りに黒い空間が出現し、容赦なく老人を吸い込む。老人の醜い悲鳴が部屋中に響き渡り吸い込まれていく。そして黒い空間に完全に取り込まれ、老人は此処から……、”この世界”　から消え去った。

レアンが行ったのは相手を異世界へと送る魔法。禁術に手を出して代償を支払って得た　”力の一つ”　。

彼はこの力で全ての世界、『百万世界』を渡り歩く事を可能とした。異世界間を繋ぐ『トビラ』など必要ともせず、彼は一人で他の世界へ行けてしまえる。そしてその力を使って自分だけでなく他人をも異世界に送る事が出来る。

現在、麻帆良学園に身を寄せている異世界人、篠宮カイという少年が居る。その少年は本来この世界に居る筈が無かったし、この世界に来る筈も無かった。それなのにこの世界に来てしまった。

それはレアンによる空間魔法を食らってしまったからだ。あの元老院議員と同じように、カイも本来居るべき世界からこの世界へと飛ばされてしまった。

全てはこの男による『実験』の為に……。

ふぅ、と一息吐いたレアンはドカッと椅子に座り、机に脚を置く。

その際、チェス盤が崩れるがレアンは気にしないでいる。

それよりもレアンは苛立っているのか、脚でバンバンと机を叩く。

「この私自らゴミ掃除をしなくてはならないなんて……、『完全なる世界』も滅ぼすか。どうせ邪魔な存在だし」

ギリッと奥歯を噛み締めて表情を歪ませているレアンは、妙な事を企てようとする。

『完全なる世界』の消滅。

どちらにしろレアンの『実験』の為に完全なる世界は滅ぶ事になるのだが、今から滅ぼしに行こうかなどとレアンは考える。居ても居なくてもレアンにとってはどっちでも良いこと。今から滅ぼしに行ってもレアンには何の問題はない。

どうしようかなー、と考えていると部屋の扉が開かれる。

レアンは手を頭の後ろで組んで、部屋に入ってきた者を迎える。

「やあ、マリア。報告かな？」

部屋に入ってきた者はライトグリーンの髪と金色の目が特徴な女性、マリア・フォースト。

京都でリョウメンスクナノカミを使ってカイ（未来の紋章）と戦ったが、最後の最後でカイに身体を貫かれてしまい、引き分けとなった。

その後、マリアはレアンにより助けられ、緑の液体が入った巨大な容器に入れられ治療していた。そんな状態であったマリアだったが、今は回復して変わらずレアンの為に動いている。

そんなマリアは一枚の紙に書かれている事をレアンに報告する。

「はい、カイについてです。現在は麻帆良祭という大規模な学園祭をやるようで、いくらでも侵入可能となっております」

「それで？」

「カイは麻帆良祭の最終日に超鈴音という女子生徒と共に、旧世界に魔法をバラそうと暗躍するようですね」

マリアの報告を聞いていたレアンは、ん？　と何か引っかかった。

「カイは旧世界に魔法をバラそうとしているのか？」

「はい。『彼』の情報ではカイに掛けられているアンチスキルスロットを超鈴音という少女が解ける薬を既に開発しているようで、それを報酬にカイは超鈴音と共に動いているようです」

「……、なる程。アンチスキルスロットをね……、（超鈴音を侮り過ぎていたか……）」

「？　何か仰いましたか？」

レアンが目を細めて呟いくと、マリアが聞き取れなかったらしく訊ねる。訊ねられたレアンは何でもない、と言って話を続けさせる。

マリアは疑問符を浮かべながらも報告を続ける。

「尚、カイは鈴の付いた黒いチョーカーを着ける事でアンチスキルスロットの呪いを回避する事が出来たようです」

「……、だったらカイが超鈴音と組む理由が分からないな？　魔力が戻ったのならそれで良い筈なのだから」

確かにレアンの言う通り黒いチョーカーを付ければ魔力が戻ると言うなら、それだけを持って逃げるなり何なりすればいい。いちいち超に協力する意味が分からない。

「どうやらアンチスキルスロットの呪いが解かれているのは黒いチョーカーを付けている間だけのようです。外したらアンチスキルスロットの作用が働いて魔力は封じられる。カイからしてみれば永遠に黒いチョーカーを付けるより、薬を飲んで完全にアンチスキルスロットを解いた方が良いと思っているかもしれませんね」

「……、そういう考えに至るのか……」

レアンには分からないのだろう。カイが鈴の付いた黒いチョーカーを着けていると『飼い猫』に見える事を。

それに歩くだけでチリンチリンと鈴が鳴るので、隠密行動時には迷惑極まりないのだ。

そんな事を知らないレアンは超と組んでまで薬を欲しがっているカイの考えなんて分からないだろう。

まあいい、と言ってレアンは椅子から立ち上がる。

「それじゃあ私達も麻帆良学園に向かおうか」

「向かうのですか？　別に向かう必要は無いかと思われるのですが……」

今から麻帆良学園に向かおうとするレアンにマリアは疑問をぶつける。

フッとレアンは口角を上げるとマリアに視線を移して、

「モニタ越しに見るだけじゃなく、そろそろ直接見ておきたくてね。それに〝同族の者〟が会いに行かないでどうするんだい？」

ニッコリと微笑みながら答えた。その内容がマリアには更に疑問を呼び寄せる。

「同族……、ですか……？」

「教えていなかったか？　私のファミリーネームも知らないのか？」

「……、はい。教えて頂いていません」

マリアは長い時間、レアンの主として付き従ってきた。レアンに忠誠を誓って従者として行動を共にしてきた。

それでもマリアはレアンのファミリーネームを知らなかった。

別にファミリーネームを知らなくてもレアンを想っているだけで

行動を共にする事が出来るのだから。だからこれまでマリアはレアンのファミリーネームなんてどうでも良かった。

だがレアンがカイと”同族”だと知らされれば、気になってくる。いや、大体の見当は付いてる。レアンのファミリーネームは……。

「そうか。教えてなかったか。では教えるとしよう。私のファミリーネームは”カイと同じだ”。では私は先に表で待っている。マリアはこの屋敷を跡形なく処分しろ。主無き屋敷など有っても無駄だからな」

そう言ってレアンは一瞬にしてこの場から姿を消す。

一方、カイとレアンの関連性を聞かされたマリアは呆然としている。今まで未来の紋章と気に入ったという理由だけで、カイを執拗として追っていたレアン。その本当の理由が別にある事はマリアも薄々気付いていた。

未来の紋章を追う理由は何となく分かる。未来の紋章には絶大な力と『未来』を視る事が出来る力を持っている。手に入れたいと思うのも分かる事だ。

だがカイに至っては本当に理由が分からなかった。未来の紋章を宿しているからと言うなら、執拗に追うのは分かる。ただ殺しても良いカイをレアンは敢えて殺さず、生かして連れて来させるようにしていた。

未来の紋章を宿していないカイなんて、ただの人間だ。多少戦える事は出来るだろうが、それでもレアンやマリアには足下にも及ば

ない。未来の紋章を奪った後、カイがいたところで邪魔な筈だ。

それなのにレアンはカイを生かしたまま手に入れようとしている。

その真の理由が……、

「レアン様のファミリーネーム……、〝レアン・メルフェス〟」

約一〇〇年前のある日。

一人の青年が雲一つ無い青空を見上げていた。青空は青空なのだが、青年が立っている世界は麻帆良学園等がある世界とは違う。

青年が本来居るべき世界。『真なる二十七の紋章』が世界のエネルギー源となっている世界である。

その世界のとある地で、一つの隠された集落があった。その集落は『真なる二十七の紋章』の一つ、未来の紋章を奉っている。

未来の紋章はその集落では神のように崇められており、地下深く

の祭壇で眠りに就いていた。集落にいる人間は誰も未来の紋章を独自に継承せようとはせず、未来の紋章も誰かに宿る事はしなかった。

青年はそんな集落で生まれた人間だ。名前はレアン・メルフェス。艶のある黒髪に淀みのない黒い目、爽やかという言葉が似合う容姿に老若男女から愛される性格をした好青年だ。

レアンの魔力は集落の人間よりもずば抜けて高く、魔法の才能が凄かった。ありとあらゆる紋章を宿す事が出来、どの紋章も使いこなす事が出来、どんな魔法も使いこなす事が出来ていた。

強国の一軍を一人で壊滅させる事が出来るくらいに強かった。

そんなレアンも唯一宿した事が無いのは世界のバランスを取っている真なる二十七の紋章だ。世界を形成していると言っても過言ではない程、絶大な力を宿している紋章。その一つがレアン出身の集落に眠っている。

レアンは未来の紋章を何としても自分の身に宿したかった。

だが真の紋章は基本的に紋章の意思に認められた人間でしか宿す事は出来ない。自分が宿したいからと言って、真の紋章が認めなければ宿す事なんて不可能なのだ。

だからレアンは未来の紋章を宿せないでいた。

レアンは未来の紋章を手に入れたがっているが、そこに理由はない。あるとすれば”ただ興味があるから”。興味があるからレアンは未来の紋章を宿したいと思っている。

真の紋章の一つでも破壊されれば世界は崩壊すると言われている。そんな紋章を宿して暴走させればいったいどれくらいの規模になるのか、レアンは知りたかったのだ。

そして未来の紋章は真の紋章の中でも強力な紋章。レアンが興味を湧いたとしても仕方ない。

「真の紋章を集める事を国策としているハルモニアが一番に求めている未来の紋章……。いったい誰が宿すのか……」

「レアンにぃー！」

ポツリと独り言を呟くレアンに背後から可愛らしい子供の声が聞こえてくる。その声が自分を呼んでいる事に気付き、レアンは後ろを振り向く。

「お、カイか」

トテトテと小さい足を必死に動かしてレアンに近付く小さい子供。その頭にはこれまた小さい白い子猫を頭に乗せて、トテトテと歩いている男の子。

名前はカイ・メルフェス。まだ五歳くらいの子供でまん丸い顔が可愛らしい。レアンと同じ黒髪に黒目、何処の街にでも居る至って普通の子供。

レアン・メルフェスとカイ・メルフェス。

二人とも同じファミリーネームだが兄弟とかそういう訳ではない。

この集落で生まれた人間は全員が『メルフェス』というファミリーネームを付けている。『メルフェス』という名の意味は『未来に隷属する者』。未来の紋章を神と崇めている集落の人間にぴったりの名でもあった。

ともかくファミリーネームが同じという事はほんの少し、二人には同じ血が流れている。要は親戚と考えれば良い。

トテトテとレアンの傍まで歩いてきたカイに、レアンはニコッと屈んでカイの頬に刻まれた三本の傷に触れる。

「この傷はどうしたんだい？」

「あたまに乗ってるネコにひっかかれた」

「はは！　そうか……、でも仲良しになったみたいだね？」

「うん！　なかよしになった！」

微笑みながら掛けられたレアンの言葉にカイもふにゃっと笑って答える。

このカイの笑顔を見てみると未来の紋章を宿したいという野望に駆られているレアンも思わず顔を綻ばせる。無垢で何も知らない子供の笑顔を見ていると、そんな野望なんてしなくても良いとさえレアンは思ってしまう。

「ねぇ、レアンにぃ？」

「ん？　どうした？」

ふと、カイがレアンの目を真っ直ぐに捉えて呼んできた為、レアンは現実に戻される。

「こんなところで何してたの？」

「ああ、そんな事か。明日はどんな天気になるかなと思っていたんだ」

「てんき？　ならあしたは雨だよ」

レアンの言葉にカイは無垢ゆえに即答する。

その言葉にレアンは表情に少し影を差して、それでもカイに微笑みかけながら問う。

「……、また未来の紋章と話していたのかい？」

「うん」

「……、そうか」

レアンの問いにカイは無垢で即答で答えて見せる。

この見た目五歳くらいの少年は宿してもいないのに未来の紋章と話す事が出来ていた。これはレアンを含めた集落の人間には絶対に出来なかった。

今でも地下深くに眠っている未来の紋章が一人の人間に対して語りかける事なんて今まではあり得なかった。有事の際は集落全員に

語りかける事は有るのだが、基本的に誰か限定して語りかける事は今まで無かった。

当初はカイが宿してもいない未来の紋章と話す事が出来るなんて信じていなかったが、カイが言った事が現実になった時があり、段々と信じるようになっていった。

レアンもこれは信じる事しか出来ず、同時に何故こんな子供が未来の紋章と話す事が出来るのだろうかと嫉妬の念を抱く。

特に魔力が凄まじいとか、実は子供の分際で体術が凄いとか、そう言った才能は持ち合わせていないごく普通の子供。そんな子供が何故未来の紋章と話せるのか、レアンは疑念と嫉妬で心が一杯になっている。

才能溢れるレアンと凡人でしかないカイ。

レアンに足りないものとは……？

「レアンにぃ？」

「……、あぁ、何でもないよ」

「……？」

「さあ一緒に戻ろうか。カイのお父さんにお母さんも心配しているよ」

「うん」

レアンはカイの手を取って集落へと歩き始める。

トテトテとおぼつかない足取りで歩くカイをレアンは目を細めて見る。

（この子が私よりも未来の紋章の宿主として相応しいなら、一旦宿させるように画策しなければ……）

頭の中でどうやってこの子供に未来の紋章を宿させようかとレアンは考える。そしてカイが未来の紋章を宿したら即座にカイを殺して未来の紋章を自分に宿す。

全ては自分が未来の紋章を手に入れる為にカイを殺そうとしている。

全て自分の思い通りにする為に……。

行間一　レアンとカイ（後書き）

少し少ないし遅い更新で申し訳ありません。（楽しみにしている人は殆どいらっしゃらないでしょうが）

現実で私の精神状態がボロボロになってしまい、更新も遅れ文章もいつもよりはおかしい感じになっているかもしれません。

それから更新速度も落ちると思います。精神状態が平常に戻るまでは。

あとサブタイトルが少し適当な感じがするのは前話に組み込むか悩んでいるからです。

若しくはこの話に加筆するかもしれないのでサブタイトルが適当な感じになっています。

次の話を更新する時はサブタイトルも変わっているかもしれません。

麻帆良祭一日目1

『只今より第七八回、麻帆良祭を開始します！！』

麻帆良中に響き渡るようにながされるアナウンスと同時に大規模な麻帆良祭が開始される。

麻帆良祭開始宣言されたと同時に仮想パレードやら麻帆良航空部によるショーが繰り広げられており、麻帆良にやって来た一般人が歓声を上げている。

麻帆良一大イベントと言ってもいい麻帆良祭は開始直後から盛況で、人が多い。去年の統計で三日間の入場者数は延べで約四〇万人、世界でも有数の学園都市の全校合同イベントの為、たくさんの人がやって来る。

麻帆良学園は学園祭という名の一大テーマパークの様相を呈しており、開催期間中バイタリティ溢れる麻帆良の学生達による技術と熱意を結集したイベントやアトラクションが学園各地で開かれ、噂を聞きつけた関東圏からの観光客は家族連れを中心として年々増加傾向にあり、ここ一〇数年で各クラブによる商業化が過激さを増したこの麻帆良祭では、一説には一日で二億六〇〇〇万もの金が動くと言われている。

「……、と自分の心の中で麻帆良祭の概要を語ってみたりする……」

麻帆良祭を楽しんでいる観光客達を尻目に、カイは深く溜め息を吐いて疲れた表情を表す。

麻帆良祭であるにも関わらず学校指定の制服姿であり、右手には勧誘用のチラシを持っている。

カイのクラスでは『ホストクラブ』なるものを出し物としてやっている訳だが、カイは基本的に戦力になる事はない。女の敵と言われる程の女顔で客を呼び寄せる力は無いのだ。

故にお坊っちゃんから戦力外通告を通達され、カイは麻帆良学園にやって来た客（特に女性）にチラシを渡す仕事をしている。まあカイの思惑通りとなったので、文句は言わない。

「しかし昨日は酷かったな。あれじゃイジメだよ」

昨日カイはクラスの出し物の準備をしている最中、逃亡して超の手伝いに行った。その後でカイを捜索していたクラスメイト達に見つかってしまい、お坊っちゃんを先頭にお仕置きを食らってしまった。

それはカイが悪い事なのでお仕置きを受けても文句は言えない。文句は全く言えないのでしっかりとチラシを配る事にする。

「休憩の際はこちらにどうぞ」

作られた営業スマイルを張り付けてカイは女性客にチラシを渡していく。チラシを渡された女性も興味を持ってくれたようで、一度行ってみると約束してくれた。

この調子でカイどんどん女性客にチラシを渡していく。手当たり次第に渡していく。

そして……。

「よし終わった。あとは自由時間だな」

手元にあるチラシを全て配り終わったカイは伸びをして、適当に麻帆良学園内を歩く事にした。

チラシ配りを終えたらクラスに戻るのが普通なのだろうが、サボるのが大好きなカイは戻らない。どうせカイは何も役に立たないので居るだけ無駄なのだ。

「さて、これからどうしようかな？」

自由時間となったカイはこれからどうするか考える。

超と行動を起こすのは基本的に最終日だ。一日目と二日目はカイが動く必要はない。取り敢えずカイが超に着いたという事を知られなければ、自由に過ごしても良いということ。

なので自由に過ごしたい訳だが、いまいち行きたい場所がない。現在地が世界樹広場に居る為、それなりに施設は有るのだが、やっぱりカイが興味を示す場所はない。

どうしたものか、と悩んでいると、

「こんな所で何やっているんだい、カイ？」

突然背後から男の声で掛けられてカイはゆっくりと振り返る。

其処に居たのはインテリなメガネを掛け顎髭を少々蓄えた四〇代

に突入していそうな男。

「……、高畑先生」

名前はタカミチ・T・高畑。麻帆良学園の男性教師で英語担当。学園広域指導員として喧嘩っ早い生徒達を指導していたりもする男。一部の不良生徒達からは『死の眼鏡（デスメガネ）』、『笑う死神』などと通り名を付けられ恐れられている。

そんな高畑先生は実は魔法先生。麻帆良学園内でも学園長を除いて一番強いとされているのが高畑先生なのだ。もちろん完全状態に戻ったカイでも勝てない。せいぜい引き分けに持ち込めるかどうか。

そんな高畑先生は魔法先生であるが魔法使いという訳ではない。高畑先生は生まれつき呪文の詠唱が出来ない体質であり、『立派な魔法使い』の資格はない。しかしそれに値する程の実績を挙げている事が評価され、魔法世界でもＡＡ＋というランク付けされ、高い評価を受けている。

そして高畑先生は二〇年前に戦争で活躍した『紅き翼』の一人でもあったらしいのだが、カイはそんな事知らない。別にカイは『紅き翼』と仲良く行動していた訳でもないので、高畑先生が『紅き翼』と行動していたなんてこの学園に来るまで知らなかった。

それはさておき、高畑先生もカイの正体を知る人物の一人。『学園長の懐刀』として裏で人を殺していたり、カイが未来の紋章というこの世界にはない力を持っている事も知っている。

ある程度の事を知られている高畑先生にカイは少々警戒しつつも、学園の生徒として対応する。

「どうしたんですか、高畑先生？　例のパトロールですか？」

例のパトロールと言うのは告白妨害作戦である。

「いやいや、僕には他の任務を与えられているからね」

「任務、ですか？」

「うん。と言っても偵察程度だけどね。少し要注意生徒を見張るだけだよ」

にこやかに答える高畑先生の言葉にカイは表情に出さずに訝しむ。

要注意生徒と言うのは間違いなく超鈴音のことだ。麻帆良祭前から度々怪しい行動を取っていた超は、当然の如く学園内の魔法使いに目を付けられている。

昨日も魔法使い達の集会を盗み見ていたので、余計に敏感になっているのだろう。

それでも超の目的や計画については誰も知らない。世界に対して魔法を公表しようとしているなんて誰も気付かないでいる。ましてやカイがそれに協力している事も知らない。

「実に大変そうですね」

「少し厄介かもしれないね。それはともかく良いのかい？　クラスの出し物とかで忙しくないのかい？」

「俺は戦力外通告されたので外で客寄せです」

「『ホストクラブ』だったっけ？　よく西園寺君が許してくれたなー」

麻帆良祭で『ホストクラブ』なんてよくやるなー、と高畑先生は言いたいのだろう。確かに学園祭で『ホストクラブ』なんて異色かもしれない。

ちなみに高畑先生が言った『西園寺』と言うのはお坊っちゃんの名字である。

「お坊っちゃんも中学最後の年だからって、今年は集客数一位を狙っているみたいですしね。出し物や手段は問うていられないんでしょう。まあ俺としては楽になって良いですがね」

「ははは！　女顔で生まれて初めて感謝を覚えたんじゃないか？」

思惑通りと言わんばかりに怪しい笑みを浮かべるカイに、高畑先生もカイの顔を指摘して声を上げて笑う。

この笑いにはカイも少々ムカッとしたが、カイは堪える。

「ええ、そうですね。長年生きてきた中で初めて女顔で良かったと思いますよ」

「……、それじゃ僕はそろそろ行くよ。カイもゆっくり楽しむといいよ」

そう言って高畑先生はカイの元から歩いて去っていく。

去っていった高畑先生の後ろ姿を眺めて、

「いったい何なんだ、ありゃ？」

溜め息を混ぜつつカイは吐き捨てた。久しぶりに高畑先生と会った訳だが、まあ無意義なものであった。

取り敢えずこれからどうするか、とカイは携帯電話を取り出して時間を確認する。

現在の時刻は十一時三〇分。いつの間にか麻帆良祭開始から一時間半も経っており、何か時間が経つのが早く感じてしまう。まあ感じるだけで他意なんてものは無い。

「昼時か。適当に歩き回るか」

一応昼時でもあるので何処かで空腹を凌ごうとカイは歩き出した。

現在の時刻、十一時五〇分。

人の荒波を掻い潜り、カイはレストランエリアへとやって来た。流石に麻帆良祭というだけあって異様な程の人の数があり、此処に来るだけで精神的に疲れてしまった。

ぐったりとうなだれるように歩くカイはレストランエリアにやって来た訳だが、何処もかしこも行列だらけだった。超包子を始め、何処のレストランも行列が出来ていた。特に超包子は数十人、いや数百人は並んでいる。異常だ。

確かに超包子は麻帆良学園内でも人気だし、外から来た人も目当てにしているのかもしれない。

時間的にも悪かったのだろう、暫くは食事にありつけない。その現実を突きつけられたカイは、

「……、仕方ない、屋台の方にするか」

とぼとぼと肩を落としながらカイは屋台が開かれている所まで歩く。屋台なら行列も少なく、早く食べる事が出来る……そう考えたカイは真っ直ぐに屋台が開かれている所まで歩く。

屋台はだいたいが運動部が開いているもので、たこ焼き屋とかお好み焼き屋とか定番な店が多い。

そうこうしているといつの間にか屋台がある場所に辿り着いていた。

手頃なたこ焼き屋で空腹を満たすか、とカイは思いたこ焼き屋に向かう。

「あれ？　カイ君？」

何処か聞き覚えのある少女の声にカイは顔を上げると、屋台の中にアキラが居たのだ。

「アキラ……、ってことは水泳部の？」

「うん」

どうやらカイはアキラが所属する水泳部の出し物、たこ焼き屋に来ていたようだ。知り合いの少女と会って妙な気分だが、カイは顔には出さずに注文する事にする。

「それじゃチーズたこ焼き一つ」

「うん、チーズたこ焼きだね」

カイがメニューに書かれているチーズたこ焼きを注文すると、アキラが早速調理に取り掛かる。手際よくたこ焼きをぽんぽんとひっくり返していき、どんどんたこ焼きが出来ていく。

そしてあっという間にチーズたこ焼きが完成した。

「はい。三〇〇円になります」

「あ、はい」

料金を渡し、アキラから紙皿に乗せられたたこ焼きを貰う。

「早速食べても良い？」

「うん……」

別に了解を取る必要は無いのだが、カイはアキラから許可を貰ってから食べ始める。一つたこ焼きを爪楊枝で取って口に運ぶ。たこ焼きを食べる様子をまじまじと緊張感を持って見つめるアキラに、その様子を他の水泳部員……という不可思議な構図が出来上がっている。

ムグムグと食べるカイはアキラの目を見て、

「うん、美味しい。意外とイケる事にびっくり」

「よかった……、美味しいそうで何よりって感じで……」

（”意外とイケる”　にツッコミ入れないんだね、アキラ……）

カイのチーズたこ焼きに関する感想にアキラは笑顔を見せる。

そして二人の会話を聞いていた水泳部員はカイの　”意外とイケる”　に「意外とは要らないんだよ『お姫様』」と心の中でツッコミを入れていたのだが、決して口には出さない。隣りに居るアキラが嬉しそうな顔をするものだから、下手なことは言えない。

（しかしこのアキラの反応……、もしや『お姫様』に……？）

アキラの楽しそうな顔を次々と来る客を対処しながら見ていた水

泳部員の彼女は、アキラがカイに対して好意なるものを持っているのではないかと感づく。

基本口数が少ないアキラが水泳部員の彼女が知らないような顔を、目の前に居るカイには見せてよく話す現実を突き付けられれば、誰だって感づくかもしれない。

しかしながら相手は言わずと知れた『お姫様』だ。その容姿から一部の女子から『女の敵』と扱いされているカイは確かに倍率は極端に低いだろう。

だけどなあ……、と彼女は苦い顔を浮かべる。噂ではカイは喧嘩が弱く他人を守れるどころか、自分の身すら守れない程の弱さ。噂好きの彼女は仮にカイとアキラが付き合う事になったとして、何か危機的状況になったとしてアキラをカイが守れるのかどうか。

まあ守れないだろう。一般人の彼女からしても見て分かるようにカイは貧弱そうな体をしていて、とても恋人を守れるようには見えない。逆にアキラがカイを守るのではないかと想像してしまう。

やっぱり似合わないよねー、と彼女は自己完結した。

結論として『お姫様』は無いな。

そう思う彼女であっても、やはり最後に決めるのはアキラだ。アキラが幸せになれればそれで良いのかもしれない。

一方、カイとアキラは、

「それじゃ予定とか有るんだ……？」

「ああ。少し重要な予定があるんだけどね……」

「そっか……、カイ君も大変そうだね」

「お互いにね」

お互いのこれからの予定を話していたりしていたが、妙にアキラが落ち込んでいたりする。だがカイはその事に気にしない。

「それじゃ俺は行くよ。またね」

そしていつまでもこんな所に居て邪魔する訳にはいかないので、カイは手を振って去っていく。

「うん……、また」

アキラもカイに手を振って別れを告げる。その表情は何処か寂しそうで切ない。

その様子に気付いた水泳部員の彼女はアキラに声を掛ける。

「アキラ、良いの？　篠宮君ってそうそう狙ってる人いないし、チャンスだったりするんじゃない？」

「……、何が？」

「何がって篠宮君のこと好きなんじゃないの？」

特にカイと何の約束もしていないアキラに彼女は疑問をぶつける。

「……、多分カイ君は誰かと一緒になる事なんて考えてないと思う。誰かと付き合ったりせず、一人でずっと過ごしたいと願ってるんだと思う」

彼女の疑問にアキラは視線を下に向けて儚げに答える。

「それって……？」

「仮に告白したとしてもカイ君は断ると思う。どんなに可愛い人であっても、どんなに綺麗な人であっても、どんなに包容力がある人でも、告白されても断るのがカイ君だよ。一人っきりになる為に……」

「アキラ……」

カイについて儚げに語るアキラに彼女は上手く言葉が言えない。

女子の中では一、二を争うほどカイと関わってきたアキラにしか分からない事だろう。アキラはカイに対して多少なりとも好意は寄せていただろう。そんなアキラだからこそカイを色々と見てきた。

色々と見てきた結果、アキラはカイの内なる願いを見抜いてしまった。それはカイが一人で在り続けたいと願っていること。

アキラにはカイの秘密なんて知らないが、それでも〝何か〟有るのではないか？　と気付いている。その〝何か〟が原因でカイは一人になりたがっているとアキラは推測している。

普通ならば好きな相手が一人になりたがっていても、孤独にさせないように傍に居ようとするだろう。孤独は思った以上に辛いもの。人間一人で生きていけるほど強くはないのだから。

最初はアキラもそうしようと思った。いつの日か自覚した好意を持って、一人になりたがるカイに無理にでも傍に居てやろうと思っていた。孤独に生きようとする少年を引き上げようとした。

だが、カイは”他の一人になりたがる人と根本的に違う”のだと、アキラは言葉では説明出来ない直感を感じてしまった。

カイは他の人達と根本的に違う。他の人達と違って、本当に一人で生きていけるのだと、アキラは何故か理解してしまった。

理解してしまった以上、無理に傍に居る訳にいかない。無理に傍に居て、好きな人の願いを踏みにじってはいけない。

それがあってアキラはカイに若干近い距離でキープしている。だからアキラはカイには告白なんてしないし、毎日一緒に居ようともしない。

それがアキラの好きな人の願いなのだから……。

「だから今の関係が最適なんだと思う……。ある程度近く、けど近すぎずな関係が……」

「……、そっか。アキラがそう決めたんなら私は何も言わないよ」

「うん……」

現在時刻、一三時二五分。

チーズたこ焼きを食べ終わったカイは紙皿を設置されているゴミ箱に捨てて、学園都市をてくてく歩いている。

やはり何処もかしこも人だらけで、暑苦しい。それだけ麻帆良祭は盛況という事で学園側としては良いことなのだろうが、カイとしては精神的に辛い。もしこんな場所で襲撃されたら堪ったものじゃない。

しかもその襲撃者がマリアだったら終わりだ。レアンに忠実なマリアが『周りの無関係な人間を巻き込んでも良いからカイを捕らえろ』なんて命令を受けていたら、大量虐殺ショーの始まりだ。

きっとマリアは二度と麻帆良祭が開催されない程に血の雨を降らせながらカイを捕らえようとするのだろう。それはカイもごめんだ。

だからカイは人気の無い所に行きたい訳だが、麻帆良祭が開催されているので人気の無い場所なんて皆無だ。せいぜい森林地区か。

森林地区に行って寝て時間を過ごしても良いが、それだと寝ている最中に変な虫が服の中に入ったりしないか心配だ……という馬鹿な事をカイは考えている。

いったいどうしたものか、と悩んでいると、

「キャー！！　直哉君！？　何コレ！？　学祭ドッキリ！？」

突然悲鳴に似た声が上がった為にカイはその方向を振り向く。

どうやら高等部の男子生徒が何者かによって撃たれてしまい、気絶しているようだ。

（ああー、此処って告白ポイントだったっけ？　って世界樹広場だから当然か。しかし撃たれたとなると告白阻止したのは一人しか居ないよな……）

カイははぁっと溜め息を吐きながら、狙撃手を探す。何となく時間を潰せそうだとカイは思った為、狙撃手を探す事にしたのだ。

男子生徒が倒れている位置からピンポイントで狙える高い位置……、とカイは冷静にじっくりと獲物を探すように探索する。

「……、見つけた」

ニヤリと口角を上げて笑むカイの目線の先には褐色の女性。

まあ何となく面白そうな予感がするので、カイは褐色女が居る場所まで行く事にした。

その場所には褐色女こと龍宮真名の姿が在った。ライフルを構え、いつ告白生徒が現れても良いように備えている。

そんな真名に一つの影が忍び寄る。

真名はフーッと息を吐き捨て、愛用の銃を手にして忍び寄る影に突き付ける。

「撃たないで。撃たないでください龍宮さん」

忍び寄る影、と言ってもカイなのだが、カイは顔を引きつらせ両手を挙げ降参の意を示す。

「ふん、お前か……」

そう言って真名はつまらなさそうに突き付けていた銃を下げる。

「お前か……、って気付いていただろ？」

「まあな」

「この女は……」

拳をワナワナと震わせ、やっぱり龍宮とは相容れない存在だな、とカイは再認識する。

「それよりもお前はもうちょっとマシなやり方は無いのか？　いくら麻帆良内だからって色々とおかしいだろ？　それにあの銃弾、絶対殺傷能力持ってるだろ？」

「安心しろ。弾は殺傷能力は無いぞ？　ただの神経毒入り麻酔弾だがな」

「安心出来ねえよ！！」

真名が例の銃弾をカイに見せながら言った言葉に、カイは両手を振り上げてツッコミを入れる。

明らかに人を殺せる銃弾を使っている真名に色々とツッコミを入れたいカイだが、もう何を言っても無駄なんだろうと思う。この女に対して注意しても聞く耳持たないのだろうから。

そんな時、ピピピと真名が手に持っている機械が音を鳴らして、何かを知らせている。

「チッ、面倒だな。複数居る」

真名の言葉から察するにどうやら告白生徒が現れた事を知らせる機械のようだ。

「また撃つ気か？」

「当然だ」

カイの言葉に真名はそう返答すると同時にライフルを告白生徒に照準を合わせ、次々と撃っていく。真名が撃つのと同時にカイは両耳を手で塞いで、発砲音を出来るだけ防音に励む。

相変わらず狙撃能力高いなー、なんてカイは呆然としながら真名の狙撃と狙撃された生徒達を見る。撃たれた生徒達の中に一人、明らかに頭から血が噴出しているのだが、まあ無視しておいた方が良いのかもしれない。

もう言及しても仕方ないような気さえしてきたから……。

「ふぅ、間に合ったな……」

「……」

額に流れる汗を手で拭い安堵の言葉を吐いた真名に、カイは本当に苦笑いを浮かべる事しか出来ない。

「しかし龍宮がこんな馬鹿げた仕事を引き受けるとはな？」

ふと疑問に思ったカイは真名にぶつけてみる。すると真名はカイの方へ振り返り、

「なに、学園長が奮発してくれたからな。だからくだらない仕事を引き受けているんだよ」

フフッと妖艶な笑みを浮かべて答えた。表情と言葉が合っていないようにも思えるが、気にしない。

「俺は勘弁だな。高い報酬を積まれてもこの仕事はやる気がしない」

「人を殺している方が楽か？」

「当然だろ？　命を奪わずに倒すよりも命を奪って倒す方が楽だ。手加減なんてしないで良いしな」

「手加減出来るほどお前は強くないがな」

「……、確かに仰る通りで」

やはりこの女には全部負けてしまうな、とカイは悔しさを滲ませながら真名に鋭さがない睨みを利かす。

カイの睨みなんて全く恐くない真名は再び機械が鳴ったので、告白阻止エリアの方へ目を向ける。

「次から次へと……、まとめて撃ち殺してやる」

「……、殺すって言っちゃってるよこの人……」

もう何も言うまい、とカイはやれやれと首を横に振り、壁に凭れかかる。何だか色々と疲れたので一眠りしようかと思い、銃声をＢＧＭにして目を閉じる。

間もなく眠りに就こうとしているカイの頭に未来の紋章の声が響き渡る。

『おい、起きろ』

（いきなり何だ？　それに龍宮も居るからあんまり話しかけないでもらいたい）

『そんなこと言っている場合じゃない。〝奴〟が近くに居る』

未来の紋章の言葉にカイの意識が一気に覚醒し、目を開く。

（……、あいつがこの近くに？）

『お前は感じないのか？　同じ集落で生まれたくせに』

（止めてくれ。それは俺の消したい過去の一つなんだぞ）

『ともかくあの男が近くに居る。用心するんだな』

それだけを言って未来の紋章の声は途切れる。カイの深層へと戻っていったようだ。

ともかく未来の紋章の忠告を受け、カイは何故気付かなかったんだと自分を責め、反省する。

だが今は反省している場合ではなく、誰も巻き込まない場所へ行くしかない。

「じゃあ龍宮、俺はそろそろ行くから仕事頑張ってください」

「手伝いも無しか？」

「手伝って俺の正体バレたら元も子もないだろ。じゃあな」

そう言ってカイは真名の元から早々と立ち去る。

そのカイの様子に少々訝しむが、今は与えられた仕事をこなす為、真名は告白生徒を撃ち続ける。

麻帆良祭一日目1（後書き）

六日ぶりの更新……何というていたらくな事か。

それでも私の精神状態はボロボロのままなので、更新速度は遅いままなのでしょうが。

それと前話で短いですが加筆してあります。

興味のある方は見てください。

麻帆良祭一日目2

真名と別れたカイは十分に警戒しながら人混みの中を歩く。未来の紋章が言っていた『あの男』と言うのは間違いなくレアンの事だろう。

この麻帆良学園にカイにとって因縁のある男が居るのは気分を害していた。

何故今更こんな所に、とか色々な疑問をカイは抱くが、今はそんな事を気にはしていられない。今は人気がない所に行って無関係の人間に被害が被らないようにしなければならない。

（この場合だとやっぱり森林地区だよな。何でこういう日に限ってアイツが……）

レアンに対する怒りと無意識に抱いている恐怖が高まって表情にも苛立ちを見せるが、カイにはそれは些細な事だ。周りからどんな風に見られても構わない。

今は無関係の人を巻き込みたくない事もあって、足を速く動かす。

人混みをかき分けるように速く歩いているカイだが、ふと疑問に思った事がある。

（おい、未来の紋章、聞こえてるか？）

『……、何だ？　宿主様から話し掛けるのは珍しい』

（何だ、そのへりくだった喋り方は？　それよりも本当にアイツが此処に居るのか？）

カイが疑問に思った事は本当に麻帆良学園内にレアンが居るのかということ。

カイにはレアンの気配など感じる事が出来ず、本当に麻帆良学園に居るのか分からなかった。代わりにレアンの忠実な従者であるマリアの気配は感じるが。

このカイの疑問に未来の紋章は一拍置いて、

『何だ？　宿主様はあの男の気配を感じ取れないと？　〝あの男と同族なのに？〟』

（うっさい！　アイツみたいに何でも出来るやつと思うなよ？）

『……、悲しくならないのか？　自分を平凡だと認めることを？』

（うがーッ！　何だよ何なんですか！？　そんなに俺を苛めて楽しいか！？　ああ、そうだよ！　お前が居ないと平凡な人間になりますが何か！？）

『……、我が悪かった。すいませんでしたー、反省しますー』

（反省する気ねえだろ！　もういい！）

未来の紋章と話すのが嫌になったカイは強制的に遮断し、さっさと人気が無いであろう森林地区へと向かう事にした。

麻帆良学園森林地区。

カイの思った通り、やはりこの区域だけは麻帆良祭中であるにも関わらず誰も居ない。遠くの方で人の歓声等が聞こえてくるが、そんなものは耳障りにはならない程に小さいものだ。

そんな静寂な場所にやって来たカイは鈴の付いた黒いチョーカーを首に着ける。いつでも戦えるように最低限の準備だけはしておく。

カイは鈴をチリンと鳴らして口を開く。

「此処なら誰にも邪魔されない。出てこいよ、マリア・フォースト」

するとカイの背後に降り立つように、上から白いローブに身を纏ったライトグリーンの髪を持つ女が現れる。

カイはゆっくりと振り返るとカイを金色の眼で激しく睨み付けるマリアの姿が目に入る。

おー、コワッ、とカイは内心少し引き気味になりつつも何とか堪える。

「よぉ、久しぶりだな。つーか生きてたんだな？」

「ええ、レアン様のお陰で何とか死なずに済みました」

「アイツがお前を助けた……、ね」

まだこの女には駒として利用価値があるという事か？

修学旅行での事件で最後の最後、カイはマリアに一矢報いる痛手を与えた。その事だけはカイも覚えていて、確かな感触はしたのだ。

ちゃんと急所を捉えて即死レベルだった筈なのだが、こうして目の前に健在するマリアを見ると殺し損ねたかと、カイは深く溜め息を吐く。

せっかく未来の紋章から自分の身体を奪い返してマリアに会心の一撃を決めたのに、殺せなかったことを知るととんでもなく惨めな気持ちになってしまう。何をやっても自分が殺したい相手を殺せないのではないかと、諦めの境地に立たせられる気分だ。

ともかくカイはせっかくマリアが目の前に居るので、知りたい事を質問してみようと思う。

「なぁ、アイツはこの麻帆良学園に来てるって本当か？」

「……、ええ、本当ですよ。麻帆良祭中とあって、少し警備が緩いようですね。楽に入る事が出来ました」

「本当に居るのか……。しかも学園の連中は敵が侵入している事に気付いていないなんて何やってるんだ？」

カイが知りたかった事に加えて侵入方法すら明かしたマリアの言葉に、カイは額に手を当てて学園の警備の甘さに落胆する。

いや、まあ麻帆良祭をしている中で外の警備に割り当てる人員が無いのかもしれないが、それでも一度襲撃したマリアを普通に入れてんじゃねえよと毒吐く。

しかしレアンが麻帆良学園に居るとなると、カイは正直言って此処から逃げ出したいとは思っている。アンチスキルスロットを掛けた張本人なので仕返しはしたいと思っているのだが、カイの実力とレアンの実力が違いすぎる。

カイがどう足掻いてもレアンに攻撃の一つも通せないからだ。

だからカイは未来の紋章を継承してから執拗に追ってくるレアンを殺さず、逃げる一手を選んだのだ。カイではレアンにまともに攻撃を通せないから。

しかし今は逃げ出す訳にはいかない。超の計画に協力しているので離れる訳にはいかないし、お坊っちゃんには『トビラ』の捜索を依頼しているので、やっぱり離れる事は出来ない。

はぁ、と無闇に変な事に手を出すもんじゃないと反省しながらもカイは続ける。

「それでアイツは何処に居るんだ？　また何処からか高みの見物で

もしているのか？」

「いえ、レアン様は別行動中ですので近くには居ません」

カイの質問にマリアは丁寧に答えるが、相変わらず剣呑な殺気を放ち続け、目は今すぐにでもカイを射殺そうとしている。

そんな殺伐とした雰囲気にカイは嫌気を差すが、更に質問を続ける。

「別行動って何だよ？　アイツが俺以外の事で何か企んでんのか？」

「これは答える必要はありません。いちいちレアン様の行動をあなたに教える事なんて有り得ませんしね」

（ならさっきまでの質問も答えんなよ……）

そんな風にカイが思う中、今度はマリアが問う。

「それより私の質問に答えてくれませんか？」

「何だよ？」

「レアン様とあなたは同族と言うのは本当ですか？」

「……、は？」

「だからレアン様とあなたは同じ集落で生まれたんですか、と聞いているんです！」

何だか変な質問にカイは呆然としてしまう。

鬼気迫る迫力で問うてくるマリアを見てカイは本気で質問しているのは分かった。

ただ……。

「……、お前、そんな事も知らなかったのか？　アイツの従者のくせに？　俺との関係も知らずにアイツに仕えて、俺を追い回してたと？　……、ククッ、これは笑える！　とんだお笑い種だな！」

レアンの従者であるマリアがそんな情報も知らずに、レアンと共に行動していたとはカイは思いもしなかった。

腹を抱え笑いすぎて涙を目に浮かべながらカイは続ける。

「ハハハ！　お前はアイツに信頼されていないみたいだな？　だいたい二〇年は共に俺を追っていたのに……。へー、そうなんだ。そんな事も知らなかったんだ……」

「……、その言葉からすると肯定、という事で良いんですね？」

クスクスといつまでも笑うカイに、苛立ちを沸き上がらせながらもマリアは冷静に訊ねる。

するとカイは笑いを止め、目に浮かぶ涙を指で拭う。

「……、ああ、そうだ。俺とアイツは同じ集落で生まれたんだ」

極めて冷徹にカイは答える。今の今まで笑っていた顔も感情など

浮かべていない無表情となっている。

「やはりそうですか……」

無表情で答えたカイに対しマリアはギリッと歯を噛み締め、

「ならどうしてレアン様に協力しないのですか？　同族であるのなら別に協力しても良いじゃないですか？　どうして――」

「同族だからって何故俺がアイツに協力しないとならない？　”同族殺し”　のアイツに」

憤りを表すマリアの言葉を遮ってカイは反論する。

そのカイの言葉にマリアはえっ？　と疑問符を浮かべる。

「……、本当に何も知らないんだなお前」

マリアの呆けた顔を見てカイは深く溜め息を吐き、マリアに哀れみを抱くように首を振る。

「アイツさ、最終的に自分に未来の紋章を宿す為に、ある大国に情報を売って集落を襲撃させたんだよ。そのせいで俺以外は全員殺されたよ。俺の両親も仲が良かった友人も殺されたし、それにアイツは自分の両親も殺したんだ。ただ未来の紋章が欲しいが為に」

「そんな事をレアン様が――」

「したんだよ！　アイツは目的の為なら自分の両親でさえ捨て駒にするほど冷酷な男だ。お前だって分かってるだろ？　それなりに共

に行動していればアイツの残忍な性格を理解しているだろ？」

「……」

カイの言葉にマリアは反論出来なくなる。

確かにカイの言う通りマリアはレアンの性格というものが残忍だと知っている。人が惨いと思う事を平気で行い、自分に反論するだけでその人間を容赦なく斬り捨てる。

だがそれはマリアも何年も前から分かっている事。それも込みでレアンに侍従しているのだ。今更そんな事を知ったぐらいでレアンへの想いが変わる事はない。

もうレアンから離れる事は出来ない程に依存しているのだから……。

カイの言葉に心を揺らされたマリアだが今は持ち直して宣言する。

「例えそんな話を聞いたところで私のレアン様への想いは変わりません。あなたの事ですからレアン様の悪事を私に聞かせて離れさせようとしていたのでしょうが、そうはいきませんよ？」

「いや、別にそう言うつもりは無いがな。どの道お前を殺すんだから仲違いさせても意味ないし」

「そうですか……」

カイの言葉にマリアは一言呟き、カードを取り出し、

「レアン様にはキツく止められていますが、やっぱりあなたを殺さないと私の気が済みません。アデアット」

アーティファクト、太極訃音を具現して呟く。

千の雷。

無詠唱で発動する千本の雷がカイに襲い掛かる。

うげっ！　とカイは顔を顰め咄嗟に魔法障壁を展開するが、雷系の上級魔法だ。カイの魔法障壁を容易にぶち抜いて吹っ飛ばされる。

カイとマリアの距離は六メートル程しか開いていなかった為、カイは避ける事も出来ずに千の雷を受ける羽目になってしまった。

未来の紋章の力で未来を視ていたとしても、カイは避ける事は出来なかった。転移魔法符も残り三枚しかないので無駄遣いは出来ない。どの道カイは千の雷を受けるしか無かった。

ゴルフボールのようにヤード単位で吹っ飛ばされたカイを見て、マリアは鬼のような形相を浮かべてカイを追い掛ける。

やはりレアンに気に入られているカイが憎たらしいので、今ここで殺しておこうとしているのだ。それはレアンの命令ではないのだがマリア自身の理性では抑えられなくなっていた。

もうレアンの忠実な犬ではなくなってきているがマリアは気にしない。

今はただ彼女の憎き敵を殺す為に弾丸の如く森林を駆け抜けようとしたが、前方に突然ホストっぽいスーツを着た少年が現れてマリアは緊急停止する。

「何故君が此処に……」

馬鹿だ、絶対に馬鹿だ。

太極訃音で無詠唱発動された千の雷を受けたカイは一本の木に背を預けながらそんな事を思っていた。

此処は麻帆良学園。マリアやレアンにとっては敵地の筈。そんな場所に忍び込んでいるというのに、マリアは何の躊躇いもなく上級魔法を撃ち放った。

そんな事をすれば学園内に居る魔法使い達が武装して来ると言うのに、マリアは魔法を使った。

これにはカイも気が狂ってるとしか思えなかった。そんな事をすれば忍び込んでいる事がバレてしまうというのに。

それと此処が森林地区であることにホッと安堵している。現在麻帆良学園は学園祭中であるので無関係の一般人が多く来ている。そんな人混みの場所でマリアが魔法を使うとなると、犠牲者が大勢出て即刻中止となるだろう。

流石にそれはカイも気が引けるので此処に来て良かったと一安心する。

だがカイの安全は確立されていない。

カイには殺気を振り撒いているマリアと何事かと事情を調べに来る魔法使い達が迫ってきている。マリアはともかく学園の魔法使いに自分の存在を知られたくはないので、此処から逃げ出したい。

しかし此処以外マリアと戦う場所が無いので、自分の正体を晒す覚悟をしてマリアと戦うか尻尾巻いて逃げ出すかの二択しかない。

取り敢えず此処に魔法使い達がいつ到着するのか、未来を視ておかなければならない。

「頼むから俺に未来を視せてくれよ……」

カイは千の雷を受けて体中に激痛が走りながらも、未来を視る事に専念する。

額の紋章が青白く発光し、カイの脳に直接未来の情報が焼き付けられる。

「……、何だ……？」

無事未来を視る事が出来たのだがその内容がおかしな物だった。

その内容とは二分後に四人の魔法先生達が森林地区に来るのだが、目下一番の敵であるマリアが全く姿を見なかった。これ以降カイに襲ってくる事もなく、姿が消え去ったのだ。

これは本当に意味が分からなくなり、カイの頭は混乱した。

確かに現在マリアの気配を探そうとするが、あの憎悪に満ちた禍々しい気配が完全に無くなっている。森林地区の何処を探してもマリアが居なくなっているのだ。

「どういう事だ？　あれだけ殺気を振り撒いて俺を殺そうとしていたマリアが突然消えるなんて……」

『考えている暇が有るのならさっさと此処から逃げたらどうだ宿主様？』

意味が分からない、と疑問を浮かべるカイに未来の紋章はさっさと逃げろと忠告してくる。

「けどマリアがいきなり消えるなんて変だろ？」

『だから考える時間なんて幾らでも有るんだから、さっさと逃げろ

って言っているんだよ？　長年生きてるくせにそんな基本的な事も忘れたのですかー？』

「……、くっ！　ムカつくけどお前の言うとおりか。分かった。此処から脱出する」

未来の紋章の口調にカチンと頭にきたが、カイはそんな事で喧嘩している場合ではないと判断し、この森林地区から逃げ出す。

その一分後には未来通りに四人の魔法先生達が来たが、カイとマリアは姿を消していて無駄足となってしまった……。

その頃、麻帆良祭が開催されている最中は空に巨大な飛行船がふよふよと飛んでいる。

その巨大な飛行船の中で一人の青年と一人の少女が相対している。

青年の名はレアン・メルフェス。爽やかで女性にモテそうな顔立ちに艶のある黒髪、背も高く世間的には格好いい部類に入る男。だ

が紅の双眸が男を異常な人間として引き立てる。

対して少女の名は超鈴音。『麻帆良の頭脳』と呼ばれるほど頭が良く、文武両道、何でもこなす事が出来る天才女子中学生。そして世界の理を変えようとする変革者でもある。

二人は白い丸型のテーブルを境に対面に座っていて、端から見る限りはどこか兄妹にも見える。だが二人以外はこの飛行船には誰も人は居なく、もちろん二人は兄妹でも何でもない。面識すら持っていない。

何故面識すら持っていない二人がこうして対面しているのかと言えば、レアンが超を誘ったから。レアンからすれば単に超と話したかっただけだが、超からすれば怪しさ満点の男に誘われるのは怖い。

しかし怪しい上に見た感じからして強者の雰囲気を漂わせている男を見逃す訳にはいかない。この男が自分の計画を潰す障害になられでもしたら困ったりする。

だから超はレアンの誘いに乗った。

さて、とレアンは口を開く。

「私から自己紹介をしようか。私はレアン。君とこうして会うのは初めてになるな」

「これはご丁寧に。私は超鈴音。初めましてネ。しかし貴方とは初めて会った筈だが？」

レアンの言葉に超は首を傾げ訝しむ。超はレアンとは初めて会う

のにレアンは超の事を知っているかのように話している。

「もちろんその通りだ。ただ一方的に私が君を知っていただけだよ。”未来から来た未来人だという事もね？”」

「ッ！」

何気ない感じで超の重大な秘密を口にしたレアンに、超はモロに自分の心情を顔に出してしまった。

「あはは！　駄目だな～、駄目だよそんな簡単に心情を晒すような真似しちゃ。ほら笑って笑って？」

レアンは微笑みを浮かべ、しかしながら完全に超を手玉に取ったレアンは嘲笑する。

いつもの彼女であれば得体の知れない相手に心情を晒してしまう失態はしない。だがレアンが相手となると何故か上手く隠せない。全てを見透かしているようで、気味が悪い。

しかもレアンの嘲笑を見ていると何処かの女男の顔を思いだす。艶のある黒髪に妙に顔立ちが似ている感じもする。

まさかネ、と超は首を振って頭に浮かび上がった考えを打ち消す。

「それで私に話をしに来た理由は何ネ？　私を脅すつもりカ？」

「脅すだなんてとんでもない。君がこの学園祭でやろうとしている計画についても妨害するつもりはないよ」

（……、私の計画まで知ってるのか、この男は？）

何処までも超の事を知っているレアンに、超は内心気味悪がり警戒レベルを引き上げる。

警戒心丸出しにしている超にレアンはフッと口角を上げて、

「私はただ君の計画に協力しているカイに無理をさせないでくれと伝えに来ただけだよ」

「カイ……、カイ・メルフェスの事か？　やはり彼に関係ある者だたカ。となると私に彼の情報を教えたのも」

「ああ、そうだよ。私がやった事だ。まほネットにカイの情報を載せたのも私だ。これで君の計画を成就させるのに一つの障害は無くなっただろう？」

ふふ、と微笑むレアンはあっさりと吐いた。

超にカイの情報を与え駒として使わせようとしたのもレアンの仕業だった。まほネットなんかに異世界人のカイの情報を載せたのもレアンによる仕業だった。

「確かに未来を先読み出来る力が相手側に有るだけで此方の不利になってしまうネ。手元に置いておくだけで物事が上手くいくかもしれない。でも何で彼の情報を私に……？」

超の疑問は尤もな事だ。何故世界の根本を変えようとしている超にカイの情報を与えたのか？

いまいち理由が分からない超にレアンは変わらず微笑みを崩さないまま答える。

「私もね、この世界が変わる未来を見てみたいと思ったんだ。だが君だけでは未来は変わらない。だったら未来を司る未来の紋章を宿すカイを君の側に着かせたらどうなるのか知りたくてね」

レアンはこの世界の未来が変わるのか見てみたいからと答えたが、超はこれは違うだろうと感じた。

レアンの狙いは未来を司る未来の紋章を宿したカイが、果たして未来を変える要因になるか知りたいだけだと直感的に思った。レアンはこの世界の未来などどうでも良い。

ただ未来の紋章の本質をこの目で確かめたいだけかもしれない。

本当に未来の紋章が未来を変えられる力を持っているのかどうかを……。

「つまり私の計画を実験として彼の力を確かめようとしているカ？」

「まあそういう事になるのかな？　ただ君は君の思うままに行動してくれれば良い。カイも呪いを解く為に君に尽力するだろう。役に立つかは分からないけど」

「……」

どうもレアンの真意が見えず、超はギリッと奥歯を噛み締める。

知らないうちにこの男の思惑通りに進んでいるようで苛立ちが募

る。

そんな不安定な状態になっている超に気付いてか、レアンは椅子から立ち上がる。

「今日はここで帰らせてもらうよ。それとカイはくれぐれも死なせないようにしてくれると助かるかな？　まだ死なれても困るからね」

そう言い残してレアンは転移魔法を使ったのか、勝手に消えていった。

一人残った超は深く溜め息を吐いて安堵する。得体の知れない相手と話すのはこんなに辛かったのか、と良い教訓になった事だろうか。

ふと、窓の外から映る麻帆良学園の光景を見て呟く。

「……、とんでもないジョーカーを招き入れたかもしれないネ」

麻帆良祭一日目2（後書き）

十日ぶりの更新ですか……。

精神状態が不安定なくせに鬱ゲーをやるのは良くないですね。

さて、今回は何の進展もなく、無駄に書いてしまったかもしれません。

特に後半なんかはね。

色々と謎ですね。

次は『まほら武道会』の予選の話になりますね。

いったいどうなるのやら……、果てしなく不安です。

麻帆良祭一日目3

「……、痛い、本当に痛い……」

現在時刻五時二〇分。

空も赤みがかかった夕焼け空に変わったが、麻帆良学園は相変わらず祭り騒ぎが続いている。人も全くと言っていいほど減っておらず、盛況さに陰りはない。

そんな大勢の人が行き交う中、学校指定の制服姿であるカイは痛みを堪えながら休憩所のベンチに座っていた。

約四時間程前にマリアと遭遇し、魔法攻撃を受けてしまい、身体は痛みで悲鳴を上げている。

雷系の上級魔法を食らって正直痛みに襲われているだけで済んだ事に驚きなのだが、今のカイにはそんな事に頭が回らない。こんな人がいる中で倒れる訳にいかないので、激しい痛みで気絶しないようにするので精一杯なのだ。

（何なんだよあの女は……、敵地で堂々と魔法を使うのなんて馬鹿としか思えない……）

先ほどからカイはこういう事しか考えておらず、こめかみに青筋を立てながら苛立っている。貧乏揺すりも激しく、だいぶ苛立っているのが分かる。

色々と文句を言ってやりたいのだが、当の本人は何処かへと消え

てしまった。しかもいきなりだ。カイには何が起きたのか全く分からない。

取り敢えずマリアからこの地にレアンが居るという事は聞けたし、間違い無い事なのだろう。

これからはいつも周りに警戒しながら過ごさなければならない。レアンが居なくなるまで……。

そもそもレアンの目的は未来の紋章なのでさっさとカイを捕獲してしまえば良いのに、カイの前に姿を現さないで高みの見物をしている。それが堪らなくカイを疲れさせる。

いや、カイを警戒させて精神的に疲れさせてから襲撃してくるのかもしれない。人を見下す傾向にあるレアンならばそのような戦術を取ってきてもおかしくはない。

レアンもマリアも消えてしまえば良いのに、とカイは溜め息混じりに思う。カイが手に入れてしまった魔剣ティルヴィングに望めば殺せるのだろうが、そんな事したら三つの望みが叶えられ、カイは破滅の未来を辿る事になる。

ただの言い伝えなのかもしれないがユーバーをこの世界から追い払いたいという望みは叶ったので、三度の望みを叶えると破滅するのも本当なんだろう。

そんなティルヴィングを惜しみなく必要以上に使う訳にいかないので、やはりティルヴィングに望みを叶えさせるのはカイにとってマイナスにしかならない。使うにしても一度きりにしなければならない。

前途多難なこれからに落ち込んでいるカイに声を掛ける者が現れる。

「おっ、カイ、こんな所で何やってるんだ？」

声質からするに少年の声が自分に掛けられていると知り、カイは顔を上げると見知った顔が目の前に在った。

黒髪の短髪にキリッとした目、スラッとした顔立ち、中学生のくせに背の高いモデル顔負け、大多数の人間が格好いいと認める少年。名は加藤浩輝。通称『プリンス』。

カイが孤独で在り続けたいと願いつつも親友と認めている浩輝は、カイと同じように学校指定の制服……、白いカッターシャツに紺色のズボンを着用していて、クラスの出し物でやっているホストのような格好はしていない。

「あれ？　クラスの方は良いのか？　稼ぎ頭の浩輝が居なくなってクラスは大丈夫なのか？」

顔を上げたカイは何故此処に浩輝居るのだろうと疑問に思っている。

クラスの出し物が終了する時間はまだな筈なのに、稼ぎ頭の浩輝が外に出ていて良いのだろうかと思ってしまう。カイとは違って周りの男が羨む程に完璧な顔立ちをしているので、客寄せとしても十分機能する浩輝。

そんな浩輝を終了時間ギリギリまで働かせるのが筋なのではない

かとカイは思っているのだ。

そう思っているカイに浩輝はハハッと笑い、

「クラスは繁盛してるんだ。別に俺が抜けても大して変わりは無いんだ。カイ以外は皆頑張っているから現時点で集客数一位みたいだぜ？」

現在のクラスの状態について教えてくれた。

どうやらカイ以外のクラスメートは頑張って出し物をやっているらしい。お陰でお坊っちゃんが目指す集客数一位も現実味を帯びているみたいだ。

この話を聞いて働いていないカイは少々の罪悪感を抱いてしまうが気にしない。クラスの皆が一丸となって頑張っているのなら、カイが別に何もしなくても良いだろうから。

「へぇー。それじゃ浩輝は休憩か？」

「ああ、長時間女性の相手をするのは疲れるな。もう精神的に疲れる」

「お疲れさん。よく頑張ったよ、あーよく頑張った」

「……、心が籠もってねーぞこら」

出し物で頑張って働いた浩輝をカイは全く労る気が無いらしく、口調も台詞も心が籠もっていない。それに浩輝が顔を引きつらせ、はぁと溜め息を吐いてカイの隣りに座る。

「しかし相変わらず賑やかだな、麻帆良祭は」

行き交う人々を遠い目で眺めながら浩輝は独白気味に吐く。

「祭りだからな。賑やかで当然だっつーの」

対してカイは浩輝と同じように行き交う人々を眺めながら答える。

それもそうだな、と浩輝はフッと笑って言っていると、ある男達の会話が二人の耳に入ってくる。

「なあ、『まほら武道会』に出るか？」

「んあ？　それって賞金一〇万円ぐらい出ないショボい大会だろ？出ねえよ」

「バカ、知らねえのか？　”ある人物”がM&Aして大会を纏めたらしいんだ。んで、優勝賞金が一〇〇〇万円に引き上げされたらしいぜ？」

「一〇〇〇万！？」

「おう。それで今話題が持ちきりで腕に覚えのある奴らが集まってるんだとよ。どうだ？　参加する気になってきたか？」

「そうだな。行ってみるか」

「そうこなくちゃな」

男達は意気揚々と去って行ったが、カイと浩輝はその男達の後ろ姿を目で追っている。

「……、まほら武道会、ね……」

「どうする？　俺達も参加してみるか？」

「何でひ弱な俺が参加しなくちゃならないんだよ？　絶対にやらねえ」

男達の話を聞いていて浩輝は参加する意欲を見せているが、カイは参加するつもりはない。

ひ弱で弱者としても通っているカイが『まほら武道会』に参加して勝ってでもしたら、それだけで何かイカサマがあるのではないかと疑われかねない。

それに命を懸けた戦いでもなければ未来の紋章は未来を視せてくれないので、やはりカイでは勝つ事は難しいだろう。まほら武道会が殺しも有りならカイも勝機はあるのだろうが、まあ優勝は無理だろう。

そんな訳でカイはまほら武道会に参加するつもりはないが、男達の会話で気になった事がある。

それは　”ある人物がＭ＆Ａをして大会を纏めたという事”　。

それを行うのには財力を持った人物でしか出来ないが、財力があってこんな事をする人間は一人しかいない。

謎の未来人少女、超鈴音。

彼女が経営している超包子ならばM&Aして優勝賞金を引き上げる財力を稼げているだろうが、こんな事になるのはカイも知らなかった。全く教えられていなかったのだ。

（あの女……、いったい何のつもりでまほら武道会を……。それに俺に知らせないってどういうことだ）

沸々と怒りを込めながらカイはムスッと不機嫌に陥る。

この事が計画に入っていなければそれで良いのだが、もし計画に入っていたらと思うとカイは信用されていない事になる。別に超に信用も信頼もされなくて良いのだが、一応計画に協力しているのだから話ぐらいは聞いておきたかった。

まあ俺を学園側に置いておくよりかは手元に置いておきたかったんだろうな、とカイは超の思惑に気付いており深く溜め息を吐く。

「ん？　どうした？」

「別に。で、浩輝はどうするんだ？　参加するのか？」

カイは答えが分かっていながら浩輝に問うた。

「もちろん。一〇〇〇万は魅力的だしな」

カイの予想通り浩輝はまほら武道会に出ると答えた。それも満面の笑みで。

予想通りの回答にカイは更に深く溜め息を吐く。別にカイは参加しないのだからどうでも良いのだが、何というか嫌な予感がする。

「んじゃ、行こうぜ」

「えっ？　俺も行くのかよ……、つうか離せこら！」

まほら武道会に参加する事を決めた浩輝はベンチから立ち上がり、カイの手を掴んで会場まで引きずって行く。

浩輝に手を掴まれたカイは振り解こうとするが、浩輝の握力が強く振り解けずに、結局はその会場へと向かう事になってしまった。

まほら武道会の予選会場となっている場所には大勢の人間が集まっていた。

格闘家に剣道部員、喧嘩慣れした不良に腕っぷしが強い巨漢の男達……、とまあむさ苦しい男達が集まっている。中には女性も居るが、圧倒的に男性の方が大きい。

そんなむさ苦しく暑苦しい会場へとやって来た浩輝とカイだったが、カイはジト目で会場となっている場所に疑問を持つ。

「……、何で　”龍宮神社”　なんだよ……？」

呆れてカイは呟く。

まほら武道会の予選会場は何処かの褐色女と同じ名前が付いている龍宮神社だった。現在カイと浩輝は龍宮神社の入り口前に居る。

まさか龍宮も超に協力しているのか？　とカイは疑問に思うが、それなら昼頃に会った時に教えてくれても良いのではないかと勝手に解釈する。なのでそれは無いと勝手に判断する。

だったら敷地的にも割に合ったのか？　等と自問自答してみるが答えは分からない。

「しっかしよく集まってるな？　みんな一〇〇〇万円に目が眩んだか？」

「さあね。少なくともそういう奴は俺の隣りに一人居るのは間違いないけどね」

「……、悪かったな、欲にまみれた男で」

カイの言葉に浩輝は顔を引きつらせる。

そんな浩輝を無視しつつ、カイはチラッと会場に集まっている人間を観察する。大多数は一般人なのだが中には魔法関係者も居る。

噂の子供先生であるネギや保護者役の神楽坂に桜咲など。何故彼等が此処に居るのかは分からないが、まあ実直に純粋にこの大会に参加しに来たのかもしれない。まあ桜咲がこの大会に参加する理由は見つからないが。

そしてもう一人、興味深い奴が居る。

それは魔法使いが着る白いローブを着た人物。顔はフードを被っていて分からないが、ただの一般人ではなく裏の人間である事は間違いない。

しかもただ者ではない雰囲気を醸し出している白いローブを着た者は、カイの視線に気付いたのか、フッと微笑みを送った。その微笑みに気付いたカイは顔を顰めて視線を外す。

関わってはいけないとカイの本能が警鐘を鳴らす。二〇年前程に会ったような気がするが考えてはいけない。

そんな時、これまた何処かで聞いた事のある声がアナウンスで流れる。

『参加希望者と見学者は入り口よりお入りください』

このアナウンスに参加希望者は続々と中に入っていく。

一方カイと浩輝はと言うと、

「……、浩輝、今のアナウンスの声って……」

「ああ、アイツだろうな……」

「何やってるんだアイツは……」

何処か聞き覚えのあるクラスメートの声に二人は同時に溜め息を吐く。

ともかくアナウンスの指示通りにカイと浩輝は入り口の門を潜っていった。

入り口の門を潜って中に入ると中庭みたいな所に出る。其処では八つの特設リングが設置されており、これから行われる試合方法が大体は推測出来る。

細目で周りを見渡していたカイだったが、前方の舞台に立っているマイクを持った少年に気付いて、其方に目を向ける。

「ようこそ！！　麻帆良生徒及び、学生及び、部外者の皆様！！

復活した『まほら武道会』へ！！　突然の告知に関わらずこれ程の人数が集まってくれた事を感謝します！！」

「……、何やってんだネズミ君は」

黒髪に普通のメガネを掛けた報道部に所属する少年、木村耕太。

何故彼が司会みたいな事をしているのか全く分からず、カイと浩輝は疑問符を浮かべる事しか出来ない。

「優勝賞金一〇〇〇万円！　伝統ある大会優勝の栄誉とこの賞金、見事その手に掴んでください！！」

大勢の人の前で堂々と司会をしている耕太を目の前にして、アイツも魔法関係者なんじゃねえだろうな？　なんていう疑問がカイの心に湧いてくるが、今のところ誰も疑問に答えてくれる人物は居ない。

「では今大会の主催者より開会の挨拶を。学園人気Ｎｏ．１屋台『超包子』オーナー、超鈴音！」

司会の耕太によって紹介され舞台に現れた超に、色々と集まった人々の間でざわめきが起きた。

何故超が居るんだ？　とか、誰だあのガキは？　とか様々。

カイはと言えば予想が的中した為、特段驚く事は無いが、何処か投げやりな気分となっていた。あとはこれが計画の布石となるかど

うかだが、もう計画の一部である事は間違いないだろう。

別にカイが超の計画に協力するからと言って全部に協力しなければならない訳ではないが、やはりカイとしては知っておきたかったと思う。いざという時に行動する事が出来るのだから……。

信用も信頼もされなくて構わないが超から協力を持ち掛けたと言うのに、ある程度は知らせてくれても良いのではないかと思う。

まあその分、楽は出来るから良いのだが……。

そんな中、超は身振り手振りしながら語り始める。

「私が……、この大会を買収して復活させた理由はただ一つネ」

超は人差し指一本立て、

「表の世界裏の世界を問わずこの学園の最強を見たい。それだけネ」

にっこりと笑んでとんでもない事を言い始めた。

周りの何も知らない一般人は疑問符を浮かべざわめきを起こす中、超は二〇数年前まで――、と大きい声で言って人々に話を聞かせる。

「この大会は裏の世界の者達が力を競う伝統的大会だたヨ。しかし主に個人用にビデオカメラなど記録器材の発達と普及により、使い手達は技の使用を自粛、大会自体も形骸化、規模は縮小の一途をたどた……」

超はバッと手を広げ、

「だが私はここに最盛期の『まほら武道会』を復活させるネ！　飛び道具及び刃物の使用禁止！　……、そして　”呪文詠唱”　の禁止！　この二点を守ればいかなる技を使用してもＯＫネ！」

高々と魔法関係者にしか分からない事を超は宣言した。

カイは横目でこの場に居る魔法関係者を見てみると、予想通りに驚愕の表情を浮かべている。いや、それよりも困惑していると言った方が正しいか。

何故　”呪文詠唱禁止”　などと大勢の一般人の前で言ったのか、困惑の表情を隠しきれていない。彼ら魔法関係者は魔法という存在を隠したがる。世間に公表したくないと思っている。

そんな彼らにとって今の超の発言をどう思っているのだろうか。

超は彼らの心中に答えるように人差し指を唇に当て、

「案ずることはないネ。今のこの時代、映像記録が無ければ誰も何も信じない。大会中、この龍宮神社では完全な電子的措置により携帯カメラを含む一切の記録機器は使用出来なくなるネ。裏の世界の者はその力を存分に奮うがヨロシ！　表の世界の者は真の力を目撃して見聞を広めてもらえればこれ幸いネ！　以上！」

そう締めくくった超は一歩後ろへ退く。

色々とよく分かっていない一般人の参加希望者もやる気を出しているのか、雄叫びを上げている。非常にうるさい。

取り敢えず参加希望者は熱気を帯び始め、今にも闘いが始まりそうな予感がする。

そんな時、超は言い忘れた事が有ったのか、再び口を開く。

「この大会が形骸化する前、実質上最後の大会となった二五年前の優勝者は……、学園にフラリと現れた異国の子供、ナギ・スプリングフィールドと名乗る当時一〇歳の少年だった。この名前に聞き覚えのある者は頑張るとイイネ」

超はナギの息子であるネギに視線を向けて話した。

その言葉は間違いなくネギの心を鷲掴みにし、より一層この大会に参加する気力が湧いた事だろう。拳をぐっと握り締め決意したような顔をしている。

遠くから尻目に見ていたカイはフンと鼻で笑って、

(真っ直ぐだね……。見ていて恥ずかしくなっちゃう)

カイはクスっと笑って顔を綻ばせた。

あんなに行方不明の父親を求めてこの大会に参加しようとするのだから、長年生きてきたカイの真っ黒な心では理解出来ない。だがまあ心温まる話である事は間違いないのだろう。

適度に頑張ってくれ、と心にも思っていない事をカイは密かにネギに送る。

ふと、カイは自分の隣りに居る親友に目を向ける。何処か表情が歪んでいるように感じられた。

憎悪。

その表現がピッタリなほど浩輝の顔は歪んでいるように感じられ、僅かながら殺気が滲み出ている。目も据わっていて光を宿していない。

カイが麻帆良に来て二年ほど経って浩輝と友人の関係となっているのだが、今までこんな負に満たされた表情を見た事が無かった。いつもは喜怒哀楽と様々な表情を見せるのだが、”憎悪”という表情は見た事が無かった。

その憎悪がカイに向けられたものではない為、どれだけ強いものかは分からないが、色々な経験をしてきたカイですら気持ち悪いと身体を震わせるほど。人間の負の感情に慣れているカイですらも気持ち悪いと思わせるほど、浩輝に写し出されている憎悪が強いのだ。

いったい何なんだ？　とカイは眉を顰め首を傾げていると、カイの視線に気付いたのか浩輝はハッと我に返り、いつもの表情へと戻る。

「んじゃ俺は参加するから行ってくるわ。早く行かねえと参加出来ないからな」

そう言っていつもの笑顔で浩輝はさっさと前へと向かった。

今現在司会役の耕太が話しているのだが、この予選会はくじ引きで決まったそれぞれ二〇名一組のグループで行われるバトルロイヤ

ル形式。グループは八つで一組二〇名という事は定員一六〇名に達したら参加出来なくなってしまう。

だから浩輝はさっさと予選会に参加するべくくじ引き場所へ向かったのだ。

浩輝が居なくなった事で必然的に一人になってしまったカイは、これからどうしようか悩んでいた。超の所に行って話をするのも良いかもしれないが、もうどうでも良くなってしまった。司会をしている耕太についてもカイにしたらどうでも良いこと。

結局は見学する事になるのだろうが、参加しないカイにしてみれば他人の闘いなんざ興味もない。

このまま帰ってやろうかな、とか思っていると、突然カイの肩にポンと手が置かれる。

「ひゃう!?」

「ひゃう、って変な驚き方をしますね、篠宮君は」

「……、お坊っちゃんか……」

突然自分の肩に手を置いた人物がお坊っちゃんであることに、カイはホッと胸を撫で下ろす。

お坊っちゃんの方もカイの驚き方に顔を引きつらせているが、いつもの凛とした表情に戻る。

カイや浩輝と同じように学校指定の制服を着こなしているお坊っ

ちゃん。このクラスの人間は麻帆良祭なのに仮装する気が無いのか、制服を着ている者が多いように感じる。

そんないつも見るお坊っちゃんであるが、カイの肩を掴んでいる手が強くなる。

「篠宮君、君は今日いったい何をやっていたのですか？　チラシを配りに行ってから帰って来ないで何をしていたのでしょうか？」

絶賛お怒り中、と言った感じでお坊っちゃんの握る力がどんどん強くなっていく。それに表情は全く変わらないので逆に恐い。

肩にお坊っちゃんの指がめり込んでいる為、強烈な痛みに襲われているが、カイは苦痛の表情を顔には出さない。

ははは、とカイは苦笑いを浮かべて、

「月並みで悪いけどマリアナ海溝より深い理由がありましてですね……」

「そんな言い訳が通用するとでも思っているのですか？」

「……、思っていません、申し訳ございませんでした」

あっさりと謝罪しました。

もうカイにはプライドなんてものが無いようで、あっさりとお坊っちゃんに頭を下げて謝罪した。

それに対してお坊っちゃんははぁ、と溜め息を吐いてカイの肩か

ら手を離す。

「まあ篠宮君が居なくても十分に客を集める事が出来たので構いませんが」

「まあ戦力外だしね。仕方ないよねー。うん、仕方ない」

「まったく、調子の良い事を……」

あっけらかんと自分を卑下するカイにお坊っちゃんは額に手を当てて呆れる。

それよりも、とカイはお坊っちゃんに質問する。

「お坊っちゃんが何でこんな場所に居るんだ？　お坊っちゃんがこんな場所に来るとは思わなかったんだけど」

「いきなりこんな大会を開かれたら見に行かない訳にはいかないでしょ。観察程度ですよ。そうして来てみたら　”この事態”　ですよ。超鈴音……、とんでもない事をしてくれましたね」

カイが何となく質問しただけなのにお坊っちゃんはブツブツと陰険たらしく呟いている。

それを聞いてカイは質問するんじゃなかったと後悔してしまうが気にしないでおく。どうやらお坊っちゃんは麻帆良祭の目玉となってしまったまほら武道会の様子を見に来たらしい。

そして来てみれば超が魔法の事なんて知らない一般人を前に堂々と『呪文詠唱の禁止！』なんて言ってのけたのだ。一応裏の世界に

ついても知り得ているので、魔法をバラしたら世界がどうなるのかもある程度は予想ついているだろう。だから超が言った事に多少なりとも憤りを感じている。

「こんな僕でもこの世界については愛着があるんですよ。今の世界に……、と言うよりは麻帆良にですがね。もし超がこの世界に何かしようとするなら僕は超を許す事は出来ません」

「……」

爪が肉に食い込み血が出てきそうな程に拳を握り締めて語るお坊っちゃんに、カイは何も言う事が出来なかった。

カイはこのお坊っちゃんを見ているともしかしたら超の計画にも気付いていて、更にはカイがその計画に加担していることにも気付いているのかもしれない。

このお坊っちゃんの真剣な瞳を見てしまったら、カイはそう思わざるを得ない。

カイがこのまま超に加担し続ければいずれはお坊っちゃんと敵対してしまうかもしれない。超がやろうとしている事は世界に変革を成すと共に様々な人を踏みにじっていくのだろう。それはカイも分かっていた”つもりだった”。

こうなる事も未来の紋章を使わずともお坊っちゃんと敵対する可能性が有るのだと分かっていた筈なのに、今目の前で宣言されてしまったらカイは言葉を詰まらせてしまった。

カイはどうもクラスメイトのお坊っちゃんと敵対する構図を思い

描いていなかったのだろうか。お坊っちゃんもまた裏の人間だと言うのに。

周りが熱気を帯びて騒いでいる中、二人の間には場違いな重苦しい雰囲気が流れてしまっている。それに気付いたお坊っちゃんはハッと我に返って、

「すみません、変な話をして。それ程までに彼女が言った言葉に驚愕していましてね」

「……、いや、当然だろ。世界の秘密を暴露しようとしている感じだしな。敵愾心を抱いてもおかしくはない」

変な重苦しい雰囲気を作ってしまった事に謝るお坊っちゃんに、カイは首を横に振ってお坊っちゃんの言っている事に同意する。

変革を望む者が居ればその変革を阻む者も現れる。様々な考えを持っている人達が居て当然だ。カイは自分の意志で超側に着いたのだから成功させようとするだろう。例えお坊っちゃんの心を踏みにじってでも。

（ほんと何年生きてると思ってるんだよ、俺。クラスメイトが敵になると考えただけで心を乱してんじゃねーよ。今まで散々他人を踏みにじって生きてきたんだ。お坊っちゃんだって敵になったら踏みにじってやるさ）

何か妙に決意を固めているカイだが、その感情などは表には出さない。出してお坊っちゃんに感づかれるなんて失態はしていけない。

カイはこの話題を変える為にもう一つお坊っちゃんに質問する。

「そう言えば耕太が司会やってるんだけどさ。もしかして　”関係者”　なんてオチは無いよな？」

それはまほら武道会の司会を務めているクラスメイトの木村耕太のこと。

カイは耕太がもしかして魔法関係者なのではないかと疑ってしまっている。

「いえ、そう言う情報は有りませんよ。彼の両親も普通の会社員で裏については全く関係ない筈なんですけどね」

「……、ってちょっと待て。何でクラスメイトの詳しい情報を持ってるんだ？」

「そんなの決まってるじゃないですか。クラスメイトの出自、生まれた経緯、家庭の情勢については　”ほぼ全員分”　把握していますよ」

「えー……」

カイは思わず口を半開きにして呆然としてしまった。

お坊っちゃんはクラスメイトの詳しい出自は調べて情報を把握していると言う。お坊っちゃんの家はとんでもない金持ちらしく、その力で情報収集など容易いのだ。

何ともあくどい感じはするが、カイは『トビラ』の捜索依頼をお坊っちゃんにしている以上、強く言う事は出来ない。

それにしても耕太が一般人だとすると司会を務めているのは納得がいかない。ただ単に超に司会として頼まれていたとしても、別に耕太でないといけない理由はない筈。他の人物でも良い筈だ。

しかし超は耕太に司会をやらせている。報道部に所属している耕太に……。

報道部……。

（超め。俺のクラスの一般人まで巻き込むとは……、って最終的には世界全員を巻き込む事になるのだけど）

カイは心の中で呟きながら舞台にいる耕太に視線を移す。

耕太が報道部という事は計画が成功した場合、どんどん魔法を広めていく仕事をさせるつもりなのだろう。となれば既に耕太は魔法について知っているのかもしれない。あくまで可能性の話。

「そう言えばお坊っちゃん、”ほぼ全員分”ってのはどういう意味だ？　誰か知らない奴でも居るのか？」

ふと、カイは疑問に思った。お坊っちゃんは先程”ほぼ全員分”のクラスメイトの情報を持っている事を言った。しかし”ほぼ全員分”という意味が気になった。

この質問にお坊っちゃんは、

「詳しい出自が分からないのは篠宮君ともう一人居るんです」

少し俯きながら答えた。まるで何か言い難そうな表情をしている。

「……、俺以外に？」

出自が明白でない人間がカイ以外に一人居ると言う。

カイは元々この世界の人間ではないので出自なんて分からないで当然なのだが、カイと同様に出自が全く分からない人物が居る。

お坊っちゃんが答えようと口を開いたその時、予選会場が歓声に覆い尽くされる。

何だ？　とカイは観客達が熱心に視線を注いでいるリングに視線を向けてみると、

「おおーっと！　強い！！　麻帆中、中武研部長古菲選手！　流石前年度『ウルティマホラ』優勝者！　体重差二倍以上の男達が宙を舞う！！」

褐色の中国娘、古菲がどんどん参加者をリング外に弾き出している光景が視界に入ってきた。

「流石は古菲。あの強さで一般人だったんだから凄いよなー（って龍宮も参加してやがる。あれは賞金目当てか？）」

「一般人の部類では最強でしょうね。まあ僕は興味ありませんが……」

「興味が無いなら別に言わなくても良いのに……」

お坊っちゃんの言葉にカイはジト目で呟いていると、今度は別のリングで盛り上がる。

盛り上がると言っても笑いと生暖かい微笑みで……、だが。

「おおーっと！？　子供です！！　思いきり場違いな小学四、五年に見える子供だ！」

超の言葉に感化されたのか、ネギ先生と学ランの少年もまほら武道会に参加しているようだ。

カイはネギの実力なんて知らないが、エヴァンジェリンの弟子になっているという事をエヴァンジェリン本人から聞いた事があり、まあ予選会ぐらいなら楽に通過するだろうと見ている。

因みにエヴァンジェリンには相変わらず『妖怪オババ』と言っておちょくっている。その分手痛い仕打ちを負わせられているが。

カイはチラッとお坊っちゃんの方を見ると、仮面を付けたかのように無表情であり、逆に恐い。

「今情報が入りました。Ｂ組のネギ選手は一部で話題の子供先生との事です！！　しかし一体何を思ってこの大会に参加したのか！？」

（まあ父親を尊敬しているらしいネギ君にはこの大会で優勝して、一歩でも近付きたいんだろ）

何処か台本口調で実況する耕太にカイは心の内で答える。

魔法使いの間では英雄と呼ばれているネギの父親、ナギ・スプリ

ングフィールドはネギの目標としている人物。物心ついた時から父親の顔なんて見た事なかったネギが父親を尊敬し目標としている。

何とも涙をそそられる話ではあるが、しかし顔もろくに見たことがない父親をよく尊敬出来るなとカイは思う。父親が『サウザンド・マスター』として尊敬されているからとか、周りがナギは英雄だとか言っているからネギは尊敬しているのだろうか、などと勝手な推測をしてみる。

そんな単純な理由ではないのだろうが、カイにしてみればどうでも良い事だったので思考を中断する。

そんなこんなでネギが組するB組の試合が開始され、二メートルを超しそうな巨漢の男がネギをリング外へつまみ出そうとするが、ネギは男の懐に入り左の拳を身体に叩き込んで吹き飛ばした。

これには周りは一瞬にして静まり返り、唖然としている。

「こ、これはぁっ!?　信じられません!!　何か武器を使ったのか!?　噂の子供先生、体重差一〇倍はあろうかという巨漢を吹き飛ばした!!」

実況の耕太も有り得ないネギの実力に驚きつつも、

「それもその筈、ネギ選手は古菲選手の一番弟子との情報が入ってます!」

ネギが古菲の一番弟子という情報を流すと、古菲を心底尊敬している中武研の人達は歓声を上げて驚いている。

ネギが予選突破へ順調に踏み出している中、カイは大きい欠伸をして、お坊っちゃんは他の試合を見ている。この二人はネギには興味が無い様子だ。

それからE組では長瀬と小太郎が何故か分身対決をしており、C組ではセーラー服を着ている神楽坂と桜咲が屈強な男達を倒し、F組では高畑先生とエヴァンジェリンが参加者を圧倒している。

何とも順当なメンバーが勝利していてカイとしては見応えが無い中、突然女子の黄色い声援が耳に入ってくる。カイは嫌な予感がしつつ苦そうな顔を浮かべて其方へ視線を向けると、まほら武道会に参加したクラスメイトの親衛隊の姿。

「A組ではかの有名な『お姫様』のパートナー的存在である『プリンス』という異名を持つ加藤浩輝選手がリングに立っている！　彼の親衛隊が黄色い声援を送る中、A組の男達は嫉妬と憎悪の禍々しいオーラを放っているぞ！　これは一波乱あるのか！？」

司会兼実況の耕太もクラスメイトが予選に参加している事で若干テンションを上げている。

異常な雰囲気で覆われているA組の試合が耕太の合図で開始されると、A組の選手達は浩輝目掛けて一斉に四方八方襲い掛かった。

浩輝はフッと微笑むとひらりひらり躱して、一人一人選手達をリング外へ投げ飛ばしている。嫉妬と憎悪に支配された選手達の凶暴さをビクともせずに浩輝は微笑みを浮かべたままリング外へ投げていく。

「流石は『プリンス』加藤浩輝！　凶暴な男達を前にしても微笑み

一つ崩さない！　これは彼の親衛隊も更に人が増えるのではないか！？」

相変わらずよく分からない強さを持っている浩輝に耕太は熱く熱く実況している。所々声が上擦っているが気にしないでおく。

「しかし浩輝は強いな。組み合わせ次第では本戦でも結構いい線行くんじゃないか？」

二〇人居たA組も浩輝を含めて四人になっているが、まあ浩輝は本戦に進む事が出来るだろう。まだ試合は終わっていないがそうなると確信したカイはお坊っちゃんへと視線を移す。

するとお坊っちゃんは浩輝を射抜くような眼光を放ちながら見ている事に気付き、カイは訊ねる。

「どうしたんだ？　そんな怖い顔して」

飄々と声を掛けるカイにお坊っちゃんは浩輝から視線を逸らさずに答える。

「加藤君なんですよ」

「ん？　何が？」

「クラスで篠宮君以外に出自を知らない人間は加藤君の事なんですよ」

……は？　とカイは最初、お坊っちゃんの言った事を理解出来なかった。

それでも少し時間を掛けてお坊っちゃんの言葉の真意を理解していくと、カイは苦笑じみた声を洩らす。

「は、はは、何言っているんだよお坊っちゃん。浩輝は普通の一般人じゃないって言いたいのか？」

それはカイにとって少々信じられない事で、認められない事だった。

「しかし加藤君の事をいくら調べても麻帆良に来る以前の事を掴めないんですよ。家の力を持ってしても」

お坊っちゃんも認めたくない事のようで、ギリッと奥歯を噛み締めて両の拳を握り締めている。このお坊っちゃんを見てカイは本当なんだと悟る。

お坊っちゃんは語る。人道的にいけない事だと分かっていてもクラスメイトの情報収集を行っていた。ある程度情報収集して何かしら危ない人間が居ないか探っていたら、二人だけ出自が分からない人間が出て来た。

一人は篠宮カイ。二年前に麻帆良に来た以前は戦争で色々と暴れた人間。この世界の人間でも何でもない為、出自を調べる事はまほネット（深度Ａ情報）以外なし。

一人は加藤浩輝。二年前に麻帆良に来た以前については全く足取りが掴めない少年。両親も不明。全く身寄りがない。加藤浩輝とい

う存在が本当に居るのか分からない。

この事を聞いてカイは顔を引きつらせる。

「じゃ、じゃあ浩輝は一般人ではなく……」

「何か訳ありの人間ですね。しかも君よりも得体が知れない。はっきり言って怪しさは篠宮君よりも上ですよ」

「でも浩輝に何かあると思うか？　俺じゃ説得力は無いけど特に何か力を持っているようには思えない。ただ他人より才能が豊かぐらいで……」

「そうですね、僕も加藤君をじっくりと観察してみたんですが、全く分かりません。特に魔力がある訳でもなく気が強いという訳でもない。見る限りでは才能が豊かな一般人ですよ。見る限りではね」

カイにしてもお坊っちゃんにしても浩輝がどうも裏の人間とは到底思えなかった。

そりゃ『ウルティマホラ』の優勝者である古菲に勝てるなど、普通ではない部分があるが、とても裏の人間とは思えなかったのだ。裏の人間でもカイみたいに学園の不良にやられる事も有るが、この世界の裏の人間ではそういう人物は殆ど居ないと思われる。

となるとやはり浩輝は裏の人間なのかもしれないが、魔力や気が全くしないのが気掛かりだ。どんな魔法使いだろうと魔力を完全に隠しきるのは出来ないらしく、魔力の流れは常に存在している。だとすると高畑先生みたく呪文詠唱出来ない体質かと思ったが、魔力自体は使えるので論外。

色々と考えてみるが全く分からず、浩輝への疑心がどんどん湧いてきてしまう。カイはそれを振り払おうと首を振って、

「でもさ、浩輝の出自が分からないからってアイツが何かするとは思えないんだが？」

何故か浩輝の肩を持つかのような言動を取る。

この二年間、クラスメイトで一番仲が良かったからかもしれない。

「そうですね。麻帆良学園に害を成すとは思えませんが……」

そう言ってお坊っちゃんはチラチラっとカイを見たり逸らしたりする。何か言いづらそうな感じをしているが意を決して、

「もしかしたら加藤君の狙いは篠宮君かもしれませんね」

「……、俺？」

意を決して告げられたお坊っちゃんの言葉にカイは首を傾げる。

お坊っちゃんは一回首を縦に振って、

「この二年間、加藤君は篠宮君と友人として行動する事が多かった。友人なら別に一緒に居たって問題はないから良いんですが、ただ加藤君が一番仲良かったのが篠宮君でした。篠宮君と同じ時期に入学した加藤君は〝初めから篠宮君と仲良くしよう〟と画策していたら加藤君の本来の目的は――」

「俺の監視……、ってところか？」

「ええ。君はこの世界にはない力を持っているのでしょう？　だとしたらその力を奪うか、何らかの事情で監視している……、という所が妥当でしょうか」

「監視……、ね」

カイはこの話の流れである男を思い浮かべる。

レアン・メルフェス。カイの額に宿った未来の紋章を執拗に追い求める、カイと同族の男。今のところ未来の紋章を欲しがっている人間はレアン一人だけなので、もしかしたら……。

「……、考えたくねえな」

そこまで考えてカイはそう呟いて思考を止める。何だか色んな事を想像してしまったが、今のはあくまで可能性の話でしかない。もしかしたら真実は違うかもしれない。

ただカイは信じてみたいとは思った。ちゃんと如何なる真実でも受け止める覚悟をしておきながら。

カイの視線の先には本戦出場を果たした加藤浩輝の姿が在った……。

麻帆良祭一日目3（後書き）

どんどん更新速度が遅くなっていきますね。

こんな感じで保てるのだろうか……

今回はまほら武道会予選という事ですが、淡々と済ませました。大して代わり映えしないんで。

あとまほら武道会に参加するのはカイではなく浩輝です。

カイでは一回戦負けしてしまうかもしれないですしね。

そしてこの浩輝が悪い意味でまほら武道会をめちゃくちゃにしてしまうかもしれません。

麻帆良祭一日目４

現在麻帆良学園は中夜祭が繰り広げられている。中夜祭と言っても結局は祭りでしかないので昼間と変わりようはない。しかし未成年者にもアルコールが飲めるなど、法律で禁止されている事を平気で出来るみたいで学園側も容認している。いったいこの麻帆良学園に日本の法律は存在するのだろうか？

取り敢えずまほら武道会予選も終わり、今日の目玉イベントは消化したが麻帆良学園内の賑やかは衰えていない。学園生徒も外から来た一般人の客人も世界樹周辺で中夜祭を楽しんでいる。

そんな中、篠宮カイは中夜祭を放ったらかしにして、人気がなく鼻につくような生臭い下水道に居た。此処は麻帆良学園の地下に存在しており、麻帆良学園に居る殆どの人間はこの下水道の存在を知らない。そして川のように大量の下水が流れている。それに広さも十分にあり、一般的なトンネルぐらい広く下水の流れる音が反響して不気味な雰囲気を醸し出している。

それに加えてネズミやゴキブリなど、人間が見ただけで不快になる生物も繁殖している。そんな場所にカイは何故居るのかと言うと、目の前に居る少女と話をする為だ。

少女の名前は超鈴音。学園人気Ｎｏ．１屋台『超包子』のオーナーで様々な研究部に所属する『麻帆良の最強頭脳』。そしてまほら武道会をＭ＆Ａを行って一気に麻帆良祭の目玉イベントにした少女。

チャイナドレスを着て、ニッコリと笑っている超を前にしてカイは目を鋭くさせる。

「先程のまほら武道会、盛り上がりは上々で何よりだ」

「この学園の人間は皆祭りが好きだからネ。明日は更に成功するんじゃないかな？」

「ふん。それにしても驚いたな。まほら武道会の事なんて俺は知らなかったんだが？」

「ああ、悪かたヨ。しかし君には最終日に働いてもらうだけの予定だったから教えなくても良いと思っていたネ」

「……、そうだな、お前の言う通りだよ。知っていてもいなくても計画に支障は無いだろうからな」

悪びれもなく平然と言ってのける超の言葉にカイはその通りだと言葉を漏らす。

確かにまほら武道会についてはカイは全く必要ではなく、役にも立たないだろう。この事はカイも重々承知している事で役に立てない事も分かっている。今はそれについて怒るような事はしない。

それよりも、とカイは超を射抜こうとするように目を鋭くさせたまま、

「何故一般人の耕太をまほら武道会の司会にさせた？　いったい何のつもりで巻き込みやがった？」

耕太を何故司会役にさせたのかと憤りをじんわりと滲み出しながら問う。

魔法関係者ならまだしも魔法の事など知らない一般人を司会にさせるなど、いったい超は何を考えているのかカイには分からない。

少々殺意をも滲み出しているカイに超は変わらず微笑みを崩さず、

「なに、彼には好意を向けていた少女の本当の死因を教える事を条件に司会をやってもらっているだけネ。彼には魔法の存在や計画などを教えてはいないヨ」

は？　とカイの頭に疑問符が浮かび上がり首を傾げる。

「じゃあ何か？　耕太は魔法の存在や計画なんて知らずにまほら武道会の司会をしてると言うのか？」

「そう言ってるネ。ただ彼は朝倉の死因が本当は何なのか気になっているみたいだったから、それを利用してまほら武道会の司会にさせてもらったネ」

「……」

超は耕太をまほら武道会に司会にさせた理由を語ると、カイは思わず言葉を失ってしまった。

カイは朝倉という人名に聞き覚えがある。それは修学旅行の時、関西呪術協会総本山で起きた襲撃事件による犠牲者の一人に、朝倉という少女が居た筈だ。その少女は耕太と同じく報道部である事を今思いだす。

木村耕太は朝倉和美に好意を寄せていたらしい。これはクラスメイトのカイも知らない事だし、正直カイにしたら耕太が朝倉に好意を寄せているなんて言い方悪いが興味すらないしどうでもいい。他人の恋愛事情なんて関わらない方が良いに決まっている。

そう言えばとカイはまた思いだす。修学旅行が終わり学園内に三人の少女が死亡した情報が流れた時、耕太の顔が青ざめて放心していた事を。言葉では簡単に表せない絶望を受けてしまっていて、カイが話し掛ける事を躊躇うほどに焦燥し切っていた。

それは好意を寄せていた少女が死んだ事に絶望していたのだと、今更ながらに思う。

それから耕太は朝倉達が不慮の事故死と言うことを認めず独自に調査していたが、学園側の情報統制はしっかりされており耕太一人では真相など判明する事は無かった。いつまで経っても少女達の死の真相が分からない事で諦めようとしていたところを、超に利用される形となっていたのだろう。

私に協力すれば朝倉の死の真相を教える、とでも言って超は耕太をそそのかしたのだろうか。まあ超が”本当の事を言っていればの話だが”。

「私は未来を変える為なら誰だって利用する。何だって利用する。私のやり方で……」

微笑みを崩さず、だが真剣だという事を言葉で語る超にカイは目を閉じて心の中で溜め息を吐く。

カイは知っている。そう簡単に未来が変わらない事を。例えこの

世界に魔法をバラして未来を変えようとしても、超が思った通りの未来になるとは限らない。未来が変わったとしてもそれが超にとって良い未来になるとは限らないのだ。

カイが額に宿している未来の紋章を上手く使えば思い通りの未来を手にする事が出来るのだろうが、完全には使いこなせていないどころか振り回されている傾向にあるカイでは超が目標とする良い未来にする事も出来ない。

そもそも異世界の未来を未来の紋章が思い通りにする事が出来るのか怪しいものだが。いや、未来の紋章の力が使えているから未来の紋章が望めば思い通りにする事も可能か。

「ともかく耕太はまだ一般人っていう事で良いんだな？」

「うむ、彼に戦える力も無いし、まほら武道会までの協力者という事ネ。あとは自由に好き勝手させるヨ。安心してほしいネ？」

「それなら構わない」

取り敢えず耕太にはまほら武道会だけの協力者（耕太には自覚なし）という事で一応ケリは着いた。

そしてカイは視線を超から後ろに向け、

「そろそろ出てこいよ。居るのは分かっているんだからさ」

冷たく言い放つと陰からスッと長身の褐色女が現れた。

龍宮真名。超のクラスメイトでカイとは共に学園の敵を排除して

きた仕事仲間。

薄汚れたこの場所には似合わない一般的な巫女装束を着ており、普通に見れば魅力的に思えるだろう。

カイはこの下水道に来て超と話を始めた頃から誰か居る事には気付いていたが、それが真名とは分からなかった。この場所に真名が居るとは思わなかったが、カイは表情には出さない。弄られるのは嫌いだから。

「何でお前が此処に居るんだ？」

「龍宮さんも私の計画に協力してくれる事になったネ。君が此処に来るほんの少し前の話だが」

カイは真名に聞いたのだが超が代わりに答えた。

その内容がカイの表情を暗く落とす。

「まさか龍宮までもが超の計画に協力するなんてな。そんなに報酬が良かったのか？」

ニヤッと賤しい人間が浮かべるような笑みをしてカイは真名に問うと、真名は真名でフッと冷笑し、

「それだけじゃないさ。超の話を聞き、超の志に賛同し、自分の意志で超に協力する道を選んだんだ。報酬が良かったからだけではないんだよ」

「……、そう。ご立派なことで」

カイは真名から視線を逸らして息を吐いた。

真名はカイとは違い報酬だけでなく超の志に賛同して協力する事を誓っている。裏の世界では冷酷非情な暗殺者と呼ばれている真名でさえも、今現在で起こっている『ありふれた悲劇』に憂いを抱いて何とかしたいと思っているのだ。

それなのにカイは自分の事ばかり考えている。自分に掛けられた呪いを解く為だけに超に協力しているだけなのだから。他人の為を思える真名にカイは何となく羨ましさを覚えた。

もう長年と他人の為に何かをした事なんて無いカイは自分が恥ずかしくさえ思えてくる。自己中心的な生き方で周りからしたら最低な人間かもしれない。

だからと言って今更生き方を変える訳にもいかないし変えるつもりもない。異世界の事情に必要以上に関わりたくないから。

……、まあ存在しているだけで関わっているのだが。

「ま、龍宮がこちらに着いたのは大きいかもな。麻帆良学園内でも屈指の実力者だし」

「そうネ、いくら君でも学園長や高畑先生を相手には出来ないだろうしネ」

「……、悪かったな弱くて」

「それに君には君でやる事があるのではないかな？」

「……、何の事を言っている？」

不意に超が言った事にカイは一瞬だけ目を見開き、冷静さを保とうと表情を変えないで問う。

超は一度息を吐いて、

「まあ君には無理をしないでほしいだけネ。ただそれだけヨ……」

何かに、誰かに脅されているかのような素振りにカイは自然と目を細めて見極めようとする。

（超が恐がる相手なんて学園内には居ない筈だ。世界に変革を成そうとする奴が麻帆良学園内の人間で恐がる筈がない。だとすると外から来た人間……、アイツか？　と言うよりアイツしかいないよな……）

少し考えてみた結果、カイは超がレアンと裏で繋がっているのではないかと思い始めてきた。

それが真実とは思わないが少なからず何か繋がりがあるのではないかとカイは思っている。

だからカイは超に問うてみる。

「お前、あの男と仲間です、なんて言わないよな？」

「それは無いと信じてもらいたいネ。いくら私でもあの男と協力し合える気がしないネ」

超もいつになく真剣な瞳で答える超にカイはカイで一度目を閉じて、

「……、一応信じておこうか」

取り敢えず超の言う事を信じる事にした。

超の計画に協力すると言っても完全に信用する事は出来ないが、無駄に疑って計画に臨む訳にはいかないので今は超の言う事を信じる事にしたのだ。超とレアンに何らかの繋がりがあろうと、今だけは黙認して流す事にする。

一応だがカイが信じてくれた事に超は心中で安堵していた。そもそもレアンとは今日直接的に初めて会ったばかりなので、仲間とか手を組んでいるとか深い繋がりはない。

まあカイの情報をレアンから間接的に受け取ったから繋がりは有るのだが……。

ともかく今ここでカイが自身の下から離れて学園側に着かせるのだけは超は避けたかった。事前に得ていたカイの情報が正しければ”未来を視れる”いう能力は、味方に着ければメリットが大きい。戦術的にも戦略的にも”未来を先読み”してもらえば敵がどう戦術を取ってくるか分かり、対策を練る事が楽に出来るのだ。

その能力を有しているカイが学園側に寝返って能力を使用されてしまったら、と思うとやはりカイを手放す訳にはいかない。それだけカイの戦略的価値は大きいのだ。例え直接戦力になれなかった事を想定して差し引いても価値は大きいと見る。

だから超は今の時点でカイが離反しない事に安堵した。

「信じてもらえて嬉しいネ」

「ふん、報酬を貰えなければお前に着いている意味がないからな」

やはりカイは変わらず報酬……、自身に施された呪いを解呪する薬を手に入れる為だけに超に協力しているようだ。だが超からしたらこういった単純な行動原理に従ってくれる方が、手駒としては動かしやすい。

計画が成功した暁に渡す報酬の薬は超の手元に管理されているので、カイが裏切る事も無いだろう。何とも単純な人間なんだろうか、この女顔の少年（実年齢的には老人）は。

「それじゃ話は一通り終わったから俺は戻らせてもらう」

「わかたヨ。明日の夜、最終日の計画の最終確認を行うから来るようにネ」

「ああ、分かった」

話を一通り終えたとしてカイは踵を返して下水道から去っていく。その途中偶然にも這いずり回っていたネズミを踏み潰して体液をぶちまける貴重な経験をしてしまい、カイはテンションが急下降に陥りながら去っていった。

その一連の流れを見ていた超と真名は顔を顰めて気分を害していたが、その出来事を無かった事にして淡々と話を始める。

「ところでカイが口にした〝あの男〟って誰のことだ？」

「ん？　龍宮サンがまさか彼の事について気にかけるとは、そういう気でも有るのカナ？」

真名がカイが話に出した〝あの男〟について超に訊ねると、超は何かピンときて道化じみたにやけた顔をして質問を質問で返した。

それに対して真名は呆れたように溜め息を吐き、

「アイツは……、色んな意味で弱いからな。放っとくと近い内に死ぬんじゃないかと思ってしまうんだ」

僂げに表情に影を差して今まで見てきたカイの実情を口にする。

この二年程の間で共に仕事をする機会があったが、その度危なっかしいなと思いながらも並みの敵に殺されるような奴ではないと思っていた。

だがここ最近、マリアが麻帆良学園に襲撃してカイが撃退に当たった時から、真名の中ではカイが近い内に死ぬのではないかと思うようになっていた。更に修学旅行の時でも瀕死の状態に陥って命を落としかけていた事もあった。余計にカイが近い内に死んでいく予想が濃くなっていくのだ。

それにカイは弱い。色んな意味で弱い。

未来の紋章というまるで神様のような存在を宿していると言って

も、カイ自身の力は大したものではない。紋章の力が宿った札を使い、黒い手袋に内蔵された銀糸を這わせれる事しか出来ない。

未来の紋章や密かに持っている魔剣ティルヴィング自体が強大な力を宿していても、一介の人間であるカイでは強大な力を完全に操って使用する事も出来ない。カイが意図して使えるなんて強大な力の数分の一、数十分の一程度しか操れない。

加えて一人で強敵に挑もうとする考え自体も駄目だろう。誰にも助けを求めず一人で何とか片を付けようとする考えには困りものだ。

今までは一人で生き抜いてこれたのかもしれないが、それは最近では通用しない事を今のカイは分かっているのだろうか？　と真名は思っていた。

最強でもないくせに強がって他人を巻き込まず一人で敵に戦いに挑むなんて、どう考えてもマゾだ。マゾヒストだ。

無様に逃げてでも生きたいとか思っているくせに、反して自分の戦いに他人を巻き込みたくないと考えているカイは何なんだと真名は思う。自己中心な性格だったらなりふり構わず他人を巻き込んで捨て駒にして自分は生き延びれば良いのに、とさえ思えてくるのだ。

本当に、よく分からない。

そんな馬鹿は放っといても構わないのだろうが、それでも真名は放っておけない。

その原動力はかつて『魔法使いの従者』として過ごしていたせいか、それとも先日自覚してしまった『感情』によるものか。

どうでもいい。

どちらにしろ真名はカイを放っておけないので、少しでもカイの助けになれるように情報を得たかった。

カイに感謝されなくてもいい。ただ真名がそうしたいから。

超も流石に茶化す気分は無くなり、〝あの男〟、レアンについて語る。

「名前は確かレアンと名乗っていたネ。容姿は黒髪に特徴的な真紅の瞳。身長は龍宮サンより少し低い程度で白いローブを羽織っていたから体型までは分からない。取り敢えず一言で言えば得体の知れない相手ヨ」

「得体の知れない相手……」

「正直言うとレアンという男には関わらない方が身の為と忠告させてもらうネ。あれは龍宮サンでも〝どうにかなるレベル〟ではないヨ」

真剣さが伝わってくる超の言葉に真名も思わず息を呑んだ。

「……、それ程危険な奴なのか？」

「まああの男が纏っていた雰囲気による推測だがネ。あれは色々とヤバい事に突っ込んでる者の雰囲気ネ。例えるなら〝神になる為に入ってはいけない領域に足を踏み入れてしまった者〟、カナ？」

「……、何だその例えは？」

レアンの事をよく分からない意味で例える超に、真名は何だか集中していた意識を削がれてしまった。

「実際のところは分からないけど人が手を出してはいけない禁術に手を出している気がするネ。あくまで憶測に過ぎないが……」

「……、超がそこまで言うという事は相当に危険な奴なのか……」

科学に魂を売ったマッドサイエンティストの超でさえも無駄に関わりたくないと思っている事に、真名は手を顎に当てて考える。

それ程までに危険な相手なら超の言うとおり関わらない方が身の為なのだろう。

だがそれでは……。

「一応忠告はしておいたネ。どうするかは龍宮サン次第だが、私の計画の事も忘れては困るヨ？」

「ああ、分かっている。仕事は疎かにしないさ」

「それなら良いネ。それじゃ　”明日のまほら武道会の方もよろしくネ”　」

最後にそう言って超は立ち去っていく。

分かっているさ、と心の中で呟き、真名も生臭い下水道から立ち去った。

その頃、世界樹周辺では麻帆良祭一日目の打ち上げとして中夜祭が繰り広げられている。学生も客もはたまた先生までもが無邪気に騒いでいる。地面にシートを敷いて花見のように食べて、呑んで、酔っている者たちも居る。

その喧騒を尻目にお坊っちゃんは世界樹周辺を歩いていた。お坊っちゃんのクラスも中夜祭に参加しているらしく、その集団を捜している最中だった。

（全く……、学園祭だからと言って羽目を外しすぎですね。いくら何でもアルコールを容認するなんて……。ま、僕が何を言っても無駄なんですが）

「一人で何歩いているんだ、お坊っちゃん？」

お坊っちゃんが現状について愚痴みたいなのを心中で零していると、後ろから誰かがお坊っちゃんの肩にポンと手を置いた。

お坊っちゃんはゆっくりと後ろを向くと、麻帆良学園で殆どの人間が知っているであろう黒髪短髪の少年が居た。

名前は加藤浩輝。お坊っちゃんのクラスメートの一人。

キリッとした容姿から女子からの人気があり、分け隔て無く誰とでも接する性格からクラスでも人気は高い。身体能力も高く喧嘩も強い、才能溢れた少年だ。

自分の肩を叩いたのがよく見知るクラスメートの顔という事もあり一応胸をなで下ろすが、どうも目の前に居るクラスメートの情報が麻帆良学園に来る以前の情報が無い為、妙な警戒感を抱いてしまう。

完全に信用してはいけないと本能が警鐘を鳴らしているのだ。

それでも普通に接するべく表情はいつもの通りで。

「加藤君こそどうしたんですか？　明日の朝からまほら武道会の本戦があるのに朝まで中夜祭に参加ですか？」

「大丈夫だって。ちゃんと途中で抜けて明日に備えるから」

「まあクラスの委員長としては君に抜けられるのは困るんですがね、出し物について」

「まほら武道会が終わったらちゃんと働くぞ？」

「それなら結構。稼ぎ頭の君が抜けてしまっては一位になるのは難しいでしょう。あの女顔の篠宮君とは違ってね」

「酷い言われようだな、アイツ」

お坊っちゃんの辛辣な言葉に現在この場所には居ないカイが不憫だなと、浩輝は思ってしまった。

実際特に貢献するような事はしてこなかったので、このように酷い言葉を言われても仕方ない。

「そう言えばそのカイは？　まほら武道会会場までは一緒に居たんだが、いつの間にか居なくなっててさ」

「それならトイレですよ。麻帆良祭ですからトイレにも行列が出来ていて、此処に来るまで時間を要すると思いますよ」

予選会会場から忽然と姿を消したカイについて浩輝は心配していたが、会場でカイと観戦していたお坊っちゃんは嘘の答えを告げる。

嘘と言ってもお坊っちゃんはカイが本当にトイレに行っているのだと思っている。まほら武道会予選が終わってからカイとお坊っちゃんは途中まで一緒に世界樹周辺へ向かっていたのだが、カイがトイレに行きたいと行って行列に並んだ所を見ている。あまりの長い行列に待つのは時間の無駄だと思ったお坊っちゃんはカイを置いて先に此処までやって来たのだ。

その言葉を聞いて浩輝はふーんと頷いて、

「それじゃ先にみんなの所に向かうとするか。それにカイの事だ、来る途中で飽きて帰ったかもしれないし」

「……、確かに篠宮君ならありえそうですね。あの人、ところどころ自由奔放さな性格が有りますから」

「んじゃ、さっさとみんなの所に向かうか」

「ええ」

浩輝とお坊っちゃんは大勢の人々が騒ぐ中夜祭の中へと溶け込んでいった。

麻帆良学園には無数に建ち並ぶビルの区画がある。其処は主に麻帆良大学工学部などが研究に使うビルなどであり、その中には研究所を設置していて大勢の人間が働いている。

今は麻帆良祭という事もあり大多数の人間は祭りに参加しているが、一部の人間はこんな時でも研究に没頭していたりもする。

そんなビルの一室、電気は点いておらず真っ暗な部屋。明かりは麻帆良祭で放たれている光がこの部屋を僅かに照らしているだけ。そんな薄暗い部屋で一組の男女が居た。

麻帆良祭で起こっている喧騒も違う部屋で行われている研究の音も全く聞こえない。まるでこの部屋だけ世界から切り離されているような感じ。

その部屋で一組の男女が居るのだが、恋人みたいに甘ったるい雰囲気は醸し出してはいなかった。逆に殺伐とした空気が流れている。

艶のある黒髪に血よりも澱んだ紅い瞳を持つ白いローブを着た男、レアンは微笑みの表情を浮かべながら殺気を滲み出して女の首を絞めていた。

「マリア、本当に君は何がやりたいんだい？　勝手にカイを殺そうと行動していたり……。いい加減にしないとそろそろ切り捨てるよ？」

「……う、ぁぁ……」

レアンに首を絞められているライトグリーンの髪の女、マリアは今にも窒息死してしまいそうな程に苦しんでいる。

だがもがき抵抗するような事はしない。いや、抵抗さえも許されない程に追い詰められているのか。ともかく死の淵まで追い込まれているにも関わらず抵抗はしない。

「これ以上は死ぬか……」

レアンは面白くなさそうにマリアの首から手を離す。

窒息の苦しみから逃れられたマリアは必死に新鮮な酸素を肺に取り込もうと大きく呼吸を繰り返している。

その間にレアンは部屋に設置されている事務用の机に座り、足を組んでマリアを見下ろす。その眼は氷よりも冷たかった。

「全く……『彼』には感謝しなくてはならないね。暴走した君を止めてくれたんだから。もしあのまま君がカイを殺していたらと思うと……」

「……し、しかしカイは使い物になんてなりませんよ！？　未来の紋章を持っているからと言って完全に使いこなせていないし、殺しても何の問題は無い筈です！」

「カイを殺したら未来の紋章は何処かに逃げる。そうなってしまったら追うのが困難になってしまうな？」

「生かしたまま捕まえて洗脳したとしても『例の実験』に使えるかどうか！？」

「分かっていないな、未来の紋章の本質を」

「しかし！」

「……、そこまでカイを殺したいのか……」

何を言ってもカイを殺そうという意志を曲げないマリアに、レアンは心底呆れたように息を吐く。

レアンも以前はカイを殺して未来の紋章を奪おうと躍起になっていたのだが、長く追いかけっこが続きすぎたせいでカイを殺す事を躊躇ってしまっている。まあ単に楽しいこのゲームを終わらせたくないと考えているだけだが。

取り敢えずカイを殺そうと躍起になっているマリアを静まらせるためにも、レアンは口を開く。

「分かった、カイを殺すこと、許可しよう」

「！　本当ですか！？」

このレアンの言葉にマリアは顔を明るくさせ、歓喜に満ちた表情をする。

ただし、とレアンは口角を引き上げ、

「カイの殺害に失敗したなら、もう戻ってくる必要はないよ」

「なっ……！？」

容赦ない突き放した言葉にマリアは絶句する。

もしマリアがこのままカイ殺害の為に行動するのなら、それ相応のリスクを払ってもらわなければならない。ここ最近になって二回程カイの捕縛に失敗しているマリアには、これ以上失敗する事は出来ない。

いくら有能なマリアであるとしても、レアンとしてはこれ以上失敗するような人間を傍に置いておく道理は無いのだろう。自分の従者であろうと……。

今マリアに二つの選択肢がある。

カイを殺す事を諦め今まで通りレアンの従者として行動するか、憎しみを抑えきれずカイを殺す事を選択するか。

いったいどっちを選べば良いかマリアは迷う。

いや、迷う必要はない。カイを殺す事に成功すれば今まで通りレアンの従者で居られるのだ。だったら迷う必要なんてない筈だ。

「分かりました。カイを必ず殺して未来の紋章も手に入れてみせます！」

マリアは決意を瞳に宿らせ、カイを殺す事を選択した。マリアの中はカイを殺す事で一杯であろう。失敗した時のリスクなんて考えてはいない。カイを殺せる自信があるのだろうか。

ともかくマリアはそう選択したのだ。レアンは微笑んで、

「それじゃ頑張って。良い結果を楽しみにしているよ」

ただエールを送るだけだった。

たったそれだけでもマリアには十分なようで、

「はい、楽しみにしていてください」

マリアは立ち上がって勢いよく部屋から去っていった。カイを殺す準備に取り掛かるのだろう。

そして一人部屋に取り残されたレアンはガラスの窓の向こうで楽しくやっている麻帆良祭の光景を眺める。今でも麻帆良祭は続いていてよく耳を澄ませば喧騒が聞こえてくる。

呑気なものだな、と思いつつも微笑みの表情は崩さない。

「さてさて、少しは楽しくなりそうかな？」

麻帆良祭一日目４（後書き）

随分と遅い更新になってしまいました。すいません。

まあ何とか生きてます。

これは本格的に月一、二回更新になってしまうかもしれませんね…。

さて、今回はまだ一日目が終わっていなく、予選会の後の話でした。

次は二日目の話です。

これからが大変なことになっていきそうです。

相変わらず更新が遅くなり、原作とは遠くなっていきそうですが、

これからも見てくださると嬉しいです。

麻帆良祭二日目1

麻帆良祭二日目。

とある学生寮の一室で一人の少年……、篠宮カイがベッドで毛布にくるまって眠っていた。

室内はカーテンから射し込んでくる朝日の陽射しによって多少はぼんやりと見えるが薄暗く、妙にどんよりとした空気が漂っていた。

無音が部屋を支配する中、ピピピとけたたましい音が鳴り響く。目覚まし時計の電子音だ。

快適な睡眠から無理矢理起こそうとする目覚まし時計にカイはもぞもぞと毛布から腕を伸ばし、ピピピと鳴り響く目覚まし時計を掴む。

「……、六時半……、何でこんな朝早くに鳴るんだよ……」

うっすらと目を開けて現在時刻を確認すると目覚ましを止めて再び眠りに就いた。

どうやらカイの麻帆良祭二日目はまだ始まらないようだ。

現在時刻六時三〇分。

まだ朝早いが麻帆良内を出歩く人間が結構多い。それは今日の目玉イベントである『まほら武道会』を観戦する為だろう。

昨日の予選会でも好評だったまほら武道会は本戦も見たいという人達が大勢居るので、我先にと場所取りのためにこんな朝早くから出歩いているかもしれない。

多くの人間がまほら武道会の本戦場所である龍宮神社に向かっている流れの中、一人の少年が眠そうに歩いている。

少年の名は加藤浩輝。

麻帆良学園本校男子中等部に在籍する中学生だ。

いつもは爽やかな顔をしている浩輝だが今日はやけに眠そうな顔を浮かべている。何故かと言われれば昨日からやっていた『中夜祭』を徹夜して先ほどまで参加してしまった事に原因がある。

浩輝だって最後まで中夜祭を最後まで参加するつもりなんて無く途中で帰ろうとしたのだが、規律にうるさいお坊っちゃんの監視の目をかいくぐり酒を呑んで酔っ払ったクラスメイトに絡まれ、逃げることも出来ず、結局はつい先ほどまで中夜祭に参加してしまったのだ。

ちなみにカイは途中から中夜祭に参加していたが浩輝がクラスメ

イトに止められている隙にカイはそそくさと帰ってしまっていた。
それに浩輝が気付いたのはカイが立ち去ってから一〇分後のことだった。

取り敢えず浩輝は学生寮に一旦帰って、シャワーで汗を洗い流してから再び制服を着て、こうして今に至る。

これからまほら武道会に出場するのにどうして制服なのだろうかと問われるかもしれないが、単に私服を闘いで汚したくないだけだ。別に私服が一着しか無いとかではなく、本当に闘いで私服を汚したくないというだけだった。

普通ならばボロボロにしてはいけない制服で出場するよりも一着ぐらいボロボロにしても構わない私服を着て出場するほうが無難だ。なのに浩輝は学校指定の制服を着て出場する。彼の考えていることが理解出来ない。

ともかく半袖のカッターシャツと紺色のズボンという制服を着て浩輝は会場へ向かっていた。

その時、眠たそうに瞼を閉じかけながら歩く浩輝の横にピタリと並んで歩く者が現れる。

浩輝はそれに気付き、チラッと横目でその姿を確認する。

艶やかな黒髪に背が高い顔は日本人風の男。日常時であれば色々と怪しまれる白いローブも麻帆良祭中であれば仮装もオーケーなので周囲からも怪しまれずに済んでいる。

ただ、その男にはこの麻帆良祭中でも周囲に馴染んでいない『異

常』なものがある。

それは血よりも紅く濁りに濁った紅い双眸。

この紅く、紅く、紅い瞳こそが男の全てを『異常』と物語っている。これがアニメのキャラなら美形だしカッコいいのかもしれないが、現実で見てみると異質で気持ち悪く見えてしまう。

普通の一般人でも赤い目を持つ人は居るのだが、この男が持つ紅い目は普通でも何でもない。この紅い目を直視し続ければ吐き気さえ催してしまうのだから。これがカラコンなら良いのだが生憎とそんなオチはない。

とにかく紅い目が全てを『異常』とさせる男と並んで歩く浩輝は、はぁ、と一旦一息吐く。

麻帆良学園本校男子中等部に在籍する加藤浩輝ならば普通はめちゃくちゃ怪しい男に話しかける行為なんてしない。

だが。

『こんな堂々と表に出て何をやっているんですか、あなたは』

浩輝はこの怪しい男に〝親しげそうに声をかけた〟。

いや、声をかけたと言っても〝男の頭の中に直接声をかける念話〟だが。

それに対して男も念話で浩輝に〝親しげに返答する〟。

『いやいや、偶には朝の散歩も良いかなと思っただけさ。運動もした方が健康的なんだろ？』

『運動？　あなたが体を動かす事なんて殆どないでしょうに』

『そうだね。確かに私は運動なんて面倒だしやりたくないしだるいし必要ないからね』

『どんだけ堕落しきった人生を送ってるんだあなたは……』

親しげに、随分と怪しげな男に仲良く話をする浩輝だが、この不毛な内容に呆れてしまう。しかも何処かしら自分の親友と呼べる存在と似ているから困る。ぐうたらな所とか。

ともかく浩輝は本題に移るように促す。

『それでこんな朝早くから俺の前に姿を現した理由は何ですか？』

その問いに紅目の男は爽やかな笑みを崩さず、

『私の従者が君の親友に襲いかかるそうだ』

『……はい？』

『つまりカイを殺しに行くそうだという話』

「な、にやってんだアナタは！」

浩輝は男から告げられた事実に眠気がふっ飛び念話でなく声で、しかも大声を出して男を睨みつける。すると当然のごとく浩輝がい

きなり大きい声を出したので周りにいる人々が、何だ何だと立ち止まって浩輝に視線を浴びせる。

すいません何でもありません、と浩輝は引きつった顔をしながら謝ると、浩輝に視線を向けた人々は再び歩み始める。

思わぬことで注目を浴び恥ずかしい思いをしてしまった浩輝は、冷静になるために浩輝は一度深呼吸をして男を睨む。

『どういう事ですか？　カイを殺すだなんて。あの人はあなたの命令無しでそんな暴挙を起こすなんて……』

一方、浩輝に睨まれている男は変わらず微笑みを浮かべている。

『どうも彼女はカイが憎いらしくてね。私が殺すなと命令しても昨日もカイを襲撃しに行くから手に負えなくなってね。だったらいっそのこと彼女の思うがままに行動させてみようと思ったんだ』

『思ったんだ、じゃねーよ!!　あの人は京都でカイに殺されかけていたんですよ？　どうして止めずに好きなようにやらせるんですか!?」

浩輝は念話で男の頭の中に怒号を叩きつける。その内容は当事者にしか分からないようなことだった。その内容を知っている浩輝はもう”麻帆良の男子中学生”という一般人の顔はしていない。もはや裏の事情を知る顔へと変貌している。

そんな浩輝に怒号を浴びせられた男だがやはり微笑みの顔は変わらない。

『彼女には長い間私の為に働いてくれたからね。一度くらい彼女の思うがままに行動させたかったんだ。まあ何だかんだで生きて帰ってくるんじゃないかな？』

『……』

どうも胡散臭い、と浩輝は心底思う。男は変わらず微笑みの顔を浮かべているのだが、その顔が胡散臭いのだ。本当にそんな事を思っているのかすら怪しい。

そもそも本当のことを言っているのか？

正直に言ってこの男は目的を達成させるなら味方すら裏切る性格をしているのだ。はっきり言ってこの男を完全に信用も信頼も出来ない。

ただ浩輝にとってこの男には借りがある。大きく、返しきれない借りがある。いや、恩と言った方が正しいか。

怪しげなものを見るような信頼していない目で見てくる浩輝に男は肩を竦めて息を吐く。

『ま、彼女が生きて帰ってきたらカイは殺されたという事になるからな。未来の紋章が逃げないように手を打っておかないと』

『マリアさんはカイを殺すつもりで行動するんですよね。俺も援護に向かった方が良いんじゃないですか？』

『援護か……。君には「まほら武道会」に参加しなければならないじゃないか。それに君はカイをその手にかける覚悟は出来ているの

かな？』

『……』

何処か皮肉った男の言葉に浩輝は押し黙る。確かに浩輝にはこれからまほら武道会に参加しなければいけない。寄り道をしている暇は無いのだ。

それに。

『まほら武道会には君の目的とした人物と戦える機会じゃないか。こんな機会をみすみす見逃すのかな？』

『……チッ！』

男の追撃に浩輝は男から視線を外して舌打ちする。

浩輝はある目的のためにまほら武道会に出場した理由がある。それは浩輝にとって何よりも代え難い目的。優先順位では一位の目的だ。

それがある限りまほら武道会を辞退することは出来ない。

『だから君は自分の目的の為に行動すれば良い。こちらの事は私が何とかしよう』

『……、本当ですか？』

『ああ、本当だとも』

やはり胡散臭い微笑みを浮かべながら答える男に浩輝は苦い顔をしながらも信じざるを得なかった。

誰もこの男に逆らえる事が出来ない。反抗の意志を見せたらその後の運命は決してしまうから。

『それでは俺は先に行かせてもらいます』

それだけ告げると浩輝はその男から逃げるように足早に歩を進めていった。

今からまほら武道会本戦に出場する浩輝の後ろ姿を眺めていた男はフッと口角を引き上げる。

（さてさて、これでお祭りも少しは面白くなってくれるかな……？頑張って面白くしてほしいな、ヒロキくん？）

男は心の中でひとしきり笑うと、人の流れに逆らうように踵を返してそのまま何処かへ去っていった。

「随分と人が多いな……」

異常と呼べる紅目の男と別れた浩輝はまほら武道会の本戦会場となる龍宮神社の入り口へとたどり着いていた。

その入り口だけで人が溢れかえるように群がっていて、なかなか先に進む事が出来ない。それだけまほら武道会に期待している表れなのだろうが。

ともかくこの人混みを掻き分けてでも進まなくてはいけず、浩輝はうんざりとしながらも強引に龍宮神社の中へと入っていく。龍宮神社の中は湖に面した所に建てられており、回廊の真下は湖となっている。中央には普段は能舞台として使用されている舞台があり、その向こうには拝殿が存在している。

その拝殿がまほら武道会本戦に出場する選手の控え室となっており、浩輝は一旦其処を目指して歩く。

（しかしこうも四方から一般人が見るんだよな。これは覚悟を決めないと。……いや、もう決めてるんだけど）

決戦となる舞台は四方から見れるように湖の上に作られた１５ｍ×１５ｍの能舞台だ。と言うことは死角がなく、下手な真似は出来ない。ただでさえまほら武道会本戦出場者は裏の人間が多いので、馬鹿みたいに魔法や気を使った技を使えば裏の人間はおろか一般人にも何者かと疑われかねない。

昨日の予選会でさえ『遠当て』なるものを使用した表世界の人間がいてネットに情報が流れている。これがまほら武道会主催側の何らかの仕掛けとして観客達が取ってくれれば良いのだが、裏世界の人間にはあまり知られたくない。

……知られたくないが。

（これまで上手く騙してやってきたんだけどな……。それも今日までかな）

浩輝は何かを諦め、何かを吹っ切った顔をして拝殿へと向かう。もう何もかも捨て去るような、踏みにじるような決意を固めて。

選手控え室となる拝殿にたどり着き、浩輝はその戸を開ける。中には既にまほら武道会本戦に出場する選手が集まっており、どうやら浩輝が最後みたいだった。

これから戦うであろう相手と雑談する者や試合前にウォーミングアップする者やフードで顔を隠す者や明らかにロボットだろう思われる者を尻目に、浩輝は凭れる柱を探し、その柱に凭れかかる。

（マリアさんがカイを殺しに行く。となるとカイも黙ってやられる訳がなく、何処かで戦闘することになるんだよな。マズいな。早くまほら武道会を終わらせて救援に向かわなければきっとマリアさんは……）

「やあやあ浩輝、元気アルか？」

思考の渦に飲み込まれていた浩輝だったが、ふと聞き覚えのある中華娘の声がした事に顔をあげて其方に振り向くと、中国から麻帆良に留学してきたという古菲がいた。

かつて古菲に闘いを申し込まれてしまい、その闘いに勝ってしまった時から浩輝は古菲に対して苦手意識があった。それから会う度に闘いを申し込まれるのだから色々と面倒だった。故に今も苦手意

識がある。

そんな浩輝に気付かず古菲は続ける。

「しかし浩輝も余裕で勝ち上がってきたアルね。というより浩輝がこういう大会に出るとは思わなかったネ」

「ああ、まあ単に優勝賞金に目が眩んだだけだが……」

「おお、浩輝も欲にまみれた男となってしまったアルか……」

「何勝手に人を評価してんだよ。しかもその印象最悪じゃないか」

「大丈夫ヨ。そんな事で浩輝を嫌いになったりはしないアル」

「いやいやいやいやいや」

「浩輝とはこの舞台で闘ってみたいがやはり難しそうネ」

「（いきなり話が変わりやがった……）まあ決勝戦まで勝たないとお互い闘うことは出来ないな。それ以前に俺はお前とは闘いたくないが」

古菲と浩輝がお互い闘うには決勝まで行かないと闘うことは出来ない。麻帆良内の実力者達が集まったまほら武道会ではなかなか決勝に行くことは出来ないだろう。

いくら古菲が強くてもきっとまほら武道会では決勝に進む事は出来ないだろう。古菲が決勝に進む為には古菲より強い者達勝たなければならないのだから……。

まあお互い頑張ろうということで、と浩輝が古菲に言った時、大会主催者の超鈴音と浩輝のクラスメイトで審判員ある木村耕太の二人が拝殿に入ってくる。

そして耕太の口から大会ルールの説明と諸注意などを告げられ、選手達は一部の者達以外はきちんと聞いている。まあ大会に出る以上、ルールはきちんと聞かないといけないのだが。

浩輝は耕太の話を聞きながら辺りを見回す。

（ようやく此処に来た本来の目的が達せそうだ）

「……、ああーヤバい、寝過ごした……」

とある学生寮の一室。

篠宮カイは喉の渇きで目を覚まし、目覚まし時計を片手に非常に寝ぼけた声を発していた。

現在時刻八時００分。

確か『まほら武道会』が始まる時間は八時ちょうどで、目覚まし時計も八時だと示している。カイは寝ぼけ眼で視線を天井からテーブルへと移す。

テーブルの上には『まほら武道会』の入場用チケットがある。これは昨日の中夜祭で浩輝から『見に来てくれよな』と渡されたチケットだ。

まあ見に行ってやるかなー、と思ってカイは部屋に帰ってから目覚まし時計を六時三〇分にセットしていた筈なのだが……。

「そういや、一度起きたっけ……？」

カイはまだ覚醒しきっていない頭で今から一時間三〇分前の事を思いだす。あの時は煩いからと目覚ましを止めたような気がする。それから再び眠りに就いて今に至るわけで。

取り敢えずカイはもぞもぞとベッドから起き上がって、だるい体を引きずりながらカーテンを開けると強烈な日光がカイの目を襲う。

うおっ！　目が灼ける！　なんてバカな言葉を発しながら呻き声を上げると、そのまま冷蔵庫の所まで歩いていき、缶コーヒーを取り出し飲み始める。苦味のある無糖コーヒーがカイの喉を潤していき、カイに活力を与えていく。

缶コーヒーを一気に飲み干してゴミ箱に捨てると、クロゼットから黒いワイシャツと紺色のジーンズを出してパジャマから着替え始める。

さっさと着替えると洗面室に行って顔を洗う。それから歯も磨い

て出掛ける準備を整えると、チケットと黒いチョーカーを持って部屋を出る。朝食は適当に屋台から買えば何とかなるだろう。

今から向かう場所はもちろん『まほら武道会』の本戦場所である龍宮神社だ。

まほら武道会の会場である龍宮神社に向かっている最中、カイはとあることを考えていた。それはクラスメイトの中で一番仲が良いであろう加藤浩輝のことだ。

昨日のまほら武道会予選でお坊っちゃんから伝えられた浩輝の情報だ。

お坊っちゃんによれば浩輝は二年前に麻帆良に転入する以前の情報が全くないという。これまで生きていれば何らかの痕跡が残されている筈なのだ。それでも一つも情報がない。

彼は何処で生を受けたのか、何処で育ったのか、家族はいるのか、それすらも分からない。

全て謎に満ちているのだ。

この二年間一般人だと思い込んでいた浩輝が一般人でなく裏の人間だとすると、とてつもなく嫌な予感がする。それもカイにとって災いを起こす人物になるような気が。

もちろん彼が裏の人間だという確証はない。これは可能性の一つとして考慮しなければならない訳だが。

それに浩輝が裏の人間ではないとカイは信じたい。今まで接してきた浩輝が偽りではないと信じたいのだ。

（だがあいつが裏の人間だったとして、問題は俺の障害になるか、だよな）

仮に浩輝が裏の人間だったとして、問題はカイの前に立ちはだかるかどうかだ。立ちはだからないのならそれで良いし、何らかの理由で立ちはだかるなら戦ってでも排除しなければならない。

例えクラスメイトであり友達であろうとも自分に敵対行動を示すなら、非情になって排除する。敵ならば女子供であろうと殺してきたカイが相手は友達だから殺せない、なんて理由にならないだろう。

今更になって生き方を変えていい訳にはいかない。そんな事は誰も許さず、自分自身許せないだろう。

とにかく浩輝が裏の人間でないことを切に願うばかりだ。そしてどちらが正解なのかはまほら武道会で分かるだろう。

「やっと着いたな」

カイは脚を止め前を見据えると、大量の人々が群がっている龍宮神社にたどり着いていた。

ポケットから携帯電話を取り出して時間を確認すると、八時二五分。もう試合は始まっているとは思うのだが、入り口の時点で大量の人々が群がっている。中は既に満員状態で入れない状態となっているのだ。

どうやって入ろうか？　と考えていると、

「お、篠宮発見！」

「ん？」

自分の名前を呼ぶ声にカイは振り返ると、誰か分からない男がこちらに走り寄ってくる。見た目カイと同年代の男子学生のようだが、やはりカイには見覚えはない。

だが男子学生の方はカイのことを知っていて一直線に此方に向かってくる。まあカイは麻帆良の学生なら誰でも知っている有名人なので、男子学生がカイを知っていて当然なのだが……。

「何か用か？」

「ああ、綺麗な女の人から篠宮に手紙を渡してほしいって頼まれたんだよ。ほら」

カイの問いに少年は答えると、手に持っていた手紙が入った封筒をカイに渡す。

封筒を受け取ったカイは隅々まで見てみるが、とくに差出人は書かれておらず、この手紙を寄越してきた人物は分からない。ただ封にはハートマークのシールで止められており、一般的ならラブレターという物なのだろう。

「やっぱりそれってラブレターだよな。女の子よりも女の子っぽい顔をする篠宮に遂に恋の予感が？」

「俺を好きになる女なんて居るとでも思っているのか？」

「いやいや、世の中には物好きな人間が居るんだよ。ほら、篠宮って以前にも同性愛者の女子から告白されたことがあるんだろ？　けっこう噂になったよな」

「そう言えばそんな事あったな。あまりにショックで忘れることが出来てたのに……、ってあの子はそうなのか？」

「さあ？」

「さあって……」

カイはその容姿から男子には奇妙な人気があり、女子からは『男のくせに可愛い顔が許せない！』と訳が分からない理由で敵対視されるほど嫌われている。しかし極一部の女子からはカイの〝顔〟だけは好きという物好きもいる。

以前、カイはそう言った女子に告白された事があり、どうせ理由が理由なのできっぱり断った事があった。その件をネズミこと木村耕太に掴まれ、あっという間に麻帆良中に知れ渡ることがあったのだ。

少年はその事を言っているのだろう。

「今回もそれと一緒な感じがしないか？」

「しねえよ！」

妙に馴れ馴れしく喋りかけてくる少年にカイは明らかに嫌そうな顔を浮かべつつも、取り敢えず封を開けて少年に見られないように手紙を読んでみる。

読んで、読んで、最後まで読んでいくとカイは真剣な表情で少年に問う。

「なあ、この手紙をお前に渡してきた女の人って、どんな感じだった？」

「どんな感じって？」

「特徴だよ」

「特徴って言ったら緑色の髪に金色の目で外国人の女だったぞ。すごい美人だったぜ」

「……、そうか」

少年から”ラブレター”の差出人の特徴を聞き出したカイは目を閉じて、心を落ち着かせる。

緑色の髪に金色の瞳、それから外国人となると間違いなく幾度となく襲撃してきたあの女だろう。

「篠宮？」

いきなり目を閉じて暗そうに落ち込むカイに、少年は何かあったのかと首を傾げる。

「いや、何でもない。それよりお前に手紙配達の報酬だ。このチケットをやろう。最前席だ」

カイは普通にクラスメイトと話すような態度でまほら武道会のチケットを少年に渡す。

「良いのか！？」

「ああ、俺には不要な物だからな」

「ありがとうな、篠宮！」

目をキラキラと輝かせながら少年はチケットを片手に龍宮神社へと突入していった。

カイは少年を見送ると手紙を封筒に戻し、ビリビリに破って近くにあったゴミ箱に捨てる。そして黒いチョーカーを首に付けて、とある場所へ向かう。

「……、超には悪いけどそろそろあの女と決着を着けないといけないな」

その瞳は敵を殺さんとばかりの危うい狂気さが孕んでいた。

麻帆良祭二日目1（後書き）

一ヶ月ぶりの更新だと言うのに短い気がする……。

さて、今回もなかなか話が進まなくてすいません。

次回はそれなりに進めば良いなと思います。

……また一ヶ月後になるのかなぁ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2965p/

真の紋章持ちの暗躍

2011年4月29日10時44分発行